

独身女性（40～50代）を中心とした中年女性の老後生活設計ニーズ
及び社会的支援に関する調査

平成13年6月

財団法人 シニアプラン開発機構

は じ め に

少子高齢化社会の進展、成熟経済という新しい環境の下でシニアの生き方や生活設計のあり方などが変わっていくものと考えられる。この中で将来のシニア層がもつであろう老後への生活ニーズを新たに捉えなおすことが求められている。また、将来のシニア層は家族形態の変化等に伴い様々な属性を持ったシニア層が出現するであろう。

財団法人シニアプラン開発機構では、このような問題認識の下、従来あまり注目されてこなかった独身の中年女性に焦点をあてることとし、金子勇北海道大学大学院文学研究科教授を座長とする「壮年期シニア研究会」を組成し、40代から50代の独身女性を中心に中年女性の老後の生活設計ニーズや社会的支援のあり方について調査・研究を行った。

本報告書は、定性的調査として全国の政令指定都市5市におけるグループインタビュー調査結果及び定量的調査としてサンプル数に制約があり試験的調査の性格にとどまるものの東京都におけるアンケート調査結果並びに本研究会における議論を踏まえてその成果を取りまとめたものである。

ここで、簡単に本書の視点や構成を紹介しておきたい。

第1部第1章では、現代日本人の意識特性を時代精神と世代論の観点から分析した上で今回のグループインタビューに参加した中年女性の個人意識と社会意識を明らかにしている。

第2章では中年女性の不安意識を取り上げ、グループインタビューで捉えることのできた特徴的な意識を「裁量権」「自分らしさ」等のキーワードから考察している。

また、第3章では、中年女性の自立意識と老後の自立に向けた備えの実態を考察し中年女性の自立を促進するための社会的支援の可能性を探っている。

第2部では、全国5都市（札幌、福岡、名古屋、京都、東京）合計15回（モニター数 106人）におけるグループインタビューの内容を要約し掲載している。

第3部では、東京で実施したアンケート調査結果を踏まえ中年女性の生活意識とライフスタイルを分析し、向老期を迎える中年女性への社会的支援の可能性を探った。

第4部では、調査票等本研究における基礎資料や研究会等での議論を付属資料として掲載した。

最後に、本報告書が将来のシニア層の老後の生活のあり方について考察を深める際に多くの方々にご活用いただければ幸いである。また、お忙しい中、今回の調査に快くご協力下さった皆様方に心から感謝申し上げる次第である。

平成13年6月

財団法人シニアプラン開発機構

壮年期シニア研究会委員名簿（敬称略）

座長：金子 勇	北海道大学大学院文学研究科教授
棕野 美智子	日本社会事業大学教授
白波瀬佐和子	国立社会保障・人口問題研究所第2室長
和田 佳子	北海道武蔵女子短期大学助教授
梶井 祥子	北星学園女子短期大学非常勤講師
佐藤 仁之	厚生年金基金連合会上席調査役

事務局：財団法人シニアプラン開発機構

主席研究員：千保喜久夫

主任研究員：仲山大輔、小林 昭

喜田勇作（平成12年10月～）

千葉友規（～平成12年9月）

吉田 敬（～平成12年11月）

（注1）委員名簿は研究会発足時のものである。

（注2）下線のある委員と事務局はワーキンググループメンバーを兼務している。

目 次

第 1 部 グループ面接分析

第 1 章 中年女性の個人意識と社会意識…………… 3

（執筆：北海道大学大学院文学研究科教授 金子 勇）

第 1 節	21 世紀日本人の時代精神……………	3
第 2 節	中年女性の個人意識……………	8
第 3 節	中年女性の社会意識……………	12
第 4 節	中年女性への社会的支援の方向……………	16

第 2 章 中年女性の不安意識…………… 20

（執筆：北星学園女子短期大学非常勤講師 梶井祥子）

はじめに	単身世帯増加の背景……………	20
第 1 節	社会規範の揺らぎ……………	24
第 2 節	独身女性の意識と行動……………	27
第 3 節	不安の諸相……………	30
	1. 健康に対する不安（医療・介護の問題）……………	30
	2. お金に対する不安（年金・貯蓄の問題）……………	32
	3. 人間関係に対する不安（交友関係、地域社会、生きがいの問題）……………	34
	4. 社会的評価の未熟性……………	35
結び	……………	36

第 3 章 中年女性の自立意識…………… 40

（執筆：北海道武蔵女子短期大学助教授 和田佳子）

はじめに	……………	40
第 1 節	中年女性のアイデンティティ問題……………	41
第 2 節	中年女性の課題としての「親密性」と「世代性」……………	42
第 3 節	中年女性の自立条件……………	44
	1. 経済的自立……………	45
	2. 生活自立……………	52

3. 社会的自立	54
4. 精神的自立	55
第4節 中年女性の自立に関する支援と課題	57
結び	60

第2部 グループ面接記録

第3部 東京の中年女性のライフスタイルと生活意識

(東京アンケート調査の分析)

(執筆：北海道大学大学院文学研究科教授 金子 勇)

第1節 データ分析の方針と対象者の属性	171
第2節 現在の社会関係とライフスタイルにおける既婚者と独身者の相違	174
第3節 現在の社会意識における既婚者と独身者の相違	178
第4節 60歳以降のシルバーサービスニーズと介護資源としての信頼性	181
第5節 多変量解析からみた生活満足度の規定要因	186
第6節 中年女性への社会的支援の方向	190

第4部 関係資料

1. アンケート調査票	195
2. 議事録（研究会・ワーキンググループ）	202

(注) 第2部及び第4部については、財団法人シニアプラン開発機構（喜田主任研究員、仲山主任研究員、吉田主任研究員、小林主任研究員）が担当した。

第1部 グループ面接分析

第1章 中年女性の個人意識と社会意識

(執筆：北海道大学大学院文学研究科教授 金子 勇)

第2章 中年女性の不安意識

(執筆：北星学園女子短期大学非常勤講師 梶井祥子)

第3章 中年女性の自立意識

(執筆：北海道武蔵女子短期大学助教授 和田佳子)

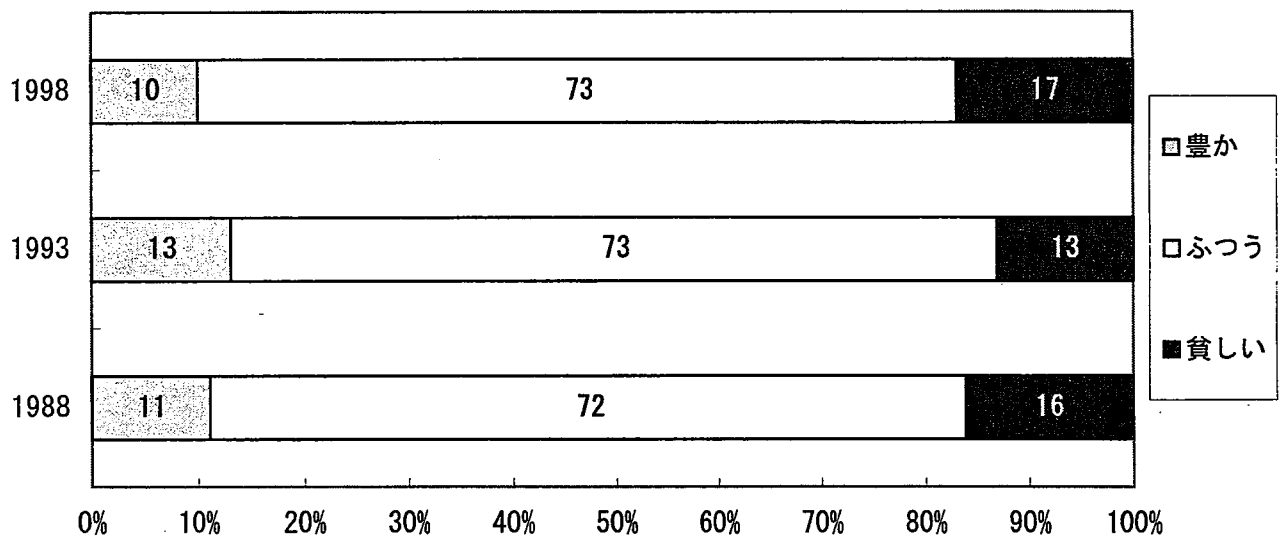
第1章 中年女性の個人意識と社会意識

北海道大学大学院文学研究科教授 金子 勇

第1節 21世紀日本人の時代精神

本章では最初に現代日本人の意識特性を時代精神と世代論の観点から分析したうえで、今回のグループインタビューに参加した中年女性の個人意識と社会意識を明らかにしたい。そこでまず、「時代精神」について考えておこう。「『時代精神』というとき、他の要因の場合と同様、われわれは、その時どきの時代精神がその時代全体の精神ではないということをはっきりと知っていなければならない。ヒトが時代精神とみなしその名のもとに指摘するものは、多くの場合一定の時点で特徴的な意義を獲得した或る社会層……がその担い手となっている」（傍点原文、マンハイム・鈴木広訳「世代の問題」樺俊雄監修 『社会学の課題』潮出版社、1976年：213ページ）。

図1 現在の暮らし向き



$$\chi^2 = 16.19 \quad d f = 4 \quad P < 0.01$$

ただし、「その他・DK」を除き、5段階の項目を3段階にまとめて再集計した。

（出典）文部省統計数理研究所『国民性の研究 第10次全国調査』1999年。

現代日本社会でその代表的な担い手は中流階層である。20世紀末からこの社会層の堅固さには翳りが認められ、部分的には中流崩壊も叫ばれ始めたが、文部省統計数理研究所が5年ごとに実

施している「国民性の研究」によれば、依然として日本人の大半は「ふつう」か「やや豊か」な暮らし方を維持している。統計的な検定を行うと、この3回の調査結果の間には違いがあるので、図1は確かに98年になると、「豊か」が減少して「貧しい」が若干増加していることを教えてくれ、中流階層意識が揺れている実態が伝わってくる。しかし、3回とも「ふつう」が73%と不変であることから、これをまだ「崩壊」とは呼べないであろう。

だから依然としてその中流階層の意識は、そのまま現代日本の時代精神としても転用できる。1億2600万人の日本人を層化する際に、この暮らし意識とそれを担う世代を軸にすると、時代を代表するのが中流階層であることが自明になる。「『時代精神』は、互いに継起する『諸世代連関』の連続的・動的相互交錯の所産である」（同上：215ページ）。年齢的に見ても多世代が交錯する中で社会とは文字通り「世代連関」によって構成されているが、そのうちの「ふつう」か「やや豊か」に暮らす階層を中流と呼ぶのである。今回のグループインタビュー調査に応募してきた中年女性の大半もまた、インタビューや諸属性から判断する限りこの中流階層に所属しているように思われる。

この層は、余暇を有効に活用し、人と人との交流やふれあい、趣味・娯楽により多くの時間や労力を注ぐことに生きがいを見出そうとするという特徴をもつ。また、時間の使い方も変化し、IT革命によってもコミュニケーションや消費などの活動が増幅して、深夜にも行われる24時間化の現象が生じやすい層である。グループインタビュー調査記録から、そのような発言も垣間見られるであろう。

日本においても、中流階層の誕生には歴史的な背景がある。第二次世界大戦後の急速な経済成長を達成し、先進国の仲間入りをした日本社会は1960年代後半から経済的な豊かさを充足してきた。その水準での豊かさを満喫するのがこの階層である。しかし、同時にその過程で地方から大都市圏への人口移動による過疎と過密の問題が発生し、特に大都市圏では、人口に加え、企業活動の中枢、物流及び情報などが集中した。交通についても、鉄道や道路の混雑が発生している。また、住宅を取り巻く居住環境水準は遅れており、地価も含めて建設コストが高いので、持家率が平均で40%台に止まっている。今回のインタビュー調査地が、少子化が進む政令指定都市の札幌、福岡、京都、名古屋、東京であったことは、以上に指摘した都市環境条件を共有すると見てよい（金子勇「都市の少子化と社会的ジレンマ」金子勇・森岡清志編『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房、2001：314ページ）。ちなみに、5都市の持ち家率は、札幌が45.5%、福岡が36.4%、京都が50.9%、名古屋が43.9%、そして東京23区が40.7%であった（『都市データパック2000年版』東洋経済新報社、2000年）。

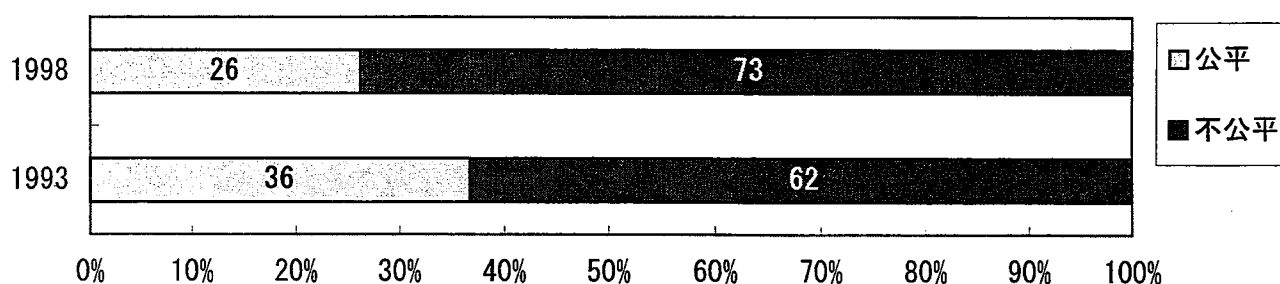
さらに、親の財産と階層をそのまま引き継げることによる、階層の固定化が鮮明になってきたという事実がある（佐藤俊樹、『不平等社会日本』中央公論新社、2000）。このような地域間格差と固定された社会階層へのいらだちやあきらめ、さらに将来への不透明性もまた、グループインタビュー調査のなかでも政治不信とともに絶えず語られている。

本人の努力や能力よりも、親の財産やそのライフスタイルから導かれる早い段階での教育への高い投資によって、階層の固定化が進んできた。子どもの教育には莫大な費用がかかり、しかもその効果は不明である。ともかくも親としては「うちはこれからお金がかかる時期なので、私のパートの収入は教育費の一部だと考えているのです。これからの教育費というのは大変な負担だと思います」（44才既婚女性：札幌1回）という諦観のなかでの子育て費用を捻出することになる。半数が大学に行くようになって、学歴はさほどの階層規定力を発揮しえなくなり、むしろ階層間格差が増大して、図2に見られるような「不公平感」が次第に強くなってきた。「頑張っても仕方がない」という気持ちが蔓延すると、気分が内向きになる。

したがって21世紀の日本社会は、価値観の多様化に対応しながら、経済的な豊かさだけではなく、このような格差をどのように是正し、社会的流動性や公平性をいかに確保するかが課題になる。さらに豊かな生活は、あらゆる階層によって享受されるほうが望ましいので、社会的弱者といわれる要介護高齢者や障害者の生活を向上させていくことも21世紀の大きな課題である。

今回の研究対象であるシニア期にいる40才以上の女性も、既婚者か独身者かにかかわらず、また子どもの有無にもかかわらず、経済的な格差が顕在化し始めている。戦後数十年でせつかく到達しえた豊かな社会の構造を維持し、その機能を活性化する方向に焦点を置きながら、インタビュー調査や質問紙調査で得られた事実の集積に立ち、そこから社会的な支援方針を組み立てることにしよう。

図2 日本社会は公平か



$$\chi^2 = 38.61 \quad d f = 1 \quad P < 0.001$$

ただし、「その他・DK」を除き、4段階の項目を2段階にまとめて再集計した。

（出典）統計数理研究所『国民性の研究 第10次全国調査』1999年3月。

そのためには現代日本における privatization（私化現象）と社会的ジレンマについて十分に考えておかねばならない。privatization は「私秘化」と訳される場合もあるが、基本的にはより小さな単位の私生活が充足的な価値を中心として一層確保される傾向を指していて、それは当初には家族単位の著しい傾向として登場する。そして、徐々に夫婦こそが私秘化の単位という段階を通り抜けて、最終的には「家族の個人化」をもたらす。いいかえると、「社会志向」に乏しくなるのである。

グループインタビュー調査でも、このような「社会志向」が極端に弱い発言もまた頻繁に見られた。そしてそこには家族にさえ守られない剥き出しの個人が析出され、ひたすらその「私性が私化する」のである。それは社会的公正・平等よりも個人的自由を優先する。この文脈での発言は今回のグループインタビューでも、5都市の違いを超えて非常に多かった。

おそらく「社会への信頼は、個人が自由で独立な決定メーカーたり得るという信仰であり、更に、この信仰は、自然の配慮にしる、歴史法則にしる、或る客観的秩序が社会の内部に刻み込まれているという予想と不可分のものであった」（清水幾太郎 『現代思想（上）』岩波書店、1966年：128-129 ページ）にもかかわらず、「社会への信頼」が大幅に低下してきたことが、私化現象の蔓延に結びついたのであろう。「私化は体制をたえず疎外するところで自由を享受する主観として成立する」（鈴木広『都市化の研究』恒星社厚生閣、1986年：546 ページ）。そこでは体制すなわち社会はまるで見えないのである。この「社会がまるで見えない」発言もまた、今回のグループインタビュー調査ではかなり得られたように思われる。

おそらく 21 世紀は人類史のなかで、集合体が「共同体→生得社会→国家→契約社会→個人」の順に推移してきたことの帰結を示す出発点であり、この推移は具体的な社会システムが「村落社会→軍事型社会→都市産業社会→企業社会→少子高齢社会」として存立することとほぼ同義である。私は少子化の原因の筆頭に「私化する私性」の蔓延を想定する。未婚化や単身化が大きな流れとなった 21 世紀の私化は、もちろん「夫婦間」を単位とせず、個人に分解して理解した方がいい。そのうえで、あらためて個人と社会との親密性をどのように確保していけるかという問題が構築できる。個人における社会性の回復についての探求は 21 世紀日本の緊急課題であろう。

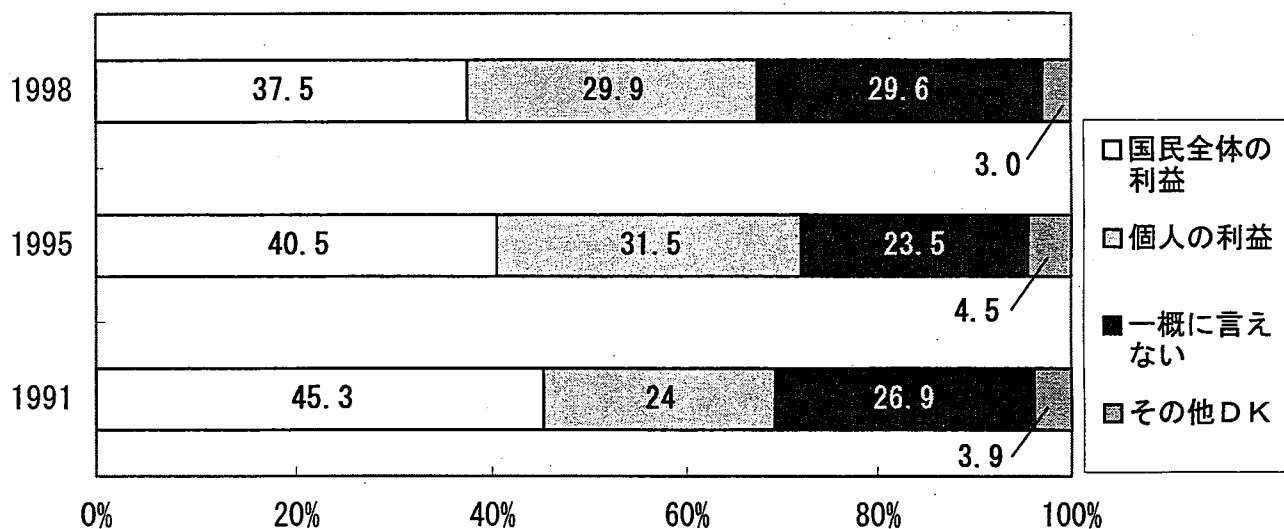
図 3 から、現代日本人は徐々に「国民全体の利益」よりも「個人の利益」を優先するようになったことが分かる。91 年には半数程度が「国民全体の利益」を第一義的に考えていたが、98 年になると 3 人に 1 人しか該当しなくなっている。将来的な社会システムへの配慮が弱く、現段階における個人の自由だけが鮮明に主張される。

今回のグループインタビューでもこのような意見の存在が紹介された。「私が知っている若い

ご夫婦などはどちらも共働きで、今の快適な生活を壊したくないから、今のままでいいという考えです。ですから、必ずしも子どもがその人たちにとっては必要ない。先のことは考えていらっしやらないと思うのですが、自分たちの生活をご夫婦で楽しんでいらっしやいます」(48 才既婚女性：福岡 3 回。これは福岡での第 3 回のグループインタビュー調査を表す。以下同じ)。このライフスタイルは自己中心主義の典型である。

おそらくシングル女性の最大公約数的な意見は、「ずっと一人で暮らしていたので、別に不安もないし、一人の方が気楽で、一人の生活は慣れているので、それなりに楽しめるし、今は体も悪くないので、あまり不安は感じていません。一人でずっと働いてきたので、お金も自分で稼いで自分で使えるし、計画性がない男の人に左右されるのが嫌で、自分が思うようにしたいのです。自分一人で死ぬほかないなと思っているから、今のところそういう考えです」(49 才独身女性：福岡 1 回) に集約されるであろう。しかし、「自分一人で死ぬ」ことは絶対に不可能である。直前には入院があるかもしれず、数年にわたる要介護状態に陥る場合もある。その際の若い訪問看護婦やホームヘルパーの養成に対して、このようなライフスタイルの人は直接的な負担をしていないという事実は隠しようもない。

図 3 国民全体の利益か個人の利益か



$$\chi^2=201.24 \quad d f=6 \quad P<0.001$$

(出典) 総理府広報室『月刊世論調査』1999 年 9 月号。

私はそのような状況に社会的ジレンマを読み取る。社会的ジレンマは、個人にとっては非協力行動を取る方が協力行動を取るよりも得であると同時に、集団全体としてみると全員が協力行動を取っている方が、全員が非協力行動を取っているよりも得な『利得構造』が存在している状況である。まさしくその状況は、個人利益と社会利益との衝突時点に登場する。

さらにいえば、社会的ジレンマ研究は個人と集合的合理性との間にある緊張の研究である。一つの社会的ジレンマにおいては、個人的には合理的な行動がすべての人々を困らせるような状況に導いてしまう。単なる個人と社会との衝突というよりも、個人の合理的選択が社会全体の不・非合理性を増幅させる現象こそが社会的ジレンマなのである。「すべての人々」はすなわち「全員」であり、決して「他人」に止まることはない。「個々の農民は可能な限り灌漑用水を取り入れてベストを尽くし、個々の漁師はできる限り多くの魚を捕ることからの利益を得るが、これらの個別的な決定の集合的な成果は災難であり、地下水が枯渇し魚の種類が消滅寸前まで行くのである」(Kollock, "Social Dilemmas : The Anatomy of Cooperation" *Annual Review of Sociology*, 24, 1998:183) とコロックが論じる視点は、社会的ジレンマの象徴的な事例である。

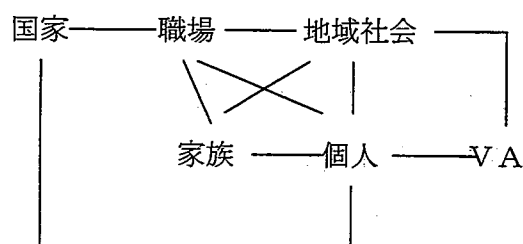
今回のグループインタビュー調査でも、文字通り自然な形でこのような発言をされた方が多かった。それは現代日本の中年女性意識の一段面であり、取りあえずは謙虚に受け止めるほかはないが、社会システム論の観点からはもちろんここで止まるわけにはいかない。シングル中年女性への社会的支援の必要性和可能性もまた、現状意識に迎合せず、もっと大局的で科学的な観点からその方向性を探らなければならないであろう。

第2節 中年女性の個人意識

図4を用いて個人意識は、個人の身のまわりに関連する出来事とそれを取り巻く家族に関わる状況に限定された内容をもつ意識であると定義しておこう。もっとも重視される原則は個人的自由であり、これと対比される社会的平等性は弱い。

家族との関係においてさえも個人の都合が貫かれ、家族の個人化が進むという動向にある。大学卒業まで最大限の家族からの支援を受けながらも、その家族へのお返し気持ちは薄く、家族からの離脱が青年層の課題になって久しい。また他方では、就職しても親離れが進まないパラサイトシングル現象が顕在化して、少子化の一因という理解をされている。

図4 現代社会の主要な要素



今回グループインタビューに参加したのは日本各地の40歳から55歳までの女性であった。

この年齢の女性のライフステージは、既婚者であれば子育て、家事労働、夫の仕事関係、両方の親の介護や看護年齢の始まる段階にあり、複雑な構成を持っている。本人の価値観と個人意識により、もとより優先順位は異なる。本報告書全体のグループインタビュー記録からも、その多様性がうかがえよう。

一方、この年代の独身女性は2通りに大別される。一つは文字通り全くのシングル生活者であり、もう一つは夫と離別または死別して、子どもを一人で育てる母親としての姿である。グループインタビューには、両方に大別できる女性が複数それぞれ参加している。

個人意識は個人と家族に関する意識なのであるから、この内容には個人や家族の生活の現状や将来の展望が含まれる。もちろん各種の生活ニーズも該当する。これを生活不安、生活自立、受益と負担の3側面から明らかにすることがここでの課題である。

個人生活も家族生活も、子育ての側面、健康的側面、経済的側面、親の介護を含む人間関係的側面に分けて考えるとまとめやすい。そうすると、次のような各側面がミックスされた嘆きが参加者から繰り返し出されたことが注目される。「一人だからこそ、自分が生計を立てるわけだから休めないわけだから、子どもを一人にさせてでも仕事は絶対に休めませんし、ちょっとしたことで辞めません。定年までいきますということで、生活がかかっているのだから会社に対していい仕事ができるというようにこちらは思っているのに、それが相手側には、小さい子もいるし、一人親はだめというように判断されてしまうのです」(47才独身女性：京都1回)。

シングルで子育てする女性は一生懸命に働こうとするが、企業側にはある種の偏見が残っている。「子育てするのが自分一人だからこそ会社も休めない」という個人の就労意欲が、企業の立場からすれば反対に見られてしまうやりきれなさがこの発言には漂っている。

そして子育ての大変さは異口同音に語られた。「下の子が小学校1年で、上は高校生と社会人でしたので、下の子の面倒をみる時間は全然ないし、金銭的にも高校生は大変でした。主人が借金を作り、子どもたちもお父さんはいない方がいいと言ったので離婚しました。それで、今はみんな伸び伸び暮らしていますが、片親だということで就職は大変でした」(51才独身女性：京都1回)。しかも子育て負担のほとんどが女性に重くのしかかる。「私が一番重たかったのは精神的な負担です。それはなぜかといいますと、私たちの世代は男の人が育児にかかわらないのが一般的なことだったので。たとえば主人が口出すだけでもいいし、具体的にオムツを替えたり、もう少し子育てにかかわってくれたら、精神的には楽だったと私はすごく思うのです」(50才既婚女性：京都1回)。

しかしこれはテレビのホームドラマのような大家族志向ではない。家族内部における子育ての資源として大家族は志向されていない。むしろ逆なのである。「大家族のことを聞いていますと、私はすごく嫌なのです。なぜなら負担は、かなりの部分が主婦にかかってくるからです。自分自身子どもを2人育ててみて、子育てというのはものすごく大変なのです。昔から母に、子ども1人育てるには3人の手がいると聞きました。実際に核家族化で専業主婦になって、本当に自分1人に何もかもかかってくるような状態をずっと経験してきました。主人は特に転勤が多かったので、自分も定まった職にもつけずに来ましたので、子育ての大変さは自分で身に沁みてわかります」(48才既婚女性：福岡1回)。

ここにも亭主が不在であり、現在40才以上の母親が経験してきた問題が凝縮されている。子どもの認識はもちろん母親の苦勞を軸に再構成されている。「私は眠たくてもしんどくても、子どものためには絶対食事も作ってやる、繕いもしてやる。だから、子どもは、『おかあさんは、私がいつも夜中におしっこに行ったときに起きているね』と言うのです。寝てから繕いとか、明日の準備とかしていました。そういうことが今は少ないのです。自分が楽しむということで」(51才独身女性：京都1回) となってしまう。団塊世代の母親は、その大正生まれや昭和初期生まれの祖母のライフスタイルに近い。

しかし、その苦勞があるので、この世代の母親からは「今の若いお母さん方は、核家族で見本がないから子どものことがわからない」という新人類母親批判が登場する。たとえばその象徴が次のコメントである。「電話相談で、『うちの赤ちゃんは青いおしっこをしない』とかかってくるんです。『オムツのコマーシャルで青いおしっこをしてる。うちの赤ちゃんは青いおしっこをしないからどうしましょう』といったそういう笑い話みたいな相談を若いお母さんたちが切実にしてくる。相談してくるのはまだましな方で、小児科へ行ってお薬をもらおうと、水薬はよく振って飲ませてくださいと書いてありますね。そうすると、赤ちゃんを振るのです。そういうお母さま方に育てられる子たちはどのようになるのでしょうかね」(47才独身女性：京都1回)。これは例外的な笑い話ではない。一方で、個人の自立を求めつつ、他方では子育ての基本的な知識が欠如する新人類以降の若い父母が増大している。

私の別のインタビュー経験でも、若いお母さんたちが、「お袋の味」ではなくて単なる「袋の味」を提供するだけだという自嘲気味な発言に接したことがある。結局、限定された自立の手段である職場への勤務が忙しいから家事に手抜きをして、スーパーやコンビニで「袋の味」を購入する。もちろん働く男性は父親になっても忙しいと称して家事や育児には参加しない。つまり両方とも忙しいので、「お袋の味」はさておいて、「袋の味」になってしまう。どっちも手抜きにな

って、子どもはそれを見て育つから、この循環が再生産される。

シングルの認識もこれと同じである。「世の中の環境が、昔と違って結婚しなくても生活できるような状況があるので、女性の方で結婚しないのは、そのためではないかと思います。女性の人も働く方法があるし、生活するのも、昔と違ってコンビニや弁当屋さんなどがありますから。そういうものがあるから、結婚しないのでしょう」(40才独身男性：福岡1回)。加えて、高等教育費の高騰である。「うちは子どもが2つ違いでしたので、大学が重なったときは大変でした」(52才既婚女性：福岡3回)という回顧的発言を、ほとんどの子育て経験者が実感的に支持した。

だから、ともすれば育児は大変だという嘆きが高唱され、その楽しさなどが若い世代に伝わらない。「自分が娘を産んで育てたときに楽しかったこととか、プラスになったことを言ったり、その子が小さかったときの話をしたりして子どもが欲しくなるような、育てたくなるような」(52才既婚女性：京都1回)話題が家族内部でも地域社会でも不足しているのであろう。だから、「子どもの結婚嫌い」や「出産嫌い」を引き起こすのである。「上の子が『私はもう結婚はしない』と言っています。なぜっていうと、『子どもは産みたくない』からです。母親と生活していて生活苦ばかり見ているので、なんとか自分一人でやっていくのが精いっぱい、子どもとか家庭とかに夢をもたせることができなかったのでしょう。これは私にも責任があります」(50才独身女性：京都3回)。

しかも金銭的な負担だけではなく、さまざまな苦勞をしたあげく子育てをすませた中年女性に待っているのは、高齢期の親の介護という問題である。「今は子育てが終わってほっとして、夫婦二人で楽しみたいのですが、80歳の父親を引き取ってしまったので、将来に対して不安、自分が体力が残っているか、はたして最後まで看取れるか、助けてやれるかという漠然とした不安で少しストレスを抱えています」(52才既婚女性：京都2回)という発言も決して珍しくはない。

娘の自立は親が等しく望むところであるが、だからといって『お母さんにはお母さんの人生、私には私の人生があるわけだし』などという言い方をされると、私としてはすごく寂しいですね。何で今まで離婚をして、十何年間一人で一生懸命子育てをしてきてことは一体何なんだという気持ちは非常にあります」(53才独身女性：福岡2回)もまた偽りなき真実である。

ともかく、40才以上の子育て女性の平均的な状態は、「今は子どもにかけて、何とか生活をする。今度、母が悪くなったらそちらの方に行く。そうすると、自分のことはものすごく先なのですよ。具体的に何も考えず、目の前のことばかりを考えているのが現状」(51才独身女性：京都3回)になってしまう。自分をひたすら後回しにするのである。これに亭主が加わると、それはさらに加速される。

したがって、開き直りの現状に対して距離を置いて、「明日は明日の風が吹く」的なライフスタイルが当然生まれる。「あまり老後のことは考えていないのが現状で、今は趣味に没頭して、自分の自由な時間を好きなように使っています。家族の協力のもとで、趣味を生かしています。ソフトボールのチームに入っているので、試合等は家族に迷惑をかけたりもします。町内会の子ども会の役員を7年以上やっていますし、育成委員もやっています」(44才既婚女性:札幌1回)。このライフスタイルは家族の協力なしには実行できないが、これを続けて行けば個人的ネットワークは豊富になるので、期せずして50才以降の生活構造を再編することが可能になる。ソフトボール、町内会の子ども会役員、子ども育成委員など、どれをとっても地域におけるネットワーク形成に密着した集団参加の形態である。

これはかなり積極的なネットワークづくりであるが、通常はもっと身近な方向性としての近隣志向が存在する。「私は夫婦二人なので、何が頼りかということ、やはり遠くの親戚より近くの他人ということで、日ごろから近所を大切にしています。本当にお味噌やお醤油を借りに行ったりできる友達も近所に出来ました。彼女たちも老後は同じような心配をもっていて、今日はこの家に集まって食事会を開催しよう、次の日はここでという話もだんだん出るようになりました。だからそういう意味では、とても近所を大切にしています」(51才既婚女性:福岡1回)。40才をすぎ50才が見えてきたら、夫婦でこのような近隣志向を具体化することは、ネットワークの拡充やストレス解消にも有効なので推奨できる生き方になる。

第3節 中年女性の社会意識

1960年に刊行された福武直編『日本人の社会意識』(三一書房、1960)では、「社会意識とは何か」が問われないままに、「社会意識の基盤をなす社会構造、それも階級・階層構造」の観点から、官僚・政治家の意識、大企業労働者の意識、中小企業労働者の意識、農民の意識、ホワイトカラーの意識、婦人の意識、知識人・学生の意識という7つの対象が分類されて、それぞれの階級・階層意識が「社会意識」として分析されている。この立場にたてば、今回のグループインタビューは中年女性を対象にしているので、「婦人の意識」の一類型に位置づけられる。

この定義の方法は今日でも『社会学辞典』(有斐閣、1993)などでは踏襲されている。それは「ある社会集団の成員に共有されている意識(心性)であり、階級、階層、民族、世代、職業、その他の社会集団が、それぞれの客観的な存在諸条件に規定されつつ形成し、それぞれの存在諸条件を維持し、あるいは変革するような力として作用するもの」である。すなわち、意識の担い

手を分類して、それぞれの社会的存在形態に対応した意識全般が社会意識と見なされる傾向が続いているが、今回のグループインタビュー調査での狙いは、自発的に応募して参集した中年女性の意識構造全体を解明し、そこからそれらを普遍化することにある。

そのためこのような従来からの社会意識理解の伝統を引き継ぐと、担い手としての中年女性が抱く意識はすべて社会意識と誤解されてしまう。個人の生きがいや自立感や不安感それに個人的な負担感や受益感などを、私は個人意識として理解する。そして国家、職場、地域社会、VA（ボランティアアソシエーション）などに関連する意識は社会意識と見なして、個人意識と社会意識とを区別しておきたい。

ここから、社会意識の内容は日本社会への期待と評価、各種制度の理解と疑問、社会的受益感と負担感などにまとめられる。より具体的には教育費用の直接的負担と高齢期における福祉サービスの受益にみる平等性、介護保険制度の負担と公平性などが指摘できる。

もちろん、子育てと仕事に明け暮れる毎日だと、「自分自身のことを考えている暇がない。子どものことと仕事中心の生活ですし、帰って家事をこなして、日曜日1日しか休みがないので、その日は残りの家事をして、子どもは何もしないので全部私がやっているような状況」（46才独身女性：京都2回）も珍しくない。ここからは個人的な将来展望が抱きにくいであろう。国家も地域社会もボランティアアソシエーションへの関わりよりも、子育てと企業での職業生活にしか時間が割けない中年女性の現状がここにはうかがえる。それでもこの両者に拘る観点を通して、同一人物から「若い人でももっと意識を持ってもらって、国民年金をきちっと納めるようにしてもらいたい。今はフリーターが多いですから、最初から納める気がないんです」（46才独身女性：京都2回）という重要な社会的側面に関わる指摘がなされる。

おそらく子育てと仕事に明け暮れているからこそ、そして自分自身の将来展望がないからこそ、直感的に国民年金の危機的状況が予想されるのであろう。育てない人々の増加とフリーターとして生きようとする世代の増大に直面すれば、自分の65才以降の年金制度への危機感は強くなる。その意味で、このような発言は実感的な判断に依存しているといつてよい。理論的にはともかく、現実を媒体にした生活感がここには存在する。

年金への危機感は既婚者でも独身者でも「子どもあり」でも「子どもなし」でも等しく高い。以下は独身者で「子どもあり」の方の発言である。「私は子どもが二人いますが、31才と26才です。なので独立しています。だから結婚するときはそれぞれでしてねという感じです。主人もおりませんので、自分のことだけを考えればいいのですが、やはり公的年金はあてにできません。自分で老後は考えていかなければいけない。子どもにも世話にはならないようにしなければならない。

それは私が親をみたから実感としてわかるのです。やはり子どもに非常に負担がかかります。そのことによって家庭にいろいろ問題が起こります。ですから、子どもの世話にはなれないので、自分でどうにかしていかなければいけません」(55才独身女性：福岡3回)。親の介護をして世話も行なったが、自分の子どもにはそれらを求めないという団塊世代に特有な意識がここから浮かび上がる。

もちろん、子育てをしていなくても年金に象徴される将来の社会保障制度への不安は強い。「一人者なので気が楽ですが、不安はあります。老後も考えてはいるのですが、なかなか切実な問題としてまだ見えていません。金銭面でも、現在の仕事はパートの看護助手なので、それほどもらっていません。老後にどのくらい必要なのか。それを考えると、このまま今の生活で行くと豊かな老後が送れないなという考えが、あらためて大きくなった気がします」(42才独身女性：福岡1回)。

独身者に将来的な金銭面の不安感が強いことは当然だが、夫がいて、姑と同居して、子どもが二人いる同年齢の女性は「社会的支援とか年金保険ですが、それはもらえるという確信はないので、不安を通り越して、明日が見えないと、私ぐらいの年齢の人は半分あきらめています」(43才既婚女性：京都2回)とさえ語る。両親と同居する独身女性になると、「年金に関しては期待していないというのが本心です。どうしても自分たちのために支払っているというイメージがないものですから」(41才独身女性：福岡3回)。厳密に言えば、現在の年金制度において支払う側に立つ人は、もちろん60才以上の受け取る側の人のために支払っているにすぎない。しかし、これはいずれ65才の年金受け取り年齢に自分が到達したら、必ず自分も年金がもらえるという信頼に基づいて支払う義務を遂行しているのである。20世紀末まではそれは確固たる事実であったが、41才の男女が年金を受給し始める24年後には信頼を確保することがむずかしいかもしれない。このように、配偶者がいてもいなくても、子どもがいてもいなくても、中年女性が抱く将来的な年金や健康保険などへの不安感は大いなのである。

しかし、いたずらに不安感を拡散するだけでは何も解決しない。自分のライフステージに合わせた貴重な工夫についても参集した女性たちは語っている。「家庭生活の崩壊とか社会保障の先細りとか言われていますが、結論は、自分のことは自分でというのが原則で、何にしても日常から孤独に強くなければ生き延びられないよと、友達とも常々話しております」(52才独身女性：札幌2回)。同じく「具体的なことはないのですが、まず、老後に向けては3つの要素が要ると思うのです。健康、サムマネー(ある程度のお金)、人間関係(友人もしくは親類)という3つに向けての準備は少しずつしなければと思っています」(52才独身女性：札幌2回)。これは5都

市で合計 15 回実施したグループインタビューにおいて、私にとってもっとも参考になった発言である。

健康とある程度のお金と人間関係を自力で準備するということの意義は、これまでの社会老年学で精緻なデータを基にして議論され、提言されてきた。もとより優先順位はない。ライフステージに沿って、各人が健康を優先し、預貯金に精出し、人間関係を着実に積み上げていけばよいであろう。

たとえば「一般的には女性の方が長生きしますね。私は老後のことを考えるときは、主人がもう頭にはいないのです。だから、仲のいいお友だちで一軒家を借りようかとか、近所だけで支えあっていこうかとか、そういう話が出てきます。今は模索中です。でも、最後に皆と話し合って、老後はやはりお金よねという結論になるところがあります」(51 才既婚女性：福岡 1 回)。これは老後に向けて夫婦関係という基軸を友人関係で補強しつつも、やはり資金面での用意も必要であるという中年女性の最大公約数的な意見である。

もっとも、制度面での保障こそが肝心であるという考え方もまた根強い。自力で健康を維持しても要介護の状態になるかもしれない、ある程度のお金だけでは不十分な場合が起きるからである。「私はお金の問題ではなくて、保障してほしいのです。自分がホームヘルパーの仕事をやっていて倒れたときの保障がないのです。要するにパートで時間給なのです。私たちはお金が欲しくて仕事をするのではないのです。自分の家が平穏だから、少しでも困っておられる方を助けてあげようという方がヘルパーになると思うのです。自分が仕事をしているときに、その方にけがをさせたらどうしようかという責任と、自分がやっていて病気になったりするときの保障が何もないので困ります」(52 才既婚女性：京都 2 回)。介護保険の不備はいくつかあるが、このような問題も 2003 年の見直しに向けてもっと議論を煮詰めておきたいテーマになる。

これについては今回数名の男性参加者が「全く他人の、しかも制度として成り立って何の負担も感じない。つまり、保険としてお金を払っているからその見返りとしてしていただくというかたちが、きわめて割り切れていて、非常にいいのだろーと思います。そういう意味では、介護保険はいいと私は思っています」(48 才独身男性：札幌 1 回)と述べた意見が最大公約数的なところである。「現実問題として私たちの年齢で、保険料だけ取られるのは理不尽なこともあるのですが、現実的に要介護者を抱えている人間から見ると、やはり介護保険は必要ではないかなという部分もあるわけです」(52 才独身男性：福岡 2 回)。

もちろん女性でも「介護保険は、これはシステムとして取られるというか、抛出するということですから、これには私は何の疑問もありません」(42 才既婚女性：札幌 1 回)。「自分の親がい

でもいなくても払うわけですよ」(金子)。「そうですね。それについては、国民の義務ということにとらえています」(42 才既婚女性：札幌 1 回)。「この介護保険に関しては何も思わず、システムとしてはどんどん払えばいいと思っています。それは小学生以下の子どもが幼稚園に行くのと同じで、老後を迎えた人たちのための次のシステムというものがもっともあっていいと思うからで、そのための支出は皆で負担するのはいいと思っています」(41 才独身女性：札幌 1 回)。

こうしてみると、中年女性でも受益感とともに負担意識が皆無ではなく、納得がいく範囲での負担には前向きという印象を受ける。

第4節 中年女性への社会的支援の方向

本研究のタイトルにあるように、「社会的支援」はここでの最大のキーワードである。これはどのように定義できるか。一般的に言えば「支援とは…他者の行為の質を維持・改善することをめざす一連の行為であり、最終的には他者のエンパワーメントをはかることにある」(今田高俊「支援型の社会システムへ」 支援基礎論研究会編『支援学』東方出版、2000 年：26 ページ)。すなわち支援の構成要素は、①他者への働きかけ、②他者の意図の理解、③行為の質の維持・改善、④エンパワーメントに分けて理解される(同上：12 ページ)。私たちはともすれば支援を「他者への働きかけ」のみに限定して扱おうとするが、それは実に支援の概念の 1/4 にすぎない。他者への働きかけはその第一歩であるが、その先に三種類の関連領域が待っているのである。

これまでの福祉分野では、支援は

- ①私的支援→自助 (例：自分で、家族からの援助)
- ②相互支援→互助 (例：支援者と非支援者とのボランティア関係)
- ③共同支援→共助 (例：独居高齢者へのコミュニティからの支援、小地域福祉活動)
- ④公的支援→公助 (例：専門家による専門的サービス、生活保護などの現金給与)
- ⑤企業活動→商助 (例：福祉ビジネス)

に分類されてきた(金子勇、『地域福祉社会学』ミネルヴァ書房、1997：45 ページ)。その意味で当然ながら、多段階の具体的な支援学が必要になっている。

支援学の骨子を支援と被支援の関係でまとめれば、支援関係の構造は、「多→多」、「多→個」、「個→個」に大別できる。「多→多」とは具体的にはホームヘルパーなどの専門家による要介護高齢者への在宅介護が該当する。そしてこれは、多くの場合は公的支援に含まれるし、制度的な

社会保障もまたここに該当するであろう。

「多→個」の事例をあげると、ボランティア活動による独居高齢者宅の雪下ろし活動などが典型的になる。これは共同支援である。「個→個」はやはり独居高齢者への声かけ運動がその事例となるが、これは相互支援の形態にまとめられる。

「支援」を以上のように理解すると、たとえば次のような建設的な提言は、出産後の女性またはその配偶者へのエンパワーメントとして位置づけられる。「子どもを産んだ場合、24 時間小さな子どもに手がかかる。それは男性、女性どちらにしても、子どもの面倒を 24 時間みなくてはいけない。そこで育児期間の 2 年間だけは健康保険掛け金や年金の掛け金は免除されるようにすればいいと思います。それはご主人が免除されてもいいですし、奥様が免除されてもいいでしょう。そういうことがきちんとされたうえで、社会人は社会人としてそれら掛け金を払っていただきたいと思います」(41 才独身女性：札幌 1 回)。

この提言はいわゆる女性の M 字型就労の問題解決へのヒントを提供する。なぜなら、M 字の象徴年齢である 35 歳前後に、職場を離脱したくない既婚女性が非常に多いからである。かりに、2 年間は子育て特例期間としてすべての掛け金を免除する公的制度をつくれば、この年齢の女性には朗報であろう。

もっと積極的な負担を表明する意見もある。「たとえば、ぎすぎすした関係の中で、温かな目で教育支援税、子育て支援税みたいなシステムを作ることには私たちは納得しますよ。納得して、子どもは宝物ですから、宝物を育てることに対して私は反対しません。ですから、納得いく説明とビジョンと、それからこういう理想を持っていくんだ。皆さん、どうですかということをお示しいただいたときに、納得できるものに対しては払います。介護保険もそうです。納得して私は払っています。そういうシステムを考えていってもいいのかなという気はします」(42 才既婚女性：札幌 2 回)。

さて、少子化がますます進む時代において、中年女性の生き方は多様になっているが、子どもそのものが変質しているという意見にも耳を傾けておきたい。「子どもが全然違います。自己中心的な子どもがかなり増えています。そういう子どもたちが育っていけば、当然、夫婦生活とか結婚生活をして、うまくいかないと予測されるのです。これは笑い話ですが、15 年ぐらい前は、教師が子どもを叱ったら校長に言うぞ、10 年前は教育委員会に言うぞ、5 年前くらいからは裁判をするぞ、というように変わってきています」(40 才独身男性：福岡 1 回)。子どもは親の言い方を鸚鵡返しに言っているのもはや若い親子二世帯がこのような感覚をもってきたことになる。もちろん笑い話ではすまないほど深刻な問題提起である。この自己中心的言動は個人主義

の典型であり、私化現象が二世代にまたがって拡散していることを教えてくれる。

「少子化の問題は、産んで育てるのがほとんど女性でしたので、その女性がかなり目覚めてしまったが原因ではないでしょうか。社会に出たい、自由でいたいという理由で結婚しない女の子も多いし、結婚しても産まない人が多いのですね。男の人に育児協力とか、いい意味でマイホームパパとか、そういう啓蒙が必要だと思います。今、若い人に聞きますと、ニュースを見ても、いじめだとか少年暴力が多くて、家庭を持って子どもを持つのが怖いというのが多く、いい家庭イメージがないのですね。少子化の問題に関しても、男女を問わずに、もう少しいい家庭像というのをみんなで広めて、若い人に家庭を持つ希望の方向を示す方がいいと思います。でなかったら、少子化の傾向は止まりませんよね。年金にしても、家族とか夫婦でなくて、個人単位でなかったら制度的にも間に合わなくなると思います」(52才独身女性：札幌2回)。

このような意見には大方の支持が集まったが、ここから社会的支援をどのように組み立てていけばよいか。一つは個人がますます重視するようになった「自由」に対応する社会的「公平性」もしくは「公正性」や「平等性」の観点からの受益と負担とのバランスを回復する支援策である。

たとえばフリーターの中にはシングル生活を選んで、子育てとは無縁だというライフスタイルの人が増えてきた。そうすると、年金自体のファンドが苦しくなって、中年女性の年金計画がご破算になる。フリーターを選択することは自由だし、その自由は当然尊いけれど、社会性がゼロで済むものでもない。第一に病気したら、健康保険を使わない十割負担は非常に大変である。そのためには日常的に健康保険の掛け金を払い続けなければならない。これを怠り、病気の時は健康保険での診察をと主張しても、それは通らない。この常識の見直しが先決である。

個人は生まれながらに自由だけれども、唯一例外的に人の自由を奪う自由だけは認められていない。受益だけではなく、負担がセットとして存在することは、他人の自由を損なわない程度に個人の自由が制限されていることの証明なのである。将来への展望がわずかでもあれば、まだ救いがあるが、現実には「信頼できれば負担が増えてもいいのですが、今の状態では少し不安があります」(44才既婚女性：福岡3回)という結論になってしまう。行政にもマスコミにもその具体的な対応策が乏しいので、「危ない、危ないばかりで、どうしたらいいのかという情報が足りないような気がします」(45才独身女性：福岡3回)となってしまう。政策的には「自分の質問に対して答えが返ってくるというシステムができたらもっと興味がわいてきます」(55歳：福岡3回)という回答にヒントを得て、行政と国民双方向の対話システムの構築が優先されるであろう。これには対面接触だけではなく、画面接触を促進させるパソコンやケータイという用具も意味があり、実現性はかなりあるはずである。

要するに、中年女性の自立の問題を軸にして、国民が感じている現在の不安感と将来に対する漠然とする不安感にどのような社会的支援策を講じればよいか。このテーマがもっと論じられるべき時期に到達したのである。

2001年5月現在の日本の高齢化率は17.7%にまで増大して日本新記録を更新しつづけているし、0歳から15歳未満の「年少人口率」もまた14.4%に低下して、日本新記録を更新中である。このような人口の長寿化と少子化がますます基調となる時代には、それなりの負担と受益のバランスの組換えが必然的に要請されるであろう。自立に隠されている負担とそれに基づく受益のどのような組み合わせが、新しい長寿化と少子化の時代に適合するのか。

本研究におけるグループインタビューではそれらを念頭にして実施したので、その記録からぜひたくさん意見を汲み取り、今後の方針樹立への参考にしていただきたいと願う。

第2章 中年女性の不安意識

北星学園女子短期大学非常勤講師 梶井祥子

<はじめに> 単独世帯増加の背景

夫婦そして親子の紐帯は堅固なものとして、長い間社会的結合の基盤であると信じられてきた。税制や年金などの社会保障制度は、いわゆる「標準モデル世帯（夫婦と子ども2人）」を中心に考えられてきている。しかし、高度経済成長期の終焉はその後の社会経済情勢に様々な変化をもたらし、人びとの考え方や家族のあり方にも大きな影響を与えた。個人の意識の変化そして家族の変容は、今まで自明とされていた社会の規範や経済の前提に対して、意味の問い直しの必要性を迫っている。そこでは、それぞれの変化が互いに呼応しあうような「相互依存的変動」が生じているのである。社会の安定を支える制度の基盤は、どのような方向に変化しつつあるのか。

1990年に発表された合計特殊出生率は「1.57ショック」と呼ばれ、人びとにあらためて「少子化」という具体的な社会変化の様相を印象づけた。政府もこれを機にさまざまな対策に乗り出した。

少子化の原因を探る過程で明らかになってきたことは、夫婦の結びつきを支えていた社会的規範はもはや機能しておらず、人びとの意識が「個」に向かっていることの兆候が顕著だということである。個々人の欲求の拡大・多様化が、ある種の「結婚離れ」に向かっていることも諸々の計量的調査で明らかにされてきた。1997年に国立社会保障・人口問題研究所が独身者を対象に実施した「結婚と出産に関する全国調査」においては、未婚者の意識が結婚から離れつつあり、「結婚には利点ない」「結婚する必要性を感じない」とする未婚者が25歳以上で増加しているという結果が報告された。

例えば、今回のグループインタビューにおいても、次のような発言があった。

「自由でいたいというのがすごくあったので。『男の世話など冗談じゃない』というのがありまして。今の日本の男性はほとんど自立していない。給料は稼いでくるけれども、自分の家では、帰ってきて、食って、風呂入って寝るみたいなものですよ。やはり本当に束縛されるのが嫌いなので」(46才独身女性：東京3回)。

「離婚して1人になったことのメリットは、時間が自由だということ。今まで夫が自営だったのでお昼でもいつあがってくるのかしらと、すごく待つというのが辛かったです。そういう気兼ねがあったからそれがなくて、そういう意味では気が楽です」(50才独身女性：東京2回)。

「前はがんじがらめの主人との生活で、自由が全くなかった。そういう意味では自分の眠たい時に眠れる。そういうのが自由でいいです。食べたい時に、行きたい時に行く。ちょっとぜいたくはできませんが。そういう意味では気が楽です」(49才独身女性：東京2回)。

ここに紹介した離婚経験者からは、結婚という制度の楔から解放され、「個」としての自由に満足している姿が素直に語られている。

今までは、単身の女性が自らの立場や考え方を語るという機会はほとんどなかった。しかし昨今では、書店においても「シングル」を対象にした本が目立つほどになっている。例えば、「『ひとり暮らし』の人生設計—中年シングルだってイイじゃない!」の著者である岸本葉子は、「未婚期間のやたら長い女性が、大量に出現したというか、社会にカム・アウトしてきたのは、この十数年のできごとだから。時代環境を抜きにしては、語れないですね」と時代との関わりを指摘する。単身女性のネットワークを主宰している松原惇子は、やはり著書の中で次のように書く。「人生も中盤になってくると、ひとり暮らしの良さばかりが感じられる。これは、強がりでもなんでもない。結局、人は最後はひとり。そのことが心の芯からわかるようになってくると、ひとり暮らしが輝きをもってせまってくるのである」(「シングル・スマイル・シニアライフ」文藝春秋)。

1998年に総理府が発表した「男女共同参画社会に関する世論調査」では、回答者の7割以上が「人は結婚してもしなくてもどちらでもよい」と答えている。かつて「皆婚社会」と言われた日本の社会は、夫婦、家族に関しては予想以上のスピードで構造変化が起きている。

非婚化の傾向は当分続くのであろうか。離婚は増えるのだろうか。「個」として生きるための新たな理念が必要なのだろうか。それに備えるべき社会の体制は整っているのだろうか。このような変動期を生きる壮年期の単身・独身女性は、どのような意識を持ち、自らの老後に対して何を求めているのだろうか。

表1 年齢別未婚率の年次推移(厚生白書平成11年版)

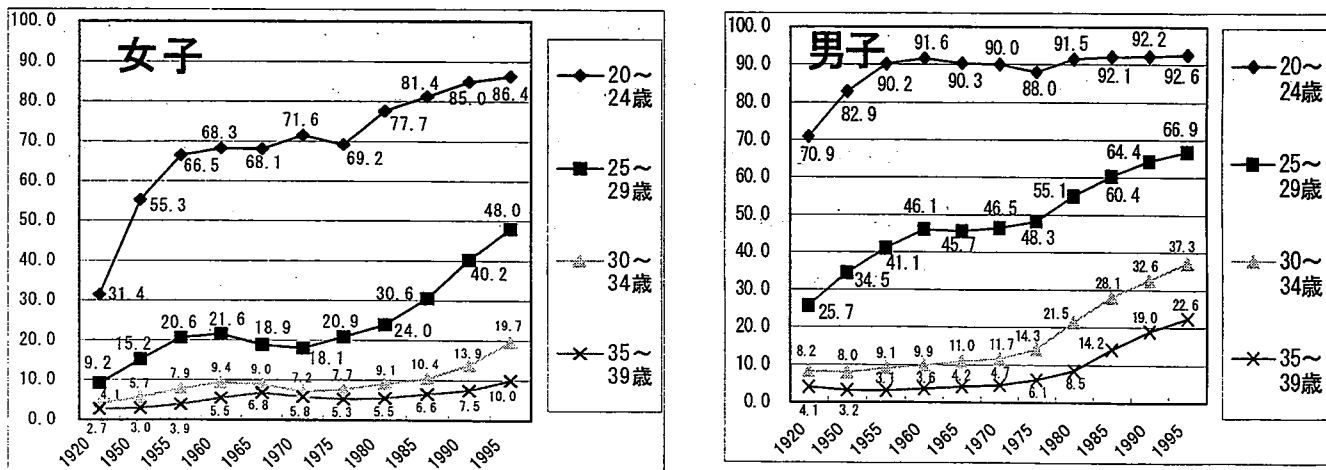
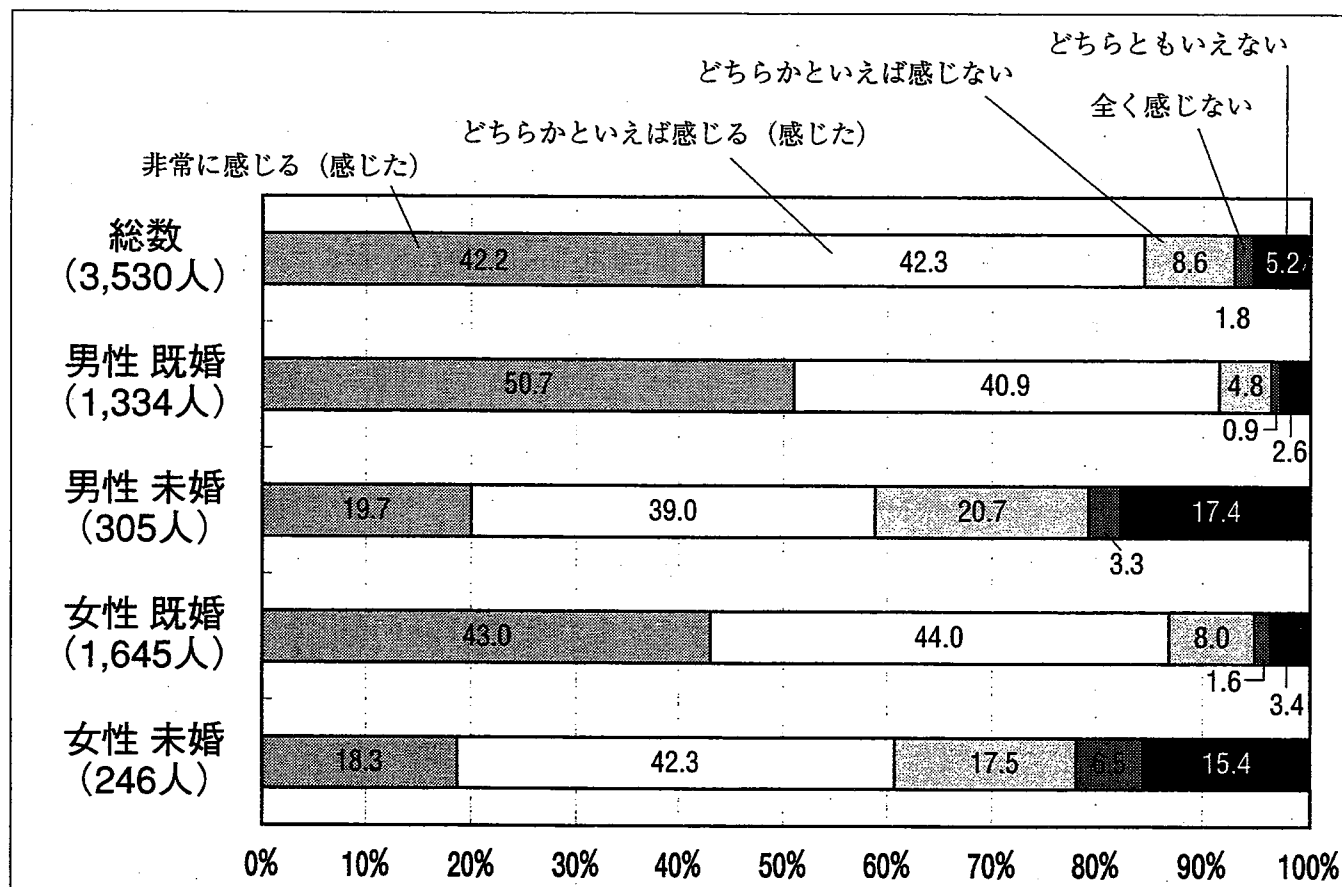


表2 結婚に対し、喜びや希望を感じるか（少子化に関する世論調査：総理府、1999年）



今回の調査を実施するにあたっては、今まで「標準モデル世帯（夫婦と子ども2人）」として扱われてきた家族のパターンが崩れつつあるという状況認識が前提となった。

国立社会保障・人口問題研究所による世帯数の将来推計では、今後2020年までの間に平均世帯人員の縮小が進んでいく。1995年の平均世帯人員は2.82人だったが、2020年には2.49人まで減少する。家族類型としては、「単独世帯」「夫婦のみの世帯」「夫婦と子から成る世帯」「ひとり親と子から成る世帯」「その他の一般世帯」の5類型を基本としているが、今後「単独世帯」「夫婦のみの世帯」「ひとり親と子から成る世帯」が増加し、「夫婦と子から成る世帯」「その他の一般世帯」は減少すると予測されている。2013年には1人で暮らす「単独世帯」が他の世帯を抜いてトップになり、2020年にはその割合が29.7%を占めるに至る。それほど遠い未来の話ではない。生涯未婚率の上昇、非婚化傾向、離婚の増加、親子の同居率の低下など、人びとの家族に対する意識の変容がまだまだ続くのであれば、社会の基本単位を「家族」に据えていた考え方を、今一度考え直す必要がある。

表3 家族類型別一般世帯数及び割合（国立社会保障・人口問題研究所：平成10年）

指 標	1995年 (平成7年)	2020年 (平成32年)	指数 (1995年=100)
家族類型別世帯数			
単独世帯	1,124 万世帯	1,453 万世帯	129
夫婦のみの世帯	762 万世帯	1,069 万世帯	140
夫婦と子から成る世帯	1,503 万世帯	1,304 万世帯	87
ひとり親と子からなる世帯	311 万世帯	462 万世帯	149
その他の一般世帯	690 万世帯	597 万世帯	86
家族類型別割合			
	(100.0%)	(100.0%)	
単独世帯	25.6%	29.7%	
夫婦のみの世帯	17.4%	21.9%	
夫婦と子から成る世帯	34.2%	26.7%	
ひとり親と子からなる世帯	7.1%	9.5%	
その他の一般世帯	15.7%	12.2%	

親子の関係もまた、次世代においては今とは質の異なる情緒的つながりを求めることになるのかもしれない。例えば、40才代と50才代の今回のインタビュー回答者は、自分の親の介護を自分たちの責任として感じているが、自分の老後に関しては子どもの世代には頼らないという意見が大勢を占めていた。親に対する考え方の、世代による温度差が窺われる。

「老後は自分で考えていかなければいけない。子どもにも世話にはならないようにしなければならない。それは私が親を看たから実感としてわかるのです。やはり子どもに非常に負担がかかります。そのことによって家庭にいろいろな問題が起こります。ですから、子どもの世話にはなれないので、自分でどうにかしていかなければいけません」(55才独身女性：福岡3回)。

「子どもの世話にはなりたくないという意識が非常に強いものですから、子どもたちには将来私の面倒はみなくてもいいと言い聞かせています。たまたま周りに私と同じような境遇の方で仲がいい方がいらっしゃいますので、将来2人で暮らそうという話も出ています。先はわかりませんが、子どもには面倒をみてもらわないで、自活をしていきたいと思います」(54才独身女性：東京2回)。

結婚をして家族を持つこと、子どもを産むこと、夫婦が生涯添い遂げること、従来は暗黙の前提事項として文化的規範となりえたことが、現代では多くの選択肢のひとつに過ぎなくなった。家族を持たず、「個」として生きることを選択する人はまだまだ増えつづけるかもしれない。

本章では、計 15 回に及んだインタビュー調査の結果を踏まえて、「壮年期独身女性の意識と不安」について報告する。第 1 節では、不安の源泉としての現代人の欲求の拡大と多様化、それに相伴する社会規範の弛緩について、社会学者デュルケムの「アノミー論」を基に論じる。第 2 節では、今回のインタビュー調査において捉えることのできた独身女性の特徴的な意識を、「裁量権」「自分らしさ」「自己完結」というキーワードから考察する。第 3 節では、具体的に語られた「不安」の諸相についてまとめた。

第 1 節 社会規範の揺らぎ

「先の見えない時代」、「不透明感」、「漠然とした不安」。これらの言葉は時代を映す表現としてすでに聞き慣れたものである。インタビュー調査の出席者からも次のような声が出された。

『将来に対する漠然とした不安』というものがものすごくあります。明日はどうなるかわからないという、いつもそういう不安はあります。それはなぜかと考えた場合、社会保障のシステム、制度がどんどん変わって行って、本当にお恥ずかしい話なのですが、何かよくわからないまいつつも生きているという気がしています」(42 才既婚女性：札幌 1 回)。

現在の私たちは、かつて経験したことのない社会規範の揺らぎの中で、正体のない不安に取り囲まれている。しかし、このような「不安感」がひとつの時代の現象として起こりうることは、ある程度予測されていたことでもあった。

19 世紀末のフランスで、産業化の萌芽期に立ち会った社会学者デュルケムは、資本主義的産業化という歴史的な社会変動が、分業、専門分化という構造変化を必然的に推し進めることを指摘した。分業においてさまざまに分化した機能を遂行する人びとが、十分に親密で持続的な相互作用を営んでいれば、その社会に「有機的連帯」が生じる。しかし、もし人びとが、そのように親密で持続的な相互作用を怠れば、どうなるか。分業を担う人びとが、相互に協力し合うことなく孤立するならば、共通の規則や理解の体系を漸進的に発展させることができなくなる。当然、社会的連帯は衰微する。その結果、混乱状態が生じ、重要な社会機能が十分に果たされず、社会は解体の危機を迎えるだろう。このような状況は、社会体系の要素間の関係を統制するうえでの重要なメカニズムである共通の規則の母体を崩壊させる。この状態を、デュルケムは「アノミー」と呼んだ。私たちが現在直面している不安も、高度に専門分化した諸システムが硬直化してしまい、連帯の契機を失い、社会規範が動揺し、しかもそこから逃れる術がないという閉塞感が要因となっている。

その意味でデュルケムの「アノミー論」は、すぐれて現代的意義を持っていると言える。彼は、

資本主義的産業化の進展によって引き起こされる社会的危機を次のように見据えていた。つまり、産業化によって経済的諸関係の優位がもたらされ、社会的、道徳的規制力は弱体化する。人びとの生活は、経済的諸関係によって支配されてしまう。個人—社会の関係原理が変質し、行き過ぎた個人主義（「功利的個人主義」）が人びとの道徳的連帯にも影響を及ぼす。21世紀に生きる私たちは、今まさにこのような危機を経験しているのである。

資本主義的産業化は、その発展のために不断に人びとの欲求を刺激し続けてきた。肥大化した欲求は、功利的個人主義の源泉となり、人びとの連帯意識、道徳観、倫理観に影響を与える。インタビュー調査では、次のような声があった。

「自分自身がどうするか、自分をどう支えるかという、『私』の部分が意識としてすごく大事であると思います。例えば年金にしても、世代間で支えるために今年金を払っているという人間は、たぶん私を含めていないだろうと思います。日常の『個』としての意識からすれば、自分が払った年金によって自分の将来が支えられる、それが正しい感情ではないかと思うのです。自分がいくら年金を払っても、将来その見返りはないと思ったら、それは当然払いたくないのです」（46才独身男性：札幌1回）。

「子どもたちは25才を過ぎていますが、その子たちが20才になった時点で年金を払わされるようになりました。でも、それがその子に返ってくるかということを私は非常に疑問に思っています。それなら現金で残してやった方がいいと思って、3人とも区役所からどんどん督促が来るのですが、一銭も払っていません」（48才既婚女性：福岡3回）。

この2人の発言に共通している点は、今ここで生きている自分の存在こそ重要であって、身も知らぬ誰かのためにお金を払うことは、どうも腑に落ちないという態度である。それがたとえ、制度全体の根幹を揺るがしかねない行為であったとしても、「個」を守っていくことこそが重要な価値として考えられている。現代社会ではこれは何も特異な感覚ではない。賛同する人は意外に多いであろう。しかし、一歩間違えれば、このような考え方からは社会的連帯・支えあい意識が抜け落ちてしまう。

社会の安定とそれを支える制度の確立には、人々の社会へのコミットメント（責任・貢献・愛着）を促す必要がある。そのためには、「負担の公平性」についての社会的合意が欠かせない。「アノミー」の理論を受け継ぎ発展させたアメリカの社会学者マートンによれば、ある文化的目標に到達するための手段が、現実には不公平にしか配分されていない時、手段配分の不公平によるフラストレーションがアノミー的状况を引き起こす要因となる。例えば、次のような指摘があった。

「これから厚生年金が段階的に65才になっていきますが、どれだけもらえるのかが、女性の場合

合は、もともとの基礎年金が男性の場合に比べると安いんです。それを考えたら、不公平だと思います」(50才既婚女性：名古屋1回)。

公平性の確保についての議論がなされなければ、規範や制度の揺らぎが新たに生じるだろう。誰もが「豊かな老後」という文化的目標を持ちながら、それを獲得するための「制度的手段」が不平等なものであれば、社会規範は容易に崩れていくのである。

一方、社会システムの硬直性が高まり、制度と実態の乖離が日常的に実感されるようになると、人びとの無力感が助長される。それもまた、社会規範への不信につながり、社会への連帯感、コミットメントを阻害する要因となるだろう。人びとは、ますます私的な生活での満足感にのめりこむようになる。

東京で行った計量調査ではアノミー無力感について、「年金など現代社会の仕組みは大変複雑で、それがどこにどのようにして機能していくのかは、我々一般の人間にはとても分からない」という設問で尋ねた。「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせると、全体の92%が無力感を感じているという結果であった。社会全体への信頼感が希薄になることが懸念される。

しかし、アノミー無意味感を、「自分はこの世の中でどういう役割を果たせばよいか分からない。自分が生きていることにいったい何の意味があるだろう」という設問で尋ねたところ、回答者の75%は「自分の生きている意味」を肯定的に捉えていた。ここでは、アノミー状況は見られなかった。家族を持って生きることがストレートに生きがいにはつながらない現代において、独身者はそれぞれの生きがいを創造し、自分の人生に意味付けを行なっていると思われる。

表4 社会の仕組みは複雑で、一般の人間には分からない(シニアプラン開発機構：2001年)

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	非常にそう思う	全体
全 体	1.2%	6.4%	54.1%	38.3%	100.0%
既婚(子有)	1.0%	5.8%	57.3%	35.9%	100.0%
既婚(子無)	2.0%	0.0%	45.1%	52.9%	100.0%
独身(子有)	0.0%	7.3%	57.8%	34.9%	100.0%
独身(子無)	3.0%	10.6%	50.0%	36.4%	100.0%

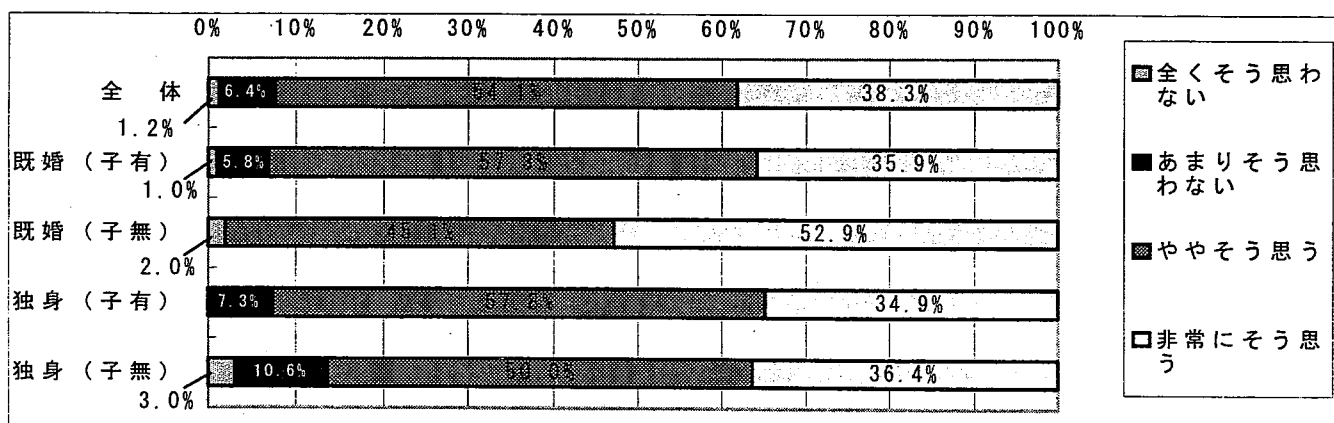
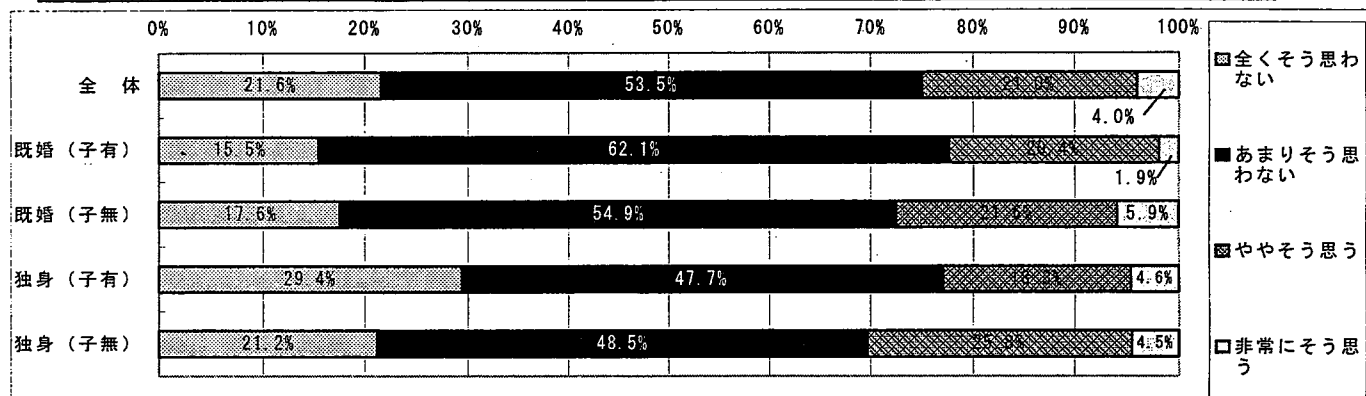


表5 自分が生きていることに何の意味があるのか（前掲）

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	非常にそう思う	全体
全 体	21.6%	53.5%	21.0%	4.0%	100.0%
既婚(子有)	15.5%	62.1%	20.4%	1.9%	100.0%
既婚(子無)	17.6%	54.9%	21.6%	5.9%	100.0%
独身(子有)	29.4%	47.7%	18.3%	4.6%	100.0%
独身(子無)	21.2%	48.5%	25.8%	4.5%	100.0%



以上、ここでは「社会的規範の揺らぎ」がどのように生起してきたか、そしてその現状に対して、どのような議論が必要であるかを検討した。

第2節 独身女性の意識と行動

今回のグループインタビューには、独身者と既婚者の意識の違いを比較するため、両方の属性の人たちに参加してもらった。健康面での意識、親の介護問題に関しては、独身者と既婚者の間で際立った意識の違いは見当たらなかった。女性の場合、配偶者がいても最後に残るのは女一人という意識があるので、最終的には独身者と同じ立場になるということも根底にはあるだろう。一方で、自由についての考え方、生活信条に関することでは、既婚者との意識の違いが顕著であった。

独身者にのみ特徴的に現れた発言を、「生活における裁量権の獲得」と、「自分らしい生き方へのこだわり」、「自己完結する人生」というキーワードでまとめた。

最初に「生活における裁量権の獲得」について典型的な発言を紹介しよう。

「独身でいることのメリットは、自分の稼いだものは自分の裁量で好きなように割り振って、疲れたらそのまま家へ帰って寝てしまうことも出来るとか、やはりそういうことだと思います」
(45才独身女性：東京3回)。

「ずっと一人で暮らしていたので、別に不安もないし、一人のほうが気楽で、一人の生活は慣れ

ているので、それなりに楽しめるし、今は体も悪くないので、あまり不安は感じていません。一人でずっと働いてきたので、お金も自分で稼いで自分で使えるし、自分が思うようにしたい」(49才独身女性：福岡1回)。

「単身でいることのメリットは、時間配分や生活の優先順位がほとんど自分中心でできるということではないかと思っています」(47才独身女性：東京3回)。

ここで言う「生活における裁量権」は、経済行動の自由と時間使用の自由として現れている。

国民の多数派が「ある程度の豊かさ」を享受するに至っている現在の日本社会においては、人びとの欲求も質的变化を見せている。独身者あるいは離婚を経験した単身者からは、経済行動の自由と自分の時間を自由に使うことの出来る裁量権が、あたかも「財産」であるように語られている。このことは、子どものいる既婚者の生活感覚とは好対照をなしている。

「子どもの教育費が大変で、余分は一銭もなく、本当にほかのことに回せない。老後のことは頭にあるんですけど、全然回っていかなくて、3人分の教育費を払うだけで本当に恐ろしいです。あるものはすべて教育費と食費だけという感じで、蓄えようにも蓄えられないです」(45才既婚女性：名古屋1回)。

「老後の豊かな生活などは何も考えられずに、今持っているマンションの支払いがきちんと滞りなく終わって、娘たちがきちんと納まっていくことが心配なだけで、それ以上のことはまだ何も考えていません。主人となるべく長く一緒に生活をしていけたらいいなと思っているくらいで、それ以上の希望なども、まだ何も考えつかないような感じです」(42才既婚女性：福岡2回)。

「自分はあまり自分らしくとか、自分自身が趣味があったり楽しみがあったりということがないので、主人や子どもがこれをやりたい、これをしたいということに一生懸命になってしまう、自分自身がないというのはですか、だからそれで自分が喜んでいるほうなのです」(42才既婚女性：福岡2回)。

このような声は、既婚女性が「個」として生きることの困難さを逆照射させる。

次に特徴的だったのは、独身者の「自分らしい生き方へのこだわり」である。経済的豊かさよりも「自分らしく生きる」ことに価値を置く姿勢が強調されている。

「長いOL生活を一昨年に辞めて、去年は失業保険をもらってのんびりしていました。今後はもう正社員になるつもりはありません。これからは好きなようにやりたいと思います。個人年金を38才の時から掛けています。60才になると15年間、毎月6万円ぐらいはもらえます。貯蓄は結構ありますので、それを自分なりに運用して、あとは国民年金と厚生年金とダブルで、少ないなりに十分やっていける。シンプルに生活することが目標です」(46才独身女性：東京3回)。

「ずっと OL 生活をしていたのですが、3 年前に父が入院したのをきっかけに仕事を変えました。現在登録ヘルパーをしています。自分が老後に近づくと、自分にとってどういうことが一番生きやすいか、働きやすいかということを考えます。安定した生活よりも自分の好きな仕事、自分に向く仕事を目指していきたい」(51 才独身女性：東京 3 回)。

老後の生活設計についても、「自分らしさ」が貫かれている。

「老後というのは昨日、今日、明日の繰り返しの先にあるわけです。突然『今日から老後よ』ということはないわけです。私はむしろ定年を楽しみにしているのです。『早く仕事から解放されて遊びまくりたいわ』みたいな。今、仕事をしながら、老後にやりたいことを同時進行で探しています。仕事はもう細々と続ける程度で、ほとんどは自分のやりたいことをする時間にしたい。そのために、健康管理には気を遣っています」(45 才独身女性：東京 3 回)。

「山登りを 40 年近く続けていまして、それを続けながら健康維持をしています。あと、趣味の部分にもう少しお金を費やして、老後はその趣味を生かしたボランティアにかかわれればと思って、現在過ごしています」(51 才独身女性：東京 3 回)。

ここでは、子どもを養育しなければならない立場と、自分一人の生活を支える立場との違いがはっきりしている。

「私たちのシニアライフを充実させるために必要なものは何でしょうか。私はこう考えます。それは、お金でも家族でもない。前向きな心と同じ価値観をもつ友人、そしてネットワークだと(松原惇子、前掲)。」このような独身者の宣言が、今回の出席者によっても実践されている。

「仕事を持っている独身女性のネットワークに非常に関心があります。そのような会のひとつに入って活動していますが、『こういう生き方があるのだな』と知ることによって、自分が困っていること、不安なことが一つずつ解消していった、今はとても良い精神状態で、安定しています」(45 才独身女性：東京 3 回)。

「人生 80 才までだとしても、あと 30 年もある。結構自由な時間が多くなるはずなのです。今まで組織の中で働いて、食べるためにお給料をいただいていたけれど、そういうのに拘束されない時間がこれからたくさんあると思ったら、どういうことをしたら自分が楽しくなるか、友達とのネットワークの中でどういうことが自分の刺激になるか、刺激を与えられるか、いろいろ考えると時間が足りないばかりで、死後のことなどあまりピンとこないですね」(51 才独身女性：東京 3 回)。

自由な時間、生活スタイルを持ち、経済的代償を払っても「自分らしい生き方」にこだわりを見せる独身者像が今回のインタビュー調査によって浮き彫りにされたが、彼らが最後に目指すの

は「自己完結した人生」と呼べるものである。

「50 才になったら生前預託を頼もうかと思っています。自分が死んだら必ずここに連絡してくれと頼んでおけば、葬式から全部してくれる。いつ倒れても、頭がぼけてしまって自分が何も出来なくなった時でも、元気な時に書いておけば、入院したときはこうしてくれとか、お金はこうだとか、そういのができるらしいのです」(46 才独身女性：東京 3 回)。

子どものいない独身者にとっては、自分が老いていく過程以上に死後の問題に重大な関心を持っているのが特徴的である。単身女性のオピニオン・リーダー的存在として執筆や評論活動をしている松原惇子も、その著書で単身女性の共同墓を造るに至った記録を紹介している。(前掲)

「歳をとるとだんだん周りに、去年まで元気だった人がいきなり亡くなるようなことが増えてきます。自分が死ぬということも次第に現実味を帯びて、死んだらどこのお墓に入るのかしらと、考えたりします」(47 才独身女性：東京 3 回)。

「今一番考えていることは、老後というよりもむしろ自分の死に方です。何か自分の老後とか介護とかいう問題よりも、自分の死に方というものをどういうふうに考えていったらいいかと」(50 才独身女性：名古屋 2 回)。

「最近お墓のことをやはり真剣に考えるようになりました。田舎の両親のお墓には入りたくなくて、できれば分骨して上野にある合同のお墓に入りたい。年に 1 回抽選があって、お金を払っておけば死んだ時に入れてもらえるんです」(46 才独身女性：東京 3 回)。

現在、血縁をこえた合祀墓の建立は静かなブームとしてマスコミにも取り上げられている。独身者が自分の人生を最後まで自分の責任で全うしようとする覚悟が感じられる。

このように独身者に特徴的な生活信条は、新たな生活ニーズの根拠となると予測される。

第 3 節 不安の諸相

今回のインタビュー対象者の不安は、高い自立意識の裏返しとしても読み取れるものであった。ここでは、「健康」・「お金」・「人間関係」・「社会的評価」に関する独身者の不安について取り上げる。

1. 健康に対する不安（医療・介護の問題）

健康に対する不安は、加齢に伴い誰もが抱くものである。女性の場合、既婚か未婚にかかわらず、最後に残るのは自分ひとりという可能性は高い。また、子どもがいる場合であっても、自分の老後の介護への期待は低く、なるべく子どもには頼らないという意識が強いことが今回の調

査で確認された。前節でも取り上げたように、独身者は特に、自分の人生をある種の「美意識」を持って締めくくりたいという欲求が強い。高い自立意識がある一方で、「個」として生き抜く立場の人々に対する社会的支援が、未だ不完全な状況であることを考えれば、とても安心して老後を迎えることはできないようだ。

「子どもがいないので、だんだん歳をとってきて自分で自分のことができなくなったときに、そのところを自分で考えていかなければいけないと最近すごく思います」(46 才独身女性：東京 2 回)。

「今元気だからいろいろな趣味を通して友人はいますが、いざとなったら間に合わないですから。そこまでは期待できないですね。だから自分の健康をまず優先ということで」(49 才独身女性：東京 2 回)。

すでに、「いざという時」を体験した人もいる。

「一人でいると、健康上のことが不安です。急に目の手術をすることになったときすごく動転してしまいまして、全然したくができなかったのです。その時は、いろいろ妹に世話になって感謝しています」(55 才独身女性：東京 3 回)。

元氣な親族、この場合は姉妹の存在が頼りになっている。しかし、少子化により兄弟姉妹の数は若い世代ほど少なくなっているので、今後は親族ネットワークを頼れるひとは限られてくる可能性が高い。

「一人で暮らしていて心配なのは、けがや病気で動けない時です。いきなり倒れてしまったり、意識がなくなったり、交通事故にもいつ遭うかわからない。結局、周りの知人、親、姉妹のサポートに頼らざるを得ない。そういうときの準備は、出来る限りやっています。いざと言う時のお金も、常に普通預金からまとまったお金が引き出せる状態をキープしています」(45 才独身女性：東京 3 回)。

「母の介護をしている間にいろいろ思いました。この人には私がとりあえずいるけれども、私は誰もいないのだよなど。そうすると、自分は他人様に看ていただくしかないということです。そのために何を準備するか。金銭的な準備ももちろんなのですが、精神的なこととか、どこでどういうふうにすればいいのかということを事前に自分がわかっていなければならない。ある日突然倒れて何とかしてくれというのは無理だろうし、今から着々とそれなりのものを作っていかなければならないのではないかと。だからどうしていいかわからないけれども、危機感というかそういうものはすごくありますね」(50 才独身女性：名古屋 2 回)。

ここでは、情報の不足も指摘されている。家族を対象にした情報は多いが、独身者への情報が

著しく少ないという偏りがあるようだ。

「標準世帯というのですか、夫婦2人と子ども2人の世帯に対しての情報量は『例えば・・・』というようなことでテレビなどでも報道されて、数字がよく出てきます。私たち40代に対する情報は、あるのでしょうけれども、それに触れる機会があまりないと思います。もっときめ細かな情報が身近にあると、少しは安心できるのではという気がします」(42才既婚女性：札幌1回)。

情報不足が不安感を煽っているという側面もある。

「単身で生活している者がある日突然倒れた時のシステムは意外にないのです。自分が倒れた時に、支えてくれるものが何かあるのかなと思います」(41才独身女性：札幌1回)。

「一人者なので気が楽ですが、不安はあります。老後を考えると、自分はどうなるのだろうと」(42才独身女性：福岡1回)。

2. お金に対する不安（年金、貯蓄の問題）

今回のインタビュー調査で明らかになったのは、現在の日本社会での女性雇用者の状況が、当然のことながらそのまま独身女性にも反映しているということである。パート労働や派遣社員として雇用されている場合、その身分は不安定であり、保障は不十分なのが現状である。「個」として一人で生計を立てていくのには困難が伴う。

「今は、家の近くの個人商店で事務員としてパートで働いて、それでは生活ができないので、夜は飲食店の裏方で5時間ぐらいのパートをしております。厚生年金を17年間掛けていたのですが、当時、保険のことがまったくわからないで辞めてしまったものですから、あと3年頑張れば満期だったのになと、今すごく後悔しています」(47才独身女性：札幌2回)。

「健康を害した時にどうなるのかなという不安は、家族を持っているのといないのとでは、大きく違うと思います。精神的な意味でも不安だし、実際に病気になって収入が途絶えたときに何の保証もない。その辺は無防備だなと思っております」(47才独身女性：東京3回)。

「生活資金のことがすごく気になります。自分なりに最低でこのぐらいと思っていたのが、保険会社の人に計算してもらおうと、すごく膨大で、ゆとりのある生活はとても無理だと思います。私の歳では、もらえる額もだんだん減っていくみたいですので、年金はあてにならないですし」(51才独身女性：名古屋1回)。

「公的年金はもらえると思っていないものですから、とりあえず現金で蓄えようと、最近保険も切り替えたりして、車も売って、そういうかたちで少しずつ貯金を増やすための努力をしています」(52才既婚女性：名古屋1回)。

「12～13 年前に入った個人年金が生命保険会社がバタバタと業績を落としていますので、確定で 15 年出しますよとは言ってますが、それがいつひっくりかえるかわからないという意味で掛け金を払いながら心配なのです。そうかと言って今やめるのは一番もったいないので、しょうがないなと思いながら払っています」(45 才独身女性：東京 3 回)。

兄弟姉妹もなく、老親の介護を引き受けなければならなくなった場合は、職業継続が困難になるなど、独身者には厳しい状況である。

「私は今、母親の年金と私のパート、あと遺産で生活をしているのですが、母がいつまでも元気だとうことはありませんので、もう少し確実な収入も考えてはいるのですが、今の状況では年齢的なこともあって仕事は大変見つけにくくなっています。母がもし亡くなって、国民年金がなくなってしまうと、ちょっと憂鬱ということで、今悩んでいる最中です」(49 才独身女性：東京 1 回)。

「自分の老後のために何かを残すというのは不可能ですね。今は子どもの教育費にかけて、何とか生活をする。今度、母が悪くなったらそちらの方に行く。そうすると、自分の先はものすごく先なのです。具体的に何も考えず、目の前のことばかりを考えているのが現状」(51 才独身女性：京都 3 回)。

「おばあちゃんを看て、主人を看て、私はどうなるのかなという感じはあるのですが、子どもに頼るつもりはないので、将来は家売ってでも老人ホームに入ろうかなと思っています。社会的支援とか年金保険ですが、それはもらえるという確信はないので、不安を乗り越えて、明日が見えないと、私ぐらいの年齢の人は半分あきらめています」(43 才既婚女性：京都 2 回)。

「私は一人ですし、結婚したいという気持ちもないものですから、やはり老後の不安はあります。行政や政府に頼っていけるものとは思っていないものですから、自分で体が元気なうちに計画を立てたいのですが」(41 才独身女性：福岡 3 回)。

「公的年金に関しては期待していないというのが本心です。どうしても自分たちのために払っているという気がしないものですから」(41 才独身女性：福岡 3 回)。

「主人もおりませんので、自分のことだけを考えればいいのですが、やはり公的年金はあてにできません。自分で老後を考えていかなければならない。子どもにも世話にはならないようにしなければならぬ。それは私が親を看たから実感としてわかるのです。やはり子どもに非常に負担がかかります」(55 才独身女性：福岡 3 回)。

「公的年金は、今もらっている方たちは安心でしょうが、私も 41 才になりますので、私たちがもらえる時期になるとどうなるのかなと気になります。報道などの情報から、いずれパンクする

のではないかというイメージをととても強く持っています」(41 才独身女性：福岡 3 回)。

「保険は無理をしてでも掛けます。その分、今の生活を圧迫していますが」(48 才独身女性：東京 1 回)。

「老後の支えは、ほとんど国民年金なのです。私はしっかり頼りにしています。それから、国民年金基金と、JA の農協共済にも入りました。60 才以降、月に約 20 万円の生活を目指しています」(49 才独身女性：東京 1 回)。

「個人年金は掛けていますが、公的年金は自由業になったときにやめてしまいました。もらえるかどうかわからないからです」(48 才独身女性：東京 1 回)。

「保険の問題や、女性の場合特にどこまで勤務できるのか、そういうことの不安を最近感じています」(41 才独身女性：札幌 1 回)。

「ずっとフリーの仕事をしていたので、国民年金と国民保険に入っているのですが、厚生年金と比べて掛けている金額が少ないので、年金がもらえるようになっても本当に少ないだろうと思っています。いったん病気になったりすると、フリーでやってますから、その時からまったく収入がなくなるので、入院給付の保険にはいっぱい入っています」(43 才独身女性：札幌 1 回)。

「私は 65 才まで勤めないと、厚生年金の最低枠に入らないので、そこら辺がとても心配です」(51 才独身女性：京都 1 回)。

3. 人間関係に対する不安（交友関係、地域社会、生きがいの問題）

独身者が親密な人間関係をどこに求めていくのかは、本人の生きがいと関わる重要な問題である。子どものいる専業主婦の場合は、地域社会や子どもの友だちの親など、身近な人間関係が生活の中心になりやすい。独身者は、自分の選好に従って、より選択的に他者との係わりを築いているようだ。

「子どもがいましたから再婚は考えなかったのですが、でも淋しさはすごく感じました。話し相手とかパートナーとか、結婚するよりやっぱりお茶のみ友だちが欲しいと思います」(49 才独身女性：東京 2 回)。

「都会は冷たいというより、みんなそれぞれ生活があるから、それを差し置いて私を助けてとは言えません。絶対に。その人が自分から率先してやってくれたらいいですが、こちらからそれを要求するということは友だちでもできない」(50 才独身女性：東京 2 回)。

ここでは、独身者が日常生活で拠りどころとなるような人間関係を求めていることが暗示されている。それだからこそなお、自ら積極的に行動する必要もある。

「自分がやはりいつも自分らしくありたい。いろいろなものに非常に興味、好奇心を持っています。自分の存在感というものを必ずいつも何か、私はここだよ、ここにいるんだと、自分発信で何かをやっていたいというものを持っています」(53 才独身女性：福岡 2 回)。

地域社会との係わりを避けているわけではないが、現実には接点を持ちにくいという指摘もあった。

「地域の人とのコミュニケーションをしたいのですが、地域からの情報が単身者にはなかなか来ないのだと思います。昼間はいないので。こちらは別に拒否しているわけでもなくて、お互い支えあえるもの、そして『個』としては『個』と、何もこだわりはないのですが、地域にはなかなか参加しにくい事情が現実問題としてあります」(41 才独身女性：札幌 1 回)。

このような状況が、やがて社会との連帯意識を鈍化させる方向に向かわないように、「係わり場」が多角的に提供されることが期待される。例えば、次のような意見があった。不安というよりは提言に近いものであるが、ここで紹介したい。

「町内会には帰属意識がないのです。私の地域に対する帰属意識はもっと任意で集まるネットワークみたいなもの、それに帰属しながら、この社会を支えるという意識を持てるものに対してです。ボランティアや NPO というものがどんどん地域に帰属しているという意識を作るためのシステムとして発展していかないと、これまでのように地域に寄りかかっているだけではだめだという感じがします」(46 才独身男性：札幌 1 回)。

「若い人が減ってくるので、シニアも社会の一翼を担って、一緒にやっていかなければならないと思うのです。中高年の人たちがもっと社会に関わって、収入ももらえるような、そういう情報が少ないのではないかとと思っています。そういう情報発信するようなことをボランティア的にでもやりたいと、友達と考えています」(55 才独身女性：東京 3 回)。

このように、家族や地域社会のほかに、自主的な新しい組織、ネットワークの活動が、社会的コミットメントを経験する場としてますます必要とされてくるだろう。

4. 社会的評価の未熟性

多様な生き方、個性を重視する社会が標榜されて久しいが、女性の単身者に対する社会の評価は未だ未成熟である。今回の調査では、その経験が語られた。

「単身でパートの身分なので、社会的な信用というか、自分の身分証明がどこにもなくて、それは今でもいやだなというのがあります」(50 才独身女性：東京 2 回)。

「独身でいることに対する偏見とか差別がまだあります。東京でも。特に私の職場では主婦の方

が一緒に仕事をしていますから、やはり言葉のはしはしに偏見みたいなものが出てきています」
(51 才独身女性：東京 2 回)。

「単身のデメリットは、保証人を立てなければお金も借りられないし、家も借りられないとか、いっぱいあると思います」(45 才独身女性：東京 3 回)。

「保険に入ろうとしたら、独身で仕事もパートということなんで断られました。旅館など宿泊を申し込んでも、女一人はやはり断られますね」(46 才独身女性：東京 3 回)。

「やはりお部屋を借りる時には大変でした。『女性の一人は困るのです』と言うので、『何が困るのですか』と聞いたら、『結局長く居座ってしまう』とか『出て行かない』とか。女性一人だということで、もう面と向かって言われて、何かすごく理不尽なものを感じました」(50 才独身女性：東京 3 回)。

「一戸建てを購入する際、ローンを組むのに銀行とケンカしました。今でこそ石を投げたら当たるほどにシングルの人も多いですし、離婚の人も多いのですが、当時は『母子家庭には貸しません』みたいなことを言われました」(47 才独身女性：京都 1 回)。

「就職の際に、人事担当者が、小さい子どもを連れているというのは、いつ休まれるかわからないと。でも、逆だと思うのです。一人親だからこそ、自分が生計を立ててるわけだから休まないし、辞めないし、会社に対していい仕事ができるとこちらは思っているのに」(47 才独身女性：京都 1 回)。

「片親だということで就職は大変でした。パートでも、社長が目をかけてくれたら、『あんた、社長に何かしたん?』とか、女の人からのセクハラ的な感じもありました」(51 才独身女性：京都 1 回)。

結び

戦後の日本社会は、企業と家族が「豊かな生活」という同じ文化目標を目指して連携し、急速な経済成長を果たしてきた。特に企業の側はその成長のために家族の支援を必要とし、家族の側も「個人の自由」をある程度犠牲にしつつ、その期待に応えてきた。そこでは企業主導の規範が、一定程度の社会の安定機能として働いていたとも言えるだろう。

60 年代後半以降の意識調査では、国民の 9 割以上が中流意識を持つようになり、物質的豊かさはそれなりに獲得されたが、一方で人びとの欲求はさらに拡散し、より精神的満足を求めて質的变化を見せた。

経済が低成長時代に入り、社会全体が従来の価値規範の「意味の問い直し」を必要としてきて

いる。日本型と言われていた終身雇用制、年功序列賃金などの企業の経営形態もなだれを打ったように崩れ始めた。戦後は、「家族賃金（＝電産型賃金）」の理念が導入され、企業が従業員の家族保障を丸ごと引き受ける体制が確立したが、そのようなことは通用しなくなっている。それに代わるものとして、「個」として生きること、「自己責任」ということが強調されるようになった。

ひとりひとりが、家族単位ではなく、「個」として生きることが時代の要請になったのである。個人の側も、それぞれが自分の生き方にこだわり、多様な自由を実現することを目指すようになってきた。

経済的ゆとりを実現したあとでは、「時間」も個人的資産としての価値を高めることになった。時間の配分は自由の配分を意味しているということが、今回のインタビュー調査でも明らかにされた。

「自由」の価値が高まる風潮のなかで、個人の自由がどのように自律的にコントロールされるのか。「個」として生きることと、社会的コミットメント（＝社会との係わり合い、負担の承認）との相互依存性をどのように考えるかが課題である。

個人の自由の実現には、確かに自己責任の意識が伴わなければならない。それは、自分で責任を持てる範囲で自由を追求するということでもある。そこには、自由を自律的にコントロールすることも含意されているはずである。

たとえば、自分の老後のために複数の個人年金に入り、その掛け金のために日常の生活が苦しくなったという発言があった。極端ではあるが、日常の経済的不自由を我慢しても将来の安心に備えるという、ひとつのセルフコントロール（自己管理）の例としても読み取ることができる。

「いったん病気になったりすると、特にフリーでやっていると、そのときから全く収入が入ってこない状態になるので、入院したときにお金が入るような保険に結構いっぱい入っています。たぶん収入に対して莫大な保険に入っていると思います。あまりにも負担する金額が大きいので、1～2個やめようかと思っているところです。気が付いたらこんなに保険に入ってしまったというのは、やはり将来に対する不安があるからだと思うのです」（43才独身女性：札幌1回）。

ギリギリまで自助努力をして、自己責任を果たすにしても、それを支援する社会的な保証は必要であろうし、万が一自己責任に失敗した場合でも、セイフティ・ネットになるような制度も検討されるべきである。

「自己責任の社会になりながら、新しい次の社会のかたちを誰も見せてくれない。それはみんな不安に思いますよ」（46才独身男性：札幌1回）。

個人の自由な生き方を重視する傾向は、今後も強く支持されることだろう。しかし、個人が「自

由であること」と、社会的負担を引き受けないこととは、当然一致しない。むしろ、個人の自由を保障するための負担、社会への貢献ということを考えなければならないだろう。その意味では、「個」として生きることは、社会の安定をより強く要請する側面を持っている。

「介護保険に関しては何も思わず、システムとしてはどんどん払えばいいと思っています。老後を迎えた人たちのための次のシステムというものがもっともっていいと思うからで、そのための支出は皆で負担するのはいいと思っています。ファミリー以外の、単身であろうと何であろうと、一人が一戸の世帯として生きていく場合のシステムを、もっともって論議していただきたいと思います」(41才独身女性：札幌1回)。

「個人の自由は社会的価値の中心に位置するばかりでなく、社会の所産でもあって、社会のあり方と切り離して論じられない(A.セン「社会的コミットメントとしての個人の自由」『みずす』1991年1月号)。」つまり、「個」としての自由を確保して生きるには、必然的に社会制度や公共政策につながらざるを得ないのである。個人が「他者への共感や倫理規範へのコミットメントのような、自己利益にとらわれない価値観と目標の担い手」であるような「社会的人格」を備えるならば、個人の自由は、より正義にかなったやり方で分配されることは可能になるはずである。

「何とかして自立して1人で生きていかねばならないと、そういう道を探したいというのが自分の願いなのです。80才まで生きるか90才まで生きるかわかりませんが、そういうふうになったときでも何かちゃんと個として生きていたい。そのためにも、何か公的なヘルプがあれば、今後できてくれればいいなと祈っています」(53才独身女性：東京1回)。

このような切実な声に社会が答えることによって、「個」と社会の相互依存性が自覚されていくのである。

「(誰にもあたりまえのもの、自明なものと感じられていたことが)揺らぎ、分裂し、あまりに多様化するとき、私たちは基準を失った不安感に曝される(中村雄二郎「共通感覚論」岩波現代文庫)。」まさに、このような時代を私たちは生きている。集団で守られていた時代から、「個」で生き抜く時代へと変化するなか、「基準を失った不安感」を抱えつつも懸命に努力している。今回のグループインタビュー調査では、そのように生きる人々の生の声を集めることができた。個人と社会を取り結ぶための新たな関係、それを支える制度を早急に提示しなければならない。

インタビューでの結果を踏まえて、具体的に次のようにまとめた。

・不安解消のための処方箋⇒きめ細かな情報の提供：「標準モデル世帯」に偏らない計算数値の情報と、税制・年金・保険などの制度維持のための将来展望を提示し、多様なメディアを通して社会にアピールする。

- ・社会へのコミットメント（責任・貢献・負担）を促すための処方箋⇒多様な「場」の提供：家族、企業、地域以外で連帯感、帰属意識を実感できる「場」を開拓し、ボランティア組織、NPOなどへの理解と支援を促す。

- ・「個」と社会との相互依存性を支援するための処方箋⇒セイフティネットの充実：無年金者対策の充実、一人暮らし用の公営住宅の増設が挙げられる。

- ・実態を反映した制度改革⇒公平性の基準の提示：公平性の基準をどこに合わせるのかを明らかにし、社会のコンセンサスを求める必要がある。

個人の側もまた、社会の安定こそが自分たちの自由を保障するものであることを自覚し、そのための負担を積極的に考えなければならない時期にきている。今回の調査によって、個人と社会の相互依存という関係をあらためて確認することができた。この結果を「制度」のなかにどのように反映させていけるのか。具体的な検討が早急に求められている。

第3章 中年女性の自立意識

北海道武蔵女子短期大学助教授 和田 佳子

はじめに

自らの老後が微かに見え始める 40~50 代は、それまでの人生を振り返り、老後を視野に入れたアイデンティティの再構築を試みる世代でもある。中年期は家庭や地域・職場で発言力を持つ安定・充実したポジションに在ると見られる一方、成人期と老年期のはざまにあって、体力的な限界や職業上の停滞、家庭内での諸問題に直面するなど心理的にも困難な課題を背負い込む世代でもある。20 代から 30 代にかけては自らを社会に適応させることにエネルギーを注ぎ、他者との関係を調整しながら自己確立を目指すことに重きを置くが、ある時点からは、それまでには考えてもみなかった方向に目が向き始めたりもする。

長寿化による「老後」の伸長は「中年期」の意味合いを変えつつある。人生わずか 50 年と言われていた時代（因みに、日本人の平均寿命が 50 歳を超えたのは 1947 年のことである）と現代とでは、中年期の課題には明らかな違いが生じている。少子高齢化による現代人のライフサイクルの変化は、特に成人女性に顕著であり、少子化や長寿化に、非婚化の進行、離婚率の増加などが加わって、女性が必ずしも結婚・出産・子育てを基本としたライフコースをたどらなくなってきた。かつて女性の人生において、自己の存在意識を確信できる時期であると考えられてきた「子育て期間」すらも、今や必ずしも安定した時期とは言えなくなってきた。夫婦の関係においても、中年期は以前ほど安定したものではなくなっている。離婚の発生率を 1960 年と 1990 年で比較すると、結婚 15 年から 20 年未満の夫婦での離婚発生率が 2.3 倍に増え、結婚 20 年以上の夫婦では、実に 3 倍強と顕著な増加が見られる（人口動態統計）。主体的に様々なライフコースを選択できる時代になったこと自体は悪いことではないが、どのコースを選択したとしても、人は常に心の危機や葛藤を抱えながら生きていることに変わりはなく、選択肢の多さゆえに中年女性の悩みの諸相はより複雑化しているとも言える。こうした様相の変化から、女性の生涯にわたるアイデンティティ形成や老後の自立の意味合いにも変化が見られるの必然であり、むしろ中年期こそ、人生における発達と自我統合の重要な時期であるとも言えそうである。

本章では、グループインタビューやアンケート調査の結果から浮び上がった中年女性の自立意識をライフサイクル論やアイデンティティ論に照らしながら考察し、中年女性が老後につながる

今をいかに生きようとしているのかを「自立」の観点から報告しながら、中年女性の自立を促すための社会的支援の可能性を探る。

第1節 中年女性のアイデンティティ問題

かつて、フロイトは心の葛藤やアイデンティティの形成は青年期に完了するものにとらえ壮年期の発達には目を向けることがなかった。しかし現代では、人は生涯を通じて発達、変化しているという考え方が一般的である。成人前期には、職業や家族を持つことによって自己を外的世界に適応させていくのに対し、成人後期には、自己の内的欲求や本来の自己の姿を実現させながら発達していくものである。ユングはこれを「個性化の過程」あるいは「自己実現の過程」と呼び、人間の発達の根本的変化は「人生の正午」である中年期にこそ起こるものと考えた。特に40~50代は、①子育ての一区切り②仕事の一区切り（退職や収入減少）③体力、気力の変調④身近な人の老いと死の受容など、身体的・心理的・社会的変化に突き当たり、自分の老後を意識しながら、青年期以来築いてきた自らのアイデンティティを問い直し、人生の後半に向けて再構築を試みる時期となっている。それまでの自分の生き方を見つめ直し、先の人生を再展望することは、時として、暮らし方や働き方・人生観までも大きく変えざるを得なくなることもある。ユングはこれを「中年の危機」と称したが、危機は人格的発達のチャンスでもあり、「自分とは何者か」を探りつつ、新たに「自立した自分」を目指して有意義な人生を考える好機であると捉えることもできる。

今回のインタビュー調査の中にも、「（離婚し）自分の人生は一度きりなので、自分らしく生きたいと思い、自分の居場所を探していきたいと思っています。いつも自分らしくありたいというか、自分の存在感を示して、自分発信で何かをやっていたいのです」（53才独身女性：福岡2回）という声や、「夫を失って初めて自分の人生を考えるようになりました。自分は一体何をやりたいのだろうか。彼の保護なしに自立していろいろなことを考えなければならないということでは、娘から、『お母さん、やっと一人前になったね』と言われます」（53才独身女性、死別：東京1回）など、中年期に心理的に揺れながらも、建設的に自分探しをする人々の姿を垣間見ることができる。

第2節 中年女性の課題としての「親密性」と「世代性」

フロイトの心理的発達論を発展させたライフサイクル論の提唱者でもある E.H エリクソンは、人間の成長は一生継続くものであると考え、生涯にわたる発達を8つの段階に図式化しエピジェネティック理論(Epigenetic Scheme)として示したことは有名である(1950『幼児期と社会』) <図表参照>。人生の各ステージにおける自我の特質を2つの対立概念として示し、特に成人期の課題として、「親密性」(intimacy)と「孤立」(isolation)・「世代性」(generativity)と「停滞」(stagnation)をあげている。つまり「親密性」・「世代性」の課題を乗り越えることによって自己確立し、自立した生き方が可能となると考えられる。

図表1 エリクソンの精神分析的個体発達分化の図式

(1990 鐘幹八郎 アイデンティティの心理学 講談社新書 p55 より)

発達段階	発達課題	危機状況
1. 乳児期	信頼感	不信感
2. 幼児初期	自律性	恥・疑惑
3. 幼児期	自発性	罪悪感
4. 学童期	勤勉性	劣等感
5. 青年期	同一性	同一拡散性
6. 成人初期	親密性	孤立
7. 壮年期	世代性	停滞
8. 老年期	統合性	絶望

エリクソンが言う「親密性」とは、他者と体験を共有し、お互いの存在を尊重しあうことによって、個人のアイデンティティを深め人生を豊かにするというものである。「親密な他者」(または「重要な他者」 significant others)による情緒的な相互性によって、人生の満足感が得られるというものであるが、特に女性の場合は他者との親密な関係を構築することによって自己確立する傾向にあると言われている。数の多少にかかわらず親しい友人やライフパートナーと頻繁に接触し、電話や電子メールで密に連絡をとりあい、食事や旅行を共にし、家族の問題から仕事の話題、日常の細かな出来事までも深く語り合うことによって互いの存在を確認しあい、心の支えにしているという事例は枚挙に暇はない。グループインタビューでも「20年来の友人とは仕事のこと家族の問題なども相談できますし、現在の状況は姉妹以上だと思っています」(50才独身女

性：名古屋3回）などの事例がある。そこには、イザというときには相手は必ず自分の助けになってくれるものという信頼関係が成立しているのである。逆に、中年期に「親密性」の実現がうまくいかない場合は「孤立」に陥ることとなる。ときに、自立とは「誰の助けも得ないこと」と解釈しがちであるが、実際には「うまく他者に助けを求めること」が自立に繋がるのであり、うまく他者に助けを求められなくなる時がまさに危機状態で、中高年の自殺多発の裏には、この「孤立」が存在するのであろう。

「世代性」とは、主に若い世代などへの世話（ケア）を通して、自分の価値観を他者に伝え、そのプロセスにおいて自身のアイデンティティを確認するというものである。子育てや親の介護・配偶者の世話・後輩の指導など、他者と関わる過程で自分自身の存在を確認し、相手に対する自分の影響力を実感することが自己充実につながるというものである。他者へのケアは身近な人に向けるものとは限らず、社会への貢献、生きがいを感じられる仕事探しなどにも通じるものであろう。ただし、中年期に自分自身への関心よりも他者への関心が強くなり、他者支配や他者依存が強くなりすぎると、老年期の自我統合がおぼつかなくなり、「停滞」と呼ばれる苦痛を味わうことになる。

グループインタビューの中にも、「末期がんの母の介護を自宅でするために、自分はずっと非常勤の仕事をしてきました。家で細々とイラストや漫画を描く仕事をしてきて、（収入は）年間数万円です。父の年金で生計を立てていますが、外に飛び出す勇気もありません。これからのことが心配で何とかしなければと思うのですが、自分のことをもう一回考え直す時期なのかなと思ったりしています。道を歩いていてごみ箱をあさっている人を見ると、『私も将来はああなるのかな』と思ったりもします」（42才独身女性：東京1回）というケースや、「母が亡くなってから、何かつかえ棒にしていたものがなくなりました。精神的などこかで親離れしていなかったのでしょうね。自由に勝手なことをしているわりには、ある線は越えられない。いつも親の顔がちらつくからなのですね。それで踏み出せない。だから破れかぶれになれない部分があって、それを理由に、ここまででいいや、とにかく生きていればいいやという感覚です」（50才独身女性：名古屋2回）など、親の人生を最優先させるあまり自分の人生を構築し難いケースも見られた。また、「自分は趣味があったり楽しみがあったりという事がないので、主人や子供がこれをやりたいということに一生懸命になってしまふ、それで自分が幸せになっているということです。皆さんは子供さんがおられなくても、自分自身の趣味があったり、きちんとした職業を持っておられるとか、そういう点はとてもうらやましく思います。でも、自分はそういうことができなかったから、子供に託しているのかなと思います」（42才既婚女性：福岡2回）と、夫や子供の人生に

自分の人生を投影し、どこか不安を感じさせるケースも見られた。

以上のように、自己確立は他者との適度な関係性の中で獲得するものであり、誰かから必要とされることが重要であるとすれば、ここに老後を豊かに過ごすための「自立の条件」の一端が浮かび上がってこよう。

第3節 中年女性の自立条件

仮に「自立」を他からの援助を受けず自分で身を立てること、と考えた場合、現代中年女性の自立意識はどのようなものなのだろうか。具体的な意識や備えの現状を、本調査のインタビューを引用しながら見ていきたい。インタビューの際に頻繁に聞かれた「家族や子供をあてにする気はない」という声の大きさから、総体的には中年女性の「自立を目指す“意欲”は高い」と見ることができよう。そのため、中年期には程度の差こそあれ、誰もが何らかの自立準備を心がけている。備えの観点としては、札幌での第2回のインタビューで52才の独身女性が発言した「老後に向けては3つの要素が要ると思うのです。健康、サムマネー、人間関係という、3つの準備は少しずつしなければと思っています」という言葉に集約されるのではないか。

一般的に自立は、次のように分類される。

①経済的自立：生計維持に必要な資金を他者の援助なく、全て自分で賄える状態。

*仕事の自立・・・自己判断を伴う職務を担い、職業継続と収入維持の可能性が高い状態。
起業や独立の可能性があり、現在の職を失ったときに、他者の力をあてにせず自らの力で再出発できる状態。

②生活自立：日常の、身の回りのことを他者の援助なく全て自分でこなすことができる状態。

*家事自立・・・掃除洗濯、被服管理、調理、買い物、家屋メンテナンス、家計管理などが自分でできる状態。

*余暇自立・・・1人で過ごせる時間を持っており、1人で行動することに抵抗がない状態。

*健康自立・・・健康管理や病気・介護に対する意識を持ち、イザというときに、他者の援助をあてにせず、他人に迷惑をかけないように準備している状態。

③社会的自立：社会に参画し、他者への援助を自らが行う力を持っている状態（他者に必要と

される状態、社会からの評価を得られる状態)。

④精神的自立: 他者に依存することなく自分で物事を決め、自己責任を負う覚悟がある状態 (円滑な人間関係を維持し、自分らしく生きられる状態)。

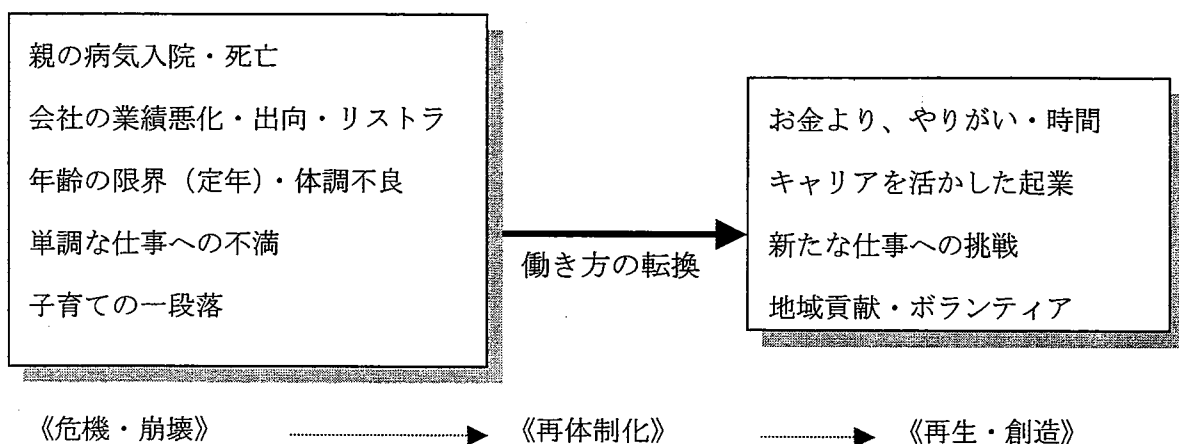
次に、上記①~④の観点から、インタビューに見られた中年女性の自立意識と課題を考察していく。

1. 経済的自立

(1) 仕事と自立

40~50代に入ると、会社勤めの人にとっては定年までのカウントダウンが始まり、老後の生活設計を視野に入れながら仕事を見直す時期が訪れる。現職を定年まで継続できるのか、転職すべきか、独立できるか、働き方のスタンスを変えるか、あるいは新たに仕事を始めるかなどの選択肢を前に、改めて自分自身を定義し直す機会に遭遇する。仕事の見直しに至るきっかけは、主に親の病気入院や介護、配偶者との離別・死別、会社の業績不振、本人の体力的限界、やりがいへの疑問 (自分のやりたい仕事かどうか)、子育ての終了などである (図表2参照)。

図表2 中年期の仕事見直しのきっかけ



仕事一辺倒の人生を振り返り、別の生き方を模索する事例も少なくないが、大抵の場合、老後の経済的な支えを視野に入れた仕事のウェイト・コントロールを意味し、完全なリタイアの希望（失業状態を望むもの）を意味するものではない。グループインタビューに見られた中年期の仕事見直しのきっかけについては、以下のような事例がある。

- ・「ずっと経理関係の仕事をしていたのですが、父が身体を悪くしまして、入院することになりました。それで、これを機会に仕事を変えてみることにしました。自分にとっての生きやすさ、働きやすさを考えると、安定した生活よりも自分に向く好きな仕事を目指したいです」（51 才独身女性：東京 3 回）。
- ・「父の死をきっかけに、38 才のときに看護婦になろうと 2 年間学校に行きました。今は午前中にパートで働きながら夜間の看護科に通っています」（43 才独身女性：札幌 2 回）。
- ・「会社が倒産し、失業するという時点で、これはチャンスだなという思いと、もう雇われる仕事はないなという両方の思いがしました。これを機会に、民宿を開こうと計画しています」（46 才独身女性：札幌 2 回）。
- ・「(OL 生活を 20 年) もう飽きたなという感じです。今までずっと事務をやっていたので、これからは身体を動かす仕事をしてみたい。ちょっと世界を変えてみたいというのがある。シンプルライフを目指したいです」（46 才独身女性：東京 3 回）。
- ・「短大を出て、ずっと銀行に勤めていましたが、不良債権問題などで残業ばかり、そういう生活が嫌で退職しました。ちょっと自分自身を見直したい、ボランティアや社会参加もしたいということがあり辞めました」（42 才独身女性、正社員から派遣社員へ転換：東京 1 回）。
- ・「経済的なこともあります、外に勤めに出ることによって、ある程度、私が精神的に発散できる環境が欲しかったものですから、(両親の介護を) ヘルパーさんに週 3 回お願いしてパートを始めました」（43 才既婚女性：名古屋 2 回）。

仕事に就く意義については、52 才の独身女性（福岡 2 回）が「事業をしています、儲かっているお金よりつぎ込むほうが多くて、まだ赤字の部分が少しあります。1 人で起業するのは大変ですが、一生懸命働くことは生きがいです。60 才までではなくて、やはり人間、働けるまで働いたほうがいいのではないのでしょうか」と語っているが、言うまでもなく、仕事は経済的側面にとどまらず生きがいや張り合いにも繋がる重要な要素となるものである。これは近年、中高年の就職が困難であるにもかかわらず、40～50 代女性の潜在有業率が高いこと（就業基本構造調査）からも容易に推測できよう。特に子育てのために長期間、職場を離れていた中年主婦の再就職は極めて困難であるが、就労の意欲は逆に最も高いようにも思われる。「結婚後は仕事に就いたこと

がないので、来月は IT 予算でパソコンを習いに行かせてもらいます。十何年家におりますと、社会とだんだん離れていく気がするので、働けたらいいなと思っています」(45 才既婚女性：京都 2 回) という声や、「40 才を過ぎて、これでいいのかなという不安があって、去年からパートを始めました。今年に入ってホームヘルパーの講座を受けました」(44 才既婚女性：札幌 1 回) などという焦りにも似た声が多い。長期間、家庭内で家事育児に専念し、子育てが一段落した後の「自分探し」の結果、社会との隔絶に不安を覚えるところから「新たな自分探し」としての仕事復帰を目指しているとも感じられる。これは社会や他人のためになっている自分の価値を、他者の評価から得ることの重要性を示すものであろう。

しかしながら現実には、既婚・独身を問わず 40 才を過ぎた女性の仕事獲得の厳しさは深刻で、インタビューでも幾度も嘆きに近い声として聞かれた。それゆえ、職業的自衛策としてエンプロイアビリティ（雇用され得る能力）を高める必要があり、中年期は自分の能力開発としての資格取得に熱心な世代であることも見て取れる。インタビューで多くあがっていた取得資格の種類としてはホームヘルパー、介護福祉士、パソコン資格などがある。

また、中年女性の仕事自立の問題を考えると、避けられないのは「貧困の女性化」の問題である。所定内給与額では男性の 6 割という賃金格差に加え、就業時の年齢制限や職業継続の困難さ（家事・育児・介護との両立）から派生する様々な不利な条件は将来的には低額の年金受給を予測させ、女性の老後の自立を阻むことを懸念させる。女性に圧倒的に多いパートタイマーの低賃金に鑑みても、パート収入での経済的自立にはほど遠い。

片や、薬剤師や看護婦など専門性が高く経済的背景が確実で将来展望が可能な職業に就いている場合は、女性であっても自立意識は高く、経済力が自立意識を上げることを裏づけるものである。「薬剤師です。ですから免許のあるうちは足腰が立たなくなっても、ある程度の年齢まで自分で食べる分ぐらいはどうかやっていけるのではないかと思います」(48 才独身女性：札幌 2 回) という言葉や、「自分自身が高校の頃からアルバイトをして授業料も小遣いも全部自分で賄って、看護学校に入りました。だから子供たちにも、何のために進学したいのか、いくらかかるのかを早くから話し合おうと思います。娘たちには『結婚しても旦那さんが急に死ぬかもしれないし、どうなるかわからない。それでも 3 人ぐらい育てられるぐらいの経済力をつける方向に進みなさい』と言っています」(41 才既婚女性、看護婦兼ケアマネジャー：福岡 3 回) という言葉には、仕事自立に裏づけられた自信と余裕すら感じられる。

また、インタビューでは、男女を問わず「リストラ」の現状を訴える声をしばしば耳にしたが、一方では会社の倒産を契機に民宿経営を始めようとする女性の起業の例や、それまでのキャリア

を活かしてファイナンシャルプランナー、イラストレーターとして SOHO での仕事に転じた例など、まさに終身雇用終焉の時代を迎えて、いつまでも組織にしがみつくとなく、マイナスをプラスに転換しようとする動きや意欲も感じられた。

首都圏でのアンケート調査結果では、仕事面での自立（責任の度合い、裁量）について、「自立している」との回答は「独身子供なし」が 50.0%、「独身子供あり」が 45.9%、「既婚子供なし」が 25.5%、「既婚子供あり」が 16.5%となっている。既婚女性の場合の就業形態はパートタイマーであることが多く、責任や裁量権のある仕事に就くことは稀であることから、必然的に独身者の自立意識のほうが高くなっているのであろう。家庭を持つ女性の仕事自立の困難さは、「男性は仕事、女性は家庭」という旧来の男女役割分担を背景とした男性中心の社会風土や雇用慣行にメスが入らぬ限り、修正されはしないであろう。仕事の楽しさは男だけのものではないし、家事・育児は女だけのものではないのであるが。

以下に、仕事の自立意識促進（プラス）要因と見られる事例を挙げてみる。

- ・「他人をあてにせず、プライドを捨てれば、お掃除でも何でも仕事はあります」（50 才独身女性：東京 2 回）。
- ・「母は 80 才を過ぎてもまだ仕事をしていますので、自分自身も納得して他人から疎ましく思われない程度まで仕事をやりたいし、仕事ができるような状況に人間関係も含めて作っておきたいと思っています」（50 才独身女性：名古屋 3 回）。
- ・「離婚して約 15 年、塾講師をやって 20 年になります。大学時代に教職課程をとっていたおかげで、セカンドステージで仕事をきちんとやってこれました」（53 才独身女性：福岡 2 回）。
- ・「女性の社会進出に関連して、年金を払うかどうかとか、介護保険料もそうですが、自分でそれだけ働けば出せるわけです。（女性の仕事と）老後の問題はワンセットです。女性も独立して自分の名前で生活する方が、張り合いが出るし、老後も自立していけると思います」（41 才既婚女性：福岡 3 回）。

一方、仕事自立意識の阻害（マイナス）要因としては次のような事例がある。子供を育てながら仕事を継続させることの難しさを訴えるものと、中年女性の仕事獲得の困難さを訴えるものが大半である。

- ・「世の中を見ると、男女対等と言いながら男社会というものが非常にあると思います。そういう中で女性が仕事を持つ機会が、特に途中で挫折してセカンドステージになると、非常に少ないのです。自分を生かせる場所を持ちたいけれど、その選択肢が少ないと思います」（53 才独身女性：福岡 2 回）。
- ・「働きたいけれど子供が小さくて働けない。保育所に預けても『子供が風邪を引いているので帰ってきてください』と言われます。いつも女性が行かなければなりません。男性はなかなか帰れない状況です」（41 歳既婚女性：福岡 3 回）。
- ・「103 万円の壁があるため、範囲内に抑えて働いている主婦は多いと思うし、雇い主の都合のいいように使われている面がたくさんあると思います」（47 才既婚女性：札幌 3 回）。

（2）お金と自立

老後の経済的な問題を具体的に計算しはじめるのも 40 代~50 代である。インタビューでは「あまり深くは考えていない」、「何とかなるのではないか」、「今から考えてもしかたがない」という楽観的な発言が多く、具体的な計算を先延ばしにしている人が多く見受けられた。実際には、配偶者の死、離婚、リストラなど思いも寄らない人生の転機に直面して初めて現実的に考え始める例が多い。しかし、中には若い時期から、公的年金だけではゆとりある老後は送れないことを見通して、早期に個人年金に入り真剣に自衛策を立てる人もいる。特に独身女性の場合、「40 歳くらいのときに将来のことを考える機会がありまして、女性の給与ベースが低いですから個人年金に入りました」（51 才独身女性：札幌 2 回）、「パートのお金はほとんど私の老後の方に貯めこんでいます」（49 才独身女性、パート販売員：東京 1 回）など、ひとりで自立した老後生活を送る備えとして貯蓄や保険をかける結果、「保険貧乏」になってしまうという声もあった。

首都圏のアンケートでは、経済的自立について、「自立している」との回答は独身者に圧倒的に多く（独身子供あり 65.1%、独身子供なし 59.1%）、既婚者（既婚子供あり 7.8%、子供なし 11.8%）との差が顕著である。ある程度の経済力が自立意識を高めることに繋がることは前項のインタビュー調査からも明らかであるが、他者をあてにせず自分で自分の生活を何としても支えなければならない独身者に比べて、既婚女性の場合は家計収入の大半を夫に頼ってしまうため金銭的な切迫感は薄く、自立意識の低調は避けられない。

しかし、「結婚していることは、もう生きていく保険ではないということです。1 人の社会人として、自分が自立しているかと問われると、自立していない。甘えの中に生きているような気がします」（42 才既婚女性：札幌 1 回）という声や、「離婚という選択もありますが、そうなった場

合、自分は精神的、また経済的に自立しているかどうかです。私は自立していないと自分で自覚しているので、そういう選択は結局怖くてできないと思うのです」(42才既婚女性：札幌1回)、
「今、仮に離婚したくても、生活していけないから現実にはできないのです。40才過ぎたら、それこそ仕事がないのです」(44才既婚女性：札幌1回)という声にあるように、専業主婦の経済的自立に対する不安は小さくないのは明らかである。

この他に、お金や貯蓄に関して出された意見は次のようなものである。

- ・「主人と私は人並みに年金や保険には入っています。年金保険は2人とも入っていて60才からふたり分受け取れるようにしています。あとは貯金を貯めておかなければと思っています」(44才既婚女性：札幌1回)。
- ・「夫は2年前にガンで、57才で亡くなりました。退職金や生命保険金のおかげで、その後の生活に困るということはありませんでした。今は健康面が一番気になっていて、夫婦でいるとお互いに助け合いますが、子供には迷惑をかけたくないし、自分ひとりで健康に明るく楽しく生きなくてはいけないと思っています」(55才独身女性：名古屋1回)。
- ・「老後のことはあまり考えたことがないですが、友人が脳出血になったのです。それをきっかけに健康に気をつけようということを最近考えています。将来のために貯蓄と投資について最近考え出したので、ファイナンシャルプランナーの方に相談したりしています」(46才独身男性：名古屋2回)。
- ・「小さな会社の副社長をやっていて、ワンルームマンションを20戸くらい経営しているので。財テクという考えはなかったのですが、土地を買ったのです。収入は男性サラリーマンと同じくらいはあると思います」(49才独身女性、子供有り：福岡1回)。
- ・「シングルで、子供の育児がまだあります。収入が男の人ほどありません。お金を残すことも大切ですが、いつ死ぬかわかりませんので旅行へ行ったり友達を作ったり、社会に参加したいと思っています」(51才独身女性：京都1回)。

(3) 住まいと自立

生活費に占める住居費の割合の大きさから、住まいの問題が解決していることが老後の自立の第一歩であることが、しばしば指摘された。老後の住まいに関する希望で顕著だったのは、家族と共に暮らすという想定よりも、仲の良い友人たちと集って暮らすことを理想としていることで

ある。特に女性の場合に、「老後のことを考えるときは、主人（のこと）は頭にはなく、仲の良い友達で1軒家を借りようとか、近所だけで支えあっていこうとか、そういう話が出てきます」

（51才既婚女性：福岡1回）という声や、「子供と同居したいとは思っていません。主人が先に逝ったとしても自分で健康を考えながら生きていけばいいと思っています。子供は子供で、ある程度過ぎたら好きなようにやってほしいと思っています」（44才既婚女性：札幌1回）、「クラスメートが5~6人いますが、老後は『亭主も何もいないから、私たちがガヤガヤ暮らせる家を探そう』なんていう話もあるのです」（49才独身女性：東京1回）という声など、中年女性たちの多くが、家族から物理的に離れた自立した住まい方を想定しているのは興味深い。

安心して住める老後の住まいとしては、グループホームやコレクティブハウジングなどをあげる人も多く、実行性は別として適度に他人の目が届く、“長屋的”な住まいを理想とする意見も多かった。このことは、他者とほどほどの距離をとりながら自立した生活を求めていることのあらわれと解釈できる。さらに独身者や子供のいない既婚者の場合には、終の棲家に老人ホームを想定している人も少なくない。

また、独身者が抱える課題として、住宅取得や賃貸住宅入居時に保証人欄への記入を要求されることや、ローンの貸し渋りの問題などが再三話題にあがっていた。老人向け住宅整備は始まっているが、独身中年向けの間取りで作られた住まいは戸数が限られており見つけにくいという指摘もあった。45才の独身女性（東京3回）からは「まだまだ男性中心の社会ですから、保証人を立てなければお金も借りられないし、家も借りられないとかデメリットはいっぱいあります。いずれ、単身高齢の人がものすごく増えてくるので、社会制度自体も変わらなければならないと思います。そういう方向で動いているわけですから」という声もあり、今後、単身者や高齢者が増えるにつれ、何らかの解決策を講じる必要があろう。

この他、グループインタビューであがっていた老後の住まいに関する事例は次のようなものである。

- ・「何かあった時のためにマンションのローンは貯蓄で払える範囲で買いました」（51才独身女性：名古屋1回）。
- ・「離婚するときに家と土地をもらいましたので、何かあったときにはこれを売って老人ホームとかに入ればいいなと思っています。子供と一緒に住むつもりはないけれども、私を捨てはしないだろうなという感じですね」（50才独身女性：名古屋2回）。
- ・「（定年から逆算すると）本当は40代で考えなければいけなかったのですが、50代になって切

羽詰まって（住み替えの家を購入）決めたという感じです。女性の場合、給与ベースが低いので（年金受給額も低く、勤めつづける）不安も感じる」（53才独身女性：名古屋3回）。

- ・「住宅ローンを組むとき、『母子家庭には貸しませんよ』というニュアンスのことを言われて、金融機関の人と喧嘩しました。片親に対する社会的な位置付けとか認識の差別をずいぶん感じました。金融機関などでは、今でも平均的な家族像というのが、両親と子供ふたりと見られていると思います」（47才独身女性：京都1回）。

2. 生活自立

（1）健康と自立

健康な身体を維持して元気であることが自立した生活を送るための大前提である。京都（1回）の47才独身女性が「健康でなければ何も始まりませんので、健康を維持するために意識的に遠出をしたり、歩くように心がけています。それには時間もお金もかかりますが、年を取って病院にかかって医療費や時間がかかることを思えば、今投資しておくことには価値があります」と語るように、身体的に曲がり角を過ぎた中年期では、ほとんどの人が健康への関心を高め運動や食事に気を配り、自己管理の工夫をしている。また、健康でないとお金がいくらあっても使えないし、健康が第一なので、日々健康に対する意識を高く持つようにしています。子供がいても、いつまでも一緒についていくわけにはいかないし。配偶者がいないシングルですから、80才まで生きようとしたときに、50才を過ぎたら楽しく遊ばないと。男女を問わずいい友達をたくさん作って、前向きな姿勢で生きていかなければと思っていますところですよ」と健康と生活自立の関係を語っている。具体的には肉料理をやめて野菜中心の食事に切り替える人や、散歩や山登りなどを通して地道に体力の維持に努めている人が多い。特に独身者の場合は継続的にジムに通うなど、健康維持を目的とする自己投資に積極的なようである。

一方、専業主婦やフリーランスの人、あるいは退職をしてしまった人は、ともすると定期検診の機会を逸しやすいという傾向も見られ、「少し前に病気をしました。専業主婦だとそういう機会（定期検診を受ける機会）がないし、私も病院は嫌いなほうなので、行けなくてずっとそのままになっていました」（45歳既婚女性：名古屋1回）、「一度も健康診断を受けたことがないので。30代の初めに一度ガン検診を受けただけで、あとは全くしていません」（53才独身女性：東京1回）などという例もあった。

（２）家事と自立

食事・掃除・洗濯といった身のまわりのことを自分でできることが生活自立の最低条件である。女性の場合には、高齢になってもさほど問題にはならないが、男性の生活自立度の低さについてはインタビューの場でもしばしば議論にあがった。看護職に就く 41 才の既婚女性（福岡 3 回）からは、「入院患者さんを在宅に切り替える際、女性の場合は 1 人で何でも身の回りのことはできるから、ちょっとした家事介護でいいのです。しかし、男性の場合、料理も掃除もできない。したことがなくてわからないのです。ましてや年をとってから言われても・・・ということで、『在宅はできないから、病院においてください』となってしまうのです」と男性の生活自立度の低さを指摘する声があった。

「給料は全部母親に渡し、家事・洗濯とかは全部母親に任せています」（40 才独身男性：東京 3 回）、「男子宿舎に入っていて、洗濯は週末に家に持ち帰り、食事は近所のおばさんが作ってくれます。あまり生活に困るようなことはないです」（40 才独身男性、離島の中学校教師：福岡 1 回）という例や、「要するに料理ができない。生活の自立ができていないので、それだけが非常にハンディで苦痛に感じています。週の半分位は、娘が用意してくれるから助かっています」（55 才独身男性：東京 1 回）という例など、中年男性の日常生活上での自立の遅れを感じさせるケースも実際に見られた。それに対しては、主に離婚経験女性たちから、「日本の男性はほとんど自立していないと思います。給料は稼いでいるけれど、帰ってきて、食って、風呂に入って寝るみたいなものですよ。そういうのを私は許せないのです。・・・だから結婚していた時と比べると今のほうがずっと楽です」（46 才独身女性：東京 3 回）という声や、「今でも結婚は否定していませんが、カナダにホームステイしていた際、結婚していても夫は夫、妻は妻という個人の時間を侵害しないで認めるという部分に共感しました。日本の男性は結婚している、していないにかかわらず、もっと自立して欲しいと思います」（51 才独身女性、東京 3 回）と、日本の男性の生活自立・精神的自立の不足を厳しく指摘する声があがっていた。

日常の家庭生活においては、男女を問わず基本的には個々が自分のことを自分でこなせるよう努めることが大切であり、真に自立した者同志が、寄りかかりもたれ合うのではなく支え合って生活することが理想である。国際比較においても家事時間が少ない日本人男性のありようを、雇用慣行のゆがみも含めて、次代に再生産することがないようにしなければならないであろう。

「主人は、私がパートから帰ってきたら一緒に手伝うし、具合が悪ければ洗濯もしてくれます。子供は、『結婚したら子供をたくさん産みたい。お父さんみたいな人と結婚したい』とずっと言っています」（40 才既婚女性：京都 3 回）というケースに見られるように、仕事も家事育児も、

共に価値あるものであることを確認し共有することが望まれる。近年は男性に対しても育児休暇の義務化の動きが出てきていることなどから、次世代での変革に期待したい。

3. 社会的自立

家庭や仕事以外の活動の場として、地域との関わりがあげられる。地域活動やボランティアによる社会貢献は、先に述べた「世代性」に通ずるもので、お金のためだけではない、他者のためになる意義ある生き方を目指す試みでもある。

「地域の人とコミュニケーションをとりたいのですが、単身者には地域情報がなかなかこないと思います。拒否しているわけではないのですが、参加しにくいという事情が現実問題としてあります」（41才独身女性：札幌1回）という声や、「朝からパートに出ているので地域とのかかわりはほとんどありません。まして、マンション暮らしなので、お向かいの奥さんと挨拶を交わすぐらいです」（53才既婚女性：札幌3回）という声から読み取れるように、核家族化や生活の「私化」によって地域における人的交流は特に都市部において希薄になっていることは明らかである。しかし、「遠くの親戚より近くの他人が頼りだと思い、日頃から近所づきあいを大切にしています。いずれは、夫々の家に順番に集まって食事会を開こうという話もしています」（51才既婚女性：福岡1回）という例や、「何かあったら頼ってね、と言われて地域の方と接していく中で安心感みたいなことはずいぶんあると感じています」（42才独身女性：東京1回）という例もあり、地域に関わることへの欲求も感じられ、単身高齢社会においては「地域活動」が果たす役割は決して小さくないのではないかと思われる。

また、「会社人間だったため、（妻が亡くなり、退職した後）それが切れちゃうと何もなくなりましたので、町内の盆踊りの手伝いなどに借り出されまして、それをきっかけに少しずつ地域に参加して知り合いができています」という55才の独身男性（東京1回）や、「早めに勇退して、支援関係（青年向け野外活動指導員）のボランティアにのめり込みたいと思っています」という55才の独身男性（妻とは死別：東京1回）のように、会社人間を終えた男性にとっても地域は重要な生活活動の場となり得ることがわかる。

ただし町内会活動については、「従来のような地域への寄りかかりは無理だと思います。今後はボランティアやNPOなどが地域への帰属意識を作るためのシステムとして発展していかなければ。地域への帰属意識が強くなると、その先に支え合いというものが見えてくるはずですよ」という46才の独身男性（札幌1回）の提言を参考として、今後、地域活動が時代に即した新しい

支え合いの形に変わってシステム化されることが期待される。

4. 精神的自立

(1) 人間関係と自立

親や子供・配偶者、親友や同僚など自分の身近な人との別れに直面する機会が急増する中年期には、その現実を受け入れる精神的な強さを身につけていることが重要である。良好な人間関係の備えがあってこそ精神的自立が果たせるものである。自分の老後や介護を想定するとき、男性からは「あまり考えてはいません。他人の世話にはなりたくないです。何かあった時は、のたれ死んだほうが良いという思いもあります。そのままにしておいてくれという人の気持ちは、分かる気がします」(46才独身男性：札幌1回)という声や、「くたばる時が来たらくたばってしまおうと思っています」など老後の孤独を恐れず、自分ひとりで死を受け入れることを願う声が聞かれたのが特徴的である。

それに比べて女性の場合は、「具合が悪くなったらすぐに2人くらい、連絡できる人はちゃんといます」(54才独身女性：東京2回)、「いざという時は、親や兄弟姉妹のサポートが必要です。そういう意味で、できるだけ準備をしています。常に普通預金の口座からまとまったお金を引き出せるようにしています」(45才独身女性：東京3回)というように、親や友人・兄弟姉妹など身近な人の存在を具体的に想定しながら自分の老後の居場所を確認する傾向が見られる。これはエリクソンが、女性は男性よりも「関係性」を重視すると述べていることに繋がるものであろうか。身内には依存しないとしながらも、「何かことが起こったときは、兄弟は結構いいものだと思います」(45才既婚女性：名古屋1回)という声や、「最終的に精神的な弱さをカバーできるのは肉親ではないかと実感しています」(45才独身女性：東京3回)という声も聞かれた。

またインタビューの中では、精神的自立を果たせず、他者依存が強すぎる例も数件見受けられた。東京での第1回インタビューの際に、夫と死別し義母と同居している53才の独身女性の発言に、大変興味深いフレーズがあったので紹介しておく。「彼(発言者の夫)が亡くなった後どうなったかという、彼女(義母)は、すべて精神的なものを私にバーっとぶつけてくるので、私自身が耐えられなくなってきているのです。彼女は自分自身がいないのです。他人を通して自分を生きているというか、私の一挙一動を把握していないと不安なのです」と言う。また、「彼女(義母)の老後を見るのが苦痛なのではなく、私自身が支配されているところに苦しみがある

のです。・・・だから、何とかして自立して 1 人で生きていける道を探したいというのが自分の願いです。ちゃんと個として生きていきたいのです」とも言い、この 53 才未亡人の精神的葛藤が手にとるように分かる。

自己確立および精神的自立のためには、他者と経験を共有し、他者から自分の存在を認められ互いに褒め合うことが重要であることは先にも述べたが、具体的には次のような例がある。「3 年前に、よさこいソーラン祭りにスタッフとして参加したのですが、踊り子を集めるときにものすごく盛り上がりました。すごく苦労しましたが、目的を持てたということでとてもいい経験をしました。お互いに褒めあうことがすごく大事だと思いました」（52 才独身女性：札幌 2 回）という話や、「親密な他者とは全く逆で、サッカーのサポーター同士、全く知らない者同士が手を取り合って喜ぶというようなこともあります」（46 才独身女性：札幌 2 回）などの事例は、これを示すものであろう。「高齢者の（書道のような）趣味を単に個が楽しむものに終わらせず生き甲斐に発展させられるように、外的なもので評価してあげる、『あなたすばらしいですよ』と言えるようなものがあると生き甲斐につながるのではないのでしょうか」（53 才独身女性：東京 1 回）という発言にも他者評価の重要性が窺われる。

中年期の人間関係構築の課題としては、新たなネットワーク作りの難しさを語る例も多い。「交友関係はやはり絞られてきますね。気の合わない友達とは、一度食事に行っても、2 回目からは行かないとか友達を選ぶという感じです」（43 才独身女性：札幌 2 回）という声や、「離婚するまで、友達との交流があまりなかったので、一緒に出かけられる人が限られていてなかなか難しいです」（51 才独身女性：京都 1 回）、「年齢が離れた若い友人もいますが、やはり独身の友達が多いです」（48 才独身女性：札幌 2 回）などの声である。しかし、「男女を問わず、いい友達をたくさん増やして啓発意識を高く持って情報を集めるとか、ネットワークを常に張り巡らして、前向きな姿勢で生きていかなければと思っていますところですよ」（47 才独身女性：京都 1 回）という積極的な声も聞かれた。

（2）孤独対策

アンケート調査では、「人間関係の面で自立している」との回答は既婚者（既婚子供あり 14.6%、既婚子なし 23.5%）に比べて独身者（独身子供ありが 49.5%、独身子供なしが 48.5%）が圧倒的に高くなっている。独身女性の場合は、孤独に耐える力を自ら意識し、イザという時に頼る人・緊急時に頼れる相手を厳選し孤独対策は早めに立てる傾向が見られる。52 才の独身女性（札幌 2 回）は「自分のことは自分でというのが原則で、何にしても日常から孤独に強くなければ生き延

びられないと、友達とも常々話しています」と発言している。このほかにも独身女性の孤独と向き合う様子を語るものとしては、「孤独というのは単に 1 人だから孤独なのですが、例えばグループに入って踊ったりしても結局 1 人になってしまうわけですから、その時の方がもっと孤独を感じざるを得なくなると思うのです」（48 才独身女性：札幌 2 回）という声や、「ずっと 1 人で暮らしていたので別に不安もないし 1 人のほうが気楽で、それなりに楽しめるし・・・、ずっと働いてきたのでお金も自由に使えるし、計画性のない男の人に左右されるのも嫌で、1 人でこまできたのです」（49 才独身女性：福岡 1 回）という声のほか、「孤独大好き人間です。1 人が好きだから、別に伴侶がいなくてもいいという状態です。将来は、たぶん老人ホームに入ることになるだろうと思っています。個室があつて、猫とか犬とかペットと一緒に生活できる老人ホームがあったら最高だなと思います」（47 才独身女性：札幌 2 回）という声も聞かれた。

一方、既婚女性の人間関係面での自立度の低さは、配偶者や家族への依存度の高さと捉えられるが、このことは既婚の女性が親しい他者（子供、夫、親）の自立援助という責務を負い、男性に比べて直線的アイデンティティを形成させにくい面があることに起因していると思われる。家庭内で育児・家事・介護の責務を一手に背負いながらも経済的側面は夫に頼らざるを得ず、重大な決断は夫に任せることとなり、経済的自立がなければ精神的自立は難しいことを物語っている。

既婚女性の精神的自立度の低さは裏面から見れば、「離婚による精神的自立」としても説明できそうである。離婚経験者からは、「めでたく離婚できました。母子というと暗いイメージがあると思いますが、今はそうではないですね。今後、いい人があらわれても籍は入れないと決めています。一緒に暮らすパートナーとしては考えていますが」（40 才独身女性、子供 1 人：東京 1 回）という声や、「前はがんじがらめの主人との生活だったので、自由が全くなかった。それが今はできます。食べたいときに食べ、行きたいときに行く。贅沢はできませんが、そういう面では気が楽です」（49 才独身女性、子供有り：東京 2 回）などの声が聞かれた。これらの事例は、家族役割が女性の人生を規定するという「拘束要因」としての家族の時代から、精神的な解放を求めて個人が選択する生き方を助ける「支援要因」としての家族の時代に変化していく（目黒依子「個人化する家族」pp113-121）勁草書房）ことを予測させる。

第 4 節 中年女性の自立に関する支援と課題

今回のインタビュー結果および首都圏におけるアンケート調査結果から、自立意識に関して浮びあがったものを整理すると以下のようなになる。

- (1) 中年男女の自立意識は総じて高く、老後は家族をあてにせず、できるだけ他人に迷惑をかけないように最後まで独りで生きたいと希望している人が多い。老後、自立した生活を送るためには、「健康」・「人間関係」・「お金」が重要なキーワードとなり、程度の差こそあれ、全ての人がこれらに対して何らかの備えをしている。特に、独身者の自立意識は、仕事・お金・人間関係すべての面において既婚者よりも高い。
- (2) 中年女性の職業獲得は、独身・既婚にかかわらず困難である。特に、出産・育児・介護による職業中断は女性労働の低賃金化を招き、結果として女性の経済的自立を阻害している。
- (3) 社会情報が世帯単位のものに偏り、独身者向けの情報が少ない。夫婦と子供2人という標準世帯単位の社会システムが、必ずしも現代社会の実態と合わなくなっている。多様な世帯類型に合った情報と自立支援が求められる。

次に、自立の観点から情報について見てみると、中高年者が求める情報は主として①年金や保険に関する情報、②仕事に関する情報、③住まいの情報、④健康や医療に関する情報である。情報収集のチャンネルとしては、テレビや新聞・官報・インターネット・タウン誌などの活用があがっていたが、公的に配布される情報の受け取り難さや内容の難解さを指摘する声があった。高齢になると、人的ネットワークも含めて能動的に多チャンネルを利用して情報収集する人と、受動的受信になってしまう人との間には情報格差が生じることも懸念される。インタビューでは、世帯向けの情報や母子支援の情報は得やすいが、純粋なシングルのための情報量は今のところ不十分であることも浮かび上がった。「結婚している人たちに聞いてもわからない状況ですから、わたしたちのような（シングルの）人たちが気軽に情報を取り入れて、色々な情報をもらえれば生き方も違ってくると思います」（54才独身女性：東京2回）という声や、「独身女性で仕事を持っている方たちのネットワークに非常に興味があります」（45才独身女性：東京3回）などという声からも、これまでの標準世帯を中心とした一律の情報ではなく、世代別、属性別の情報ニーズが高まることが予測できる。

「（情報チャンネルとしては）社会福祉協議会やボランティアセンターで得られる情報と、そこに集まってくる人からの情報の両方があります。これをもう少し社会化するには、図書館を活用できないものかと思ったのですが」という51才独身女性（東京2回）の声や、「シニアのための楽しくて夢をもたせるような情報誌や情報が少ないのではないかと思います。そういうのが出てくればもっと楽しく生活できるのになと思います」（47才独身女性：東京3回）という発言が示唆するように、高齢社会における中高年向けの情報は、「わかりやすく（文字も大きく）・楽し

く・受発信が簡易である」ことが肝要である。

最後に、前述の中高年者の自立意識と求められる情報を基軸として、中年女性の自立支援の視点をまとめておこう。

（１）中年女性の経済的自立を促進するための支援

中年女性の経済的自立を促すには、男女の賃金格差を是正すること先決である。そのためには、出産・子育てや介護期間でも就業を中断することなく安心して働き続けられる条件が整わなければならない。特に、今後は既婚女性の経済的自立を高めることが社会的課題となろうが、中年女性向けの再就職情報のストックと、より積極的な形での情報提供の工夫が必要である。また、再就職訓練の機会の増加による女性の経済的自立意識の高揚に加えて、就職時の年齢制限の緩和や、男性の育児・家事参加といった社会的風土是正への働きかけも必要である。休職期間中の給与保障率を高めることや、地域による子育て・介護サポートの一層の充実も求められる。

（２）「標準世帯」以外の世帯者でも、不都合を感じない社会システム構築への支援

独身女性の場合は、住宅購入時の融資条件が厳しく、賃貸契約時においてさえ保証人が必要とされるなどの不都合が生じている。雇用形態や年収制限によってクレジットカードが作れないなどの例もある。これらの不都合を解消するには、独身女性の社会的信用を保証するシステムの構築が待たれる。また、多様化する中高年のライフスタイルに合わせたグレードや間取りの住宅供給なども望まれる。

（３）個別性の高い情報提供による精神的自立のための支援

情報過多の時代にありながらも、中年向け、特に標準世帯外の人を対象とした情報量は依然として少ない。中年独身者向けの雑誌の発刊や、インターネットのメールマガジンのような個別性の高い情報提供が望まれる。年金や保険に関しても、個別の情報提供が期待され、各ライフコースに合わせた経済的生活設計サポートなども、老後を安心して暮らすための自立支援の大きな要素となろう。また、精神的自立を促すためには、中年独身者に向けてネットワーク作りの場を提供し、中高年者の趣味を生き甲斐につなげるような「社会的評価の場」を提供することも有用であろう。具体例としては、インタビューでも指摘があったように、常時、地域に発表・展示の場を設けることなどが考えられる。

（４）中年女性が健康で自立した生活を実現させるための支援

中年女性を対象とした健康作りの場の提供や、地域毎に細分化された医療情報の提供などは健康自立促進の一助となろう。専業主婦やフリーランスの人に対する、ある程度義務化された健康診断機会の提供も必要と思われる。独りでも安全で快適な生活を送るための安価なセキュリティシステムの普及や、NGO やボランティアによる地域活動（子育て・介護・生活サポートを含む）の活性化・定着も期待される。

結 び

少子高齢社会を迎え、現代人の生き方の多様化や家族と個人の結びつきの変化が叫ばれる昨今であるが、本調査のグループインタビューで 106 名の中年男女の様々な人生を覗かせていただきながら、中年期とは、「充実感と危機感の両方を抱え込む人生において最も重みある時期である」ことを再認識させられた。社会でも企業でも家庭内でも、先の見通しが立ちにくい時代に、自分らしい人生をどう築いていったらよいのかと葛藤している人々の姿に触れて、長寿化した現代社会においては誰もがシングルになる可能性を持ち、そのときに自立した生活を送れる自分であるか否かは、男女を問わず全ての人の課題であることを思わされた。

岡本祐子は、「自立とは上手に助けを求めることができること」（『女性のためのライフサイクル心理学』p 209 福村出版）であり、「若いときから人間の相互依存性を認識し、必要なときに『助けを求め、受ける』権利を行使できる自立性を身につけておくことが重要である」（同上、p 212）と述べている。その意味でも、老後の自立を実現させるための社会的支援は有用であろう。

東京の第 3 回インタビューでは、55 才の独身女性から、「これからは単に社会にお世話になるばかりでなく、若い人が減ってくるのでシニアも社会の一翼を担う、というふうにもっと生産的に一緒にやっていかなければいけないと思うのです」という発言があったが、個人は自立に向けた努力をし、社会がそれを応援するという相互システムが作られることが望ましい。自立支援の主体としては行政・企業・個人などが考えられるが、社会的支援を受けた個人はただ支援を受け取るだけではなく、自らも自立に向けて積極的に努力する責務があり、支援を受ける最終的目標が個人のエンパワーメントであることを忘れてはならない。

第2部 グループ面接記録

○グループ面接実施スケジュール（5都市×3回＝計15回、各回約2時間）

(1) 札幌	第1回	2000年10月27日	19:00～
	第2回	2000年10月28日	11:00～
	第3回	2000年10月28日	15:00～
(2) 福岡	第1回	2000年11月25日	11:00～
	第2回	2000年11月25日	15:00～
	第3回	2000年11月26日	11:00～
(3) 名古屋	第1回	2000年12月2日	13:00～
	第2回	2000年12月2日	17:00～
	第3回	2000年12月3日	11:00～
(4) 京都	第1回	2001年1月20日	11:00～
	第2回	2001年1月20日	15:00～
	第3回	2001年1月21日	10:00～
(5) 東京	第1回	2001年2月24日	13:00～
	第2回	2001年2月24日	17:00～
	第3回	2001年2月25日	11:00～

注 記

○グループ面接記録は発言内容の抄録であり、発言内容の意味を損なわない範囲で文章を短縮化してある。

○発言者の名前について：

- ・モニター名はアルファベットで表示（A、B、C、…）している。
- ・モニターのうち独身女性の名前は四角で囲っている。→ 例： (A)
- ・モニターのうち独身男性の名前には下線を引いている。→ 例： (B)
- ・モニター以外の登場人物は以下の通りである。

	氏 名	役 職
(金子)	金子 勇	北海道大学大学院文学研究科教授
(和田)	和田 佳子	北海道武蔵女子短期大学助教授
(梶井)	梶井 祥子	北星学園女子短期大学非常勤講師
(白波瀬)	白波瀬 佐和子	国立社会保障・人口問題研究所第2室長
(佐藤)	佐藤 仁之	厚生年金基金連合会上席調査役
(千保)	千保 喜久夫	財団法人シニアプラン開発機構主席研究員

札幌グループ面接 (第1回)

日時 2000年10月27日 19:00~21:00

場所 札幌グランドホテル

(金子：司会) 最初に、自己紹介を兼ねて、1人5~6分程度お話をお願いします。

(A：41才独身女性) シニアというのは遠い先のような気がして、独身なので1人での人生設計ができていなかったのです。それを現実を感じるのが、保険の問題や、女性の場合特にどこまで勤務できるのか、そういうことの不安を最近感じています。いただいた資料の中で、不動産を担保に老後の資金をとというのが少し興味深かったです。

(B：48才独身男性) 私の母親は倒れて来年の夏で丸4年になります。半身不随で今一人暮らしをしています。そう離れていないですが、互いに一人暮らしです。非常に介護保険がいいと思うのは、私は母親のところにせいぜい週1回、30分かそこら会いに行くだけです。それでもちゃんと生きていけるわけで、自分の明日を考えるときもそういう意味で非常に心強い。個人的なことを言えば、1人でずっと生き続けていくには健康管理が一番大事ではないかと思っています。この15~16年、毎週最低1回はジムに通っています。

(C：46才独身男性) 自分の老後についてはあまり考えてはいません。他人の世話になんたくない、何かあった時はのたれ死んだ方がいいという思いを少し持っています。子供の世話にもなりたくなければ、老後のために自己責任で何か資産運用をするとかもあまり考えていません。

私は今年会社を創り、新しく事業を始めました。2人しかいない小さな会社ですが、社会保険料として会社全体で月に10万くらいが売上から消えていくわけです。人を1人雇える分、社会保険で消えていくわけで、それを払い続けていくのは実は簡単なことではない。

(D：42才既婚女性) この世の中、周りを見回してみますと、結婚していることはもう生きていく保険ではないということです。1人の社会人として自分が自立しているかと問われると、やはり自立はしていないのではないかと、甘えの中に生きているような気がします。また、「将来に対する漠然とした不安」がものすごくあります。明日はどうかかわからないという、いつもそういう不安はあります。それはなぜかと考えた場合、社会保障のシステム、制度がどんどん変わって行って、本当にお恥ずかしい話なのですが、何かよくわからないままいつも生きているという気がしています。標準世帯というのですか、夫婦2人と子供2人の世帯に対しての情報量は「例えば…」というようなことでテレビなどでも報道されて、数字がよく出てきます。私たち40代に対する情報は、あるのしょうけれども、それに触れる機会があまりないと思います。もっときめ細かな情報が身近にあると、少しは安心できるのではという気がします。例えばインターネットですぐ検索して自分のデータを入れれば、双方向で何か打ち返しをしてもらえそうなシステムがあるといいなという気がします。

(E：43才独身女性) うちの会社も非常に弱小企業で、厚生年金等の社会保険にまだ加入できない状態なのです。先程言われたように、本当に負担が大きくて、どうなるかなという感じです。ずっとフリーの仕事をしていたので、国民年金と国民健康保険に入っているのですが、厚生年金と比べて掛けている金額が少ないので、年金がもらえるようになっても本当に少ないだろうと思っています。20代のころ、1か月ほど入院するような病気をしてから、元気なときは何とか食べられるくらいは働けるかなと思うのですが、いったん病気になったりすると、特にフリーでやっていると、その時から全く収入が入ってこない状態になるので、入院した時にお金が入るような保険に結構いっぱい入っています。私は、たぶん収入に対して莫大な保険に入っていると思います。あまりにも負担する金額が大き

いので、1～2個止めようかと思っているところです。気がついたらこんなに保険に入っていたというのは、やはり将来に対する不安があるからだと思うのです。年金も、たぶんそんなにももらえないことはわかっているし、今掛けているものですら本当にもらえるのかどうかわかりません。私の両親は健在で、2世帯で1階と2階で住み分けて同居しています。私の両親は高齢なので、2人で一度に寝込まれたら、自分の仕事が続けられるのかどうか一番心配です。

(F:40才独身男性) 母親と2人暮らしをしています。母親は保険が好きで何本か掛けているのですが、次々に保険会社がつぶれて、あのお金はどこに行ったかと思っています。

(G:44才既婚女性) あまり老後のことは考えていないのが現状で、今は趣味に没頭して、自分の自由な時間を好きなように使っています。家族の協力のもとで、趣味を生かしています。ソフトボールのチームに入っているのも、試合等は家族に迷惑をかけたりもします。町内会の子供会の役員を7年以上やっていますし、育成委員もやっています。40才を過ぎて、これでいいのかなという不安はすごくあって、去年からパートを始めました。また、今年に入ってホームヘルパーの講座を受けました。仕事が終わってから夜間の講座を受けて一応2級は取得しました。

(金子) 一巡して、いろいろご発言いただきましたが、大きな問題として2つ出ていたと思います。1つは女性の自立の問題で、もう1つは不安の問題です。同時に、自立に隠されているところがあるのですが、負担の問題があります。何人かから出た保険の話は、負担という意味で非常に大きな問題だと思います。まず不安について少しお話をお願いします。

(D) システムがドラスティックに変わってきており、少し前とは全く違う制度が出てきています。それに対応してどうすればいいか、たくさん情報はありますが、何を選択していいのかわからないのです。また、国の財政についての不安があり、貨幣価値も変わるので、掛け金が60才になったときにどれほどの価値があるか不安です。

家庭の中では親の扶養の問題が出てきます。独身の方は自分の両親のことを考えますが、結婚していると相手の両親の面倒もみなければならない場合もあり、ダブルでそれが自分に降りかかってきます。今の社会では女性にかかる負担が大きい。同居するのか、どのように介護するのかということになると、自分の今の仕事は続けられなくなります。

(金子) 介護保険についてはどのように考えていますか。

(D) 介護保険は、これはシステムとして取られるというか、抛出するということですから、これには私は何の疑問もありません。

(金子) 自分の親がいてもいなくても払うわけですね。

(D) そうですね。それについては、国民の義務ということだとらえています。

(B) いろいろな人の話を聞いてそう思うのですが、肉親が直接介護するということは、私はしてはいけないことだと思います。最初の1～3ヶ月を過ぎるともう何をやってもわがままです。どっちも。ですから、お互いにとってときどき会うのが一番良い。それもヘルパーさんが、他人がやってくれるのが一番いい。全く他人の、しかも制度として成り立って何の負担も感じない。つまり、保険としてお金を払っているからその見返りとしてしていただくというかたちが、きわめて割り切れていて、非常にいいのだと思います。そういう意味では、介護保険はいいと私は思っています。

年金制度については世代間で面倒をみるという最初に作った時代と大きく実態が変わってしまっています。今あらゆるものの価値観が大きく変わっている時代だと思うのです。少子化もそうですが、子供をつくりたいと思う人が本当にいるのかなとも思います。十把一からげの論理で世代間で面倒をみると考えていたのが、確実に破綻したのだと思います。

(金子) 介護保険は40才以上全員で払うのですが、世代間で協力するという意味では年金

制度と同じところが結構あるのです。親がいなくても払う人は払うわけですから。価値観が違うからといって、「自分は親も配偶者もないから払わない」というわけにはいかない制度を時代の要請で作ったということだと思います。今のところ不安、負担、自立の3つの問題が絡み合っていて出てきていますが、負担の問題についてはいかがですか。

（G）うちはこれからお金がかかる時期なので、私のパートの収入は教育費の一部だと考えているのです。大学へ行ってお金がなければローンを組めばいいとわりと簡単に考えています。

（金子）大学生活は自宅外では授業料と生活費で年間大体250万円くらいかかるのです。大学4年間で1千万円かかることになります。これは結構大変だと思います。

（G）収入面ではうちの家庭は普通だと思います。みんなが国公立に入れるわけではなくて、私大で家から通うだろうと。そうなればどれくらいかかるかという想像はもちろんしていますし、それなりの預金はもちろんしてはいます。

（和田）一般に言われているような、教育費が高すぎるとか、そういう感じはどうですか。

（G）それはもちろんそうですが、皆その路線なわけですね。教育費はすごく高いと思うし、上の子は高校が私立でお金がかかっています。ただ、周りの人々がやっているのだからうちもできるだろうというところですね。

（梶井）さっき、世代間の支え合いとか、年金の制度が今の実態と合わないのではというご意見がありましたが、今は1人の若者が2人分支えればいいのかもかもしれませんが、Gさんのお子さんは大きくなったら、4人くらいを支えることになります。せっかく育てても、子供たちの収入が随分上の世代のために使われることになります。

（G）私は自分の子供と同居したいとは思っていません。自分の状況がどうなるかわかりませんが、主人が先に逝ったとしても自分で健康を考えながら生きていければいいと思っています。子供は子供で、ある程度過ぎたら好きなようにやってほしいと思っています。今、自分が10～20年もし若ければ子供をつくるかという、はたしてどうなのかと思います。今、私が20代でこれから結婚するにあたって、子供を普通につくれるかという不安です。これからの教育費というのは大変な負担だと思います。1人に何千万もかかる、結婚するのにいくらかかる、住居のこともあるでしょうし。

（金子）高い教育費を周りで少し負担するということであれば大丈夫ですか。

（G）もちろんそうでしょうね。子供、とくに男の子は大学だけは出しておきたいと考えています。やれることはやってやろうというのが現状です。

（B）独身OLが年2回は海外に行けたのに、結婚したら行けなくなり、子供ができるとそれどころではないわけです。それを考えただけで子供なんかと思うのではないですか。

（金子）子供相手の商売をしている企業に勤めている人は、子供がいなくなったら多分その企業はうまくいかなくなって倒産することが当然読めるわけです。その点はどうですか。

（B）もっと外国人の方がどんどん入れるようにして、フィリピン系日本人から中国系など、人が入ってくると価値観もいろいろ変わってくると思います。米国みたいな形にでもなっていないいろいろな意味で行きづまりが来ているのではないかと思います。

（金子）これも価値判断が分れるところでトラブルももちろん出てくるわけです。そういうのが嫌だという人も結構いますから。もう少し自立と不安の話をして頂きたいのですが。

（A）世の中のいろいろなシステムという中で、ファミリーの枠のものが多いいのです。例えば教育ローンとか、いろいろな金融関係のものはファミリー対象にはたくさんあるのですが、単身で生活している者がある日突然倒れた時のシステムは意外にないのです。

私の親などもそうですが、兄弟がいて結婚して家を持ったり、孫が学校に行くと、お婆ちゃん・おじいちゃん世代がいろいろ面倒をみます。しかし、単身だとそれは何もないの

です。ただお祝いを出すばかりで、自分が倒れた時に、支えてくれるものが何かあるのかなと思います。私はこの介護保険に関しては何も思わず、システムとしてはどんどん払えばいいと思っています。それは小学生以下の子供が幼稚園に行くのと同じで、老後を迎えた人たちのための次のシステムというものがもっともっていいと思うからで、そのための支出は皆で負担するのはいいと思っています。ファミリー以外の、単身であろうと何であろうと、1人が1戸の世帯として生きていく場合のシステムを、もっともって議論していただきたいと思います。

(金子) 例えば、さっきEさんは、保険に関してそれをかなり自覚されて、かなり多額の保険に入られて、先取りされているという感じがしますが、いかがですか。

(E) 今、Aさんがおっしゃたことは全くその通りです。自分自身、とりあえず何か不安だから入っているのですが、実際にそれだけで生活していけるかどうかは疑問です。介護保険が年金と同じでない点は、今、年金をもらっている人からも介護保険料を徴収している点だと思います。テレビで見たのですが、要介護になっていない2人で自立している老夫婦が年金の中から2千〜3千円引かれていたのです。月々3万程度の年金しかもらっていない人のところから何千円も引くのは、制度として少しまずいのではと思いました。

(金子) それに対して、北海道の北の方と兵庫県のいくつかの自治体が、ある一定以下の所得の人たちからは取らないという英断をくだしています。ただし、みんなで支えるという趣旨からすると、半額でも500円でも100円でもいいから取った方がいいと私は思います。また、老人世帯のかなりの部分は子供がどこかで暮らしていることが多く、その場合、子供は千円ですら応援しないのか、そういう関係性がないのかという素朴な不安があります。

(F) 先程父親の話をしてしましたが、10年間家で母親がみていて、下の世話もお風呂も全部でした。そういうのを見ていますと、自分もそのようにはなりたくないということと、私はやはり父親の下の世話はできなかったです。それで、介護保険という、制度的にはまだ欠陥もあると思うのですが、応分の負担の中でやっていくというのは良いと思います。

(金子) Cさんは、経営者の側として、先程、2人の社会保険料を併せると1人雇えるくらいの保険料を負担していると言われましたが、そのあたりはいかがですか。

(C) 介護保険にしろ年金にしろ、自分たちの負担で社会を支えることは正しいと思っていますが、なぜ年金制度がこれだけ問題になったり、不払いがあつたりするのかと思います。自分自身がどうするか、自分をどう支えるかという、「私」の部分が意識としてすごく大事であると思います。例えば年金にしても、世代間で支えるために今、年金を払っているという人間は、たぶん私を含めていないだろうと思います。日常の「個」としての意識からすれば、自分が払った年金によって自分の将来が支えられる、それが正しい感情ではないかと思うのです。自分がいくら年金を払っても、将来その見返りはないと思ったら、それは当然払いたくないのです。保険料を払うことは自分たちの社会を自分たちの負担で支えることだとするのであれば、その社会にどうやって帰属して支えていくのかという意識が必要です。各構成員が、自分がお金を払っているこの集団は自分のものだという実感を持たなければ払いたくないですよ。

(金子) つまり、世代間で循環するからいいではないかという話は、どこかほど遠いところがある。そうではなくて、「払ったからには見返りがある」という形で実感したいわけですね。「世代間」ではなくて、「世代内」なのですね。それは非常によくわかります。

(B) 「払ったからには見返りがある」という形で実感したいというのは非常に説得力があります。逆に言うと、Eさんが保険にいっぱい入っているのは、どうも年金も含めて怪しいという思いがあるから自分でお金を払って自分の見返りを得ようとしているのです。

(金子) 今は、我々が払っている分は全部戻ってこなくて、70〜80才くらいの人がリッチ

な生活をしているわけですね。それをどこかでえいっと切って、これからは払った者に戻るような仕組みにする方向に徐々に変えていくということが始まるかも知れません。

(C) 従業員は所得税などを払うわけですが、会社はもうかると法人税を払うが、赤字になると払わない。だから、私も外形標準課税をやるべきだと思います。つまり、法人もきちんと税金を納めることで社会を支えるべきだと個人的には思っています。

おそらく20~30年以上前は地域社会に自分が入っている実感があったと思うのです。例えば講や結(ゆい)、今で言えばNPO的なものに帰属して、そこで教育や訓練がされるわけです。自分がそこに帰属して集団を支えていくという。それをある意味でバラバラにしておいて、システムがどんどん変わっていく。将来は見えない。自己責任の社会になりながら、新しい次の社会の形をだれも見せてくれない。それはみんな不安に思いますよ。

(金子) 唯一見えてくるのは年寄が増えることで、その中で比率的には変わらないが、実数としては要介護が増える。もう一方では子供が減ってきて頭でっかちになっていること。そういう中で、個人のあり方と社会のあり方を考え直して、できることは実践しなければいけないということになると思います。

(C) 社会のためには自分は子供を2人産もうとか3人産もうとか。

(金子) そういうことはだれも思いませんよね。ただし、結果的にはそういうことになってきているのです。次の世代を作らないと社会というものはすぐになくなってしまう。Eさんはたくさん保険に入られているということですが、例えば主婦として子供を育てておられるGさんはどうですか。生命保険をかける余裕とかについて。

(G) 主人と私は人並みに年金や保険には入っています。年金保険は2人とも入っていて、60才から2人分受け取れるようにしています。ただ、65才になった時にいくら入るかということは分かりません。あとは貯金をいくら貯めておかなければいけないと思っています。

結婚するかしないか子供をつくるかつくらないかということは、やはり価値観の問題だと思います。私は今悩み多き年ごろの子を抱えています。子育ては楽しいと思って生活しています。私は町内会も含めていろいろボランティアにもできれば参加しているのです。

例えば今払っているものは、自分自身生きていくために払うという感覚です。自分たちが少しでも現実に健やかに生きていけるように一部の負担をしているという感覚です。だから、みんなが払うのだったら、自分たちも払えるものだから払うという考えです。

(金子) Dさんは、「親の介護に直面したときに仕事は続けていけない」とおっしゃいましたが、これはいかがですか。

(D) その親にもよると思います。私の両親は、子供には頼らない、あなたたちは好きにやりなさいというスタンスです。主人は長男で、主人の両親は「長男がみるものだ」というような古い考え方の持主です。このままでは、仕事は当然辞めて親の面倒をみるものだという考え方の親であるために仕事を続けることはできないと思います。介護保険のような制度があっても「嫁は何をやっているんだ」という風当たりは非常に強いと思います。

離婚という選択もありますが、そうなった場合、お嫁さんという立場ではない自分は精神的に、また経済的にも自立しているかどうかです。私は自立していないと自分で自覚しているので、そういう選択は結局怖くてできないと思うのです。

(和田) 女性の場合には経済的な先行き不安をいつも抱えていて、仕事を続けられるのか、辞めるのだろうかという中で揺れています。男性の場合は仕事を続けるか続けないかという選択肢はないため、不安の度合が随分違う、つまり女性の方が悲観的な感じがします。

(金子) それは、男性は働かなくてははいけないという風にずっと育てられたからです。

(G) 私は、今仮に離婚したくても、生活していけないから現実にはできないのです。そのように思っている人は多数いると思います。40才過ぎたらそれこそ仕事がないのです。

熟年離婚というのは嘘ではないと思いますが、私は離婚なんてできません。

(梶井) Gさんは町内会の役員を7年もやっていらっしゃるということで、家庭を持つと子供が地域で育つということもあって、地域に対する帰属意識を持ち易いと思います。しかし、職場だけに専心していると、なかなか地域への帰属意識を持ちにくいと思います。

(C) 町内会には帰属意識がないのです。私の地域に対する帰属意識はもっと任意で集まるネットワークみたいなもの、それに帰属しながら、この社会を支えるという意識を持てるものに対してです。今の子供たちの世代を見ていると、地域で生きるということはこの子供たちには不可能と思わざるをえないバラバラ感を感じます。ボランティアやNPOというものがどんどん地域に帰属しているという意識を作るためのシステムとして発展していかないと、これまでのように地域に寄りかかっているだけではだめだという感じがします。

(金子) 帰属意識が強くなると、その先に支え合いというものが見えてくるわけですか。

(C) たぶん教育だと思うのです。学校教育ではなくて地域や社会教育です。そのグループに属して、そのグループを維持運営していくために自分でお金を出したり、組織を支える活動をします。自分が組織を支える一員であるという教育ができるのです。それを積み重ねることで国や地域、自治体、自分を取り巻く組織との関係になっていくと思います。

(金子) それが仮にできたとして、その先には何が見えますか。支えるということですか。

(C) その先に支えることを見せるために、その先に支えることを見るために、今それをやらなければいけないと思うのです。

(金子) Cさんは最初に「私はのたれ死にしたい」とおっしゃいましたが、それはどうなるのでしょうか。のたれ死んでもだれかが世話をすると思うのですが。

(C) 例えば介護保険を申請しないお年寄りがいる。人の世話になりたくないというのですが、それは分るのです。例えば、自分に何かあったときヘルパーさんが来て、自分の家に上がって台所や部屋に入ると考えただけで少しぞくつとします。そういう気持ち、人の世話になりたくない、何かあったらそのままにしておいてくれというのは分る気がします。

(金子) おそらく、全ての人が世話してもらいたくないと思っているわけではなくて、やはりBさんのところのようにちゃんとお世話してもらっている人もいるので、制度としては作った方がいいだろうという気はしますね。

(B) 私の感じとしては、『楢山節考』は山に捨てたけど、私は母親を自宅に捨てている感じです。今までは病院に親を捨てたのですが、今はシステム的に自宅に捨てられるというのが何となく実感です。何か覚悟があるかなという意味なのです。

(A) 介護保険など一つ一つ割り切れるシステムができていくことは、いいことだと思います。私は初めて入院した時に、苦しい時に他人にちゃんと面倒をみてもらえることは、意外にも自分自身苦痛ではなかったのです。だから、老人の介護で、ある程度ドライに割り切ってこの部分は手伝っていただくと思うことは、体験してみると意外に抵抗はないものです。娘やお嫁さんよりは割り切れると思える方も増えてくるような気がします。

(和田) ネットワークとしてはどんな人とお付き合いがありますか。

(A) 私は週末も仕事に出たりということで、地域の人とのコミュニケーションをしたいのですが、地域の情報が单身者にはなかなか来ないのだと思います。昼間はいないので。こちらは別に拒否しているわけでもなくて、お互い支えあえるもの、そして「個」としては「個」と、何もこだわりはないのですが、地域にはなかなか参加しにくい事情が現実問題としてあります。情報なども一番確かに伝わるのはメディアでしょうか。

(金子) 公的年金の負担についてはいかがですか。

(A) 子供を産んだ場合、24時間小さな子供に手がかかる。それは、男性、女性どちら

にしても、子供の面倒を24時間みなくてははいけない。そこで、育児期間の2年間だけは健康保険掛け金や年金の掛け金は免除されるようにすればいいと思います。それはご主人が免除されてもいいですし、奥様が免除されてもいいでしょう。そういうことがきちんとされたうえで、社会人は社会人としてそれら掛け金を払っていただきたいと思います。

（金子）あっという間に2時間たっています。そろそろまとめたいと思います。一言で言うと、自立と不安、負担という3つのキーワードが、それぞれ重みを持って皆さん方に迫っているのではないかと思います。最大公約数的に言うと、納得のいく負担だったらまあまあいいのではないかみたいなのが、多分に皆さん方からのお話には見え隠れしていると思います。本日は貴重な意見を聞かせていただき、どうもありがとうございました。

以上

札幌グループ面接（第2回）

日時 2000年10月28日 11:00～13:00

場所 札幌グランドホテル

（金子：司会）最初に自己紹介を兼ねて、1人5～6分ぐらいで自分のこれまでのやってきたことや、例えば親の介護の問題、あるいはお子さんのことも含めてお話しをしていただいて、そのあとは自由にお話を続けていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

（A：51才独身女性）父は亡くなりまして、母と一緒に過ごしておりますがまだ健康なので、まだ介護はあまり身近には感じていないのですが、具体的に友達のお父さんがそういう年齢に差し加かってきているので、関心を持ちはじめてきたところです。

40才ぐらいのときに将来のことを考える機会がありまして、年金のことについて資料などを見ますと、女性の場合は給与ベースが低いですから個人年金に入りました。

（B：52才独身女性）親が10年前に他界したものですから、介護関係の認識がなく、私もおかげ様で大変健康ですのであまり考えていなかったのですが、50才を過ぎましたらいろいろ気になりまして、思うことは、家庭生活の崩壊とか社会保障の先細りとか言われていますが、結論は、自分のことは自分でというのが原則で、何にしても日常から孤独に強くなければ生き延びられないよと、友達とも常々話しております。

（C：42才既婚女性）まだ夫の両親も健在で元気であるが、相手の親も扶養しなければならないということもあるし、その場合に自分の仕事を続けていけるかどうかという不安もあります。不安の海の中で泳いでいる。溺れそうになっているのだけれども、たまに仕事があるので、浮輪を投げてもらってその浮輪にしがみついて泳いでいる状態です。自分でどうやって対策を講じるかということになりますと、避けている面があります。情報も実はたくさんあるのですが、自分にぴたり合う情報というのがなかなか見つけられない状態です。ただ、公的年金もあまり期待できないかもしれないという不安はあります。

（D：43才独身女性）私は今年43才になります。5～6年ぐらい前に病院で栄養士の仕事をしていましたが、6年前に父が病気で亡くなり、入院中に父に何もしてあげられなかったという思いがあって、38才の時に看護婦になろうと准看の学校に2年間行きました。

現在は午前中にパートで働きながら、夜間の進学の看護科に通っています。母と暮らしていますが母は年金をもらって生活している状態です。今は健康ですが、将来何年か先には私が面倒をみることになると思います。姉がいますので私1人というわけではないので樂觀視している面がありますが、他人ごとではないという感じがします。

私には子どもがいませんので、将来のことはなるべく考えないようにしているのですが、テレビや新聞に介護のことが出ていると、漠然とした不安が広がってくるような状態です。

（E：46才独身女性）9月の末日に会社が廃業になり、今、失業保険の手続きをとって、これからのことを考えようと思っています。今、札幌、小樽は雇用の状況が大変厳しくて、特に40過ぎの女性、まして独身となりますと、ほとんど希望に沿う仕事がない状態ですのでこれを機会に旅人を対象に民宿を開こうと計画しております。

親は2人とも千葉で健在でおりますので、とりあえず自分のことを周りに迷惑をかけないように生きていけるように準備して頑張っていきたいと思っています。

（F：48才独身女性）私も20年近く前に父が亡くなり、父の看護は、母が朝タクシーで行って、夜はまたタクシーで戻ってきてという生活を6か月ぐらい献身的に尽くしました。

その母を連れて札幌に来たのですが、なぜ札幌に来たかという、妹が今札幌に住んでおります。父の親戚や母の親戚は頼るつもりは毛頭ありませんし、心の支えにそばに妹がいればと思って、それだけで札幌にまいりました。それで今は母と2人で過ごしております。

す。私もどちらかというと現実を見ないで今までずっときたという感じです。

（G：47才独身女性） 私自身の性格からいって事務職関係は合うだろうと思って経理の学校へ行き資格を取ったのですが、37～38歳でスタートするのは遅かったという現実を突きつけられました。いずれは介護の問題が出てくるのですが、まだ両親からヘルプの声がかかっていない状態です。2人とも田舎暮らしが好きなので都会には出たくないと言っています。子供の世話になりたくないという頑固な親ですので、その辺のところはいざとなったら考えようと、姉妹で言っていますが具体的にどうしてあげようかという問題になると、みんな「うーん？」という感じなのです。今は、家の近くの個人商店で事務員としてパートで働いて、それでは生活ができないので、夜は飲食店の裏方で5時間ぐらいのパートをしております。厚生年金を17年間掛けていたのですが、当時、保険のことがまったくわからないで辞めてしまったものですから、あと3年頑張れば満期だったのになと、今すごく後悔しています。辞めたことは後悔していませんが、無知だった自分には後悔しています。

（金子） 孤独に強くないと生き延びられないということはすごく大事なことで、若いときは、友達、仕事の仲間とのつきあいがあるのですが、年を取っていくと外へ出るのがおっくうになるということもあるし、どういうことで孤独に対応されているかという話を聞きたいのですが、よろしいでしょうか。

（B） 具体的なことはないのですが、まず、老後に向けては3つの要素が要と思うのです。健康、サマナー（ある程度のお金）、人間関係（友人もしくは親類）という3つに向けての準備は少しずつしなければと思っています。その中で、友人という部分では、若いころの友人はだいたいいるのですが、現実問題一人暮らしをしていますと、具体的に女一人でその辺のレストランに入ろうと思っても、なかなか入れなかったりするのです。

（金子） 孤独に向けての3要素、健康と少しのお金と人間関係というのは、まったくそのとおりだと感心しておりますが、多くの場合、健康というのは自分のことで、毎日のことです。みんな関心があって、それから当然生きていくうえではお金の問題が出てくるのですが、3番目の人間関係というのが、孤独の裏返しとして、大事なだけでもなかなか目につかないということがあるわけです。

孤独対策というか、人のつきあいの面ではいかがですか。

（D） 私はだれとでもつきあう方なのですが、交友関係はやはり絞られてきますね。気の合わない友達とは、1度食事に行っても、2回目からは行かないとか、友達を選ぶという感じです。

（A） やはり同じような友達がいますので、グループで集まったりとか、一軒のお宅で食べる会を催したり、また、前はスポーツクラブのエアロビクスに通っていて、その仲間と交流したりしています。その友達とは月に1回ぐらいは食事をしています。あとは、映画も好きなので、映画は月に2～3本は見ます。

友達も老後を心配して最近インターネットを始めたという人もいます。私は会社ではパソコンをしますが、家でもだんだん必要になると思っています。

（金子） 私たちの研究分野によると、親密な他者というのはすべての人生のライフステージで大事なのです。その親密な他者というのは、家族でももちろんいいのですが、家族外でももちろんいいわけです。異性でももちろんいいわけです。そういう親密な他者がいることによって何が一番いいかというと、その親密な他者から自分がきちんと評価されるということなのです。

（E） 親密な他者とはまったく逆になるのですが、私は、サッカーのコンサドーレ札幌の発足当時から熱心なサポーターをしております。名前も経歴も知らないサポーター同士、全く知らない者同士が、手を取り合って喜ぶというようなこともあります。私も友達に関

しては厳しく選別する方で、少なくともいいから深くという方針なのですが、その反対側でそういうつながりというのは、今の私にとってはとても大事なことです。

(B) 3年前に、よさこいソーラン祭りにスタッフとして参加したのですが、10代から60代までの踊り子を集めるときにもものすごく盛り上がりました。すごく苦勞しましたが、目的を持てたということでもとてもいい経験をしました。先程の評価するという部分では、お互いに褒めあうことがすごく大事だと思いました。

(梶井) 先程、Aさんも、同じような友達とわりと会うちょうと。DさんもEさんも、少なくともいいから気の合った深い人とおっしゃっていますが、そのような気の合ったお友達というのは、やはり独身の方が多いのですか。

(F) 私はたまたま学校に行っていますので、年齢も12~13才離れた若い人も友達ですし、でもやはり独身が多いですね。

(G) あまり年齢とか仕事では分けてはいませんが、子どもを持っている専業主婦の方とは時間帯が合わないということもありますね。

(金子) Fさんは4年前に移ってこられたということで、昔の友達はこちらにいらっしやらないわけですね。その場合、先程から話題になっている孤独の対策というか、友達とか知り合いをどのようにするかということで何かお考えはありますか。実践なさっていることはありますか。

(F) 先程からの話を聞いていると、孤独というのは単に1人だから孤独なのですが、自分の中では今も母はいますが1人ですね。でも、自分の気持ちの中で孤独という言葉はないのです。例えばグループに入って踊ったりしても、その中に入っているときは孤独ではないけれども、家へ帰ったときには結局1人になってしまうわけですから、その時の方がもっと孤独を感じざるをえなくなると思うのです。だから、今は年に2度くらいは仙台へ行って学校のときの友達とおしゃべりします。それはほとんどが子持ちの主婦です。

(金子) 札幌では友達はいらないのですか。

(F) いらないというのではなくて、作る場もないし、年をとってくると、たくさんではなくていいのです、おいしいものをちょっとでもいいから食べたいという、そういう雰囲気なのです。ただ、その友達が私を選んでくれているという確信は持てませんが、共感をたぶん持ってくれているのではないかと思いますので。

(G) 私は正直言って孤独大好き人間なのです。テレビがあれば(笑)。特に今の年になって、前に17年間勤めていた会社の友達とつきあえるかといったら、つきあえないです。向こうはお金があるし、私はないし、そこで同等のつきあいができるかといえませんができないです。実際に収入の差があると対等にはつきあえないというのがあったのです。若かったらきつとしていたかもしれないと思うけれども、今はそういう生活はしない。自分の収入に合った生活をしようと思っています。私は1人が好きだから、別に伴侶がいなくてもいいという状態ですので、将来は、もっと老後の国の政策ももう少しよくなっているのではないだろうかという期待を持ちつつ生活しているのです。たぶん老人ホームに入ることになるだろうと思っています。個室があつて、ペットと一緒に暮らせる老人ホームを造ってもらえたらなんと。低所得者でも、プライベートをきちとして、猫とか犬と一緒に生活できる老人ホームがあつたら最高だだと思います。

(和田) 孤独に耐えるという意味で、Bさん、お子さんの存在というのはどうですか。離れていらっしやるのですか。

(B) あまり親を両方あてにできないからと言って、今は3年ですが東京で暮らしています。だから、普通の母子家庭とは少し違ひまして、私も離婚して10年近く独身生活をしていましたのでギャップがあります。どちらにしても、これからは子どもをあてにしてい

けないと思っています。例えば就職にしても、北海道に帰ってくるのはラストにして、どこでも世界でも宇宙の果てでも行きなさいねと割り切っていますので、私のことは自分でやろうと思っています。

(梶井)わりと独身女性に対する情報がものすごく少ないというご指摘があったのですが、例えばGさんはテレビをわりとご覧になるということですが、必要な情報が少ないとか、テレビを見ていても若い人向けで私たち向けが少ないとか、情報に対する不安はありませんか。

(G)ただ、楽しんでいる状態ですが、年齢とともにNHKを見る回数が増えてきたとか、教育テレビも案外おもしろいとかBSとか。教育テレビも意外とおもしろいですね。

(金子)皆さん方、シングルで生きておられて、一番必要な情報というのは何でしょうね。

(A)やはり30~40代になってきて、やっと将来の話が出てきましたが、そのときに、生命保険がまず一番になりました。今は、生命保険でも満期の時点で年金に選択できるのもあるそうで、そういうのに入っている入っていないでいろいろ議論しました。

(金子)趣味に合わせた情報についてはいかがですか。

(A)私の場合はクラシックが好きなので、そういう人が友達にはあまりいないのですね。それはまた別で、先程コンサドーレの方が言っていました、私の場合は、テノール歌手でホセ・カレーラスという人がいるのですけれども、その方の生の演奏を初めて東京で聞いたのです。それがすごくすばらしくて、専門の雑誌があるというのがわかって、そこに資料を欲しいというのを書いたら、全国から送ってくださった方がいたのです。いまだにつきあっていますけれども、そういうのはファンクラブに入るということでなくても、つながりがあるのですね。

(金子)Eさんは、民宿のプランを具体化するための情報というのはどこかで集められているのですか。

(E)私は足を使って今のところは集めています。これから市役所のお世話になったり、いろいろなことはあると思いますが、まず、市役所に行ったら、どういうところへ行ったらどのようになるのか、そういうのを一つ一つ聞いていかないと。今はインターネットで調べたりしているのですが、住宅情報にしても、市で押さえているものがあまりにも少なかったり、小樽は空き家がすごく多いのです。

それと情報の面では新聞は読んでいても、情報そのものが難しすぎるという感じがします。とにかく新聞の1面、2面はとてもむずかしく感じます。

(金子)新聞社の人に言わせると、どうせみんな読まないから、見出ししか見ないからとおっしゃると方もいますけどね(笑)。Gさんは、情報という面ではいかがですか。

(G)今、一番欲しい情報ですか。やはり求人ですね。

(和田)40を過ぎた女性が再就職のポジションを得ることが非常に難しいのです。最後まで雇用されつづける不安というのがありますね。ですからEさんが会社がだめになったときに、次に考えだすのは起業するというので、自分で何かをやるというスタイルが私の周りでも非常に増えてきていまして、そちらの方が女性に合う働き方なのかなと思います。もちろん現実には厳しいのですが、そういう人たちも増えてくるのではないかと思います。そういうときに応援するシステムとか、それこそどこに行ったらどういう情報があるかということが、シニアであれば特に必要になってくるのではないかと思います。

むしろ我々の同世代の女性たちが蓄積している経験を活用しない手はないのではないかと思います。もちろん、若いパワーというのは限りないものですが、年齢で切られることが多いですね。35で切られ、40で切られるというのがあって悲しくなることがあるのですが、その辺について声を挙げていかなくてはいけなと思っています。

〔G〕 先程、就職の紹介というお話があって、考えないことはないのですが、若いときと違って、紹介する方も紹介される方も、決まったとしてもプレッシャーがあるのですね。私はどちらかというと気が張らない方がいいので、紹介されるのもありがたいのですが、すごいプレッシャーとリスクを背負わないといけない。

辞め方の問題もあるし、紹介してくれた人に申し訳ないと思うことがあってもいけないという面もあるので、二の足を踏んでしまいます。

〔梶井〕 皆さんいろいろ不安がおありになると思うのですか、私が印象深かったのは、Cさんは溺れそうだという表現をなさって、ときどき浮輪が投げられて、それにつかまるような状態ですと。Cさんは今はご主人もいらっしゃるという状況ですが、ご主人はいらっしゃらないで独身の方からは、あまり溺れそうということはでないのですが。

〔C〕 私の周りは独身の女性の方々がほとんどなのですが、会社勤めをしていたりする。会社勤めをすると、組織の中でいろいろありますけれども、でも、今は女性が一人で仕事をして定年まで勤めあげることが普通にできる状況になってきているというところに勤めていれば、退職金もきっとあるだろう。というようなライフ設計が、周りの方々はちゃんと立てられているわけです。そうすると、ある程度見通しを立てて、結婚しようがしまいが自分の仕事を持ってやっていくという人たちが周りにたくさんいるものですから、そういう意味では何をやっているのだろうと。

〔和田〕 Eさんは、どの段階で民宿を考えられたのですか。ある程度温めていらしたのですか。

〔E〕 失業するという時点で、これはチャンスだなというのと、もう雇われる仕事はないなというのと両方でした。

〔F〕 私は薬剤師です。ですから、免許のあるうちは、足腰が立たなくなっても、ある程度の年齢までは自分で食べる分ぐらいはどうかやっていけるのではないかと思います。土日だけ調剤薬局へ行ってバイトしているのですが、そういうことで、どこかで薬とかかわったり、人とおしゃべりしたいということがあります。

〔金子〕 孤独の防止みたいなものですか。

〔F〕 それが孤独対策なので、人とお話ししたくなるときには土日が楽しみです。

〔金子〕 例えば高齢者介護の8割以上は女性がやっているわけですし、ヘルパーさんのほとんどが女性なのです。そういうかたちで、ある分野については女性が非常に多く負担を抱えているということがありますが、働き方について何かご意見がございませんか。

〔A〕 女性に負担が大きすぎるのではないかと思います。名目的には育児休暇や介護休暇とかがあっても、たぶん取らないと思います。もっと取りやすい環境にしていくのが必要だと思いますね。女の人でも育児休暇はなかなか取りづらくて、辞められる方も結構いますから。介護休暇についても、大きな会社でゆとりのある人数でしたらいいですけども、小さい会社ではとても取れないですから。

〔B〕 少子化の問題は、産んで育てるのがほとんど女性でしたので、その女性がかかなり目覚めてしまったのが原因ではないでしょうか。社会に出たい、自由でいたいという理由で結婚しない女の子も多いし、結婚しても産まない人が多いのですね。男の人に育児協力とか、いい意味でマイホームパパとか、そういう啓蒙が必要だと思います。今、若い人に聞きますと、ニュースを見ても、いじめだとか少年暴力が多くて、家庭を持って子供を持つのが怖いというのが多く、いい家庭イメージがないのですね。少子化の問題に関しても、男女を問わずに、もう少しいい家庭像というのをみんなで広めて、若い人に家庭を持つ希望の方向を示す方がいいと思います。でなかったら、少子化の傾向は止まりませんよね。年金にしても、家族とか夫婦でなくて、個人単位でなかったら制度的にも間に合わなくな

ると思います。

（C）たとえば、ぎりぎりした関係の中で、温かな目で教育支援税、子育て支援税みたいなシステムを作ることには私たちは納得しますよ。納得して、子供は宝物ですから、宝物を育てることに対して私は反対しません。ですから、納得いく説明とビジョンと、それからこういう理想を持っていくんだ。皆さん、どうですか、ということをお示しいただいたときに、納得できるものに対しては払います。介護保険もそうです。納得して私は払っています。そういうシステムを考えていてもいいのかなという気はします。

（金子）さまざまなご意見をいただいて、私たちも非常に参考になりましたが、話の流れとしては、一方では親の介護のこと、自分の生き方論などの話になってきて、Bさんが出されました、健康とお金と人間関係というのが非常に大きく今日の話を導いてくれるきっかけになったのではないかと思います。それから、自分で起業するというのも女性の選択肢の一つであろうと。Eさんが、たまたま意欲を燃やされているということもありますし、そういう多方面のお話をちょうだいできました。

それでは、グループインタビューとしてはこれで終わらせていただきたいと思います。

以上

札幌グループ面接（第3回）

日時 2000年10月28日 15:00～17:00

場所 札幌グランドホテル

（金子） まず、自己紹介を兼ねて、お一人5～6分程度お話いただいて、あとは自由に意見を出していただければと思います。

（A：53才既婚女性）団塊の世代なので、思っていたような老後が過ごせるか、経済的に厳しい気がします。私達の年金支給が崩れるような気がしていて、その時に親の面倒を見ることができるのかということが気になります。

（B：46才既婚女性）今、子供の学校のことが精一杯で、自分の老後のことも考えていなかったし、親の介護のことについてもその時に何とかなると、具体的に考えていませんでした。

（C：53才既婚女性）自分の老後のことは一切考えていませんでした。子供がいないので年金で老後は何とかいけるかなと。ただ、自分達が年いったときに、介護のことが今少し心配です。

（D：55才既婚女性）隣近所のお年寄りや町内会のボランティアをしています。主人の職場で年金ライフプランセミナーがあり、主人1人で参加しましたが、年金は少ないし、退職金もすごく少ないことがわかり、2人で悩みました。

しかし、健康で心穏やかに暮らしていける人生にこれからしたいなということで、お金がなくても死にはしないとか、自分流でいけばいいんだとか、もっともっと生活を見直してやっていけばいいのだと、気持ちを決めて生活してきました。

（E：44才既婚女性）今、家のローンがあり、これから子供に教育費がかかる世代なので、とても自分達の老後のために貯蓄している余裕はありません。それで、年金で何とかなのかと思っていましたが、昭和30年前後生まれを境に年金支給額がだいぶ減ると新聞で読み、気がかりです。

（F：42才既婚女性）母の介護が必要になった時、経済面では1人だけなので心配はいりませんが、1人っ子なので、私も夫もいろいろな面でかわらなければいけないと思っています。また、年金もどうなるかわからないので、個人年金も考えなければならないと思っています。

（G：47才既婚女性）子供が3人、ましてや長女が地方の大学にいらっているので、教育費が一番かかります。また、身体の不自由な年寄りと障害児がいますが、地域のバックアップ体制が整っているおかげで、フルタイムでホームヘルパーという仕事できています。介護の問題とか、障害のある子供を育てて一番思うことは、的確な情報が、一番必要としているところへ来づらいシステムになっているということです。当然受けるべき介護やサービスが受けられていない現状がありますが、超高齢化社会を支えていくのは的確な情報の共有だと思います。

（H：41才既婚女性）実家の母が脳腫瘍で手術をした際、周りを見ていたら身体が半身不随になる人ばかりでしたので、その時介護の大変さとヘルパーの仕事を見て、自分でできるのかと考えました。しかし、自分の親は自分で見たいと思います。

子供がいないので、自分達がそうなった時には誰が面倒をみってくれるのか不安です。また、貯蓄もないので、保険に入っているが、貯金というよりも保険貧乏になっています。

（金子） もっと老後生活に関する資料を早く見たかったという人と、今からかなり負担が重くなるので覚悟をしているという方、いろいろいらったのですけれど、やはり1つはGさんがおっしゃった的確な情報が必要などころになかなか届いていないということ

は当然あると思います。

(G)現場にいる介護職の人間とケアプランをたてるケアマネージャーとに差があります。また、生活の厳しい方ほど介護の要求度も高く、要介護支援の度数も高いが、それは経済的な裏付けがないと老後を支えていけないという一つの端的な例だと思います。

毎日ヘルパーに来てもらっている人は、毎日違う人が家の中に入るという事態がおこっています。毎日違う人が来て、下の世話を受けることに耐えられるかという現状があります。介護をする側とされる側のギャップがあり、介護サービスの利用控えがあると思います。

(金子)私もそういうことを調べる人が多いのですが、ヘルパーさんが主に働く場所というのは、寝室と台所なのです。

(G)あと浴室です。

(金子)ご両親やご自身が台所と寝室と浴室、とにかくプライバシーを十分保っているところに他人が入ってこないと介護してもらえないというジレンマに対して、どのようにお考えになるかと思って聞いていたのです。

(C)下の世話をいろいろな人にやってもらうということはいや。やはり、1人か2人の人に見てもらいたいです。

(F)介護が家族、特に女の人、お嫁さん、娘さん、孫から、特定の介護専門職の人に行っているだけで、必ずしも社会的な広がりとか社会的支援にはつながっていません。そのところをぼやかしていくと、介護保険は機能しないし、誰もサービスを利用しないと思います。

(C)自分に暇があって要介護の人を見ることができればいいですが、現状は見られないので、せめてお金だけという感じはあります。

(D)介護というのは、どうしても女の人、今また在宅介護という言葉もでてきているから、どうしても家庭にいる女性に任せられてしまうし、任せられてきました。だから、そういう部分では私達がしっかり声を上げて、現状を見ながら変えていくべきだと思います。

(G)日本の福祉とか医療は、ドクターや大学教授といったある種の肩書きを持った方をトップとして、ヒューマンケアに携わった人間がプライドを持って仕事ができない現状がたくさんあります。自分は、ヘルパーに来てもらったり、施設に預けたりして、制度を活用しているので、介護保険料をとられているという意識はありません。しかし、介護保険制度を活用していない高齢者の方にとられているという意識がものすごく強いです。

(B)介護保険については取られているとは思わないし、自分達が高齢の介護を必要な人の分を見るという意識もあります。しかし、親の生活を見ているから、老人というか年金からとるのはちょっとと思います。きめられた年金しかなく、他からの収入のない人が多数いることを知るべきだと思います。

(D)その枠内で生活しているものにとっては、100円でも200円でも厳しいのです。

(B)年をとっている人にはやはり若い人が手を差し伸べてあげたい。どの年よりもみんなが平等に介護を受けられればいいし、生活に困らないで生活できればいいなという理想はあります。

(A)83才の母は1人暮らしで不自由はしていませんが、少しぼけてきています。介護の認定の登録だけをしたらいいのではと兄弟で話したことがあり、そうしようと考えています。その母の兄も1人でいてすごく元気なので、私らは兄弟が多いが、ほかの兄弟と一緒に住みたくない。あちらが元気であるうちは私も元気でという感じです。

(金子)40代の方は、高齢者の人と子供にできるだけ負担をした方がいいというお話しですが、子供を育てている立場からするとシングルの人に対し、どういうふうにお感じになりますか。

(E) 今後教育費を貯めなくてはならないという時期に入って、わずかの私のパート代でも必死でとにかく貯金をしようと思っているのです。自分の老後の資金なんてその次で、全く考えられません。せいぜい、主人の名前で入っている保険ぐらいしかありません。私の両親は2人ともまだ健在ですが、年金でつつましくくらしています。千円でも3百円でも介護保険料を取るのとは酷な話です。一番働き盛りの30代、40代の世代が負担するのはしょうがない。社会が一番見てあげないといけないのは子供とお年寄だと思います。

(F) 同級生で結構シングルでそのままがんばっている人が多い。話をすると意外と本人自体はそれほど切実ではなく、若いつもりで気分的にまだバリバリとやれる意識があります。でも将来的には、資格を取って自営をしたり起業家になろうと考え、自分に投資しています。私達の世代で独身でバリバリという人達は、ある程度年を取ってから子供が少ないので、子供のいない方にはそれ相応の負担をしてもらって、介護を受ける時は割増にしてもらわないとつじつまが合わないのでは、と母が言っています。

教育費に関してシングルの人と話しても、大変だねと言う程度で、結局平行線をたどりません。従って、あまりそういうことにはお互いに突っ込んだ話はしないようにしています。介護保険の負担については、年寄の年金に応じて、もっともっと細分化して取っていくしかないと思います。今は40才以上で徴収されていますが、今後支えきれないので、もっと年代の下の人からも徴収しなければ、いずれは破綻すると思います。

(G) 介護保険は元がとれないという話については、サービスという言葉を使うからです。現場では介護サービスと言うので、サービスは受けなきゃ損と皆が思うのではないのでしょうか。生命保険をサービスとは言わないですね。今のヘルパーの仕事は自立に向けての家事援助がほとんどであり、身体介護はヘルパーの医療補助の問題もあり難しいです。従って、ヘルパーと家政婦の仕事の違いが難しく、相手の要求に対し「介護保険の中のサービスにはない」と言っても納得させられないのです。

(D) 健康の秘訣については、カロリーをなるべくとらないとか、塩分のとりすぎにならないように食べ物に工夫をしています。また、1日に1時間半ぐらいは犬を連れて外を散歩しており、犬を連れていけないお年寄にも、散歩のボランティアをやってあげています。

(金子) 3年前ぐらい前から日本一長寿の研究をしまして、女性の日本一長寿は沖縄で男性の日本一は長野です。日本一ということは、食生活の面と医療の面とライフスタイルの3つからみるのです。例えば、カロリーに注意し苦いものを食べたり、老人大学に入り、仲間を増やしたり、カラオケを歌ったりと長生き健康のための工夫をしています。

(A) 主人に関して言えば、仕事は結構趣味ですが、若い時から土日はびっしりスポーツに打ち込んでいました。でも仕事一筋でもありません。

(B) 単身赴任なので土日は仕事を抱えて帰ってきます。普段、子供に対する教育は一切なしですが、自分は仕事をして稼いでいるという考え方だからです。でも、教育と一緒にして欲しいです。仕事は熱心で、夜中までやっています。

(C) うちでは全然仕事人間ではなく、さっさと帰ってきます。普段の日はテレビを見るか、お酒を飲んでテレビを見るぐらいです。また日曜日はお互い好きなことをやっています。

(梶井) 地域との係わりはどうですか。

(C) 私は、朝からパート出ているので、地域とのかかわりは殆どありません。まして、マンション暮らしなので、お向かいの奥さんと挨拶を交わすぐらいです。

(D) 主人は公務員ですが、どんどん人が減っているため仕事がきつく、こんなはずじゃなかったと言っています。息子は会社員ですが、毎日帰りが10時、11時と遅く、殆どがサービス残業です。労働組合で話し合ったらと言ってもコスト削減でそんな時代ではないと言っています。

（金子）男性の働き方みたいなことについてはどうですか。

（E）主人は土日は大体いるし、夜も7時ぐらいに帰ってきます。長々といるといつまでも仕事が終わらないから、帰ってくるんです。休日は、個人で行動するのが好きなので、1人で釣りに出かけていますが、年をとり、退職した時に1人でいいのかなと心配しています。

（金子）人間は、自分をきちんと評価してもらえ人を常時求めているところがあって、1人か2人、家族でも家族外でもいいのですが、親密な他者を非常に求めます。

（F）主人は公務員で、帰りは10時ぐらいになります。仕事とプライベートな面では仕事関係の人とプライベートの友人関係はちゃんと分けて上手につきあっているようです。一生懸命インターネットをやっていて楽しらしく、音信不通だった人と会う機会も増えました。

（G）寝たきりの年寄と障害のある子供を育てるのは1人では無理なので、主人が当然家庭にも地域にもつながってないといけないということがあって、そういったものを立ち上げて十何年になります。しかし、転勤、残業ができないため出世が遅れ、年収が低いです。

生活を維持していくため、子供を支えていくために働かなくてはいけないという現実があるので、その部分では、弱者を抱えている家庭をどういう形で支えていくかということに対し、日本は遅れているし、当事者が声を出しにくい環境にあります。

今の暮らしはかつかつにしているけれど、将来の展望が全くひらけない。忙しすぎて自分や主人の健康面の管理ができません。私は癌を3回患ったし、主人も癌かと思ったことがありました。その点では、どこかで援助して、支えて欲しいという思いがあります。

シングルの人達が結構自分に投資するという現実に対しては、あまりにも立場が違いすぎると意見がかみ合わないことが多く、結局お互いに攻撃になってしまいます。

（H）子供は望んでいましたが、できませんでした。不妊治療のための料金は保険がきかないため高額で、またホルモン注射等で身体もぼろぼろになり精神的に疲れてしまい、ある時から2人で生きていこうと決心しましたが、それまでがすごく大変でした。

姉も48歳でシングルですが、母と暮らしているので家賃もいれず、結構気楽です。仕事がなくなる様子ですが、なるようになったのだから、またもう30年近く働いたのだから働かなくていいと話しています。

（F）結構シングルの方は両親と同居が多くて、経済的に家計にかかるお金がない分、やはり独身気分、いつまでも健康なうちはひたすら優雅にという感じがします。

（D）うちの娘には、結婚した方が楽と言っていますが、あとあとのことを考えると絶対シングルの方がよいと思います。

（G）専業主婦になったら、次の仕事を見つけることがなかなかできません。私は、一番需要のある職業で、資格もあったのですぐに再就職がきましたが、この年代で子育てもある程度落ち着いたからと言ってもまずできないでしょう。また日本ではいろいろな生き方が認められていないと思います。

女性も高度な教育を受けるようになりましたが、発揮できる場所がありません。また、それを正しく評価してくれる受け皿もないところで、少子化をどうしろといっても、むづかしいと思います。

（金子）公的年金の第3号被保険者問題に関しまして、専業主婦に対して保険料を徴収すべきだという意見がありますが、ご自身の立場から意見を聞かして下さい。

（A）公的年金の第3号被保険者問題については、以前国民年金をかけていたのですごく喜びました。

（B）私は主人が払っているので、それで問題はないと思っています。私から取るという

のであれば、扶養手当を15,000円ぐらいしかもらってないので、声を大にして反対します。

(C) 私はずっと働いていたので、厚生年金と基金があります。専業主婦は、子育て等でいろいろあり、やはりそれも仕事のうちだと思います。私は子供がいないのでおおっぴらに働けたわけだから、専業主婦からはとらない方がよいです。

(D) 公的年金については、シングルの人が騒ぐほどの額なんてもらえません。それから家事労働に対する報酬も政府が考えて欲しいです。103万円という限度額があるために、個人がその範囲内に収入を抑えているのではと言われていますが、使う企業側も上手く利用して、結局最低賃金に抑えて103万円にならないようならこの時間内という感じで働かせています。だから労働条件、賃金体系の見直しができると思います。今の企業のあり方とか、労働条件のあり方とかをきちんと話し合う男女参画プランがありますが、女性労働者がうまい具合に利用されているようで、実際に103万円で抑えられている雇用状態はどうなのかという問題などを改善していくべきだと思います。

(E) 家事労働に対する報酬とか育児に対する報酬のことを考えたら、もっともですし、任意加入する必要もないし、現行通りの第3号被保険者制度でいいと思います。

(F) 年金制度がこのまま長く続くとは思えないので、高齢化社会が進行すると、専業主婦の支払う負担も多少はアップしなければいけないと思いますが、それに比例してシングルの人はさらに支払う負担をすべきで、両方が比例してやるのがフェアだと思います。

(G) 私は被保険者本人ですが、本人になるためには、勤め先と相当やりあいました。103万円の壁があるため、範囲内に抑えて働いている主婦は多いと思います。事業所も103万までに抑えている方のメリットが多く、それが雇い主に都合のいいように使われている面がたくさんあると思います。第3号被保険者制度について、主婦から取るとなると、収入のない人から取るということになるので、筋違いという気がします。また、高齢者の介護も社会的なことが介護保険で導入されたので、子育ても子供の教育も社会全体がという風潮になればよいと思います。

(H) シングルの人にたたかれるほど、多くもらうわけではありません。今、何となく主人が払っているのに、13,000円払わなければならないとなったら、払えません。また、私達は、もらえるかももらえないかわからないものに対して、無理をしてまで払いたくないです。

(金子) 予定の時間になりました。今日は大変貴重なご意見をお聞かせいただき、本当にありがとうございました。

以上

福岡グループ面接 (第1回)

日時 2000年11月25日 11:00~13:00

場所 グランドハイアット福岡

(金子: 司会) 最初に自己紹介を兼ねて、お1人5分程度で40代、50代の1人として、どのようなことを考えながら生きているかを中心にお話をいただきたいと思います。

(A: 49才独身女性) 私は49才で、18才から30年以上ずっと働いています。子供は1人いて離婚経験者です。子供が京都の大学に入ったので安心しています。

ずっと一人で暮らしていたので、別に不安もないし、一人の方が気楽で、一人の生活は慣れているので、それなりに楽しめるし、今は体も悪くないので、あまり不安は感じていません。1人でずっと働いてきたので、お金も自分で稼いで自分で使えるし、計画性がない男の人に左右されるのが嫌で、自分が思うようにしたいのです。自分一人で死ぬほかないなと思っているから、今のところそういう考えです。

子供への仕送りは14万~15万ぐらいです。私は会社にも行っているし、アパート経営もやっているの、男性並みには収入があると思いますので、できるのかもしれませんが。

(B: 40才独身男性) 40才になったばかりです。まだ結婚していません。父が70代、母が60代で、父が十何年か前に脳梗塞になり、身障者手帳を持っていて、要介護3で毎月約27万の介護保険が出ており、家中、バリアフリーみたいにして、介護に関しては肌で感じています。好きで一人者ではないのですが、結婚して、子供がいて、家族で生活をするというのが分りません。親と同居して生活には事欠きませんが、親は歳をとって死に近づいています。

(C: 51才既婚女性) 歳は51才で、子供は授かりませんでしたので夫婦2人です。性格はケセラセラ、なるようになるさという感じで、老後のこともなるようになるさと。将来のことをあまり考えていないという嘘になるのですが、どうなるかわからないと考えています。私は40才の時に作業療法士の免許を取り、今年の4月に辞めるまで12~13年ぐらいリハビリテーションに携わっていて、高齢者のことをよく考えます。何か私ができることがないかと、同じ年代の人に「歳をとったらどこに住みたい」といろいろ聞いてきました。

(D: 48才既婚女性) 私は48才で、主人と子供が2人います。子供が2人とも京都の大学にいて、主人が今年3月から北九州に単身赴任となり、今は本当に女一人で犬と暮らしています。在宅のアルバイトで通信教育講座の添削業務をしており、今年で12年になります。

私は里が大阪で、福岡暮らしがもう24年になります。兄と暮らしている87才の母が正月早々に骨折し、6か月のリハビリを余儀なくされて、その間、何回か足を運びましたが、家がからっぽになると犬の世話もできないので、4月からは行けなくなりました。

子供2人の仕送りが大変ですが、両方とも奨学金をもらっているの、仕送りは私のアルバイトと主人のお給料だけで何とかすみます。上の子は運動部に入っていて寮生活なので仕送りは5万円ですんでいます。下の子は10万円かかっています。

(E: 43才独身女性) 私は43才で、高3と中3の女の子2人を抱えて1人でがんばっています。下の子が受験で金銭的にも苦しい所に差しかかっています。なるようになれで生活していますが、将来のことを真剣に考えなければと思いつつ、どこかに置いて生活しているのが現状です。

子供を抱えながら母を看病してきましたが去年亡くなりました。看病中心の生活になってしまったので、子供のことは後回しになり大変迷惑をかけたと思います。母が亡くなって

年金がストップし、生活も一段と苦しくなったので、朝から夜まで働くようになりました。

(F : 40 才独身男性) 40 代のシングルで、離島の中学校で教師をしていて週末だけ自宅に帰っています。60 代の母と暮らしていますが、今年の春から妹とその子供 (女の子 3 人) が一緒に住むようになりました。母は元気ですが、少し足に障害を持っているので、手すりを付け、お風呂を改造しました。床面を真っ平らにしてバリアフリーにする計画を立てています。やはりこちらに母を残しているのが心配ですが、妹家族と住むようになって、少しはいいかなと思っています。ただ、島へは 30 分で行けるので、帰ろうと思えばその都度帰れます。妹家族と共に 6 人家族で家が大きいので、週末帰るぐらいがちょうどいいと思います。二重生活なので、仕送りというか生活費は月々 15 万～16 万かかるし、自分にもかかります。養護学校で勤めたことがあり、障害児の子供たちと接する機会が多いのですが、そういった子供たちが高等部を卒業後通う施設が少ないことから、得意な木工を教えながら、作業所のようなものを作って、将来障害のある子を受け入れて、一緒に生活できればと思っています。

(G : 42 才独身女性) 42 才で 1 人者です。保育園で 10 年間働いた後、電機の本社にいましたが契約社員で、2 年前契約社員が全員辞めさせられました。今は小さな病院で看護助手をしています。一人者なので気が楽ですが、不安はあります。老後も考えてはいるのですが、なかなか切実な問題としてまだ見えていません。病院に寝たきりのお年寄りが 2 人いまして、その人の看病やおむつ交換をしながら、老後を考えると、自分はどうなるのだろうと。金銭面でも、現在の仕事はパートの看護助手なので、それほどもらっていません。老後にどのくらい必要なのか。それを考えると、このまま今の生活で行くと豊かな老後が送れないなという考えが、あらためて大きくなった気がします。

(金子) 一通り自己紹介を兼ねてお話をいただいた後は自由にお話しいただきたいのですが、まず最初に、子供さんとのかかわり、経済的な負担の話をお願いしたいと思います。

(A) 私は子供は 1 人だけでお金の負担はあまりないのですが、ラグビーをやっている、口を切って病院へ行ったら 7 千円かかったり、陶芸の合宿で 3 万円かかったり、コンピューターを買ったりとか、足りなかったら仕送り以外にお金を送らなければなりません。

(D) 学費と仕送りが 2 人分あります。上の子はラグビーをしています、体育会系はアルバイトができないので奨学金をもらっています。寮費は月 7000 円で、あとは奨学金と仕送りで何とか賄っているようです。下の女の子は奨学金が少し入るのでワンルームマンションにいます。10 万円送っていますが、足りなくて、家庭教師をやっているようです。

(金子) 今、お 2 人の方々の子供さんに対する仕送りの負担の話が出ましたが、独身の方はそういうお話をお聞きになって、どのような感想をお持ちかお尋ねしたいのですが。

(B) 子供がいて実際そこまで負担しているのかなという気がします。でも、自分の子供のためだったら、自分の趣味で使うお金を減らしてでも負担するのかなと思います。

(C) 毎月 15 万ずつ仕送りというのは大変だなと思います。やはり共働きしないとやっていけないと思います。主人は国家公務員で、もらうお給料は決まっているし、主人のおこづかいが最低限です。もし子供がそうであれば、やはり私の方が働くと思います。

(E) 私毎月 15 万とはいわないまでも、送ってやろうとは思いますが、実際問題できないです。ぐっところえて「自分のことは自分でして」と言います。私 1 人に 2 人の女の子ですから。下の子がまもなく受験で、上は就職の方を考えて、今がんばっています。

(F) 私自身が高校、大学も自分のお金で卒業したので、もし子供ができたなら、本当に学ばなかったら自分のお金でやれと言うと思います。学ぶ機会はいくらでもあり、10 代の頃に絶対に高校や大学へ行かなければならないことはないわけです。本当に自分で考えて、新聞の奨学金などもありますから、そういう努力をしながらやった方がいいと思います。

(金子) 中学生を教えておられて、豊かな子、そうでない子と、かなり格差があるような感じですか。例えば昔だったら、修学旅行に行けない子供がいたわけですが。

(F) 今はかなり補助が出ているので、修学旅行に行けない、学費が払えないということはありません。今住んでいるのは離島ですので、あまり極端な格差はありません。

(G) もし子供がいて仕送りが必要な場合は親に援助をしてもらうかもしれません。女の子だったら短大までとか、自宅から通えるところにするとか、自分も働くようになると思います。夫婦でしたら主人が働いて自分もパートができますが、Aさんも一人者と言われたので、月15万を送って自分の生活もというのは、相当ないとできないと思います。

(A) 小さな会社の副社長をやっていて、ワンルームマンションを20戸ぐらい経営しているので。建築の方の会社で経理などをやっていて、財テクという考えはなかったのですが、土地を買ったのです。収入は普通の男性サラリーマンと同じくらいはあると思います。

「教育費 ハイリスクなし ノーリターン」という川柳がありますが、本当に返ってなくなりましたね。昔の、大学まで出せば大会社に勤務という感じは今、ありませんからね。

(金子) 40代、50代の方々のお話をまとめる軸として、今のような負担の問題と、今からお尋ねする自立の問題と、将来への不安の大体3つに分けることができると考えています。自立についてはいろいろあって、経済的な自立もありますし、子育てで自分の時間、余暇時間がないという意味での自立もあるし、介護では自分の健康が周りから支えられるという意味での自立の問題もあります。その辺りを和田先生を中心にお話をお願いします。

(和田) 先週、札幌のホテルで結婚しない子を持つ親の集会が開かれ、主催者は20人程度集まればいいと思っていたところ120人の応募があって、親は子供が何歳になっても心配で、「結婚させたい」と。パラサイト・シングルの問題などもありますが、いつまでも心配している実態が浮き彫りになった、というニュースを見ました。おふたかたは40代でシングルですが、親や周りからのプレッシャーや生きにくさを感じられることはありませんか。

(B) あります。親から見れば、いくつになっても子供は子供です。逆に親が子離れしていないのか、子が親離れしていないのか、見る立場で全然違うと思います。親のプレッシャーに加えて周りのプレッシャーもあり、会社関係ではどこへ行っても「まだ一人だ」とか言われます。世の中の環境が、昔と違って結婚しなくても生活できるような状況があるので、女性の方で結婚しないは、そのためではないかと思います。女性の人も働く方法があるし、生活するのも、昔と違ってコンビニや弁当屋さんなどがありますから。そういうものがあるから、結婚しないのでしょう。

(和田) あえて家族単位にならなくても、1人でも生きやすい時代になりつつあるということですね。Bさんご自身は、身の周りの自立に関しては自信はおありでしょうか。

(B) 母からいろいろ援助は受けていますが、いざとなったら一応全部できるつもりです。今は一人っ子なので、出ていくわけにも行かないような状況です。大学は福岡、就職も前の会社も今の会社も福岡でないとだめという条件でした。母は元気ですが、歳が歳です。やはりそれほど前のように身の回りの世話をできなくなりました。

(和田) Fさんは二重生活とおっしゃっていましたが、あっちへ行ったりこっちへ行ったりされていて、生活スタイルはご自身でできるかと思いますけれども。

(F) あまりしていません。私は男子宿舎に入っていて、洗濯は週末に家に持ち帰りで、食事は近所のおばさんが来て作ってくれます。あまり生活に困るようなことはないです。

(和田) 社会的な生きにくさとか、そういったものは感じますか。

(F) 学校の教員は30代、40代で独身の先生が多いのです。独身の女の先生も多いです。女の先生も同じ給料なので十分自立できるわけで、変な男と一緒にいるより、自分で生活した方がいいという方は多いと思います。少子化についても生活環境というか、社会の環

境自体が対応できていないために結婚されない方も多いと思います。今は結婚について母も言わなくなり、職場は結構独身の方が多いので、特にどうこうということはないです。

(金子) 私は介護の問題を研究している時に、「自分で介護の経験がない人が研究をしても、本当はわからないよ」という批判を受けたことがあります。それでいうと、自分で子供がいない人が子供を教えるのはなかなか大変ではないかという意見はあまりないですか。

(F) そういう意見はあまり聞こえてこないし、どれだけ子供と普段多く接触するかが勝負と思います。1人か2人しか子供を産まないわけで、逆に私の方がいっぱい子供を知っていて、いろいろ表情が見られるわけです。島だから素朴でいいと思われるのですが、そうでもなくて結構市内の情報が流れてきて、実際にいじめもあるし不登校の子もいます。

(和田) Gさんは日頃看護助手をやっておられて、少し将来が心配というお話でしたが、老後に向けて何か、希望的なことでもいいですが、準備されていることはありますか。

(G) 計画は何もないです。この資料の中に「どういう情報が欲しいか」とありますが、どんな情報があるかも分かりません。年金についてもまだあまり具体的に考えていません。

(佐藤) 先程から介護の問題がありましたが、親御さんの介護は別にして、ご自分が60才になった時に、自分の住まいはどういう風になっていくのかと考えておられますか。

(G) 住まいは、今住んでいる自分の家(持ち家)に住みます。ずっと1人でのいる気はないのですが、結婚は考えてはいます。結婚しても、そこに住みたいと思っています。

(佐藤) Eさんが60代になった時に賃貸をどうされますか。お嬢さんたちが独立していかれた後、1人住まいで賃貸を続けるということですか。賃貸料は、少し働いて、いずれ年金が出るという感じで賄われるのですか。そういう部分に対して不安はありませんか。

(E) 今のままだと思いますが、今のところ安いので、そうなりますね。だから、食べていけるだけという最低限になってくのではないかと思います。考えれば不安ですが、考えないようにしています。考えるとしたら、子供が離れてからではないですか。40才を過ぎて、少し体がきついときがあります。ふとこのまま1人で、子供たちを抱えて、もし何かあったらどうしよう、どなたかいい方がおられればと思う時もありますが、今の生活で、やはり後ろに下がってしまいます。

(D) 私は、子供の負担のほかに、13年前に今の持家を買ってローンがあります。自分の兄弟が上に4人いて、話をいろいろ聞かされます。私立の老人ホームに入るにはすごくお金がかかるし、倒産する場合もあると。私はまだ今の家に住み続けるかどうかまで考えていませんが、どうしようと、今、本当に入り口に立ったばかりというところなんです。

(金子) 住宅ローンの支払いが終わり、夫婦だけになり、体が少し不自由になった頃に有料老人マンションに移ろうかということまで老後設計の中に入っているということですね。

(D) 兄たちからそういうことを聞かされると、そういう考え方もあると思いますし、今住んでいる家も、子供の代に移るのか、売却して別の所に移るのか。ただ、私は出身が大阪なので、自分が住みたいところに行きたいなと。

(和田) 住まいとかお金の面とか物理的な問題もちろん不安がありますが、人間関係や地域との関わり、ネットワーク作りなどで何か考えておられる方はいらっしゃいませんか。

(C) 私は夫婦2人なので、何が頼りかという、やはり遠くの親戚より近くの他人ということで、日頃から近所を大切にしています。本当にお味噌やお醤油を借りに行ったりできる友達も近所に出来ました。彼女たちも老後は同じような心配を持っていて、今日はこの家に集まって食事会を開催しよう、次の日はここでという話もだんだん出るようになりました。だからそういう意味では、とても近所を大切にしています。土日に庭で近所の人とバーベキューをしたりという時は主人も一緒に参加します。

(E) 子供を通じてですね。お母さんたちと。2人とも部活をしていた関係で、結構付

き合いは広いですね。

(F) 学校の場合、学校生活というのは狭いですから、私はアマチュア無線とかインターネットなどいろいろな趣味を持つようにして、フットボールのチームに入ったり、仕事以外の人と多く触れ合うよう努力しています。学校という塀の中では「学校の常識は社会の非常識」という感じになるので、自分でいろいろネットワーク作りをしています。

(B) 私は建築の仕事ですが、いろいろな趣味を持っていて、アマチュア無線もしています。仕事以外の人間ネットワークを広げるために、写真を撮りに行ったりしています。本当のプライベートな人間関係を広めないと井の中の蛙になります。なるべく全然知らない人と付き合っ、「ああ、そういう考えもあるのか」と思って、仕事でも活かせるので、そういう考えで付き合うこともあるし、完全に仕事と関係なく付き合っている人もいます。

(和田) 30代からこの先そう変わっていくのかなと、期待感を抱きつつ伺いましたが、50代になると、会社の世界だけで生きてきて、退職した時には自分はほとんどのことに関わることができない男性が多いと思います。そういう意味では次世代の期待ができると思いました。

(金子) もう1つは自立ということで、ネットワーク作りなど自助努力をしておられる中でも、ふとした時に将来や現状への不安、老後をどう考えればいいのかということが、どこかで出てくるわけです。その点を、梶井先生を中心にお話いただきたいと思います。

(梶井) 札幌ではわりと単身者の方が、老後に関して不安感を早く先取りして準備をしている傾向が見られましたが、Gさんは「あまり意識していない、まだこれからです」と言われました。お子さんをお持ちの主婦の方が子供の教育費がかかって、自分の老後の蓄財まで手が回らないといわれます。Dさんも老人ホームがそんなにお金がかかるとは思ってもいなかったと言われました。全然、老後の方には手が回らないという感じですか。

(D) 今回娘が大学に入学する時に、年金や保険のたぐいを全部見直そうということで、今解約すると不利になると言われた財形年金以外のいらない保険は皆解約しました。

(梶井) 社会でもう少し、子育てに対する負担を支える仕組みがあった方がいいのではないかということは感じられますか。

(D) うちの場合は両方とも遠方に出していることが、主人の里の方からも、ぜいたくだねと言われました。遠方に出すのはお金がかかるという考え方もありますが、何とかやっていけるというのは、恵まれているのかなとは思いますが。

(金子) 奨学金をもう少し増やしてもらおうとか、そういうことは。

(D) 奨学金は借金で、本人が返すものだから、あまりもらっても後の負担になると思います。上の子の奨学金総額は4年間で256万円で、これをこの子が18年間返していくと思うと大変だと思います。下の子も同じくらい借りるので、やはり大変だと思います。

(和田) 奨学金の返済率が悪くて、長期的には厳しくなっていくという話を聞きました。

(梶井) まあ悪循環ですね。子育て費用も高いのに、奨学金も高くなって借り入れにくくなる。それで老後のことに手が回らなくて、ノーリターンとなるわけですね。

Eさんは、ご自分の老後の設計などはいかがですか、不安感はありませんか。

(E) 不安ですが、考えても1日は進まないし、1日は考えなくても来るし。子供にも自分自身のことは話さないです。まずは子供を出してからというのが先です。社会の変化に対する不安があっても言うてもしょうがないと思います。先程奨学金の話が出ましたが、上の娘は今、返済の手続きが終わり、3年間で借りた57万6千円を9年間で月払いにするか年払いにするかです。今度は下の子にお金がかかります。

(C) 一般的には女性の方が長生きしますね。私は老後のことを考えるときは、主人がもう頭がないのです。だから、仲の良いお友達で1軒家を借りようとか、近所だけで支えあっていこうとか、そういう話が出てきます。今は模索中です。でも、最後に皆と話し

合って、老後はやはりお金よねという結論になるところがあります。

個人年金には入っています。

(A) 個人年金もかけているし、30年以上勤めているので、国の年金制度の資格では一応出ます。保険関係では一時払い養老保険などをしています。

(佐藤) 皆さん方は今、ご健康だと思いますが、健康に不安があるというお話はなかったのですが、その裏付けとして、定期的に健康診断や人間ドックは受けておられますか。

(A) 家から歩いて3分の所に女性の内科の先生がおられ、更年期に入っているのも、調子が悪ければすぐ行きます。そのかかりつけの先生は「心配は自分がするからあなたは心配しなくていい」と言われるので、それほど心配する状態ではないと思っています。

(B) 会社で年に1回、健康診断を受けています。不安がないといったら嘘です。父が糖尿を持っていて脳梗塞になり、透析を始めたので食事はかなりの減塩に変わりました。三人家族皆同じ食事であり、父の病気で健康な食事ができているのではないかと思います。

(C) 勤めている時は健康診断がありました。退職後は少しおかしいなと思ったらすぐ病院に行く方ですから、そう気になりません。一番気になるのは痴呆で、物忘れも多くなりましたが、ケセラセラの状態で、心配しても仕方がないという感じで開き直っています。

(D) 主人は職場の方で年1回必ず受けています。私は13年同じ所に住んでいて、かかりつけの先生がよく相談に乗ってくださるので安心です。去年、胃がおかしくなった時は初めてバリウムを飲んで検査しました。ただ、定期的にはしていないので不安はあります。

(E) 定期検診は受けてみたいといつも思っていますが、受けたことはないです。職場の方で年1回定期検診があったらいいと思います。なかなか自分では足を運びませんので。

(F) 学校教職員は、35才以上は必ず毎年受けることになっています。今僻地にいますので僻地ドックがあり、1泊2日で全部調べます。定期検診は必ず行くようにしています。減量するように言われており、スポーツだけはいろいろしようと思っています。

(G) 年に1回、職場で受けています。今のところは不安はないです。

(金子) 少子化についてご意見があればお聞かせください。

(F) 私は教員になって17年目ですが、子供が10年前と変わっています。昔はよくいえばネットワークがあり、友達どうしも仲良しで、人が困っていたら手を貸すという感じでした。今は子供が全然違います。自己中心的な子供がかなり増えています。そういう子供たちが育っていけば、当然、夫婦生活というか結婚生活をして、うまくいかないと予測されるのです。あとは極端なことを言えば、学校にしつけもお任せで、何かあったときだけ学校に言えばいい、というところも増えてきています。これは笑い話ですが、15年前ぐらい前は、教師が子供を叱ったら校長に言うぞ、10年前は教育委員会に言うぞ、5年前ぐらいからは裁判をするぞ、というように変わってきています。それから、社会全体が少子化に向けての努力をしていない。例えば、女性が子供を持って働く環境にないとか、そういうところがかなりあるので、実際に結婚しない人が多いと思います。

(D) 大家族のことを聞いていますと、私はすごく嫌なのです。なぜなら負担は、かなりの部分が主婦にかかってくるからです。自分自身子供を2人育ててみて、子育てというのはものすごく大変なのです。昔から母に、子供1人育てるには3人の手がいると聞きました。実際に核家族化で専業主婦になって、本当に自分1人に何もかもかかってくるような状態をずっと経験してきました。主人は特に転勤が多かったので、自分も定まった職にもつづけに來ましたので、子育ての大変さは自分で身に沁みてわかります。

(金子) 貴重なご意見を2時間にわたっていただいて、今日は本当にありがとうございました。

以上

福岡グループ面接（第2回）

日時 2000年11月25日 15:00～17:00

場所 グランドハイアット福岡

（和田：司会）最初に今の状況について、お一人5分程度で自己紹介かたがたお話をお願いします。

（A：41才既婚女性）個人企業を営むかたわら、専門学校で非常勤講師をしています。40代になりますが、結婚が遅かったので、まだ子供が4才になったばかりです。自分の老後のことと子供の教育費と、今後の日本を踏まえて、悩み尽きないこの頃です。

（B：41才既婚女性）私は普通の主婦で、子供はいません。10年間ぐらい小学校の教師をして退職しました。高齢化に関しては、自分の子供がいないので、自分が年をとった時にどうなるか、どうしても周りのお世話になるので興味があります。あとは、両方の両親と、私には独身の障害者の姉がいますので、その介護の問題もあります。

（C：53才独身女性）離婚して約15年になります。大学を出て、25才のころ結婚して子供を1人もうけました。以前会社で働いていましたが、現在は塾の講師をして20年になります。大学時代に教職の課程をとっていたおかげで、セカンドステージで仕事をきちんとやってこれました。50才を過ぎ、今年5月に父が亡くなって、私にとっても介護は非常に大きな問題です。私には兄弟がいますが、私が独身ということで私の方に全部かかってくるような感じです。また、世の中を見ると、男女対等と言いながら男社会というものが非常にあると思います。そういう中で女性が仕事を持つ機会が、特に途中で挫折してセカンドステージになると、非常に少ないのです。自分を生かせる場所を持ちたいけれど、その選択肢が少ないと思います。もしかしたら来年は郷里に帰ろうかなと思っていますが、自分の人生は一度きりなので、自分らしく生きたいと思い、自分の居場所を探していきたいと思っています。

（D：52才独身男性）52才で、普通のサラリーマンです。業種は人材派遣、俗に言うアウトソーシングで、採用を専門とする担当部署で管理職をしています。

私の両親は、1人ぼけが始まっていて、非常に深刻な状況になっています。それが元で家庭の中ががたがたになるということも経験しましたし、私の母親もぼけが始まりました。そこで、老人介護に興味が出て、今年の5月にホームヘルパー2級の資格を取りました。

（E：48才既婚女性）私は主婦で、主人を亡くしてちょうど1年になります。子供が2人いて、今度は大学受験と高校受験です。日々は趣味の部分を3つして、あとは地域活動を2～3して過ごしています。地域活動は婦人消防団で、準公務員みたいな感じで、活動の時には制服を着て出っていて、街頭キャンペーンとか、地域のお年寄りの方たちに消防活動をアピールしたりとか、あとは婦人協議会というのがあって、老人食のこととかをお声がけします。

（F：42才既婚女性）私も平凡な主婦で2人の女の子がいます。上の子が大学1年で音楽大学に行っており、とてもお金がかかるので、パートで仕事をしています。下の子はまだ小学校2年なので、上の子が片づいてもまだまだ下の子のために元気でがんばらなくてはと思っています。老後の豊かな生活などは何も考えられずに、今持っているマンションの支払いがきちんと滞りなく終わって、娘たちがきちんと納まっていくことが心配だけで、それ以上のことはまだ何も考えていません。主人となるべく長く一緒に生活をしていけたらいいなと思っているくらいで、それ以上の希望なども、まだ何も考えつかないような感じです。また、私の祖母が90代で、少しぼけながらいます。介護保険の制度ができて、養老院ではなく、ちょっと泊めてもらえる所にいるから今はいいのですが、それまでずっと

父か母どちらかが必ず家にいないといけない状態が長く続き、とても大変で精神的に追いつめられました。自分も将来必ず親の面倒を見ることになるからと、心配して見ている状態です。

（G：47才独身男性） 私の両親もぼちぼち介護という年代に入っていく歳になってきたと思っています。私は離婚して女房はいません。離婚してすぐ自営業を始め、17年ぐらいになります。

（H：52才独身女性） 英語の講師をしていて、3年前に自分でスクールを作りました。これは長年の夢で、3年前はゼロからの出発だったので大変でしたが、どうにか落ち着いてやっています。私は独身で88才の母がいます。母は1人で暮らしていて、土曜か日曜に私と一緒に買い物をして、あとはデイリーサービスを取って、大体自分で自立してやっています。まだ50代の初めで元気なので、老後のことを真剣に考えることはないのですが、友達がたくさんいて、いろいろお話をお聞きしていますが、この前、6千万円ぐらいないと暮らせないと聞いて、それはとても貯められないので、実際いくらいるのか分かりません。自分の健康状態がどうなっていくかもわからないのですが、一応自分で気をつけて、なるべく添加物がないものや危なくないものを摂っていきたくと、健康面では考えています。

（和田） 一通りお話を聞かせていただきました。大変身近に介護の問題や老後の不安を感じておられる方が多いようですが、最初に介護のことで少し情報交換をしたいと思います。

（B） 障害者の姉は就職して、1人暮らしですが、マンションを購入しました。購入に際して親が半分くらい支援しましたが、改装にすごくお金がかかるのです。それで、姉になまじ収入があるために一切控除がないのです。車の改装にもお金がかかりますが補助が出ません。スウェーデンでは改装費に1千万かかっても全部国が出してくれるということを聞くと、本当に日本は補助がないと。60才を過ぎれば高齢者としての保護がありますが、60才までの障害者で税金を納めている人間ももう少し保護してもいいのではと思います。両親は今のところ元気ですが、私には介護する人が自分の親と姉と、主人が農家の長男で2人の両親とおばあちゃんがいる、これに夫の介護が付いたら7人です。

（C） ずっと父が病気がちで、昨年から入退院を繰り返している状態です。兄弟の中で私1人だけが福岡にいて、兄は少し離れた所に、妹は鹿児島市内にいたので、母だけでは大変ですから、妹夫婦が帰りに寄ったりとか。私も年に数回こちらから駆けつけました。私の場合は皆さんと違って、健康保険や雇用保険がなく、立場的には自営業のような形です。だから、往復の旅費にしても何にしても自分の負担で、とても大変でした。介護保険料を払っていますが、私などはとても負担率が高いと思います。パート的な収入で、300～400万の範囲ですので健康保険料は2万円強です。それに介護保険料として5千円近くもかかってくる。現在、いやいや払っているのですが、やはり負担は大きいです。

（和田） 介護も育児も女手が当てにされるという印象ですが、Dさんはいかがですか。

（D） 私は今年、労働省の訓練給付金という制度（8割が返還される）を利用して、ホームヘルパー2級を取りました。なぜかという、私の両親、そして家内の両親共に、母親の方がぼけが始まったのです。私は単身赴任で長く東京にいて、今年戻ってきたばかりです。そのため家内の方に負担がいき、そこで非常に家庭内でごたごたがありました。そうこうするうちに私の母親は亡くなり、今度は家内の母親にぼけが始まり、施設に入っています。最低条件として、両親が動けなくなった時に自分自身がきちんとした看護ができ、配偶者に負担をかけることがないようにと思って、ホームヘルパー2級を取りました。何も知らないのではなく、ある程度わかって介護するという点で役に立っていると思います。老人介護については実際抱えてみないとわからない部分がたくさんあり、本当に大変です。そういうことを病院で見ていると、少なくとも自分自身もそうなるのではないかと

いう不安と、現実身近にいる身内の状況を見ていますと、やはり非常に不安です。介護保険については、現実問題として私たちの年齢で、保険料だけ取られるのは理不尽なこともあるのですが、現実には要介護者を抱えている人間から見ると、やはり介護保険は必要ではないかなという部分もあるわけです。そういう立場の差が考え方の差につながってくると思います。

(和田) Dさんは男性が介護休暇を取る時代はやがてやって来ると予想されますか。

(D) やって来るといよりも、切実な問題として、来てもらわないと困るわけです。ただ、非常に取りづらいのが現実です。特に今はあまり経済情勢がよくないため、マイナスポイントがあることがリストラにつながるおそれがあるので、非常に取りづらい雰囲気があります。ただ、2015年に65才以上が25%以上になるという現実を踏まえると、法律や社会的カルチャーを整備して、取り易い環境を作っていかなければならないと思います。介護休暇は、企業の論理として現実にはマイナスポイントです。しかし、基準法などできちんと立法化すれば、企業風土として根付かせることができるのではないかと思います。

(和田) それでは、引き続き教育や子育ての負担ということでお話を伺えればと思います。

(F) 高校までは私立に行かなければそれほどお金はかかりませんが、大学は額が違います。とくに、音大だと2千万円近くです。東京の方だし、お金が無いまま見切り発車しているの、今はもう前が見えないくらいの負担です。高校の3年間ぐらいから、私が月20万円ほどもらえる仕事に就いていたので、その分をずっと貯めてきたぐらいで、その前からの蓄えとか計画性はそんなにありません。最初に寮費も全部一括で払うので、1か月の仕送り額は計算できませんが、1年間分で3百万円以上払ったと思います。

(A) 私の主人は今単身赴任で、完全に経済を2つに分けていて、主人は主人で、私は私で自活しています。保険証などの問題もあり、子供は私の扶養に入れています。

0才の時から近くの何ヶ所かの保育所に申し込みましたが、どんどん後回しにされました。私の場合、実母が私の出産で手伝ってくれていたの、「見てくれる方がいる」と。母の手を借りて子育てしているのが現状で、仕事を辞めたくない女性が産みたくないというのもよく分ります。幼稚園・保育所の数は人数的には割り当たっているということですが、やはり便宜性の問題があり、午後5時までに絶対に迎えに行かなければならないとか、残業や土日どちらが必要な時に預けられないとか、病気で熱が少しでもあったら駄目とか…。

(E) 今、下の子も上の子も塾に行っており、月2万円は普通よりかかります。あとは大学で、国公立を目指してがんばってもらわなければいけないのですが、それがだめなら私立ということで。県外に行くことは考えていないので、何とかという感じでいます。

(C) 娘が1人ですが、私としては大学は4年制に行って自立するという道を選んでくれるかと期待していましたが、結局私の親の方で少し援助してもらって、こちらの私立女子大学に進学しました。女としても自立という道を選んでくれるかなと思ったのですが、仕事に生きる女性というより、いい伴侶を求めて昨年結婚して1児の母になっています。でも、娘に「お母さんにはお母さんの人生、私には私の人生があるわけだし」などという言い方をされると、私としてはすごく寂しいですね。何で今まで離婚をして、十何年間一人で一生懸命子育てをしてきたことは一体何なんだという気持ちは非常にあります。

(和田) 先程からCさんは、私とは何者なのかというような自分探しをしているというお話だったのですが、そのあたりをもう少し詳しく聞かせていただけますでしょうか。

(C) 自分がやはりいつも自分らしくありたい。いろいろなものに非常に興味、好奇心を持っています。例えばパソコンでメール交換をしたり、インターネットなど、まず時代には乗り遅れたくない、社会参加をしたいというか、自分の存在感というものを必ずいつも何か、私はここだよ、ここにいますよ、自分発信で何かをやりたいというものを持

っています。仕事も教師など人にものを教えることが好きです。常に自分が社会参加していたいという中で、ギャップを感じるの年齢です。例えば転職しようと思って、司会業など自分が興味を持ちそうなことに応募すると、「あなたはおいくつですか」とまず聞かれるのです。53 才ですと言うと、「では結構です」と言われます。

（和田） 私は短大で教員をしており、学生は 20 才そこそこです。就職難でも、若いということは「売りものになる」ということで、矛盾を感じるがあります。こんな子でいいのかなという部分があって、むしろ経験、知恵を蓄積した 40 代 50 代の人たちの活躍の場がもっとあっていいと感じています。社会の評価が非常に厳しいと感じていますが。あと、自分探しという意味で E さんにお伺いしたいのですが、ご主人が亡くなられて、私は何なんだろうというような、揺れのようなものは経験されましたでしょうか。

（E） 私は、仕事をしていた時に男性はどうしても女性を下に見るところがあり、反発する気持ちがありました。結婚してからも、自分是对等の立場でいたいという気持ちがずっとありましたが、主人はどうしても下に見てしまうのです。悔しいと思いながらずっときて、突然主人が亡くなり、その事実を受け入れる時に、今まで一生懸命自分のことを主張してきた私は何だったのだろうと、すごく思いました。今は肩の力を抜いて、あるがままに、前を向いて、有意義に過ごしていくという感じでやっています。

（和田） お互いに知らず知らずのうちに依存し合っているということは、お感じになりましたか。ご主人が亡くなったことで、自分をご主人に依存していたと感じませんでしたか。

（E） それはいいですね。私は家の人、主人は働く人という感じで思っていました。だから、話がかみ合わない時はよくありましたが、私はその立場でずっといました。

（梶井） 皆さんは親の老後のことを一番先に考えられていて、自分の老後は親の老後を看取ってから考えるという感じですが、子供のいない方は自分の老後を自分で何とかしなくてははいけないので、何らかの心の準備、経済的準備を考えなければならないと思います。子供のいる方は、育てている時はそれに一生懸命で、ハイリスクですがノーリターンです。子供に全部投資して、お金がなくなった時に自分に老後が来て、子供は自己中心的になっていますから、おそらく自分が親を介護したようには、自分の子供は自分を見てくれない。それから、少子化で、社会も年金で私たちを支えてくれない。かえって家族のある方、子供のいるの方が、経済的ダメージは老後についてはあるという感じです。特に B さんは 7 人も介護しなくてはならないのですが、ご自分のことは不安はないのでしょうか。

（B） 幸い、主人が農家の長男であり、定年後の主人の職業を私は決めていまして、「どうもあなた向いているから、農業をやったら」と。主人はどうするかわかりませんが。問題は障害者の姉のことで。姉は B 家の人間ではないので、姉の分のことに関しては、実家の方と姉とで何とかして、私はそのサポートぐらいでやっていこうということで。だから、私にとっては自分の老後よりも、そちらの方が非常に気になっています。

（G） 自分自身の老後のことは、まだ実感はないのです。ただ、うちは父親が、自分が子供のころから体の具合が悪くて、ずっと入院しているのです。母親はまだ元気ですが、いつかは自分が介護しなければいけないかなと。妹も離婚していて、母親と子供と一緒に住んでいるのですが、母親と妹では自分の父親の介護は無理かなと。やはり今のうちに心の準備や金銭的な準備を考えておかなければいけないと最近思うようになりました。

（和田） 男性の方は、自分のことは放っておいてくれとおっしゃる方が多いのですが。

（G） はっきり言って、自分のことを考える余裕はないです。ただ、今の高校生や大学生の人たちに、親の介護などといったら、まず「私は知らない」という感覚ではないでしょうか。私は長男だし、責任上私が面倒を見ないという気持ちがあるから、今のうちからいろいろ考えて、準備をしておかなければいけないかなと思っています。

（金子）子供の数は少しずつ減るわけです。しかし、介護の対象者は確実に増えるわけで、介護を担うのはケアマネジャーや介護福祉士という資格を持ったプロを育てるしか手がないかなと思うわけです。そのためにはある程度子供が産まれてこない、介護の手さえ見えてこない。と同時に、子供がいる方は子育て費用が大変だ、それから親の介護がある、そして一番後回しに自分の老後の介護をどうするかと、負担がこの3本立てなのです。子供がいない方は親の介護と自分の老後の2本立てで、その辺りの負担の意識の違いが、徐々に大きくなってきたと思います。Fさんのように、子供が音大に行きたいから無理してでもやる、自分はパートでがんばって稼いでいるという立場から、例えば子供がおられない方の話をお聞きになって、どんなふうにお感じですか。

（F） 自分はあまり自分らしくとか、自分自身が趣味があったり楽しみがあったりということがないので、主人や子供がこれをやりたい、これをしたいということに一生懸命になってしまう、自分自身がないというのですか、だからそれで自分が喜んでいるほうなのです。皆さんは子供さんがおられなくても、自分自身の趣味があったり、きちんとした職業を持っておられるとか、そういう点はとてもうらやましく思います。でも、自分はそういうことができなかったから、子供に託しているのかなと思います。

（金子） 3本立てと2本立ての違いは、特に負担、不安の問題としてはあまり意識されないですか。自分を後回しにすることに対しては。

（F） いえ、私は親を見ることが自分の老後なのだと思っているので、自分はいつのことだか…。自分の老後は母たちと一緒に住めて、介護ができればいいなと。親を見れるということは幸せかもしれないと思うので。それも生き甲斐になってしまうかもしれません。

（B） 子供がいないと教育費がいらないからお金が貯まるだろうというイメージがあります。でも、子づくりにお金がかかるという点を少し見ていただきたいと思います。私は不妊治療に大変お金をつぎ込みました。一番辛かったのは、お金もですが、不妊治療のための休暇がないことです。15～20年ぐらい前の話なので、不妊治療に関して今ほどオープンではなく、休暇の理由を言うにも、本当に不定期に取らなくてはいけないものかと。だから1年くらい不妊休暇というものがないのかということ。子供が生まれれば育児休暇はあるのです。少子化を皆さんよく言いますが、今はものすごく不妊が増えていて、問題になってきているので、私はパイオニアとして、非常に気になることです。

（H） うちも子供がいないのですが、事業をしていますので、とてもお金をつぎ込んでいます。もうかっているお金よりつぎ込む方が多くて、まだ赤字の部分が少しあります。一生懸命働くことが生き甲斐で、小さなお子さんから大人、老人の方までお会いできることがいいことで、お金はもうからない。やはり1人で企業を起こしてやるのは大変です。

（和田） Hさんは、独立するまでの間は雇用をされていたわけですか。

（H） いえ、自分の家でずっとやっていました。3年前にスクールを開いたのですが、自分の場所とは違う所だったので生徒さんがいなくて、ゼロからだったのです。だから、すごく働いて、今はどうにかまわっていますが、プラスにはならないような状態です。60才までではなくて、やはり人間、働けるまで働いた方がいいのではないのでしょうか。日本も少子化になって、支える方の問題はありますが、高齢になってもお互いに助け合うというシステムを取ればいいと思います。今まで子供がサポートするということでしたが、考え方を変えて、今度はお互いに支え合うという社会を作っていく方がいいと思います。

（E） 60代の皆さんはお若いのです。定年後の60代の方がたくさんいらっしゃるって、皆さん張り切っているんですよ。ただ働く場がない。生かす場がない。気持ちは非常にあると思いますので、言えば、それこそ病院でもボランティアでも、皆さんやってくださると思うのです。だから、そういう労働力は、期待してもいいと思います。

（D）それは全くその通りです。ただ、企業、特に製造業などは若年労働者を求めるわけで、若い人を若い人をと私どもに依頼があります。要するに中高年はいらないのです。ただ、中高年の人口構成は上の方に上がってきますし、昔の7掛けぐらい、例えば50才の人は昔の35才ぐらいと言われるわけです。しかし、企業は若い人を求めるので、この辺りの矛盾が大きい。私も中高年なので、もう少し年齢的に拡大してもらいたいのですが、例えば、障害者雇用を法律で定めているように、60才以上の人を何%採用しなさいというようなものを作らないとだめではないでしょうか。

（和田）高齢者の活用と合わせて、例えば、子育て中の女性を何人雇わなければならないというぐらいの法律を作って、そういう形で活性化させていかざるをえないですね。

（D）平成11年4月に施行された男女雇用機会均等法には、男性より低い女性の賃金を男性並みに引き上げていこう、という意図もあったわけですが、施行されてどうなったかというと、実は逆なのです。企業側は「女性を採用してください」というわけです。安く使えるからです。「女性の採用は難しいです」ということになると、「男性でもいいけれども、男性は女性の賃金だよ」ということで女性の賃金に全体を合わせるようになった。だから世の中全体の賃金水準が落ちてきたというのがここ1～2年の状況だと思います。

（和田）最後に情報について、老後に向けてこんな情報がほしいとか、今、日常的に情報をとるチャンネルは何かという辺りを、一言ずつお話を伺いたいと思います。

（A）「市政だより」のようなものも、かなり小さい字で書かれていて、普通、関係がなければ読みたくありません。やはりそれなりの年代の人が必要な情報を必要なところに向けて発信していただくように。また、高齢になったら小さい字は読みづらいということも含めて、もう少し高齢者にも情報が手に入り易いようにしていただきたいと思います。

（金子）例えば分野としては、どういう情報がいいですか。

（A）まず一番に教育です。例えば公立の小学校、中学校でもかなりランクの差があり、自分が住んでいる地区の公立小学校・中学校はどういう風なのか。義務教育も与えられるだけでなく、選べる時代になってほしいということも含めて、教育の情報がほしいです。あとは年金のシステムとか。破綻するといわれながら、国民年金を掛けていない人もたくさんいるし、掛けている方が損にならないようにしてほしいので、そういう情報もほしい。これだけ掛けていたら、こういうものが返って来るというような、リターンとリスクをきちんと知ったうえで、自分たちが選択できるようになりたいです。

（B）情報は今、私自身は新聞とテレビ、ラジオぐらいです。インターネットはつないでありますが、あまり活用していません。ほしい内容は、私は医療関係です。特に昨今医療ミスがよく取り上げられ、病院1つ選ぶにしてもどこがいいのだろうという感じです。介護施設にしても、どういう介護内容か、費用はいくらか、公立と私立で違うのかとか。特に私の両親は田舎にいますので、田舎に関してそういう情報がほしいと思っています。

（C）医療情報はやはり必要です。これから病院やお医者さんにかかる機会も多いかと思うと。健康雑誌などに、例えば全国の優良医者等のリストが中にあるようです。それから私は、同じような立場の方、同じような考え方を持っておられる方とのネットワークがあまりないので、何かそういう情報が、もう少し得られたらいいなと思います。あとは公的機関、地方自治体から発信されるものに関して、いろいろな世代、立場の方がいるわけですから、画一的な表現の仕方ではなくて、印刷物のほかに、もっといろいろな形で発信してもらえれば、もっと見る機会が増えてくるのではという気がします。

（和田）時間になりました。大変長時間にわたりまして、貴重なご意見をたくさん聞かせていただきました。ありがとうございました。

以上

福岡グループ面接（第3回）

日時 2000年11月26日 11:00～13:00

場所 グランドハイアット福岡

（金子：司会）まず、自己紹介を兼ねて、1人5分ぐらいずつお話をお願いいたします。

（A：55才独身女性）50代です。私は一昨年両親を介護しましたが、その時はまだ介護保険はありませんでした。本当に助かったのは、ヘルパーさんに来てもらって、自分の時間も少し取れ、余裕ができて介護できたことです。その介護保険でいろいろな問題が出ているということで、介護に対して社会的にももう少し深く考えてほしいと思っています。ただ介護保険料を毎月強制的に取るのではなく、もう少し国民の声を聞いて試算してほしいかと思っています。

（B：44才既婚女性）40代ですが、自分の老後も気になるし、自分の母親も一緒に住んでいるので、これからの介護のことなども気になります。子供は今22才ですが、まだ子供にお金がかかります。大学も来年ぐらいで終わるので、学費を全部貯蓄に回したいと思いますが、なかなか思うようにはいかないです。母親も73才になるので、通いの仕事もできません。

（C：48才既婚女性）夫がもうあと3～4年で定年で、そのあとの生活がどうなるのだろうと考えています。子供4人のうち上の3人は成人して、別居しています。中学生が1人残っていて、その教育費と、上の3人がまだ未婚で、結婚資金の問題などが頭から離れません。夫が長男で一人息子で、94才と89才の両親が5分くらい離れた所に住んでいます。私も76才になる両親がいるので、そちらの介護の問題もあります。私たちが老後になった場合、体は悪くなるし、医療費の問題があります。年金も今の若い子が払っているお金が今の年寄りにいつているわけですから、私がもらえる年齢になったら、ぎりぎりである程度もらえるようですが、実際はどうなるかわかりません。子供たちは25才を過ぎていますが、その子たちが20才になった時点で年金を払わされるようになりました。でも、それがその子に返ってくるかということを私は非常に疑問に思っています。それなら現金で残してやった方がいいと思って、3人とも区役所からどんどん督促が来るのですが、一銭も払っていません。会社で勤めている子は厚生年金に入っていると思います。非常勤のような形で入っている子は何も老後の保障がないわけで、その辺もすごく気になります。

（D：45才独身女性）私は大分に75才の父と70才の母がいますが、とても元気です。2年前に離婚して、高校3年生と1年生の子供がいて教育費がかかります。私は一切自分の老後を考えていなかったのですが、自分の老後の前に、どうやって子供の教育費を捻出するかが大変な問題です。父と母の面倒を自分がみるということで、子供たちにもそれなりに考えてほしいということもあります。全然、私には今、老後というのはわからない部分です。

（E：41才既婚女性）年齢は41才で、子供は小学校6年生と3年生と1年生の女の子が3人います。職業は看護婦で、ケアマネジャーを兼ねています。今年2月に家を新築したばかりで、子供も今から教育費がかかるため、まだまだ老後の方には思いをはせられない状態です。ケアマネジャーとして今考えているのが、住宅改造の分は上限20万円などというものがあるのですが、もっと先の改築・新築におけるお年寄りを中心とした住宅の問題と、ITの問題です。パソコン等を活用したら老後が開けて有意義な人生が送れるのではということで、試験的に60代ぐらいの方にパソコンやワープロの指導を進めています。

（F：52才既婚女性）52才です。娘が2人いて、上の子は嫁ぎ、下の子は大学を出て就職しているので、夫婦2人だけです。主人は第二の職場で給料ダウンしながらもがんばっ

ています。終身保険や介護付き年金などをずっとやっていますが、毎月のお金は公的年金をあてにしています。ずっと専業主婦ですが、昔保母の資格を取っていて、1年ほど前から有料ボランティア的な形で週に2回やっています。これからは夫婦2人だけの老後と思って、少しは貯めて、公的年金と合わせて毎月25万～30万円あったらいいなと思って、公的年金を納めています。

（G：41才独身女性） 41才で未婚で、年金生活者の両親と一緒に暮らしています。父は公務員だったので生活に困らない程度の年金収入はあり、私の仕事にかかわらず家族を養っていける状態です。ただ、私がこの不況で、会社を辞めました。取引会社の連鎖倒産で大きな負債を私が抱え、親の家までなくしてしまう状態になりました。仕事も、生命保険会社に勤めたりしましたが、精神的に参ってしまい、体調を崩して入院したりしました。公的年金は、今もらっている方たちは安心でしょうが、私も41才になりますので、私たちがもらえる時期になるとどうなるのかなと気になります。報道などの情報から、いずれパンクするのではないかとというイメージをととても強く持っています。今現実問題、自分が何とか親を支えられるような状態になりたいです。

（金子） 一通りお話いただきましたが、老後がまだ具体的に考えにくいという話が多かったと思います。60才を過ぎてからの年金は、自立した自分たちの生活を支えてくれる非常に大きな要因になります。ただし、お子さんたちへの支援が必要な場合は、まだ自立というより負担を考えなければいけませんが、その辺りのご苦勞の話をお願いします。

（C） 私は、子供に結婚資金として最初から出すつもりはなく、「自分たちでやりなさい」と言っていますが、「困ったからどうにかしてくれ」と言ってきたら、してやろうという気持ちです。それぞれ生まれた時に満期で100万円程度の保険に入っていました。養老保険が4人とも100万円ずつあり、そのほかに貯めたもので1人頭400～500万円あります。

（金子） 一番大変な時は、4人の子供の教育費は合計いくらぐらいでしたか。

（C） 2人が大学にダブって入っていた時があったのですが、中学生ぐらいの時から通帳を作って、大学資金として貯めました。うちの子は全部文系で、そのころ文系で年間60万円くらいかかりました。それぞれの通帳を作り、生活費からではなく、通帳の中から出すという形でしたので、生活費の何%かは分かりません。地元でしたが、教科書代などもありますから、文系でも年間100万円近くはいります。

（D） 大学入学には差し当たって100万円はすぐにいります。蓄えは離婚する際に全部出してしまいました。もう一銭もないまま、今は援助もありません。母子家庭の市からの借入れや子供の教育資金しかないです。あとでそれを返していくという形です。当面私は下の子供が大学に行って卒業するまで大変ですが、それから後は子供たちが払うと言っています。自分で何とかすると言っていますので、その間少し頑張るしかないという形です。

（金子） やはり教育費に回すと、それだけ自分の老後の準備は後回しになりますか。Fさんはもう定年というお話ですが、10年前まではやはり同様の大変さがありましたか。

（F） うちの子供が2つ違いでしたので、大学が重なった時は大変でした。文系と理系で、年間200万円近くかかりました。自宅から通うことができたのでよかったです。今は2人とも独立して、下の子は結婚はまだですが、何とかやっていくと思っています。私たちは、「もうこれからお父さんとお母さんは自分たちの生活がかかっているし、親がいるので、自分たちのことはしっかりやってくれ」と言っています。

（E） 3人が生まれた時から、もし大学に行く場合、350万円くらい貯金してあればと思って、学資保険をかけています。自分自身が高校のころからアルバイトをして、高校の授業料も小遣も全部自分で賄って、看護学校に入りました。だから、子供たちにも、何のためにそこに進学したいのか、いくらかかるかということを早くから話し合おうと思いま

す。「結婚しても旦那さんが急に死ぬかもしれないし、どうなるかわからない。それでも子供3人ぐらい育てられるぐらいの経済力を身につける方向に進みなさい」と言っています。

(金子) 教育費負担の重さが期せずして皆さんの中から出てきました。他方で、皆さん方には両親や配偶者の親の介護問題があります。そして、自分の老後のことも、漠然とですが、不安があると思います。それに対して、例えば社会的な応援や行政の援助のようなことについてお話を伺いたいと思います。梶井さん、そのあたりを少しお聞かせください。

(梶井) 昨日も福岡で2回このようなインタビューをしたのですが、老後のことは心配だけれども、考えれば考えるほど心配になるから考えないでおこうと、とにかくケ・セラ・セラで楽天的だと思いましたが、本当は脇においてはいけないことだと感じます。

Gさんは今おひとりで、いろいろ事業のことなどもあって、老後のことなどあまり考えられないと思われるかもしれませんが、頭の片隅に老後に対する不安感はないでしょうか。

(G) 私は1人ですし、結婚したいという気持ちもないものですから、やはり老後の不安はあります。さっき言われたようにケ・セラ・セラという部分もあり、そちらの方が今は大きいものですから「何とかなるさ」と。ただ、今の行政や政府に頼っていけるものとは思っていないものですから、自分で体が元気なうちに計画を立てたいのですが。やはり60代になるまでには何とかと。周りから見て安心してもらえるようになりたいと、漠然とですが、そう思っています。

(金子) Gさん自身の不安でいうと、事業に失敗されて負債を何とかしなければいけないこと、両親の介護の問題、自分自身の健康の問題、さらに、年金が自分が60才を過ぎたときにくるかどうかと、4つくらいあると思います。負債をがんばって返しながら、健康を何とか維持するという自分でできることと、社会的な支援がないとどうにもならないことがあると思いますが、その辺りは自分の気持ちの中でどのように位置づけられていますか。

(G) 公的年金に関しては期待していないというのが本心です。どうしても自分たちのために支払っているというイメージがないものですから。生命保険関係の年金にしても、自分が生きていくからという形ですので、今の寿命からすると、本当に歳を取って自分の体が動かなくなったときは、もうそれはなくなっている問題ですので期待していません。

(B) 年金はかけておいた方がいいと思います。自分の母親がかけていなかったんで、今は全然もらえていません。それでも介護保険の保険料は払わなければいけないので、全部私たちの負担になってきます。給料から2人分引かれているし、母親の保険料も払わなければいけないので、子供が1人なのに苦しいのかなと思います。本人に収入がなくても、主人にはあるので、それで介護保険等を全部払わなければいけないのは負担がきついです。

(A) 私は子供が2人いますが、31才と26才ですので独立しています。だから結婚するときはそれぞれでしてねという感じです。主人もおりませんので、自分のことだけを考えればいいのですが、やはり公的年金はあてにできません。自分で老後は考えていかなければいけない。子供には世話にはならないようにしなければならぬ。それは私が親をみたから実感としてわかるのです。やはり子供に非常に負担がかかります。そのことによって家庭にいろいろ問題が起こります。ですから、子供の世話にはなれないので、自分でどうにかしていかなければいけません。今の介護保険は、65才になっても強制的に払わなければいけなくなりましたが、収入に関係なく同じ金額というのはおかしいと思います。納税額に対していくらとか、もう少し考えてほしかったと思います。それで負担に思っている方はたくさんいると思います。

(和田) Eさんは女性が1人でやっていけるようにというお考えですが、いかがですか。

(E) 女性の社会進出に関連して、年金を払うかどうかとか、介護保険料もそうですが、自分でそれだけ働ければ出せるわけです。最初は保育所の問題で、働きたいけれど、子供

が小さくて働けない。保育所に預けても「子供が風邪をひいているので帰ってきてください」と言われます。いつも女性が行かなければなりません。男性はなかなか帰れない状況です。そういう状況を何とかしない限り、老後の問題はいつもワンセットです。女性も独立して自分の名前で生活する方が張り合いが出るし、老後も自立していけると思います。

（金子）今の制度で一番問題なのは、払うお金は全部上の世代が吸い取って、年金が一銭も戻ってこないことです。私たちがその年齢になったら、下の世代が払うものしかこないわけです。そういう矛盾を皆感じていて、「払うのはいいが、払うお金は全然戻ってこないじゃないか」と、若い人たちはそのように思っています。それをどこかで断ち切るべきだという議論もあるわけです。ご両親の世代は満額もらっていますが、それを例えば7掛けにして我慢してもらうことが可能かどうかです。そして、7掛けにして3割は払った人に戻るシステムに徐々に変えていかないと、年金はどこかで破綻する可能性は潜在的にはあるわけです。Fさんは、間に挟まれる立場としてそういう意見に対していかがですか。

（F）主人の両親を見ていても、貯金もあって、年に何回も旅行しているのを見ると、年金で暮らしていてもずいぶん裕福だと思います。そういう生活は私たちには保障されないでしょうね。昔は私も任意加入でずいぶん毎月払っていましたが、今は主人の方で払っています。やはり自分の年金は自分が払うという意識をきちんともって、専業主婦の方も何らかの形で払わないと、今のままではつぶれてしまうのではないかと思います。

（D）でも、恩恵は受けているのです。親は89才ですが、病気した時に年金で全部入院費が賄えますから、私たちは何も手助けなくていいわけです。そこのところは、今まで厚生年金などで働いていた分をもらっているから、私たちも恩恵は受けているのです。

（金子）でも、自分が払った分が戻ってこないわけです。ですから、先程のCさんのように、子供さんは払わなくていいという方々が増えてくるとますます、今のおじいさんおばあさんはいいけれども、私たちの時にはどうなるのかという不安があります。

（C）払わないとももらえないといっても、払っていてももらえるかどうか全然わかりません。もらえる歳まで生きているかもわからないし、すごく曖昧です。

（A）親のために出していると子供たちが思ってくれたらいいのではないかと思います。自分の親のために払っているのです。

（金子）自己中心的な子供が増えてきたという意見が一方であるので、親のためというか、自分が払うものが戻ってこないと払わないという話になると、たちまち…。払っていないから自分はもらえないのは当然ですが、その前に制度が壊れてしまう危険性があります。

（C）普通に考えて、払ったものがもらえないと、あたりまえというか、やはり払ったらもらいたいということはありますね。

（梶井）でも、システムとして、例えば厚生労働省などが絶対大丈夫と保証したら。

（C）それは絶対信じません。子供がいなくて、今でさえ20才の子からまで取るようになったのは、いかにそれがいいかということです。子供がますます少なくなっているから、女性が働きやすく、子供を産んでも育てられる環境にしないかぎり、若い世代から取ったものを年寄りに回すという順繰りは絶対できないと思います。子供を育て易くするには、男性の育児参加もあるし、保育所の完備です。病気の時にもケアしてくれる施設がないと、女性が働くのは無理です。保育園の料金も高く、0才児ではおむつが取れないと4～5万円かかり、非常な負担です。みんな最初は赤字覚悟で、ずっと勤めて後で取り返そうと、辞めずにがんばっています。その辺が整備されなければ子供が増えないような気がします。

（金子）教育費が高い場合は奨学金を増やすというようなことで考えた方がいいですか。

（C）それは一時的な問題です。奨学金は子供が自分で返さないといけいないから、

（金子）自宅外の大学生は1年間で約250万円、4年間で約1000万円かかり、大きな負担

になりますが、全部親が負担し、社会的な応援はありません。だから、もう子供を産みたくなかったとしてもしかたがないのですが、産まなくなるとますます大変になるわけで、その解決策があるのかどうか。例えばCさんのご主人は結構育児参加をされた方ですか。

(C) 全くしていません。主人には手助けの依頼は一切しませんでした。頼んでいいいやしてもらいよりは、自分のペースでやった方が良かったから。手助けしてほしかったこともたくさんありますが、言わなかっただけです。男性にさせると、いちいち説明して二重に手がかかるので自分でした方が早い。最初からしつければいいらしいですが。

(E) 私は夜勤をしますから、掃除、料理など、必然的に父親の出番があります。2人いるのだから仕事を2人で分担する、できる方がするという形です。入院患者さんを在宅に切り替える際、女性の場合は1人で何でも身の回りのことはできるから、ちょっとした家事介護でいいのです。しかし、男性の場合、料理も掃除もできない。したことがなくてわからないのです。ましてや歳を取ってから言われても…ということで、「在宅はできないから、病院においでください」となってしまうのです。でも、病院においたり施設に行くには、介護度が少し足りないというような問題が山ほどあるわけです。

(梶井) Dさんはいかがですか。私たちは金子先生がおっしゃったように、間に挟まれた世代です。上の世代を支え、自分たちが働けるときには教育費も払った。しかし、教育費をかけた子供からは何ももらえないという非常に寂しいサンドイッチなのです。でも、この制度が本当に崩れてしまったら私たちは下から一銭ももらえないわけです。

(D) 父は仕事もしなくて生活できて、私よりもたくさん収入があります。でも、Gさんが、自分がもらうために払うのではなくて、それは一応国に預けていると言われたのですが、そのような考え方にならないとだめではないかと思いました。だから、子供も親の面倒をみなくていいとか、私たちも親の面倒をみないというのではなく、みんなでみていかなければいけないと子供には言っています。子供の面倒をみる、親の面倒をみるというのは当たり前のことではないかということです。

(金子) 親の面倒をみるのですが、子供だけでみるのは大変だから、介護保険でもっといろいろな人の応援を得ようということになったのだと思うのですが。

(A) でも、その制度は少しおかしいと思います。要介護の認定によって、今まで受けられていたことが受けられなくなった。そして、受けるためには1割を負担しなければならなくなったので、それはすごく厳しいと思います。それと、今まではヘルパーさんが市から来られても無料でした。何をさせていただくにも無料でしたので。

(梶井) 財政的な問題があったのでしょうか。支える側の人数が少なくなったということです。これから負担ということが大きな問題になると思います。よくスウェーデンはすばらしいという議論が出ますが、スウェーデンの負担は私たちの負担に比べたらすごいです。そのかわり、払えば国は何かやってくれます。私たちはそのような土壌にいませんから、どれだけ負担をして、どれだけを自立で賄ってということを一人一人が緻密にやって、やはり負担は避けられないのではないかと考えていかねばならないと思います。

(B) 信頼できれば負担が増えてもいいのですが、今の状態では少し不安があります。

(A) 私たちの時の国民年金は、先の認識がないから、任意でも全期払っているわけではないので、もらうときは少ないと思います。国民一人一人に「今こうしていたら、こうなりますよ」ということを本当に訴えていかなければいけないし、任意でもう少しかちんと払っていたらと思っても、情報が足りないですね。

(D) 危ない、危ないばかりで、どうしたらいいのかという情報が足りないような気がします。

(金子) 情報の質も問題ですが、情報を提供する手段として、Aさんに一番役に立つメ

ディアは何ですか？テレビ、新聞、メール、インターネットなど情報メディアがたくさんありますが、一番簡単に情報が得られて安心できるものにどのようなものがありますか。

(A) やはりテレビです。NHKでも民放でもいいですが、それと、実際に経験された方の声です。テレビ登場でなくてもコメントや字幕でもいいし、経験した方の声が一番強いと思います。近所に講演会にすれば一番いいと思います。市の広報等に経験した方の話を載せるよりはテレビのようにもう少し家庭の中に入り込めるメディアの方がいいです。

(B) ただ、情報として与えられるモデルケースがそれぞれ違うわけですから、自分にぴたりこないという不安はきっと皆さんお持ちだと思います。

(金子) 家族4人が標準だったのが、一人暮らしの場合も、夫婦だけの場合もあり、また妻の収入に応じていろいろなバリエーションがあります。その代表的なものについて、「大変だけれど、こういう解決策があります」というようなことを、テレビを使って情報を提供するというのが一番いいのでしょうか。

(A) それから、「20才から払いましょう」と訴えていく。どうして払わなければならないのかを、本人の若者に通じなくても、ご家庭の方に認識していただくような方向です。政府の広報のように一方的ではなくて、こちらが「どうして払わなくてはいけないのですか」と質問できる状態です。返事が返ってくる、自分の質問に対して答えが返ってくるというシステムができたらもっと興味がわいてきます。

(金子) 例えば区役所に行ったら、おそらく答えてくれる人はいると思います。

(A) でも、それは興味がある人が行くわけです。興味がない人に、「こうだから、こうしなければいけない」と。特に20才くらいの人たちには全然認識がないと思うのです。「どうして僕たちはお金がないのに払わなければいけないの」と。でも、バイトして、それを遊びのお金に使っています。その一部を「こうだから、払ったらどうですか」と、親や国が言ってもだめですから、民間でそのようなものがあつたらいいと思うのですが。

(和田) Gさんはどのようなところから情報を得て、情報を生かそうとお考えですか。

(G) やはりテレビ、ラジオが多いです。友人関係に会社経営をしている男性陣がいて、その友人たちからの情報が多いです。

(梶井) Fさんは社会参加について、ボランティアで託児などをしておられるといわれましたが、老後の人間関係のサポートということは具体的に何かお考えですか。

(F) こちらに転勤してきてすぐはお友達がいませんでしたが、市政便りを見たら手話のボランティア講座があつたので、まずそこに入りました。それから、月に一度お会いした方たちとお食事したりしています。あとは自分が昔、保母の免許をもっていたので、市にサポーターの登録をして、必要があれば何時から何時までお手伝いという感じで、それは有料ですが、そういう形で参加しています。

(金子) 下の娘さんはまだお一人でしょうが、女性の自立とか、子育てに夢がもてないとか、そういうお話をされることはありますか。

(F) 下の娘は25才で、今は栄養士をしています。結婚のことは全く考えていなくて、自分が自立して、どんなときにでも自分の食べ口は自分でやるという考えの子です。結婚の方は、縁があればしたらいいなという思いはあります。私が知っている若いご夫婦などはどちらも共働きで、今の快適な生活を壊したくないから、今のままでいいという考えです。ですから、必ずしも子供がその人たちにとっては必要ない。先のことは考えていらっしやらないと思うのですが、自分たちの生活をご夫婦で楽しんでいらっしやいます。

(金子) 長い間かなり踏み込んだ質問をしましたが、きちんと答えていただきましてありがとうございました。これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

以上

名古屋グループ面接 (第1回)

日時 2000年12月2日 13:00~15:00

場所 名古屋不二パークホテル

(和田：司会) 介護や老後の不安、教育のことでも結構ですし、住宅の問題などどんなことでも結構です。日頃考えていらっしゃることを中心に、自己紹介をお願いしたいと思います。

(A：55才独身女性) 夫は2年半前に癌で、57才で亡くなりました。60才前の死亡でしたので、主人の退職金や生命保険金などのお蔭で、その後の生活に困るということはありませんでした。私も55才ですので、この先老後1人だとやはり不安なことがありますので家を建替えました。今は健康面が一番気になっていて、夫婦でいるとお互い助け合いますが、主人は亡くなっており子供には迷惑をかけたくないし、自分1人で健康に明るく楽しく生きなくてはいけないと思っています。それと、なるべく食生活と運動を心掛けるようにしています。

(B：51才独身女性) 15年前位に離婚をしたときの慰謝料で、余裕を持って仕事につきましたが今までは苦勞しないでやってこられました。仕事をしていると張り合いがあって、自分も元気でいられますし、くよくよしないです。営業の仕事でしたので、様々な方と知り合いになれたことがすごく楽しかったです。将来子供と住む事を考えてますが、今は元氣ですので、1人でできるだけ住みたいです。家は去年買いまして、今22歳の娘と一緒に住んでいます。仕事は去年までやっていたのですが、最近また仕事を探したら、やはり50歳過ぎていきますのでパートしかない状態です。正社員にはやはり無理があります。パートに近い仕事をとりあえず見つけて、今はその研修に行っています。

(C：45才既婚女性) 専業主婦をしながら子供に英語を教えたりしていたのですが、子供が少ない世の中でなかなか仕事がないので、何か私にとって一番いい仕事はないかと考えたときに、介護保険がぱっと頭に浮かび、思い切ってヘルパーの資格を取りました。そして4月より話が進みヘルパーセンターに登録しました。週に3~4回いろいろなお宅に訪問介護の仕事に行っています。気晴らしにお友達とどこかに遊びに行ったりしながら、あまり気を高ぶらせないように、ストレスをいろいろなところで発散しています。

(D：45才既婚女性) 子供が大学生2人と中学生の3人なので、今までずっと専業主婦をやっていました。在宅で少し仕事をしていますけれども、殆ど何もしないできました。

老後のことは今まで幸いみんな元氣ですので、まだ考えたことがなかったのですが、これからは介護などの問題について勉強しなくてはいけないと考えているところです。

(E：52才既婚女性) 夫が10才年下で40才と少し若いので、老後はとりあえずおんぶしていればいいという考えがあったので特に貯金などもしませんでした。お店をしていた関係で友人と食事をしたりすることが非常に多かったのです。でも最近脳こうそくで母が倒れ、父も脳いっ血で何年か前に倒れているので、介護の話題を実感としてすごく考えました。私達夫婦は長男と長女なので、「親が1人になったら見てあげなくては」という感覚があります。

(F：50才既婚女性) 私は50才で、高校生と中学生の娘と夫の4人暮らしです。結婚してからすぐに国民年金だけでは足りないと思っていたので、60才払込み満了で15年の個人年金に入りました。この7月まで2年半ほど仕事をしていましたが、これは一生続ける仕事ではないということで今パソコンの勉強をしています。ハローワークなどに行っても、やはり50才を過ぎると求人がありません。パートも探しましたが、それでも「若い人に決めました」とか、いろいろ言われる状況です。

(和田) 介護の問題をそろそろ考えなければいけないということと、一方では既に始まっているという方もいるようですが、そのあたりのところを少しお伺いしたいのですが。

(C) 母が、少し足が悪くなってきました。父が月に1~2度、母を病院に連れていくだけの状態ですので私も気が抜けない状態です。外に介護の仕事でいる感想としては、私はわりと家族の温かみがない家庭に行っているような気がします。介護保険は始まったばかりなので、皆さんがどう使ったらいいのかよくわからない状況があって、「両親の面倒は見たくない」と言う方が、今は使っている状態ではないかと感じています。

(和田) 利用者にとってはいいような悪いような、家族が壊れていく一面もあるのかもしれませんがね。

(E) 母は介護保険が始まる少し前から具合が悪くなったので、「そのために脳こうそくをやったようなものだね」と周りから言われました。介護保険は1割負担ですのすごく助かりました。妹の近くに家を借りて父と母で住んでいます。でも2階建てなので父は何とか上がれますが、母は2階にはもう上がれない状態です。

ヘルパーさんがいらっしゃってくれているので助かっていますが、それはやはり別物だと思います。親子というのは全然違って、自分が行かなくてはいけないという使命感があるので、精神的なことはやはり家族が大事ではないかと思っています。

(D) 実家の父が病気をして、幸い何となく大丈夫ですが、そのとき母に「介護保険が始まってはまだよくわからないから、説明を聞いてきてほしい」と言われて、私が聞きに行きました。まず最初に区役所への提出物など、様々なことを聞いたのですが、高齢者の方に配られたパンフレットでは読みづらいようです。

(和田) それは、どんなかたちで情報が流れてきたらもっと読みやすくなると思いますか。

(D) パンフレットに、まず最初に何をするとか、最初に区役所に行ってこれをお願いささいとか、箇条書きでもいいから、やることを1番、2番とわかりやすく書いてもらわないと、何が何だかわかりません。私でもそうなんですけど、特に高齢になるとわかりません。今は、ごみの出し方でもわかりません。もう少し高齢の方にわかりやすいように、簡単に、細かい説明はあとからでもいいから、まず必要なものをわかるように書くとかの工夫が必要だと思います。

(B) 弟が母の面倒を見ていますが上手くいかないようで、母も年を取るとともに私の方によく来て話をしにきます。気を使わないので母は私と一緒に住んで最後まで暮らしたいのですが、周りに知っている方がいないので、年を取るとともにそういう人は大事なので、それに話すということが、ぼけなどの防止にもなると思うのです。

弟の世話になることを終点にはしているのですが、今のところは迷っているみたいです。

(A) 夫の母は特養に入っていて10年ぐらいになります。私の実母は82歳ですが足や肩がここ1年位で急に悪くなりまして、やはり娘に面倒をみてほしいという考えで、「介護保険が始まったから、いろいろなことを聞いてきたら」と言うと、自分の家に介護してくださる方を入れたくないという、すごい拒否反応があります。

(和田) 年齢が高くなるにしたがって、守りというか、拒絶することが出てきます。台所や浴室などに入ることを嫌がるというのも聞きます。

(C) 最初に会話をしながらお付き合いをさせてもらおうと、「ケアしてください」という感じになります。やはり、自分でしたくても出来ないので、1~2度させてもらおうと「助かる」というのが先に立たれるみたいで、何度か通っていくうちに信頼関係が出てきます。

(和田) これからシニアの時代を私たちが迎えるにあたって、どんな人間関係を築いていけばいいのか、またはどんな活動をしているのかをお伺いしてみたいと思いますが。

(F) 私はソフトボールを始めて12年目になります。みんな私と同じぐらいの年齢で監督も含めて全部女性です。少しずつ若い子も入ってきて、世代交代は上手くいっています。

冬に温泉旅行へ行きますが、みんなもそれが楽しいからやめられないと言っています。地域以外にも、PTAの関係で友達が多少はできているし、学生時代の友達が結構います。

(E) いずれ来るであろう老後の備えを本当に準備していないので、最近少し不安はよぎります。だけど、その日その日がすごく楽しい日を、いつも充実しているということで、そういう深く長いおつきあいのある方の方が多いので、そういった意味では、あまり不安感というのはそんなには感じていないのですが、現実になったらどうかと思います。

(梶井) シニア世代は、親のことはまず自分が介護しなくてはいけないとけなげに考えて、子供には頼りたくないと考えています。そこでどんな備えをこれからしていかななくてはならないかということ、または具体的な不安などについてお話を伺いたいと思いますが。

(F) 私自身が年金は満額もらったって60万円と思ったものですから、これは絶対自分でやらなければいけないということで、33才のときに個人年金に入りました。

ただ、これから60歳になるまでの10年間に子供の教育費は頭が痛いと思っています。

(A) 日当たりが悪くなりましたので最近家を建替えました。老後のことも考えて全部バリアフリーにしました。新聞によく年金の話が載っていますが、60才支給開始の場合、私達の年齢だと70%出るという話です。支給後62才の時に、例えば足を骨折して障害が残ると、切替えができないと、60才支給開始にするか65才支給開始にするか、身近にあることを例にとっていろいろな情報を流して欲しいです。自分から情報をいくらキャッチしようと思ってもできない部分があるので、もっと役所の方から住民のためになる情報を提供して欲しいと思います。

(B) 生活資金のことがすごく気になります。自分なりに最低でこのぐらいと思っていたのが、保険会社の方に聞いて計算してもらおうと、すごく膨大で、ゆとりのある生活はとても無理だと思います。私の歳では、もらえる額もだんだん減っていくみたいですので、年金はあてにならないです。お金があれば、いくら子供に世話になるにしても気持ちが違おうと思うのです。

(E) まだ夫が若いからという私の方で甘えがあるので、今はそんなに不安に思っていない。公的年金はもらえるとは思っていないものですから、とりあえず現金で蓄えようと、最近保険も切り替えたりして、車も売って、そういうかたちで少しずつ貯金を増やすための努力をしています。

(D) 子供の教育費が大変で、余分は一銭もなくて、本当にほかのことに回せない。老後のことは頭にあるんですけど、全然回っていかなくて、3人分の教育費を払うだけで本当に恐ろしいです。私は病気をしたりしたので、もう外では働けないのですが、食べて行くには何とかなっているからいいんですけど、子供の教育費以外の貯蓄とかには全然回らなくて、考えたくても考えられないので、もうしばらくは無理です。

(佐藤) 住まいについて、娘さんがご結婚された後も一緒に暮らすとことを想定した部屋の広さなのか、いずれは1人で住むからという規模なのか、少しお話を聞きたいのですが。

(A) 現時点では2人で住むのは広すぎます。将来は私1人で住む予定です。娘が結婚してからも一緒に暮らしてもいいと言ってくれば、私は喜んで一緒に暮らそうと思っています。全部バリアフリーにしたので1階のみで生活できる状態に作ってあります。

でも、どうにかなったときは子供に病院にだけは入れてほしいと言っています。

(B) 金銭的にマンションはお金がかかるので、何かあった時のためにローンは貯蓄で払える範囲内で買いました。今は、二女と一緒に住んでいます。もし一緒に住んでくれば良いようにいろいろな考えて4LDKにしています。

(佐藤) 自分が介護されるような場合、どういう場所を望まれるのかというのをお聞きしたいです。例えば病院、老人ホーム、自宅でヘルパーさんに来てもらいたいとか。

(E) 夫の実家が宮崎なので向こうに土地を買って、それなりの年齢の人達だけが集まった町というか、今でいうマンションで病院があって、ホームで全部ついている住宅みたいなのがあって、夢のような社会を描いていたのですが、そういうものがあつたらすごくおもしろいかと思います。例えば夫婦どちらかが亡くなって1人になっても、その中の仲間の人たちだけは一緒にいられて、だれか見ていてくれる感じで、同じような年齢層でも、その中にポイントになってちゃんと管理をしてくださる方がいればいいと思います。

(和田) 私の周りにいる40代、50代のシングルの女性たちが、一緒に住むつもりはないけれども、隣接して一緒に住みましょうという話がだんだん具体化してきています。だから、そういうことも実現できないわけではないと思います。

(A) 今は体も丈夫ですし、以前勤めていた仕事仲間や、高校、短大の友達とか、いろいろお付き合いがありますので現時点ではいいんです。私達も年齢が同じぐらいの方が病院に入ったら、皆さんでお見舞いに行こうという話は出ています。シングルになったら広い所を借りて、みんなで仲良く暮らしましょうという話がこの年代は意外とです。

でも何か自分の体に異常があった場合はやはり家族です。でもその頃は子供も独立していますから、何か本当にいいお話があつたら飛びつくかもしれません。

(E) ケアマネジャーの方が、たまたまうちの両親の近くの方だったんです。万が一のときは、今妹も近いのですが、「本当に連絡してください」と言ってくださって、1人になったら家族がいない人もいますし、遠くの方もいるので、そのようなケアマネジャータイプの方が近所にいけば、安心して生活もできるかと思います。

(梶井) 若い世代からのサポートも、子供には頼りたくなくても、社会的には何かしら若い世代からの社会的サポートが必要だと思うんです。しかし要求するからには、ある意味では何らかの社会的負担が必要です。介護保険は、私達は月々40才以上から負担をしていますが、負担に対する公平感や不公平感、不満、負担をするからにはこういう社会的サポートが欲しいというものは具体的にはありませんか。

(F) これから厚生年金が段階的に65才になっていきますが、どれだけもらえるのかが、女性の場合はもとの基礎賃金が男性に比べると安いんです。それを考えたら、不公平だと思います。いつの時点のものを基礎にするのか、今は初任給でも16~18万円はもらえますが、それこそ何十年前は女性がそのころもらったのは10万円ぐらいです。それを基礎にされたらもっと少ないと、そちらの方が私は言いたいです。

(A) パートで仕事をしていたときは年間で抑えてしまいますから、全然払わなくても何も思いませんでしたが、実際に自分が払わなければいけない立場になったらこれは不公平だと思いました。自分勝手かもしれませんがサラリーマンの妻だって、パートで働いている方は月に7~8万円ぐらい収入があるわけです。収入がある人に比例して税金を取る方式の方が、私としては皆さん納得ができるのではないかと、今の立場になってから思うようになりました。

(D) 私は、子育てもちゃんと仕事をしていることになると思います。専業主婦は遊んでいると見られますが、外で働くだけが仕事ではなくて子育ても大事なことだと思います。

(B) 仕事をやめて失業保険をもらっていたときに、国民年金を払いましたが、本当に大変でした。実際自分が本当に払ったとき、主婦でパートの方がまだいいと思いました。

(和田) 収入に応じた負担であれば、逆に払うことによって、自己責任というか、自立の意識も高まってきます。

（梶井）不公平感があるとなかなかみんなが納得して払えないということがありますから、そういうところは是正されないとだめですね。

（C）スーパーのレジの方も、企業の方から急に「明日は来なくていい」と言われると言っていました。

（佐藤）厚生年金の加入者になると、今度は企業の事業者負担が出てきますので、企業側もそういう抑制をするんです。

（F）パートに行ってみましたが、週に何十時間以上働くと、社会保険に加入しなくてはいけないので、事業者から「20時間ぐらいに抑えてください」とよく言われました。

（A）失業保険というのも全部そうですね。1週間に20時間ですか。

（F）昨日もパートに行っている友達と話したら、パートをやめさせられてアルバイトになったそうです。アルバイトだから1日4時間までしか働かせてくれなくて、しかも「たくさん休みを取れ」と言われ、首にされないだけましとって働いている感じです。

（梶井）男性に比べて女性の平均寿命が長いので、最終的に自分が1人になるときが来ると思います。そのとき頼りになるもの、頼りになる人はどんなものだと思えますか。

（F）優先順位をつけたら子供が大事です。その次に友達です。

（A）物質面は、かなり金銭的なものが必要ですね。精神的なものは子供と友達です。子供に話すこととお友達に話すことは違うので、友達というのは本当に心を許せる人が1～2人はどうしても必要です。子供の場合は、少し違った感情で話をします。金銭的に大きなバックボーンがあれば、人間は精神的なゆとりが出来ると思います。

（B）やはり金銭的なものがしっかりしていれば安心です。子供の場合は、最近まで私の方が相談に乗っていたので頼る存在ではなくて、母や兄弟を一番相談相手にしていました。これから子供が大きくなってくると、また変わってくるとは思いますけれども。

（C）今のままの優しい気持ちでいてくれたら、子供は頼りにできると思います。

つい最近、私の母が病気になって兄と弟と私の3人で話し合ったときに、何かことが起きた場合、兄弟は結構いいものだと思います。大学の友達は殆ど遠くに離れているので手紙とかメールぐらいでしか会えないのですが、小学校からの友達で気が合う友達が4人ほど近所にいます。1年に1度、一緒に旅行に行ったり、月に1回ぐらい集まっておしゃべりしたり、こういう方たちと近所でずっと暮らしていけばいいなあと思います。

（A）私は転勤族なので、子供会やPTAのお付き合いがなくて来てしまっているんです。少ししてからのお友達とお付き合いが今も続いています。あとは高校・短大のときの友達との付き合いはありますが、隣近所というのはあまりありません。

（D）やはり子供かと思いますが、うちは男の子ばかりなので近くにいてくれないと、いざというときに相談しようにもあまり遠くでは無理かなと思います。あとはお友達です。ご近所とは、それほどお付き合いはないです。お隣のうちなどとは挨拶はしますが、そう深くはしゃべらないです。あまりわかってしまうようなお付き合いはないです。

（E）私の場合は、もちろん金銭的なものが一番だと思いますけれども、それよりも兄弟です。妹と弟ですが結構仲がいいです。母の入院を機に兄弟関係が深まったようで、きっと1人になれば「近くにおいでよ」と声をかけられる兄弟の仲です。友達はその場限りで寂しいかもしれないですが、私は現実的に今までに見てきたような気がするのです。

（和田）私も兄弟が多いので本当に兄弟が頼りのなのですが、逆に今は少子化で一人っ子がふえてきているので少しかわいそうな気持ちです。

（佐藤）今ご自身の健康について、例えば健康診断や人間ドックとかをきちんとやっているとか、あるいはそういう機会がないとかその辺をお聞かせ願えればと思うのですが。

（A）夫が亡くなる前は、会社の人間ドックに妻も入りますので1泊2日ぐらいで受けていました。夫が亡くなってからは機会もなくなりましたので、市の方でもなかなか行けなくなりましたので、最近ある機関で検査をしました。引っ越してまだ1年半ですので、かかりつけのお医者さんは選ぶ基準がなかなかないので特にいません。自分の体の隅々までご存じのかかりつけの先生は本当に必要だと思っています。

（B）去年まで会社で人間ドックをやっていました。今まで大丈夫だったから、今年はやらなかったのですが、また勤めるようになりましたのでやと思います。

（C）病院が大嫌いなので、健康でいられさえすれば病院にかからなくていいという考えです。でも35歳の市民検診の頃から、2年に1回ぐらいは半日ドックを受けています。

（D）私は、少し前に病気をしましたので、今まだ病院に1年に数回行って、そのときにちょうど血液検査などしてもらえるので、それでいいと思っています。

（和田）そうすると、もう確実に行きつけの病院があつてということですか。

（D）そうです。それまでは何もしていなかったのですが、突然そうなって、行っておかないといけなかったとは思いますが、専業主婦だとそういう機会がないし、私も病院は嫌いな方なので、行けなくてずっとそのままになっていました。

（和田）予定の時間になりました。長時間にわたってお話しいただき、今日は本当にありがとうございました。

以上

名古屋グループ面接 (第2回)

日時 2000年12月2日 17:00~19:00

場所 名古屋不二パークホテル

(和田：司会) 住まいや介護や、老後に向けての不安、それから働き方のこと、お金の問題もあるかもしれません。自分にかかわりのあるところからお話いただければと思います。

(A：50才独身女性) 今一番考えていることは、老後というよりもむしろ自分の死に方です。母のおばが今入院しており、気管支切開により管につながれて生きているのです。何か自分の老後とか介護とかいう問題よりも、自分の死に方というものをどういうふうに考えていったらいいかと。今は離婚して1人です。子供は2人とも学生で東京にいますのでお金がかかっています。また、母がいます。長男がいますので経済的なこととか、今いろいろ私を助けてくれています。母に介護が必要となった時は、私がしようと思っています。

(B：50代独身男性) 5年前に離婚して、今1人で住んでいます。18才の娘が母親と暮らしています。仕事は25年ぐらいフリーでデザインをしていますので生活費は非常に不安定です。私の81才の父と75才の母は電車で自宅から30分位の所に住んでいます。最近、父が病院に入院をして、介護の話が急に身近になってきてしまいました。

妹夫婦が今住んでいるマンションに空部屋があるので、そこに来てもらおうという話が進んでいます。両親もその方が安心だということで近々。でも新居に移ってしまい、今まで馴染んだものがなくなると、記憶がなくなってしまう進行が早いという話も聞いたのです。父や母にはできるだけ身の回りのものだけでも持って行ってほしいと思っています。

(C：52才既婚女性) 私は現在失業中です。26年ばかり児童の福祉施設で働いてきました。私の実家の父が90才で今まで元気でしたが、昨年大腸ガンをやりました。それから同居している夫の母が、85才で元気なのですが腰が痛かったりということで、私の仕事が9時~5時ならいいのですが、夜もいろいろあったり、時間的な拘束が大きいもので、今は失業というスタイルですけれども、失業訓練に通ったりとか、長年のあかを落としながらちょっと頭の体操をして、考え方を整理しながら休養期間に置いています。

夫婦2人と夫の母と子どもが3人です。上の男の子2人はもう自立してしまっていて、3番目が高校3年で今度大学に入りましたので、それも家を出て行きますと、いよいよ50代と80代の3人という生活に入ります。そのような状況です。

(D：50才独身女性) 50才になります。私は一人っ子で兄弟もなく両親も亡くしているで、親戚以外天涯孤独な状況です。とにかく1人で両親を看取らなければならなかった状況でした。父は本当にあつかなかったですが、母は3か月ぐらいは治療で、後の1年9か月はリハビリの病院にいました。完全看護だからということで介護の方をつけました。公的な補助もありましたが、誰も負担してくれないので、私1人で全部やらなければならぬ。生活していくためには私が働くしかないで親を看られないという状況でした。母を看取ってお葬式を出すときに、さてお金をどうしようと思うぐらいの状況でした。

母の介護をしている間にいろいろ思いました。この人には私がとりあえずいるけれども、私は誰もいないのだよなど。そうすると、自分は他人様に看ていただくしかないということです。そのために何を準備するか。金銭的な準備ももちろんなのですが、精神的なこととか、どこでどういうふうにするかということとを事前に自分がわかっているべきではない。ある日突然倒れて何とかしてくれというのは無理だろうし、今から着々とそれなりのものを作っていかなければならないのではないかと。だからどうしていいかわからないけれども、危機感とかそういうものはすごくありますね。年金付きの保険とかをしています、掛金も毎月2~3万位のものしかないし、あと厚生年金や国民年金に

しても、私の場合は厚生年金の加入期間が短いので、いただけるものは本当に少ないと。だから不安感ばかりです。

(E: 40才独身女性) 8年前に離婚して両親が既に亡くなっていますので、今は子供と2人で賃貸住宅に暮らしています。仕事は今小学校にパソコンを教えに行っていますが、来年の2月までなので就職活動をしています。40才ですが、40~50才ぐらいまでは正社員の募集もありますけれども、年齢が高くなったときに経験者だと採用されやすいのですが、経験のない職種に40才で行くとやはり断わられることが多くてどうしようかなと思っています。仕事を見つけないと家賃も払えないし、生活もしていけないので何とか探さなくてはと思っています。正社員を希望しているのですが、体が丈夫な方ではないので、フルタイムというのはあまり自信がないのです。正社員ではないので厚生年金もなく自分で個人年金をかけないといけないのでしょうか。自分の老後のこととか不安でいっぱいです。

以前はインテリア・アドバイザーの仕事をしていたのですが、土日の出勤が多いので正社員になりませんでした。子供がまだ小さかったですし、身内で頼れる人がいなかったのので、どうしてもパートみたいな形を取っていたのです。子供も大きくなってきましたので、そろそろちゃんと仕事を探さないといけないと思っています。

(F: 43才既婚女性) 家族は6人で、83歳になる夫の父と81歳になる夫の母、そして私たち夫婦と子供たちです。上の娘はもう20歳で、下の娘は18歳になります。現在夫の母が要介護3、父が要介護1。私はパートで働いています。4月からいろいろ問題点は指摘されながらも介護保険が始まったのは、うちにとって非常にラッキーだったと思っています。父はそれほどではないですが、母は朝から晩まで「もうあれがない、これがない。」と責められると、こちらも精神的におかしくなってしまうのもうどうしようもなかったのですね。経済的なこともあります。外に勤めに出ることによってある程度私が精神的に発散できる環境が欲しかったものですから、ヘルパーさんに午前中週3回お願いしてパートを始めました。私はパートの合間に毎日家に通っています。

私はそれで一つ思ったのですけれども、女性の方はわりとそういう公共のサービスとか、他の方が来ていただくことに対して抵抗がないのですが、男性は、ほかの方に来ていただくとか、ほかの方の世話になるということにすごく抵抗があるのですね。だからこれはもう主人の意識改革から始めないと、そのつけがやがて娘たちに回ってくると思います。今は両親の姿を見て、そして自分たちの老後を考えるという、今はそういう状況です。

(G: 46才独身男性) サラリーマンを二十数年やっています。就職して東京、大阪、東京、名古屋というふうに転勤がありました。名古屋に来て7年になります。1人で住んでいます。両親は早くに亡くなってしまっていて、兄が1人大阪にいます。老後のことはあまり考えたことがないですが、大阪の友人が今は回復して健康になりましたが、高血圧で脳出血になったのです。それをきっかけに健康に気をつけようということを最近考えています。将来のために貯蓄と投資について最近考えだしたので、実際に投資はしていませんが、ファイナンシャルプランナーの方に相談したりしています。

(和田) 介護のことは本当に現実に迫っているということがよくわかりました。それから、生活費、仕事の獲得というような問題ですとか、継続の問題ですとか、さまざまなことがあると思うのですが、介護の話を少し具体的にお聞かせいただきたいのですが。

(F) 介護保険制度はなければちょっと困りますね。だけど私がおかしいなと感じたのは、独居の方であれば子供がどんなにお金があっても介護サービス料はタダなのに、同居家族がいると同居家族の収入によって1時間いくらかというのが決まるということです。でも介護保険がなくて誰にも手助けされなければ、私は仕事を辞めるしかないと思います。私の体は今のところは大丈夫です。介護保険制度のお陰で精神状態は2年前に比べたら今

の方がずっと安らかです。朝から晩まで罵倒されていた頃に比べると今は天国です。

（C）私たちの親の世代は戦争をくぐってきて、大変な中で子供を育ててきましたので、社会的な施設に預けたりするのは嫌だという基本的な考え方があります。自分の親に対してはそれだけのことをきっちりしてあげたいし、自分は子供にはそういうふうにはさせたくないから、老後は基本的に夫婦で困らないように、若いときからやらなければいけないという計画としてはそういう方向でやってきています。

（B）妹が講座に通ったりして知識もあるし全部やってくれるので任せていました。介護のことから自分で逃げていたと思います。高校の頃に父が「おまえの世話にはならない」と言ったのです。たぶん金銭的なことを言ったと思うのですが、老後は全部用意しておまえの世話にはならないので好きなようにしろと、自分に都合よくだけとっていたと思います。自分の老後については、「くたばるときが来たらくたばってしまおう」と思っています。お金がなくなるのが早いのか、命がなくなるのが早いのか。フリーデザインの仕事をしていると、働こうと思っただけでも出来るかもしれないけれども、甘くはないということが最近わかったのです。仕事自体変わってしまって、コンピュータでなくてはいけないので若い人の方が上手いですね。

（和田）Eさんの今の不安というのは。先程も。

（E）特に住居や収入ですか、厚生年金がないので国民年金ですが、それが6万5000円ですよね。それと国民年金基金というのですか。あれが3万円で65才から9万5000円なのですか。それで生活していこうと思えばできるのだと思うのですが、病気になるか。今の年でこんな状態なので、体がもっと不自由になった時には身内に頼れる人がいないので誰に頼ればいいのかと思うのです。

（梶井）まだ40代ぐらいだと老後は考えにくくて親を見ながら想像すると。その中で備えとしてはまず健康面ですね。それからサム・マネーというくらいのお金の蓄えが必要だろうと。それから人間関係。その3点のことでの備えをはどのようになさっていますか。

（A）一応離婚するときに家と土地をもらいましたので、何かあった時にはこれを売って老人ホームとかに入ればいいのかと思っています。将来子供と一緒に住むつもりはないけれども、私を捨てはしないだろうなという感じですね。あと幸せなことに母から経済的な援助を受けていますが、長男が東京の大学に行っていますのでそちらの方の生活費にまわしています。私が働いた分は一応貯金、保険、光熱費などに殆ど消えます。パートで家庭教師をしていて、月に2万3000円。だから私はこの2万3000円で生きていくのだという感じで、とりあえず自分ではそれだけで生活しています。友人関係としては、アマチュアの人形劇団の人たちと仲よくさせていただいているし、体が続く限りやっていきたいなと思っていますので幸せな方だと思います。

（D）母が亡くなってから、何かつかえ棒にしていたものがなくなりました。精神的などこかで親離れしていなかったのでしょうか。自由に勝手なことをしているわりには、ある線は越えられない。いつも親の顔がちらつくからなのですね。それで踏みだせない。だから破れかぶれになれない部分があって、それを理由に、ここまででいいや、今は食べられればいい、とにかく生きていければいいやという感覚です。

（梶井）死ぬ直前まで元気でいてコロナと逝くのもなかなかうまくいくものではないと思いますけれども。何か社会的な支援などを受けるための情報とか、何か社会的な支援があればというようなご希望はありますか。

（D）私は母が入院していて、仕事を辞めた段階で病院の方などいろいろな話をしたら、援助があると言っても負担が大変だろうから、生活保護というのを一度聞いてきたらと言われて区役所に行ったことがあるのです。3万5000円の家賃のところにしか住んではいけ

ないとか。2万でも3万でも収入があればその2万、3万は引かれるわけですね。私と母は住民票が一緒に私が母の介護をしている状態だから、母を病院の所に住民票を移して、世帯を別にして1人だという状態にして保護を受けたらどうですかと。結局踏みきれないままに亡くなったという状況でしたね。

（梶井）やはりそういう面での公平な負担というのは、少し損なわれていると感じられますか。税制面に関して。不公平感が強い世の中でしょうか。

（D）国民健康保険などはすごく不公平感を持ちますね。年収が何百万で頭打ちで、何千万だろうが何億だろうが同じですよ。野球選手も一緒よねという。その1億円取っている人も一緒だと思えば、ちょっと「えっ」という感覚はありますね。

（E）私も同様に思います。まだ子供が小さい時は生活保護をいただいていたのです。4年間。そのときは本当に何もかもが無料で、友達もうらやましがるほどに「そんなに待遇がいいの」というほど援助していただいたのです。でもそれが外れたら本当に普通の方とまるきり一緒ですよ。ですからかなりそれに払う額が多いのでちょっと厳しいです。

（和田）人間関係のことで少し伺いしてもよろしいでしょうか。地域とのつながりとか、あるいは老後どういう人達と生活していくのが理想かを聞いてみたいと思いますが。

（A）同じ区内の人間が殆どです。大体人形劇の友達、それからやはり大学のときの友達、近所でも助けてくれた友達、そういう人たちと今もつきあわせていただいています。そういう友達どうして何か一緒に老人ホームでも作るといいねみたいな。一緒に住むといいねというような話はしていますけれども。

（B）僕は将来、長屋というものがあれば住みたいです。僕は25年ぐらいもうフリーで仕事をしていると、例えば大家さんとかが日中顔を合わすことが多くよく話かけられる事が多いので、長屋というのは僕にとっては一番いいところだと思います。

それと5～6年でしょうか1週間に3回、日本語教室等のボランティアに行っています。僕1人で住んでいてもすごく楽しいのは、昔から仕事の人とは付き合わないからです。仕事以外の所で日本語を習いに来る外国の人や、一緒にボランティアをしている人、僕より年上の人もいるし若い女の子もいます。そういう所で週に1回顔を合わせているし、何かその辺で安心しているのではないかなと思っています。

（佐藤）例えば自分が娘さんに頼らないということを前提にすれば、バタツといったときに、自分は別にして、どなたがBさんをケアすると予想されますか。

（B）今は一緒に住んではいませんけれども以前同居していた女性がいて、いい友達なのですごく心配してくれているのです。僕より15歳下なので若い。たぶんあの人が面倒みってくれるのではないかなと。その人次第だからわかりませんが。

（和田）Cさんは仕事をされていたときと今はもう仕事をされていませんが、人間関係、つながりは変わりましたでしょうか。

（C）まだ4月からですので期間が少ないですから、がらつということはないのです。

今は家族の状況がいろいろ手にかかる関係、家族以外の方との時間的な接触は少ないですね。地域ではいろいろ手を貸して欲しいと言ってお友達が来たりとか、地域生協や医療生協や子供達の教室などいろいろありますけれども、ちょっと期間を置きたいなとか、考え方が偏っているというとおかしいですけどももう少し時間が欲しいという感じです。

私も職業訓練の失業対策で、日本語教師の養成というのを半年行かして、やはり何か接点、国際交流とか自分が違うかたちで結びつきが持てるものを持っているといいなと感じているので、もう少し準備をしていくべきかなという実感があります。

（D）昔から人と接する仕事をしてきたので、プライベートの時に人と接するのがすごく面倒くさいのです。でも借家で2年暮らしているのですけれども、4棟あり私と同年代か

少し上の方たちなので、それこそ長屋的な感じで、朝仕事に出て行くときに、「おお、これからか」、「はい、行ってきます」という感じで出て行きますので。「ああ、そうか。こういうのも久しぶりだ。悪くはないけれどもちょっと疲れるな」という感じはあります。

(和田) Bさんの長屋の話や、今のDさんの話を聞くと、そういうかたちの住まい方、住宅の形態というのは何かこれからのちょっとヒントなのかなというふうに今思ったのですが、マンションだと本当に冷たい、箱の中に入ってしまうという感じなのですね。Eさんは今大変なところだろうと思いますが、人間関係を構築するとか築くためにどこかに出かけたり、意識的にやっておられることはありますか。

(E) 私の場合は友達です。本当に友達に頼るしか心の支えがないので友達はやはりたくさん欲しいと思っています。でも今はそういういろいろなところに出て行く時間がないのです。そういう時間があったら仕事に行かなければいけないので。

今メール交換をしている友達とか3~4人います。その人達は一応心の支えみたいには言っていますが、頼ってばかりではいけないのでなるべく自分で何とかしなくてはと思っています。何かあった時に友達に電話をしても時間がかかるのが現実です。実際私が先月に2日間入院した時も目の前のお宅の方が、私の状態を見て子供を泊めていただきました。義理と人情というのか、困っている時はお互い様というような方でしたので本当に助かりました。今は、そういう方に頼るしかできないかなというところです。

(和田) Fさんは家から外に仕事に出ることによってかなりストレスがかなり発散、整理できたという話でしたが、人との関わり方が変わってきましたか。

(F) 人とかかわり方は、介護によって変わったということはないのですが、消費生活アドバイザーの資格を一つ取ったことによって、その同じ資格の方との勉強会を通じて一つまた新たな活動というのが生まれました。私はそれが、仕事と家の事で本当に時間はないのですが、何とか時間を作ってそういう活動をしている状態ですね。

(G) 私は地域のつながりは全くありません。いろいろ転勤があるものですから。名古屋は7年と比較的長くて、東京、大阪とそれぞれ5年ずつ位。そういう状態ですから家も買いづらいです。将来的には出身地の大阪で家を買えたらと思っていますが。

ただ、計画は立てられないのです。いつ大阪以外への転勤があるか分かりませんので。

でもいつまでもそうはいかないので、ちょっと長期的な作戦を立ててやろうと思います。

大阪に小学校時代からの友人が3~4人いますので、2か月に1度ぐらいは三重とか奈良で合流してゴルフをしたり、あとメールのやり取りとかをしています。

(梶井) 自分が介護される立場になった時に、最終的に体が動かなくなった時には、どういう場所で介護を受けたいでしょうか。

(B) 長屋というものにもし住めたとして7~8人住んでいるとしますね。するとその中に管理人さんのような医者さんと介護する専門の人に1人住んでもらう。医者とか介護の人の出張みたいなものですね。ただし、お金がかかるので公的に家賃や給料をみてもらう。すると施設を作ってそこへ行くのではなくて、あるところに向うから来てもらうという形になると皆安心して、先程僕が最初に言ったように急に違うところに行ったりすると記憶をなくしたりぼけが進むとか、実際に理論的にあるとなるとその面もクリアできるし、畳の上で死にたいとか自宅でという人にとってもすごく安心です。それで見慣れた中でスーッと逝ってしまうと。発想の元は先程言った日本語教室だと思います。そこは既に全国でボランティアが集まってネットワークを作っているからです。

(梶井) 家族という介護者がいなくても在宅でサポートできるそういうしくみがあればということですね。行き先がホーム、施設だけということではなくて、もっと多様なサポートの仕方があってもいいというご提案ですね。

(A) 私立の施設だと何千万円納めて自分の個室があつてお医者さんもいるという。こういう所だったら家と土地を売って入ればいいかなと思ったのですけれども、あれは月々も結構お金がいるのですよね。だから今話がでた公的なところで、個室も確保されて、もう少し安くやっていただければいいのにとおもいます。多少男性よりは女性の方がどこでも行けるとは思うのですけれども、私の場合はそういう感じでいきたいなと思います。

(和田) 情報源というか、皆さんに今情報を収集するにあたって、インターネットとかそういうことも含めて、どんなツールを使っていらっしゃるとか、どういう媒体を見ることが多いとか、それから逆にこういう情報が欲しいのだけれどもなかなか手に入らないとか、情報というキーワードについてお聞きしたいのですが。

(G) 私などは新聞ですね。毎朝、新聞を隅から隅までご飯を炊きながら読みます。読めないところは昼休みとか帰ってから。詳しく知りたいと思ったら、そこからさらに本を借りるとかというふうにしてやっています。また、会社にいる時間が多いですので会社のインターネットを使うことが多いです。ファイナンシャルの情報等ですね。

(F) 私も新聞を毎朝読んでいます。それと雑誌がすごく好きなものですから、本屋さんでザッと自分の興味のあるところはチェックします。買う雑誌は大体決まっています。あとはインターネットで、自分の好きな情報というのはメールで来るようになっています。新聞などにホームページの記載があると、興味のあるものについて情報収集はしています。

今一番興味があるというのは介護のこともありますし、あと投資のことですね。

(E) 今一番欲しい情報は仕事です。それと老後の情報だったら何でも知りたいという感じ。友達はそこまで考えていなく、聞いてもこれといった反応はありませんので。

新聞を毎朝読んでいます。ホームページを見たりもします。あと行政の出している市の広報についても利用しています。ただ、もう少し突っ込んだ所を書いてほしいですね。新聞を読んでも、何か上っ面にしか私には取れないので。その先がすごく知りたいです。だから誰かその先のことをすごく詳しく知っている人はどこにいるのだろうと思っているところです。また、そういったことを何処に行けば気軽に聞けるのか知りたいです。

(D) テレビとか雑誌が多いです。テレビなどで興味のあるものを、また詳しく書いてあるものを調べます。パソコンは乗り遅れてしまった状況です。仕事上は使わなければいけないみたいなのはあつたのですけれども、個人的にはほとんど使うことがないので、せいぜい携帯電話で情報を入手できるもの程度です。

(和田) 例えば部屋の中に流れてくる情報が自分に合うものが少ないとか、そういうようなことはありますか。

(D) 合うものは少ないと思います。例えば仕事に行ったりしても私みたいな立場の人間というのはあまり会ったことがないのですからたぶん少ないのだと思うのですね。

一番知りたいことは、最低限どれぐらいのお金があるものなのかということです。例えばひょっとしたらと思ったときに、お役所などに行ってどうすればいいのですか、というのはどこで聞いたらいいのだろうとか。そういうことが知りたいですね。

(C) 現在私は仕事をしていませんので時間がある関係、新聞や広報誌などをしっかり読んで無料の講演会や、何らかの治療や、最新情報でフォーラムなどお金がかからなくて情報がつかめるものをチェックしておいて、応募して聞きに行くということをしています。

(和田) でも情報を取るために何かフォーラムだとか何だとかと動いていくときに有料であれば行かないですか。無料の情報ということは。

(C) やはり収入がない場合は大きな天秤になります。失業対策で学習に来ているシニアの方とか若い方とかいろいろな年齢の方がいましたけれども、やはり専門学校へ行くのは60万とかかかるけれども、そういう国のお金で保障されるというのがあればやはりそこで

勉強したいと。パソコンもやりたい、資格も取りたいというのはあります。

（B） 情報は新聞です。インターネットはしていません。仕事でパソコンを使っていますけれどもつないでおりません。物についての情報については僕はもういりません。何か死ぬ主義ではないのだけれども、何かすごく身軽に身軽に身軽にと。今まで整理して置いておきたいと思っていたものを、いらないとしたら物についてはもう欲しくないから情報もいらなくなってしまうのです。確かに物を集めている時は、いろいろなことが知りたくてあちこちやっていて楽しかったです。でも今はそれをするつもりは全然ないです。

あといわゆる情報としてどうすればいいのだとか、そういうものについても、今のところ身近には起きていないものですから。起きたら、たぶん僕は区役所だったり市役所だったりに行って直接聞くとします。

（A） 情報はやはり新聞と人間ですね。いろいろな人、いろいろな分野で働いている方がいるものですから。実際に介護している人、そういう友達からいろいろ情報を得ています。自分も離婚を通して、知らなくて損したことというのはすごくありました。本当に知らないで少し損をしてきたということをつくづく感じたものですから、とりあえず何でも知りたいというふうに思っているいろいろやっています。

（和田） 皆さんのさまざまな貴重な意見をお聞かせいただきました。本当に長い時間ありがとうございました。

以上

名古屋グループ面接（第3回）

日時 2000年12月3日 11:00～13:00

場所 名古屋不二パークホテル

（梶井：司会）今どのような気持ちで老後を考えているのか、もしくは自分が40～50代といういことで、どういうふうに住生活プランをお持ちかお話しただれければと思います。

（A：49才既婚女性）49才になります。夫と高校生と小学生の男の子が2人いて、ずっと子育てを楽しんでいる専業主婦です。今は何かとお金があるのでパートを探しています。主人の両親が田舎に住んでいます、母は全然耳が聞こえなくて、父は13か所ぐらい脳血栓で詰まっているような状態で、支え合って何とか倒れないように生きている状態です。どちらかが倒れたときには、やはり帰るなり、引き取って見るなりしないといけないなという覚悟はあるのですが、具体的にその話題に触れることが怖いような現状です。

いずれは田舎に戻るか、あるいは名古屋で小さなマンションでも買うか、借りるか、あるいは公営住宅でも借りて、ひっそりと暮らしていきたいなという心づもりはありますが、まだ夫婦間では具体的にそういった話は進んでいません。

（B：50才独身女性）現在50才で独身です。フリーでコピーライターの仕事をして20年以上になります。今は83才の母と2人暮らしをしています。母は今のところは元気で遊び回っていますが、今までも何度か入院したりすることがあります。「介護の問題も切実に考えなくては」と思いますが、介護が本当に必要になった時に姉と相談して考えようかなと思っています。私の周りにはみんな同じような性格で、老後に対しての緊迫感がないです。貯蓄も含めて、気持ちの問題も、今のことしか見ていないという状況ですがいろいろな資料を見るうちに他の方々先の方で先まで考えているようでしたので少し不安になりました。

（C：47才既婚女性）現在47才です。高校生の娘と中学生の息子と、夫と今4人で暮らしています。主人は広島出身で、両親は父が90歳、母が80歳で、父は半年位寝たきりの状態です。90才の父を80才の母が殆ど付きっきりの状態です。一応主人の弟が近くに住んでいるので、主人の両親のことは見てもらえることになっています。

私の両親は名古屋の郊外に住んでいてまだ60代で元気です。私の方はずいぶん助かっています。ですから自分自身の老後というのは、本当にまだ……。子供たちをこれから世の中に出さなくてはいけないので、いずれ主人と2人になるのですが、やはり元気に仲よくいつまでも暮らしていけたらいいなと思いながら毎日生活しています。

広島の両親は、介護保険を受けています。父は要介護4で、母もすごくよく勉強していますが前の制度の方がよかったと言っていました。介護と言っても、デイサービスとかヘルパーさんなどの対応はそれほど変わらないですが、何をするにしてもやはりお金、時給ということで、年寄りが理解するということはとても大変であると言っていました。

（D：41才独身女性）中学生の娘と2人暮らしをしています。両親は私が住んでいる市の市街に住んでいるのですが、ぼけたとはいえそこそこ普通の生活をしています。老後については考えることが怖いという部分と、まだ切実感がないという部分もありあまり深く考えていません。

子供が生まれた時から会社員をしていますので、小さい時は両立ということが辛かったこともありました。今は中学生になり殆ど手が掛からないものですから、やっと自分の人生が毎日送れる時期に入ったということで、あれもやりたい、これもやりたいという自分への意欲が沸々と沸き起こってきて、介護のことまでは現実感が私にはついてこないということが現状です。数年もすれば、真剣に向き合わなければいけない事実だとは思いますが、今は自分の意欲を最優先にしても許してもらえるのではないかと軽く考えています。

(E: 43才既婚女性) 私は娘2人、主人1人の4人家族です。歩いて30分の所に実家があります。両親はまだ元気ですが、やはり毎日見ていると本当にちょっとしたことが年を取ったなと分かるようになりました。両親に何かあった時に、主人を取るか、両親を取るかという選択があったときに、みんなはどうするかなと少し思うことがあります。親が入院した時に実家に帰ってしまった状態になって、私の両親は私以外「誰も見られない」状況だと言い切ったものですから。主人が「両方の親に何かあったときにどちらを取るつもりだ」と言ったのです。私は「実家を取ります」と言ったのでけんかになりましたが、お互い近くに住んでいるから仕方がないのだと本人は思ったみたいです。

(F: 40才既婚女性) 5年前に名古屋に転勤になって、4年前から主人の両親と同居しています。78になる義父と、74になった義母と息子が2人いまして6人家族です。私が家事一切を全てやっていますので、何かぼけてしまうのではないのと周りから言われているのですが、私も人に任せたくない性格ですから、いけないのかなと思いつつ元気です。とても助かっています。自分の親は69才で車で40分程の所に住んでいます。足が少し弱くなってきているので週に1度合間を見て掃除とかご飯作りに行っています。最近介護保険が始まって、生命保険会社さんからも、介護の積立の商品がを盛んに薦められています。実際には自分の親も同居の両親も元気ですので、自分の介護はまだ考えられませんという感じです。

(G: 53才独身女性) 年齢は53才で独身です。家族のふれあいがありますが、周りの友達とか、人のふれあいというのは薄れているなと思います。今まで自由な時間があって家のことを結構できましたので、家族は母親が84才ぐらいですか、あとは姉がいて、実家の方で女性3人で、そういう意味では自由にしています。

会社勤めしていますので、夜の8時位まで仕事していることが多く自由時間があてないような状態です。年金の知識は乏しい状態ですので、最近お休みの日などにテレビなどの情報をなるべく触れるようにはしています。

(梶井) 老後の備えとして、どのように備えていこうかなという意向などを、人間関係、健康、お金について具体的に踏み込んでご意見をいただきたいと思うのですが。

(B) 経済的なことで申しますと国民年金ですので、最低限の生活が予想されるなと思っています。終身保険には入っていますが、これも私が受け取る世代になると価値から言って、国民年金も含めて今の生活を維持できる状況になる金額かどうか不安です。

健康面で申しますと、取り立てて何もしていません。祖母が102歳まで生きましたので健康長寿の家系かもしれないという根拠のないことを考えています。母も80才過ぎてクモ膜下出血をしましたが、今は復活して仕事と遊びをやっています。でもそろそろ健康の事は考えなくてはいけなんでしょうね。勤めと違うデメリットも多いフリーランスなのですが、唯一60才で終わりということがありません。気持ちの持ちようですが、母は私と違う仕事していますが、80才を過ぎてまだまだ仕事をしていますので、自分自身も納得して他人から疎ましく思われない程度まで仕事をやりたいし、仕事ができるような状況に人間関係も含めて作っておきたいと思っています。

(C) 広島の方はここ1年くらいで悪くなって、現実どうしようかということに直面しているわけですが、弟の家族が近くに住んでいますので私が一番得している状況なのです。主人にはそういう点ではすまないなと思います。

主人との老後生活については、子供にこれからお金がかかりますので貯えということはとても難しいのです。やはり親を見ていると、いつまでも元気に過ごさなくてはいけななということと、今はパートで週に4日ぐらい行っていますが、ある程度年齢がいても自分に収入を持たなくてはいけななということを考えています。

(梶井) 何か本当にわずかでもいいですから、60才、70才になっても、収入を得る道があるということは、1つの備えとしては重要なことかと思えますね。

(A) 仕事を探していますが非常に難しいです。車の免許はありますがペーパードライバーということと、パソコンも年賀状を打つ程度ぐらいにしか使えないということと、年齢と小学生がいるということで、条件を合わせると電話口だけでまず年齢で切られてしまいます。面接に行ってもやはりいろいろな条件が出てくるという状態です。

(F) 私はかつて他県で教員をしていたのですが、今にして何で公務員を辞めたのと散々周りから言われます。現在子育ての時期から少しアップして、これならば出られるという状況で2年ほど前から塾の講師をしています。

今のある程度のお年寄りを見ているとお金はある程度持っていて、皆様お元気なのです。お金があつてある程度健康で、自由に遊んでいるのを見ると、やはりお金も貯めておきたいなと思うし、ゆくゆくは旅行やカルチャースクールに使っていききたいなと思っています。

(E) 今年私大に入学した娘と、私立の高校に入学した娘を2人抱えていますので教育費は莫大です。しばらく貯蓄は無理だと思っています。大体50過ぎからお金を貯めるしかないのだろかなと思うのですが、現状でははっきり言って無理です。

私も夫も会社員ですので厚生年金には加入しています。でもそれがきちんと来るかはバダーラインみたいなのです。だからそう考えると、考えたくない気持ちになります。

健康面についてはできるだけ歩くようにしています。本当は車で行くことが好きなのですが、時間がある限り自転車とか歩くことだけはしています。

(A) 健康面で私たちの年代はすごく不安があります。親しい友達も、突然筋萎縮症で要介護5になってしまつて、これから面倒を見るはずの方から、面倒を見ていただくというような状態になっていたり、胃がんで倒れたとかのお話をいっぱい聞くものですから、私の年代はそんなに長生きはできないのかなと、このごろ思います。

(G) 情報は自分で拾っていかないから、余計にだめなのですね。施設などに入るにはお金が必要だと。そういうことが10年か、20年か先にはやってくると。私は子供にお金がかからない点では楽なのですが、親がいて、60才以降働くと言っても収入が……。老後は見てもらう人が逆にいないですから、それが不安ですね。やはり施設に入るか、家族は姉がいますが、姉もどっちがどうなるかわからないですから。やはり施設の事を考えて、有料でももう少しできるようなことを考えてもらえるといいかなと。

(和田) 実際に皆さんは人間ドッグとか、そういうものに入っていらっしゃいますか。

(E) 検診は行った方がいいと思います。半年に1回、1年に1回だと期間が長すぎるので、半年に1回が最高のペースだそうだと先生が言っていました。

(G) 会社の方から年に1回の定期検診がありますから、それで一応チェックがあったら、行くようにしています。婦人科の方も2~3年前にありましたが、そういう点ではチェックをしてもらえますのでいいのですが、やはり1年に1回ではなくて、半年に1回というふうに、もう少し行ったほうがいいですね。

(B) 私は健康診断も何も受けたことがないのです。風邪をひいて2年に1回お医者さんに行く程度で、そのときに血液検査とか、レントゲンなどがあるのですが、そのほかは全く検診したことがなかったので、今どきつとしました。

(D) 健康でいるということは、ある意味で医療費がかからないので、貯蓄につながります。いかに健康を持続させるかということです。通勤も近いということが大前提なのですが自転車通勤するようにしています。食生活などもコレステロールが溜まらないようにとか、ちょっとしたことなのですが一応頭の片隅に留めておくようにしています。

親の介護が必要になった時は、側にいてあげられる方がいいと思っています。定年後も

少しでも収入が得られるようにSOHOとして何か仕事ができればと思っています。趣味だけでは長続きしないので、収入が少しでもついてこそ生き甲斐にもつながると思います。

(F)今お話を伺っていて、私が加入している保険会社さんのモニター会議に出席した時、両親も、義父母も健在ですからと言ったら、「40代で倒れる方がすごく多いですよ」という話が出ました。話半分に聞いていたのですが、でも実際あるのだと思いました。

それと男性は介護になった場合、殆どの人が奥さんや家族に見てもらいたいというのです。それを女性にあてはめるとでは9割以上が逆だったそうです。

(梶井) 例えば自分の住まいがあるかどうかによって、かなり老後の生活というものが変わってくると思うのですが、その辺は現状いかがでしょうか。

(B) 今、母名義のマンションに住んでいますがかなり老朽化が進んでいます。住まいの事に関しては、笑い話みたいに例えば友達といくらか出し合って、7~8人位でグループ生活をするコミュニンを作りましようとか。私の周りには独身女性が多いので、その話は30代からしています。姉は一戸建ての家に住んでいますので、姉も子供たちが自立する年代になりましたので、将来的には私と一緒に住みたいという希望なのです。姉の方も今主人がいないので将来一緒に住もうかと、顔を合わせたときに話をしています。具体的ではないのですが、姉の家の居候みたいない形で入るのかなと。もう少しみんなの年代が上がってくると、具体的に考えるのかなと思っています。

(F) 今の住まいは間もなく丸4年になるところなのですが、土地は義父のもので、家の名義は私と主人と折半で、でもまだローンが残っています。

できれば本当は公営の施設で、買い物が便利で、近くに駅もあって、病院などもあって、図書館とかそういういろいろな設備があって、エレベーターが付いた2DKぐらいのものが安く借りられる設備があると。声を大にして望みますけれども。

(E) うちの借家住まいで、主人の田舎にいつかは戻るつもりでいたのでこちらで住居を確保することを考えていませんでした。中古のマンションの購入なども考えたのですが40過ぎてからでは返済を考えると割り切ることができました。本当に年をとってどうしようもなくなりましたら、主人のお墓を守りに田舎にこもってもインターネットをつないで世界中と自分自身とをつなげて生きていくしかないかなという思いはあります。出来ることならば公営住宅で、自分達の生活の規模にあった広さがあればいいなあという思いがあります。非常に不安な老後です。住むところはやはり確保したいと思います。

(和田) 外国などでは賃貸で、家族が多いときは広い家を借りて、夫婦2人になれば狭く借りて、借換えがしやすいという話を聞いたことがあります。そうできれば本当はいいのですが、現実には老夫婦で収入が無くなってきた時に貸してくれる制度がないのです。

(梶井) 何でも社会的と言って国に頼るわけではないですが、やはり老夫婦が借りやすいシステムということは、意外と拒否する民間のマンションもあるのです。賃貸なのにそこで死んでもらったら困るとか、あのような意識はやはり払拭したいという感じはあります。

(C) 私の場合は今マンションに住んでいるので、ローンを払い続ければ今のところで自分たちの生活はあります。主人も広島に帰る予定は殆どないです。

ただ先々私としては、主人の親よりも自分の親を今後見なければいけないということがあるので、実家の方も一戸建てなので両親のどちらか1人になったときに家をどうするのか、引き取るのか等の問題があります。今は電話など、殆ど毎日かかってくるのです。

だからやはり同居したら難しいかなと思う面が少し出てきました。私は同居するには時期が過ぎたなと今は思っています。だから今後はやはり難しくなるとは思います。

(D) 私はマンションに住んでいるのですが、将来的には親の面倒を見なくてはいけないと思います。少なくとも今のマンションは最終的には引き払って、同居用の新しい家に住

むのではないかなと漠然と思っています。それはとてもラッキーな話だと思いますが、自分の老後も、そこで迎える可能性が高いのではないかなと思っています。

娘が結婚したら同居しなくてもいいですが、理想としてはスーパの冷めない距離に住んでももらえたらなと思います。

(G) 私も母親名義の家に住んでいるのですが、先のことを考えると、少しは日あたりのいいところへと考えて、最近 60 才までお勤めできる仮定で購入したところなのです。定年が 55 才なので返済は 30 年にしたのですが、それ以内に納められるようにと。本当は 40 代に考えなければいけなかったのですが、50 代になって切羽詰まって決めたという感じです。今は母と姉の 3 人暮らしです。やはり女性の場合、年金にしても医療費控除にしても給与ベースが低いですから、女性の立場で制度を改正してもらいたいかなと。お勤めもやらなければいけないでしょうが、そういった不安もあります。

(梶井) 女性の定年年齢が少し早めに切られたりとか、賃金ベースが最初は低い、年金も少ないということは、ちょっと今の制度では合わないかもしれませんね。

(白波瀬) お友達関係のことについてお伺いしたいのですが、ご家族がいらっしゃるって、老後という、まず親のことということになるのですが、別途、自分の親しい友達があるという状況なのか、それとも家族のことで手一杯ということなののでしょうか。

(B) 独身ですので、友人関係のつながり方も皆様とは少し違うかもしれません。年代的に私の前後 10 才くらいの友人関係が、20 年くらい 5～6 人集まって常にずっと行動してきた友人在るのです。20 年来の友人とは仕事のこと、家族の問題なども相談できますし、現在の状況は姉妹以上だと思っています。きっかけは、この仕事に入ってから広がっていった友人です。たまたま状況が似ていたのです。みんなたまたま結婚していても子どもがいなかったか、あるいはずっと私よりも年齢が上の方で独身だったり、環境が似ていたのです。それで親しくなれた友達です。

(C) 子供が幼稚園に入ったときのお友達が、今 8～9 人続いています。主婦で子供がいると友人関係になりますね。身近なので、会いたい時にすぐ会える、ちょっとお茶を飲もうかという付き合いが 7～8 年続いています。何か困った時に精神的に励ましてくれて成長していけるなというお友達は身近にいるのでそれはとても幸せだなと思います。今後も今のところに住んでいれば、付き合いが続いていけるのだと思うのです。

(D) 子供というのは、お友達づくりの一番の武器ですね。子どもが媒体で、友人というのはある程度できますし、学生時代とかの友人ですと、離れてしまいますよね。会社の同僚ですと若い子の中でおばさんですから、表面上のつきあいが主になりがちですので、やはり身近な地域の友人というのがメインになると思います。

(E) 私は学生時代からの友人と 30 年近い付き合いをしています。2月に 1～2 回位に 3 人で会っていますし、Eメール等でやり取りをしています。

先程のコミュニティですか、旦那も親もみんないなくなったら、財産も何もかも全部売り払って、3 人でマンションを造って各フロア 1 戸ずつ自分たちで取って、残りは賃貸にして収入を得ながら楽しく暮らそうという夢とかいう話をしています。

(F) 幼稚園、小学校のときからのお友達、一緒に役員などをやったお友達は、ランチを食べたり、お茶を飲んだり、あたりさわりのない話をするにはいいのですが、立ち入ったことを話すのは姉たちになりますね。そこまで話せる友人は近所にはいません。

(G) 私も近所付き合いというのは勤めている関係でないので、今まで母親が元気だったので町内のことはみんなお願いしていました。やはり難しいのですが、自分からなるべくそういう場を作らなければいけないということもあるかなと思ったりしています。私の場合はお友達が。そして嫌だけれども家族。家のことを話し合えるのは家族。学生時代のお

友達は環境が違って、差があっても、憎みあいとかそういうことはないの、いいお友達は必要だなと思います。でも自分で努力しなければいけないということは感じます。職場の中も3~7人ぐらいです。話してもいいのだけれども、あとで後悔や、やはり控えることが出てしまいます。でもいろいろ話すのはやはり友達かなと思います。

(A) 33年来の友人が3人います。仕事を持っていたり転勤で遠くに行って離れたりしたのですが、年に1~2回会って話ができるという関係です。子供の幼稚園仲間、公園仲間が5人ぐらい、ご近所で生協活動をしている仲間も5人ほどいます。あとはご近所で友人というか、ご近所の年輩の方で会うとご挨拶をして世間話をしてという、地域には根を張るようにはしていますのでできれば地元で一生を終えたいなと思います。

(梶井) もし夫がある日亡くなった時に自分の精神的な自立、経済的な自立、その辺の覚悟というか、何か想定されることはありますか。

(E) 自分は収入があるので想定はしています。実家の両親のことも考えていますし、たぶん別れたら主人の方がかわいそうです。私は住む家もありますし子供は女の子ですから母親につきましますし、20~30人近い友人がいますから、何とかなっていきそうです。でも女1人暮らしていこうと思ったら、住む家と収入だけは絶対いると思います。

(D) かつて離婚をして現在子供と2人暮らしです。初めから勤めていましたので経済的には大変ですが何とか耐えました。生きていくのにしっかりしなくてはという緊迫感はないかったです。ただ教育費はとてめにかかるので、中学生の子どもを持つ私がこういうことをいうのもおこがましいですが、教育費にこれほどお金がかかるとは思っていなくて。

(和田) 地域での活動ですとか、趣味のことですとか、皆さんが日常の生活で、生活の延長線上でしょうが、それ以外のことで、興味を持っていること、そういった情報をどういうところから収集していらっしゃるか。その辺のことをお伺いできますでしょうか。

(D) 今、趣味で市から菜園を借りて、毎週週末はほとんどそこに浸かっているのですが、そこで知り合った方と情報交換、インターネットでその畑に対する悩みとか、新しい情報とかをやり取りできて、少し輪が広がったなというコミュニケーション、友人作りの意味でもそれがとても今楽しくて仕方がないという感じです。

(E) 私もやはりインターネットをやっています。友達とのコミュニケーションとか、いろいろな情報を使うのに便利は便利です。旅行で急に宿を取りたいときでも便利です、インターネットで適当に検索しています。

(F) 最近新聞でも何かIT時代で、インターネットを何かどんどん乗り遅れていって、なかなか踏み切れないような状態です。個人的には投稿とか文字を書くことが好きでよくやっています。一時期テレビ局や、国や、企業などのいろいろなお話を聞いたりしました。資料などを読んでも難しいですが勉強になりますし、普通に生活していたら知り得ないような情報など知ることができ、そういう点では趣味と実益を兼ねてやっています。

(G) 20年位になる刺繍の習い事をやっています。最初は趣味で行ったのですが、ちょっとそれがお友達を得るという感じで、趣味の方はそっちのけの状態です。

今だったら70才過ぎている人もいますから、だから年齢の差をなくしていろいろなことを得られたかなと思っています。

(A) 今もっとも必要な情報は求人です。友達やご近所に、ちょっとしたパートでもあれば、声を掛けてくださいとお願いしています。あとは新聞の情報等で、自分が動ける時間で、募集があればすべて電話を掛けて履歴書を持っていつているという状況です。

私は本を読むことが好きなので近くの図書館に通っています。あとはイタリア関係にもはまってまして、ローマ古代史というか。だから友人とも65才になったらイタリアへ行こうかと、毎日100円でも200円でも貯めて、イタリア語を勉強して、それこそ老後の楽

しみを残そうかという話も出ています。

（梶井）老後の楽しみの備えを結構今からしているわけですね。大切なことですよ。

（B）今の仕事を始めるまでは9～5時の会社員だったので、自由時間が比較的にあり、興味のある習い事は一通り全部手をつけました。1つもものになっていませんが今でも関心があることなので、自分が求めるような気持ちになったときに再開したいと思っています。現在は空いている時間に映画を見たり、本を読んだり、年に1回海外旅行に行ったりとかしています。あとは自分の中でライフワークとしているものがありまして、自分の終末期医療を自分で選択する“Let’s me decide”、直訳すれば「私に決めさせて」ということなのですが、その活動の運営委員をしています。友人から誘われて顔を出したら、非常に私に関心ある分野でしたので。ただ尊厳死だけではなくて、終末期の医療を生きている間に自分で選択するのをいずれ厚生省に認可させようという運動です。カナダでは制度化されていて、それをみんなに声をかけていこうと。その活動を2か月に1回勉強会を開いている程度なのですが、情報を常にネットで交換し合っています。

（C）私は1日にわずかでもいいので、現実を離れた自分だけの時間を作っていくことが、この先々の将来のために自分のためになっていくのではないかなと思っています。かつていい出会いがあった方々とたまにテーマをきめて会話等をしています。また最近は俳句を、新聞とか本に出ているものを読んで季節のこととかを調べています。

だから趣味と言っても、あまりお金をかけられないので、お金をかけないでいかに楽しむか、楽しんだときにこんなにできたのだという満足感を日常の中で味わいたいなど。

（梶井）結構皆さんしっかり老後につながるような趣味、家庭菜園だってこれからの食生活につながっていきそうですし、俳句にしても刺繍にしても、終末医療に関しても、老後につながっていく趣味も考えたということで、大変私自身も勉強になりました。今日はまたさまざまなご意見をお聞かせいただきまして、本当にありがとうございました。

以上

京都グループ面接 (第1回)

日時 2001年1月20日 11:00~13:00

場所 ルビノ京都堀川

(金子：司会) 自己紹介を兼ねて、それぞれ5~10分ぐらい、親の介護、育児、将来の不安、自立、ニーズ、負担に関する6つの内容で、ご発言をお願いします。

(A：40才既婚女性) 私はまだ子育ての最中なので、自分の将来のことは考えられない状態なのですが、67才の姑と同居しています。姑はまだ元気で仕事もしているのですが、介護もそう遠くはないと感じています。

(B：52才既婚女性) 私は介護の問題と自分の将来のことが一番身近なことです。介護ですが、主人の母だけが独り暮らしで島根にいて、長男の兄嫁に世話になっていますが、心配です。自分が不安なことは、自営なものですから、国民年金と一般の保険会社の年金しか入っていないので、全然足らないと思います。今は年金が不安です。

(C：47才独身女性) 私は若いときから母子家庭で、男の子が2人いるのですが、下が20才になり、これから自分のことだけを考えていくという時期にきています。そして老後の不安とか生き甲斐など、シングルにすごくこだわりがありますので、仕事もできればシングルの方の応援に関わることをしていきたい。介護については自分の親だけですが、2人とも亡くなりました。今は、親も子も手がかからなくなったので自分も楽しもうと思います。まず老後と思ったときに、健康でないとお金がいくらあっても使えないし、健康が第一なので、日々健康に対する意識を高く持つようにしています。子供がいても、いつまでも一緒についていくわけにはいかないし。配偶者がいないシングルですから、80才まで生きようとしたときに、定年後とか、50才を過ぎてから楽しく遊ばないと。独居老人の方たちのニュースを見るにつけてもすごく虚しいものがあります。だから、男女を問わずいい友達をたくさん増やして、啓発意識を高く持って情報を集めるとか、ネットワークを常に張り巡らして、前向きな姿勢で生きていかなければいけないと思っていますところ。

(D：43才独身女性) 妊娠中に主人が亡くなりましたので、子供は20才までは私が育てなければいけないと覚悟して、1人でも絶対育てるという気持ちで出産しましたから、シングルだからと自分で思ったことはないです。ただ、経済的な面で、休んだ日はお金が入りませんし、非常勤になると、有給はもらえるのですが、全部有給がなくなるとお金が減っていく。そういう面で、1人でやるとお金が半分しか入ってこず、つらいというのがありました。私は、先にニーズになるのですが、病児保育室があったらいいとずっと思っていました。保育園の間は感染症が絶対あります。微熱だけで感染の可能性がない子どもだったら預かってくれればいいのかと思うのですが、そういうシステムがあればいいと思います。私はデイケアに来られている方のケアマネージャーをしています。私は在宅も受け持っていますので、在宅の人のケアマネージメントもしています。私は両親とは別居していますが、私は両親が希望したときに同居しようと思っています。介護はできるだけ自宅でみてあげたいということと、叔母もいますが、最後はちゃんとみてあげたいと思います。看護婦で肉体労働はだんだんできないので、頭脳プレーに切り換えていこうと思って受けたのがケアマネージャーです。それで、ケアマネージャーだけではだめで、福祉住環境コーディネーターが国家試験になるかもしれないというのがありまして、去年受けてみました。今度は、ケアマネージャーに福祉環境コーディネーターを目指して仕事したいです。去年の2月にお腹で腸が破裂して死にかけたので、わりと先を考えていないのです。せめて10年先ぐらいまでは一応計画を立てていますが、自分が母親としてできること、女としてできること、いつも二本立ての柱で一応考えています。

(E: 50才既婚女性) 最初の介護の問題ですが、私はマンションの4階に住んでいて、1階に80代の父と70代の母を抱えておりまして、まだ元気ですが、これからまさに正念場だと思っています。2番目の育児については、2人の子たちが子どもを産む時代になると本当に大変な時代だと思います。だから、そのことを十分にわきまえたうえで子どもをつくるかつくらないか決めてほしいと思っています。次に自分の将来に対する不安ですが、1番目に思うことは健康で長生きしたいということです。それと、例えばIT革命にしても、今までの経験だけでやっていけないことがこの世の中に多くあるので、それに対する漠然とした不安があります。4番目の生き甲斐・自立についてですが、今までは子育てに一生懸命で、自分が後回しになっていたのも、これから夫婦が、いかに楽しく、生き甲斐をもって生活できるかということに重点を置いてやっていきたい。5番目のニーズ、それにともなう負担の件ですが、これから中高年の人は、介護の問題や、パソコンの扱い方とか、生き甲斐につながるような趣味にしても、一人ではわからないことをシニアプラン開発機構で教えてくれるような支援をしたら、中高年の人はすごく助かると思います。そのようなネットワークが必要だと思います。主人は52才で、希望退職の応募を考えていますが、その際、ずっと家にいると私の精神的なストレスがあると思うのです。それをうまくプラスに変えて、楽しく老後を過ごそうかと、その不安と楽しみが半々です。

(F: 51才独身女性) 私もシングルです。私は一人っ子で、母親だけおりますが、元気で働いています。しかし、介護に関しては、病院の方が本人も暮らしやすいようなことを聞きましたので、その方がよいかなと思っています。子供の育児がまだあり、自分のことは完全にまだ考えられません。それと収入が男の人ほどありませんので、ぼちぼち考えたらいかなぐらいです。お金を残すことも大切ですが、いつ死ぬかわかりませんので、旅行へ行ったり、友達を作ったり、社会に参加したいと思っています。

(B) 私は国民年金と個人年金しか入れなかったもので、このままいって65才ぐらいから支給されたとすると、困るなと思っています。でも、50才を過ぎると考えますね。

(金子) Cさんはお友達とのおつきあいを前向きに進めていくということで、情報を集めるとおっしゃったのですが、情報源の特定をされていますか。

(C) 新聞を4種類ぐらいは毎日読んでいます。自分でとったり会社で見たりとか、あるいは無料紙などを読んだり、友達どうしの情報交換をしたりして、アンテナを張っています。ビジネスと両方プラスになるような情報量の多い方と会う機会を多くしています。同じ会社では一定勤務時間内の交流は必要なのですが、異業種の交流が大事だと前から感じています。例えば一つの会社だと人間まで似たような色になってきますが、全く違う異業種の交流は新しい風が入って刺激を受けますし、大事だと思いました。

(金子) 最後の発言で、何かに投資する、投じるところからしか始まらないとおっしゃったのですが、それは自分ではなくて人に投資するのですか。

(C) 自分にも、お金にもです。健康でなければ何も始まりませんので、健康を維持するために意識的に遠出をしたり、歩くように心掛けています。それには時間もお金もかかりますが、歳を取って病院にかかって医療費や時間がかかることを思えば、今投資しておくことには価値があります。

(金子) 自分に対する投資の中では健康ですね。趣味はこちらへ置いてという感じですか。

(C) そうですね。両立というか、一石二鳥という部分があります。

自分のいるレベル(精神的、肉体的、経済的に)よりも上の方からは、話一つ聞いても中身の濃い話が聞けるのですが、そうではない自分と一緒に、あるいは、意識の持ち方が違う友達の場合は、「あなた、そうではないわよ。私はこう思うわ」と自分の側に引きずりこみます。自分の同類項が増え、活性化する感じです。

(金子) Aさんは、ご自身のこれからのことはまだあまり考えておられませんか。

(A) 下の子が幼稚園に入り、多少なりとも時間ができてきたので、少し勉強したいです。向上していきたいので、どこかへ出ないとお友達が増えないと思うのです。教室へ行ってみたいのですが、うちは同居で農家ですし、京都は閉鎖的なところで、出掛けるといって近所はうるさいです。私はお花を習っていたので、そういう趣味的な世界で、長く続けられるよう、もっと向上していきたい。

(金子) そのような情報というのは新聞・テレビ以外に何か求められていますか。例えばお花ならお花の教室とかで。

(A) お花はそんなに思いませんが、情報というのは無料で入る新聞も京都にありますし、そういうのは隈なく見て探しています。雑誌類は大好きです。また、私には兄がいます。が独身なので、当然、実家の母の介護は私がやることになります。

(金子) 私は仕事柄福祉のことをやっているのですが、ケアマネージャーさんときどきお会いして現状をお尋ねすることがあるのですが、Dさんは、ケアマネージャーとして他人の介護プランをお作りになるときに感じておられることは何かありますか。

(D) とにかくその人の生きてきた生き方が一番大事ですね。だから、どんなにこっちのプランがいいと思っても、明治時代から生きている人だと動かしがたいものがあります。だから、少し危険がともなうと思っても、その人のやり方をやらせなければいけない。

(金子) よく言われるのは、ヘルパーや他人が入ってくることに対して、特に明治の人は嫌がるということを全国でいろいろ聞くわけです。そういう気持ちの人に対して、やはりヘルパーは必要だという説得はされますか。

(D) 訪問看護でも、地域の保健婦さんなどが行くわけです。主治医は受け入れるが、訪問看護は絶対いや、ヘルパーなんかとんでもないという人が結構います。家族が働いていると、誰もいない間に訪問看護が来てお風呂へ入れて帰るわけですので、京都は特に嫌がられる方が多いです。それが、6か月たつとご家族も本人も慣れて、そのころには訪問看護からヘルパーに譲って、訪問看護は週1回、健康状態だけ把握して、手間はヘルパーさんに移っていくというのがあります。先生は別格で、訪問看護婦よりも先生が絶対です。しかし、技術面でわかっていない先生をものすごくたてまつって、その下に私たちがいて、ヘルパーさんはもう少し下にいます。一緒に動いているのだけれども、格差があります。

(金子) 10年先を見て、いろいろなことを具体的に取り組んでいるというお話で大変感銘を受けたのですが、ご自身の生き甲斐みたいなものは、仕事を除いて何か特にありますか。

(D) あと10年たつと子供の手が離れます。そしたら、とにかく私は1人になって、バリバリ自分のしたいことをしたいと思います。私は温泉が好きだから、温泉街を転々と回って、そこで訪問看護婦をしたり、ケアマネージャーをしたり、養護施設、乳児施設で住み込みで寮母さんをして、家がなくても生活していけるなということを考えて、その資格を生かして転々といろいろな地域を回って、そこでボランティアみたいなものでお金は別にいらないう感じ。というのは、今は家賃を払っていますが、両親と同居したら、その家は私の家になるから、家に関しては心配しなくてもあるわけです。知識を若い人たちに教えてあげたい。キャリアを持っていると違うのです。保険料というのは収入がドンと減ったところで、前年度のまま来るので、保険料や厚生年金の負担が大きいのです。

(金子) Eさんは、ご亭主が、もしかしたら会社をやめて家に戻ってくるとお考えですか。ご亭主の方はいろいろお考えになってそういう選択をされたのでしょうか、そういう場合には、2人の相談はもちろんでしょうが、何か第三の機関を経由して、50代の初めから一緒にやるということをお考えおられますか。

（E） 主人が今考えていることは、会社での経験をもとに、専門にする会社を立ち上げようと思っています。スモールオフィス・ホームオフィス（SOHO）です。

私が唯一できることは快適に仕事ができるよう精神的、肉体的にバックアップすることです。そのためには、私が楽しく生活できるよう2人で話し合う必要があります。

（金子） マンションの4階にお住まいで、ご両親が1階と、これは理想的なスプの冷めない距離なのですが、それはたまたまですか、偶然ですか。

（E） 主人の両親が九州に住んでいたのですが、主人の父のお母さんが亡くなったのをきっかけに、息子のところへ来たいと言って、九州の家を売り払って越してきました。

（金子） 呼び寄せ老人という問題が一方であり、自宅を売って息子のところへ行くのだが、うまくいかなくて、家がないので帰るにも帰れない。嫁や息子とうまくいかないという問題が一方で少しずつ増えていまして、それに対する110番もあるのです。Fさんは、介護、育児の問題もまだ残っているということで、ご自分のことを、年齢的にはそろそろ考えた方がいいと思いますけれども、どのようになさりたいですか。

（F） 生きている間は元気でいたいと思います。今までは働くだけで気持ちに余裕がなかったのですが、自由な時間が少しできましたので、なるべく外へ出たいと思っています。離婚するまで、友達との交流があまりなかったので、一緒に出かけられる人が限られていてなかなか難しいです。親も76才で商売をしています、年齢的には、明日どうなるかわからないとは覚悟しています。在宅介護よりも、今は老人向けの病院が増えていて、設備も病院にまかせる方がいいと聞きましたので、金銭的には大変みたいですが、あまり大変だと思えないようにしています。私には（一人っ子だから）負担をかけたくないようなので、話し合えば病院に入ってくれると思います。ただ、今娘2人が働いて助けてくれています、結婚したら生活ができなくなるので、そのときは母と同居しようと考えています。

（金子） ご自身としては少し気持ちに余裕ができたということですが、より具体的にどういうことをするというところまではまだきいていませんか。

（F） そうですね。私は結婚している間は厚生年金をほとんど掛けていませんでしたし、主人の借金を抱えて出たので、その借金も全部すみましたが、自分のことを考える時間がほとんどなかったのです。だから、これからは考えていきたいと思っています。

（和田） Dさんが、経済的にぎりぎりの生活であったとしても、自分の生き甲斐を求めたプランがはっきり見えていて大変すばらしいと思ったのですが、その背景には、住居の不安がないとのことでしたが、どのような状況になっていますか。

（C） 結婚したときに公団に10年ほど住んでいましたが、私の名義で借りたものから、亭主を追い出したのです。しかし、ちょうどバブルがはじけるあたりで、ローンで家を買いました。家賃というのはすごく負担が多いが、ローンはいずれ自分のものになります。税金もかかるし賃貸の方がいいと思ったのですが、社会から乗り遅れてしまう。社会の評価が賃貸と持ち家では違うような気がして戸建てを買いました。

そのときは、年をとると段差が気になってきますし、平面で見渡せて平らなので、一戸建てがよいと思いましたが、最終的にはマンションの方が老後は過ごしやすいと思います。

（和田） その家を買われた時点で、シングルの状況でローンを組まれたのですね。それで何か不利なことはありましたか。

（C） 一戸建てを購入する際、ローンを組むのに銀行とケンカしました。今でこそ石を投げたら当たるほどにシングルの人も多いですし、離婚の人も多いのですが、当時は、「母子家庭には貸しませんよ」というニュアンスのことを言われました。今は一人親の方たちも、昔ほど肩身は狭くないと思うのです。だけど、私が一人になったころは、保障そのも

のにも母子、父子といった片親に対する社会的な位置づけとか認識の差別をずいぶん感じました。金融機関などでは、今でも平均的な家族像というのが、両親2人と子供2人と見られていると思います。

(和田) 母子だけに限らず、女性はシングルという場合にも同じことが言えると思います。

(C) それは思います。就職の際に、人事担当者が、小さい子供を連れていているというのは、いつ休まれるかわからないと。でも、逆だと思うのです。一人だからこそ、自分が生計を立てるわけだから休めないわけだから、子供を一人にさせてでも仕事は絶対に休めませんし、ちょっとのことでは辞めません。定年までいきますということで、生活がかかっているのだから会社に対していい仕事ができるというようにこちらは思っているのに、それが相手側には、小さい子もいるし、一人親はだめというように判断されてしまうのです。

(和田) それでは、住居の方に話を戻させていただきますが、Fさんは？

(F) 世帯年収が6百万円という基準の京都市の特優賃に住んでいます、子のアルバイト収入を足してやっと申し込めたのです。だから、家賃は安いのですが、私たちの収入にしては大変なのです。だから、70才以降は、親の持ち家を売ってもいいかなと思っています。

(和田) Fさんは雇用されている立場ですね。そうすると、ある程度年齢がくると定年があるということで、その辺のことをお話ししたいと思うのですが。

(F) うちの会社は、事務は65才ぐらいまでいけるそうです。でも、私は65才まで事務はしていないと思っているのですが、65才まで勤めないと厚生年金の最低枠に入らないので、そこら辺がとても心配です。給料が上がりそうにないので、副職があればと思っていろいろ探していますが、それも年齢で難しいです。

(和田) 離婚されて、就職するときのご苦労はありましたか。

(F) ありましたね。下の子が小学校1年で、上は高校生と社会人でしたので、下の子の面倒をみる時間は全然ないし、金銭的にも高校生は大変でした。主人が借金を作り、子供たちもお父さんはいない方がいいと言ったので離婚しました。それで、今はみんな伸び伸び暮らしていますが、片親だということで就職は大変でした。パートでも、社長が目をかけてくれたら、「あんた、社長に何かしたん？」とか、女の人からのセクハラ的な感じもありました。

(和田) 組織を離れたときに、どうするかという不安を抱えて、年金の問題もそうですが、女性の方が男性よりも年金額が低いですし、所属がなくなった際に再就職できるチャンスは少ないという問題もあると思います。Cさんも、今は雇用されているのですか。

(C) そうです。現時点では60才定年でして、1年継続で嘱託で65才ぐらいまでいけるのではないかと。65才から年金がもらえるということで、それまでのつなぎです。老後も少しは気になるけれども、健康であれば何とかかなるでしょう。60才時に臨時で雇われなくなったら、所得は落ちますが、そのときに自分が食べてさえいければいいかなと。年がいったからは遊べないし、動ける若い間に遊んでおこう、活動的にと思っています。

(和田) 企業社会も厳しいですから、雇われている者としては雇われ続ける能力を高める必要がある。ベースは元気でなければ働くこともできないということでしょう。

Eさん、お仕事に関してご主人とお2人で話をなさったことはありますか。

(E) 主人は大学を卒業してからずっと勤めたので、「もう飽きた」と言ったのです。今までの貯金と、早期退職なので普通の退職金より上積みしてくださるのです。その分を合わせて、目処がある程度立ったので、会社から提示があれば応じるようです。それには心構えが必要なのですが、具体的にまだ話し合っていないです。定年までいることはないかと前々から思っていたようなので、今までのいろいろな経験とか知識、重要なことを自分のパソ

コンに入れてしまっています。それを元手に何かしたいようです。

（和田） Aさんは今パートでお仕事をされているのですか。

（A） 自宅で教室をしています。教室講師なので、生徒さんが来てくれなかったらいつまで続くのかわからないというのもあり、そのために向上しようという感じですが、子育てと両方で、しかも家は農家なので手伝わなければならないのです。自分が自立できるまでに仕事を持っていきたい。また、うちは持ち家なのですが築100年以上で、これからローンを組み家を建て直すことも必要な時期で、私も働かなければいけないのです。

（和田） Aさんは、今一番必要な情報とか、こんなことがあったらいいなというものはありませんか。積極的に自分を向上させるために情報として欲しいものは何かありますか。

（A） まだ子供が気になります。今は少子化で、次の時代を担う人間形成というのが一番情報として欲しいです。多くの人を支えていかなければいけないので、一人前の人間になるように、そういう情報はすごく欲しいと思います。

（金子） 負担でいきますと、まず、お金の負担というのが結構大きいわけです。それから心理的な負担や、特に子どもが小さいときには夜も一緒に眠れないので肉体的な負担、時間的な負担と4とおりに分けられるのですが、ある程度子どもが大きくなられてから、経済的な負担、時間・精神的な負担、肉体的な負担の4つを総合してみると、Eさんは子育ての負担の問題でいえばどれが一番印象的ですか。

（E） 私が一番重たかったのは精神的な負担です。それをなぜかといいますと、私たちの世代は男の人が育児にかかわらないのが一般的なことだったのです。例えば主人が口出すだけでもいいし、具体的にオムツを替えたり、もう少し子育てにかかわってくれたら、精神的には楽だったと私はすごく思うのです。

（B） 私も、夜泣きすると、「明日仕事あるのに、目が覚めて仕事が行かなくなる」と言われて、おんぶして泣かさないようにした。主人は育児には協力性がなかったです。

（E） だから、子供が結婚するときに言おうと思うのですが、これからは男女一緒に働かなければいけないし、家事もちろん半分ずつ負担して、2人ともお互いにそれぞれ自立して協力する間柄でないととても難しいと思います。

（金子） やはり経済的な負担の重さよりも精神的な負担が大きいのですか。

（F） そうですね。私は兄弟もいなくて、相談する人もいなくて、参考にする本もなく、どうしたらいいのかと思って毎日泣いていました。

（金子） 亭主がそういう状態だったら、第三者的な身近な相談相手が必要ですか。

（F） はい。兄弟がいなくて、親もそのときには一生懸命働いていますので、恥ずかしいのと情けないので言えないのです。今だから言えることでも、20代、30代は自分の恥ずかしいことを人に言えないのです。兄弟でもあればなと思ったのですが。

（金子） Dさんは、お子さんがまだ10才ですが、精神的、経済的、肉体的、時間的と仮に4つで分けた場合、子育てを中心にした負担の問題というのはいかがですか。

（D） 子供と遊べない。お金がないのが一番重いかな。でも、ないなりに何とかなっていますが、慣れてしまったから、いかにお金を使わないか。

（金子） Cさんは、負担の問題でいえばいかがですか。

（C） 今の保育園には非常に感謝しているのですが、病気のときは困りました。病気の子たちの施設なり機関が地域のコミュニティの中にあればいいと思います。それから父親の参加です。今の育児休暇ができたというのでも、実際に法律があっても使っている事業がどれだけあって、あるいは男性がどれだけ利用しているのか。男女とも、肩身の狭い思いをしなくても育児休暇を取れるような制度が確立されるべきだと思います。子育てもそうだし、企業としての認識の高さもそうですが、あらゆる子育て、事件もそうですが、相

談できない。それを親兄弟には言いにくい場合には、公的機関でそういう制度の充実が図れるようにと思います。今のお母さん方は、核家族で見本がないから子供のこともわからない。電話相談で、「うちの赤ちゃんは青いおしっこをしない」とかかってくるんです。「オムツのコマーシャルで青いおしっこをしてる。うちの赤ちゃんは青いおしっこをしないからどうしましょう」といったそういう笑い話みたいな相談を若いお母さんたちが切実にしてくる。相談してくるのはまだましな方で、小児科へ行ってお薬をもらおうと、水薬はよく振って飲ませてくださいと書いてありますね。そうすると、赤ちゃんを振るのです。そういうお母さま方に育てられる子たちはどのようなことになるのでしょうかね。安心して子育て、育児ができるような相談機関を公的機関でPRもして、レベルを引き上げる制度なり施設の充実が非常に望まれると思います。

（金子） 京都も非常に少子化が目立つわけですが、そういう問題に対して何か一言、こういうことが大事かというのを言ってもらえればありがたいのですが。

（F） 子供はものすごく大事だと思うのです。私は眠たくてもしんどくても、子供のためには絶対食事も作ってやる、繕いもしてやる。だから、子供は、「おかあさんは、私がいつも夜中におしっこに行ったときに起きているね」と言うのです。寝てから繕いとか、明日の準備とかしていました。そういうことが今は少ないのです。自分が楽しむということで。

（B） 私の娘もそうなのですが、なかなか結婚しない。私の子供も結婚して子供を欲しがっていないところもありますが、自分が娘を産んで育てたときに楽しかったこととか、プラスになったことを言ったり、その子が小さかったときの話をしたりして、子供が欲しくなるような、育てたくなるような話をしたらいいのではないのでしょうか。

（金子） 予定の時間になりました。長時間にわたって貴重なご意見をいただき、今日は本当にありがとうございました。

以上

京都グループ面接 (第2回)

日時 2001年1月20日 15:00~17:00

場所 ルビノ京都堀川

(和田：司会) 親の介護、子育て、将来に対する不安、生き甲斐と自立、ニーズ、それから、求めるのと逆に負担するということでも、お話しいただければ幸いです。

(A：52才既婚女性) 主人の両親は早くに看取り、83才の父が残っていますが、兄弟の中で、私が一番近くに住んでいるので、今年引き取りました。父を介護できるかという将来の不安があります。今は子育てが終わってほっとして、夫婦2人で楽しみたいのですが、80才の父親を引き取ってしまったので、将来に対して不安、自分が体力が残っているか、はたして最後まで看取れるか、助けてやれるかという漠然とした不安で少しストレスを抱えています。独り暮らしの方のヘルパーをしています、更年期なので、体力的に不安です。介護というのはすごく力が要りますし、体力も要ります。今は父が元気ですから、主人と旅行に行ったりしていますが、病気になったら、面倒を見るつもりです。

(B：45才既婚女性) 親の介護の問題については、主人の両親は2人とも元気で、私の家からスーパの冷めない距離にいます。身体障害者である長男夫婦が同居していますが、私が手伝いに行っています。私の両親は70代ですが、2人とも健康で、私の家からも近く、弟が同居していますので安心しています。将来の不安については、自分の健康の面で、病気になったときの不安が一番大きいです。それから、金銭的な面にも不安があります。自立については、結婚後は仕事に就いたことがないので、来月はIT予算で1か月ぐらいパソコンを習いに行かせてもらいます。十何年家におりますと社会とだんだん離れていく気がするのです、働けたらいいなと思っています。

(和田) 健康への不安ということがありましたが、これは何かきっかけがありましたか。

(B) 年がいくと体調が優れない日が多くなってくるのは確かなのですが、今のところはスポーツをして体力に目を配っています。

(C：55才独身男性) 私は1人暮らしで、将来に対する不安はかなりあります。会社でライフプランの研修があつて、年金だけでは暮らせないのでどうしようと、今は考えているところです。収入なのですが、まず貯金でカバーしなければいけない。そういうことで年金保険のことを調べているところですが40代ぐらいから考えておくべきだったと痛切に感じております。ライフプランの話ですが、収入と健康の面で、保険は終身保険や養老保険に切り換えておくように習いました。生命保険は年齢制限があるし、僕ぐらいになると何か病気があるので、それも難しいのです。そういうことで、これからは健康を大事にして、病気にかからないように、いくところまでいくしかしかたがないと思っています。

(和田) ライフプラン研修というのは会社から勧められて受けられたのですか。

(C) 今までは55才でしたが、40才と定年の時に、強制的ではないのですが、全員受けるようになっていました。受講したことがものすごく考える材料になりました。年金で食べていけないことが完全にわかりました。漠然とわかっているのですが、目の前にこれだけですと具体的に突きつけられるとすごくショックでした。

(D：43才既婚女性) 親の介護については、結婚して主人の母とずっと一緒に暮らしていますが、介護となると自信はないです。実家の両親は共に70才ですが、父親が糖尿の悪化により週3回透析に行っています。娘3人とも全部出てしまったので、一番近い姉が車で病院へ送り迎えしています。子育てについては、子供が女の子で2人だけなのですが、今は大学へ行っているの、子供が卒業すれば私も介護士の仕事に就きたいと思っています。生き甲斐と自立ということでは、介護士になることです。おばあちゃんを見て、主人

を見て、私はどうなるのかなという感じはあるのですが、子供に頼るつもりはないので、将来は家売ってでも老人ホームに入ろうかなと思っています。社会的支援とか年金保険ですが、それはもらえるという確信はないので、不安を通り越して、明日が見えないと、私ぐらいの年齢の人は半分あきらめています。税金制度も、一所懸命勉強したのですが、2～3年すると制度がどんどん変わって行って、覚えても変わってしまう。私たちの年代ではたぶんもらえないと覚悟しています。

(C) うちの親自体も蓄えは持っていますし、私たちに頼っていない。でも放っておかないですけども、私も子供に頼る気持ちはありません。

(E: 46才独身女性) 私は7年ぐらい前に離婚して、子供が2人います。両親とも元気で。父親は70過ぎですが現役で仕事をしていて、そこで私が経理の仕事をしています。介護については、父親がもし悪くなったら母親が何とかしてくれると思いますが、その間私は仕事なくなり、仕事を探さなければいけないので、父親が仕事をやめたときにどうしようかと不安です。自分自身のことを考えている暇がない。子供のことと仕事中心の生活ですし、帰って家事をこなして、日曜日1日しか休みがないので、その日は残りの家事をして、子供は何もしないので全部私がやっているような状況です。パソコンの学校に通いたいと思っていますが、夜しか時間がないので、行ける状況ではありません。老後のことは当然考えていて、私のところは個人商店で国民年金しかないのですが、私は10年弱ほど会社に勤めていたので、厚生年金が少し入ります。また、養老保険とか年金保険にも入っており、それと、一生働くつもりでいますので何とか1人でいけると思います。親も、私に何とか食べていけるぐらいのお金を残してくれるみたいですし、家もあるので何とかいけるかなと思っています。

(F: 51才独身男性) 父は93才で亡くなりました。母親は90才で、田舎の方の老人福祉施設に一時置かせてもらったのですが、それも1年までで転院するというのです。つまり、今の介護制度の対象にならないのです。それで無理を言ってお願いして、長男が京都にいて引き取っていたのですが、年寄り年寄りのつきあいがあって、知らないところに来てもおもしろくない。それで、老人の賃貸マンションでお世話になっているのですが、それも1年ぐらいです。

(和田) それは民間の施設なのですか。

(F) 民間です。そこにいるのですが、それも期限付きで1年で出なければならない。家は田舎にあるのですが放ったらかしです。長男が責任を感じているのですが、そういう面では、できれば、今の介護制度では予算的にも無理だと思いますので、もう少し何かできたらと思います。私も、母親ですから、力仕事ならしてあげられるのですが、下の世話はつらいです。子育ても、あとは結婚するだけで何の不安もありません。私も、就職してずっと36年近く働き64才まで年金を掛けましたが、もらうとなると19万前後です。それだけ掛けてもそれだけしかもらえないのですから、今の若い人が不安を抱くのは当然ですし私も不安です。私は、京都の少し変わった店や場所をよく知っていますので、将来的には、観光ボランティアで地域貢献をしていきたいと思っています。

(G: 46才独身女性) 介護ですが、私の母は、私の住まいの近くで独り暮らしです。父が亡くなったときはがっくりしていましたが、それからすごく元気になって、ニューヨークへ旅行するとか、1人で外へ出ることを覚えて、幸せそうです。母は兄夫婦もいますが、実の娘との暮らしがベストだと思っていますし、私も一緒に住んで面倒をみたいと思います。そうすると、介護の経験がないので不安もあります。

(和田) 共通して出てきたのは、親の介護というのはまだ実質になれていないということですが、少し具体的にお話したいかと思います。

(A) 知っている京都がいいというので、こちらへ来ましたが、町内とは付き合いがありません。前のところでは知人が多かったのですが、まだ慣れないようです。その点では、来てくれる人もいないし、おしゃべりする人もいない。父は月に1回映画を観にいたりとか、催しものがあると出掛けていたり、運動代わりにしています。

(金子) 呼び寄せ老人の引きこもりというのがむしろ大変だと思います。近くに知り合いの方がいらっしゃらないと、外に出してあげないと急速にぼける危険がありますから。

(A) 衰えないために運動を兼ねて1時間ぐらい毎日出ているのです。それと、買い物に行ったり、映画を観にいたり、でも、まだまだ友達ができるというところまでは。又、住まいもバリアフリー住宅に改造しました。それはなぜかということ、私たちの老後も考えたのです。どちらかが不自由になったら1階に移ろうということです。

(和田) Fさんは、お母さんが90才で転々として戻ってというお話をされましたが、お母さんの世話についてどのように考えていらっしゃいますか。

(F) 毎日変えられませんし、だれか生活を共にしないと、年寄りですから無理です。本当は故郷に帰りたいのですが、我慢してもらっているというのが現状だと思います。

(和田) Dさんのところは同居されて長いということですが、まだお元気ですか。

(D) うちの1日ばかりで糖尿のため通っていますが、年寄りにはかなりの負担で、そのお医者さんに行くのに元気でないと行けないのです。だから、今のところは元気です。

(和田) 介護士の資格を取りたいと言われていましたが。

(D) 町内の奥さんはみんなヘルパー2級を取っていて、介護士の方が難しいと聞いたので、今はパートへ行きながら、来年子どもが学校を卒業したら経済的に楽になりますから、勉強しようかなと思っています。

(金子) ヘルパーさんの資格を持つ人は多くなったのですが、勤務条件がよくないものですから、ペーパードライバーみたいな感じで、持っていてもなかなか使わない。補助すれば行政なりが単価を引き上げることを考えていくことになるだろうと思います。

(A) 私はお金の問題ではなくて、保障してほしいのです。自分がホームヘルパーの仕事をやっているのに倒れたときの保障がないのです。要するにパートで時間給なのです。私たちはお金が欲しくて仕事をするのではないのです。自分の家が平穩だから、少しでも困っておられる方を助けてあげようという方がヘルパーになると思うのです。自分が仕事をしているときに、その方にけがをさせたらどうしようかという責任と、自分がやっていると病気になるかするときの保障が何もないので困ります。

(和田) あとは、自分の身を守るといったら資格、Bさんがパソコンを習っている、そこら辺で、もっと自分でも向上させたいという気持ちからですか。

(B) もちろんそうですし、それで少しでも就職に有利であればと思います。

(E) 仕事でパソコンを使っています。経理の方をしています、コンピュータは毎日打ち込みしていますが、仕事に追われてしまっていてできないのです。ちゃんとした教室がいいかなと思って、家にパソコンを買って本格的にしてみたいと思っています。

(和田) 再就職を考えたときには、会計事務所でも。

(E) 資格を持っているわけではないので、かなり大変な仕事なので責任もありますし、父親の傘の下でやっているのです、これから外で普通の会社勤めをして、そこまで責任をもてるかと思ったら、なかなか難しい。ほかの仕事でもいいかなと思っているのですが、なかなか50才を過ぎると仕事がありません。

(G) もともと好きで始めたことが何となくかたちになった感じです。会社組織として1人でやっていますから、今までは心配したことはなかったです。

(和田) そこで、例えば融資を受けるときに何かを感じられましたか。

(G) 融資を受けたことがないのです。最初からいろいろ相談していたのですが、だからよかったのだと思います。よく言われますが、女性1人でやっていく融資というのはすごく難しい、皆さんには絶対に無理だろうと言われました。

(和田) 今の制度は1世帯を基準に年金や保険料、健康保険料が算出されていますが、シングルに対する不公平さとか、やはりシングルが損だとか、カップルが優遇されているのではないかと。

(G) 私は感じませんでした。かえって優遇されているのではないかとということもありました。例えば児童母子手当をいただいたり、そういうのを考えると、私は不公平感は感じませんでした。

(E) これから先、ご主人がある人はいいなと思います。

(梶井) 男性の方もシングルで、結婚されている方は自分が死ぬときは奥さんが看取ってくれるのではないかとという甘えがあるのですが、それがない分だけ備えもかなり気をつけていらっしゃると思いますし、いざというとき、足腰が立たなくなったときにどうするかということを具体的にお考えになっていらっしゃるのでしょうか。

(C) 介護されるのもいやだし、あまり人にお世話にならないように、体を傷めるだけ傷めてころっと逝きたいと思っています。今まで仕事できなかった東南アジアでの山登りを、楽しく続けていきたいです。山登りで、ボランティアの人とつながりもできましたし、毎日動いていなかったら不安になり、体も衰えてくるので、動くだけ動きたいです。

(金子) 具体的に健康づくりを実践されていますか。

(C) 時々山に登りますので、山に登るとすぐわかります。足から来ると。そんなにひどいものではなくて、最低のことしかやっていません。

(F) 規則正しい生活を心掛けています。私は独身ですけども、面倒をみってくれる人はいますよ。私的年金をかけて、みてくれるということは限りませんが。

(B) 市民健診を去年初めて受けました。

(梶井) 不安について、わりと漠然とした不安があるとか、Gさんはお子さんと話したときに、将来に対するサジェスションが全然できなくて、幸せのかたちというのが今は非常にゆれ動いている。不安を通り越してあきらめモードですという言葉もありました。

Gさんは、具体的に何がどのように変われば不安は取り除かれるというものはありますか。ここがこう変わってくれるなら少しは安心できるというものはありますか。

(G) 年金のことがもっと単純にわかるものがあればと望みます。この年になり初めて老後のことを考え始めています。

(金子) 最も大事なものと年金と健康保険がありますので、それがよくわかるような制度に変えるということと、変えたことを常に伝えるということ。若い人で、年金保険を払わなければ当然もらうことができないので、ある意味では自業自得ですが。

(梶井) 不安だけでも、ずっと負担はしていったら。

(E) そうですね。将来、もしその分が空白になって、子供の年金が削られるのは、親としてかわいそうだと思いますので、主人もそれぐらいやれと言うものですから。甘いかなと思ったのですが出しました。でも、本人は何とも感じていないようです。

(梶井) Bさんは教育の負担についてはどうですか。

(B) これから2人が大学になる時期ですので本当に不安で、いまの収入では危ないので私もパートに出ようかと考えました。私立だとかなりの負担です。従って、老後の蓄えは考えたことがありませんでした。とにかく教育費が一番大切なことです。

(金子) 高齢者の調査をすると、60代の貯金が退職金のため一番多いのです。70代も結構持っているのです。50代は教育費と住宅ローンがあるので何もない。老人の無料何とか

というので、お金持ちなのにむしろ優遇するような制度があつて、そのあたりを細かく見ていって、全体としては高齢者にも負担をという意見も強くなっているのです。老人に対する負担をもう少しお願いしようということについてはいかがですか。Eさんは、ご両親からいろいろしてもらっていますが。

(E) 私は親を支えないといけないし、確かに私のところも逆に支えてもらっているような状況ですが、年寄りに負担をかけるのもどうかなという気もします。70代の方というのはもう仕事を退職し、厚生年金が多いのです。若い人でももっと意識を持ってもらって、国民年金をきちっと納めるようにしてもらいたい。今はフリーターが多いですから、最初から納める気がないんです。

(和田) 人間関係について伺います。若い人たちと違ってつながり方とか変わってきているかと思いますが、どのようなネットワークを持っていらっしゃるか。

(A) 最初に若いときに勤めていたときの友達で、それと、習い事をしていたときの友達でグループができています。あとは町内で仲良しが何人かいます。あとは、長く文通している友達がいます。1か月に1回か2回、旅行に行ったりとか、食べておしゃべりして、ストレス解消しています。近所の方では、同年代の方がおられますから、子育てしているときからずっと。深くはないですが、何かのときに頼めるので頼りにはしています。

(B) 私は、子供の幼稚園時代と小学校、中学校時代の親どうしのつきあいです。それから、長年つきあっているお友達というか、お世話になっているのですが、そこは私より年が上の方が多いので勉強になることがあります。

(C) 僕は、職場関係の友達がいます。友達というのは、何かあったらその連中が頼りになります。退職したら彼らも田舎へ帰るので、おいでや、百姓しようと。また、朝早く出て、夜帰るだけですから、地域での活動はあまりないです。

(D) 来年は主人に会長役が回ってくるので、しっかりしないといけないと思っています。それから、電話をかける友達がいて、あと会社にたくさん友達がいます。また、子供がある方とどうしても仲良くなるので、しゃべったり、前の仕事へ行っていたときのパート仲間が10人ぐらいいて、ときどきですが情報交換しています。でも、うちは町内なのです。平均年齢が85才で、年配の人たちが町内に15人ぐらいいらっしゃいます。

(E) 私も、ほとんど朝出ていって帰ってくるだけです。それでも、私と子供で住んでいるので町内の役はしなければいけないのです。3分の1はお年寄りで、高齢者が多いのですが、同じ年代が少ないのです。学生時代の友達とか同じ職場の友達と仲良くしています。単身者が結構いますので、2〜3か月に1回くらいそういう方と会っています。

(和田) そういう方とはいざとなったら助けてもらったりするのですか。

(E) そうです。学生時代の友達は、「子供がみんな大きくなったら、一緒に住もうな」とは言ったりしているのですが、友達でも一緒に暮らすとなると難しいです。勝手気ままになってしまう。何かのときだけ助けてもらえるような。

(F) フリー時間がないから、終わって友達が来る。それでも規則正しい生活をするのです。相談などよくします。

(G) 私はずっと外に出ていますから、仕事関係よりも、それにともなって友達いろいろな人がたくさんいますし、何かあれば助けてくれると思います。

(佐藤) 今までこのぐらい納めてきて、何歳でこれだけになるというようなライフプラン研修をすることによって気づくとか。標準4人世帯で、モデル的なものはやりやすいのですが、特にシングルの方はそのようなカリキュラムで、参加しませんかというやり方をした場合には、時間と暇があれば、皆さん、参加する意欲はありますか。

(C) 絶対受けたらいいと思います。60才で辞めて、あなたの年金支給額はこれぐらい

ですよ、だから支出はこれだけにしなさいという話から進んだのですが、あれはかなりショックですが。そこから始めないと不安は解消しません。たくさんそういうのを作っていただいて、だれでも参加できるような形にするとすばらしいと思います。

（佐藤） 漠然とした不安があつて、数字を見たときに急に具体化するのです。55 才で聞いたときに、「しまった、もっと早く 45 才ぐらいで」と思うのですが、45 才の方を連れてくると、問題意識を持っていないので全然来ないです。その辺がミスマッチなのですが。

（梶井） 呼び込みのタイトルをもう少し工夫した方がいいと思います。まだ大丈夫だと思っている人のセミナーみたいな感じで。先程、皆さんは漠然とした不安とおっしゃっていましたが、それが具体的な不安に変わるわけですね。Cさんがおっしゃったように、ショック療法みたいに感じて、自分のライフプランをはっきり見せて、それで、そのあとどうするかという議論をした方が建設的ですね。呼び込み方の不安がある。

（C） 自分のことだったら早くそういうチャンスがあればと考えます。チャンスがあれば絶対行くべきです。

（梶井） 若い世代にフリーターも増えていきますし、未婚の方もどんどん増えていきますから、一人一人が自立する道というのを早いうちから考えていかなければだめなのではないかと思います。Cさんのように経験なさった方が若い世代に。

（C） それは増えてきました。例えば郵便局の年金保険に入れば、年間 90 万ぐらいになります。そうやって考えられますが、あとでしまったというのが現実です。

（佐藤） 長期家計プランというコーナーがあつて、その前の時間に社会保険のいろいろな勉強をしているわけです。非常にきめ細かくやっていきますし、毎年毎年残る金額が決まってくるのです。それで、あわてる人もいれば、ハッピーだという人もいたりします。そういうのは、厚生年金基金に加入している中堅企業か大企業の方のご夫婦を呼んでやるわけですが、シングルの女性の場合は、うちでやろうとしたらできるのかないつも思っています。個々人で、今までやってきた歴史が全然違うのです。どこかで再就職したとか、パートへ行って 2 年でやめたとか、そうなるとなかなかコンピュータではじけないのです。そういうのを整理して、一人一人、漠然としていた不安が具体化する。

退職金が 60 才のときに入るといふと、これは収入の欄に記入するのですが、逆に税金がかかるのです。そういう項目まで全部拾ってくるわけです。

（F） 厚生年金相談センターでできます。あまり若いときには参考になりませんが、そこそこ国民年金 5 年とか、全部教えてくれます。

（佐藤） 年金のことが全然わからなくても、自分の年金番号を言えば教えてくれます。

PR が行き届いていないですが、東京の霞ヶ関にある中央相談所というのは、ほとんど電話が繋がらないぐらいひっきりなしにかかってきています。

（和田） Gさんは今まで考えたことがないという話でしたが、今日話を聞いていかがでしたか。

（G） 年金に関してはみんな興味を持って、危機感を持っていると思います。こういう人たちがいろいろ見ているのですから、そういう PR をしていただければきつともっと参加する人が増えると思います。シニアプランということだけでもすごくひかれたのです。どんな若い子でも、必ず興味を持つはずですので、是非やっていただければと思います。

（和田） 予定の時間になりました。本日は長時間にわたり貴重なご意見をいただき、本当にありがとうございました。

以上

京都グループ面接 (第3回)

日時 2001年1月21日 10:00~12:00

場所 ルビノ京都堀川

(梶井：司会) まず、介護、それから次の世代の子育て、自分の将来に対する不安、それから、自分のこれからの生きがいや自立、生活上の負担をどのように考えているか。それから、具体的なニーズがあれば出して下さい。自己紹介を兼ねてお願いします。

(A：51才既婚女性) 介護は経験がありませんが、祖母の介護を大学時代に見てきました。自分自身の体力的なものと今後の仕事を考えると、家での介護は無理だと思います。多分、ヘルパーをお願いするとか、病院に入れるとかが私の家庭としては最適だと思います。

(B：50才独身女性) 子供がまだ小学生なので、育児の最中です。シングルで、子供は2人ですが、自分の好きな仕事をさせてもらっているのととても満足しています。介護については、両親ともに早くに亡くしましたので、今は自分自身の介護だけ考えています。子供が自立した時点で自分の自立も考えられますが、できれば自分の本当の人生をそこで考えて送りたいです。あとは、シングルで子供たちを育てていることに関して、国の行政面で、非常に恵まれているようで足りない部分がいっぱいあって、非常に苦労しています。

(C：51才独身女性) 私は2年前に離婚して子供が2人います。子育てはあまり手がからないのですが、50才近くで契約社員になったのですが、生活が何とか維持できるという感じです。母が高齢なので、いつ私に介護が回ってくるのかなと気になっている状態です。ただ、母が具合が悪くなったといって私が仕事を辞めるわけにはいかないし、ヘルパーさんとか制度が変わってきているので、よく知っておきたい。今一番気になっていることが、これからの介護をどのようにやっていくのかということです。

(D：40才既婚女性) 子供は女の子2人です。夫の両親のことは夫の兄弟にお願いするつもりです。自分の両親は76才と74才で、今も元気に働いていますし、心配はないのですが、ぼけないよう健康に気をつけてプールに一緒に行ったり、コンサートとかに誘ったりしています。私たち夫婦だけは子供たちの世話にならないようにと、一緒にスポーツジムに通ったりして、できるだけ自立した生活をして将来のことに気をつけていきたいと思っています。

(E：45才既婚女性) 家族は4人で、私と夫と私の両親です。それまでは両親と私たち2人は別居だったのですが、子供がいないということで身軽さもあり、夫も了承してくれ4人での生活が始まりました。私の両親は、私たちに経済的な不安や負担をかけないようにと考えているようです。母も元気ですし、父は自宅療養ですけれども2人の時間を作ってほしいと思いますので、なるべく放ってあります。将来の不安としては、子供がいないので、どちらが残ったとしても必ず最終的にはだれかの世話にはならなければいけないでしょうから、その時どうしたらいいかということです。

(F：47才既婚女性) 夫の母と同居で、夫が画家ですので、それを手伝いながら子供3人を育てています。夫の母ですが、要介護3に認定されまして、週1回にデイサービスの世話になっています。相談員の仕事を月のうち15日間やっており、夜はお年寄りの家事代行を3~5日ぐらいやっています。私も将来のことを考え、今の契約社員では不安が芽生えてきたので、公務員待遇のところを受けまして、最初の1次試験の筆記だけは合格しましたが、子供の教育費ですごくお金がかかるものですから、今の仕事を割り切って考えていますが、これからは自分の将来のやりがいや生きがいに発展させていきたいと考えています。

(G：55才独身女性) 私は現在、老後生活を一人でしています。子供が娘1人で、50才直前に離婚しましたが、その際、家をもらいましたし、ずいぶん恵まれていました。

ただ、頼りにしていた子供が突然亡くなり、放りだされました。幸い、家もあったのと、貯金もありましたが、突然身寄りがなくなったのです。自分の父親は早く亡くなったので、親の介護も一切知らないのです。母は、96才ですごく元気です。自分の老後は、お金がなくなったら特養でも入るつもりです。

(梶井) 皆さん、親御さんの介護とかご両親の老いを見つめつつ自分と重ね合わせているという話がずいぶん出ていましたけれども、自分の老後を、どの場所で、どのようなかたちで過ごしていきたいということは、具体的にお考えですか。

(A) バブル崩壊後、主人の会社が厳しく、生活に余裕はないのです。私の体力を考えたり、自分の仕事を考えたりすると、きっと母の介護は無理だと思います。母より私の方が先に倒れるのではないかなという気がします。自分の介護については、家族にしてもらうのが一番いいし、理想です。そのとき、主人がいないかもしれないし、娘にお願いしたいけれども、そういうことは絶対してはいけないと思います。

(C) 子供に頼るわけにはいかないし、ケアハウスとかの宣伝を見ても結構費用がかかるみたいですし、自分はどうなるのかなとぼやっと考えているだけです。

(E) 子供がいないので、最終的に夫婦2人でなった時は、自分たちでなんとかやっていきたいです。最後に1人になった時は、情報を集めて、ケアハウスのようなところを捜します。だから、自分が動ける間はできれば一人でがんばりたいなと思います。

(梶井) Fさんは介護保険の恩恵をずいぶん受けられていますが、それがなかったら、お仕事やお母様との同居の両立は無理だったのではないのでしょうか。

(F) ある意味でそうです。母は在宅を希望していますので、母の意思を極力尊重したいと思っています。私自身は、自分一人で生きていけるところまでは生きていきたいけれども、将来は施設に入りたい。そこで、また新しい人生を歩むつもりです。

(梶井) 施設に入って生活の生理的な条件はちゃんと保障してもらって、その中で精神的な自己実現は主体的にやっていきたいという考えですね。

(F) 私も友人から、友人どうしてマンションや一軒屋を借りて、食事だけを一緒にしようという誘われるのですけれども、一線は必ず引いておかねばと思います。それも考えつつ、そしてまた施設も考えつつ、今できることは自分の保障をきちんとしなければいけないと思い、契約社員ではどうなのかということで今、転職を考慮しているところです。

(梶井) Dさんは、具体的にはまだ子育てで一生懸命といったところでしょうか。

(D) 教育費にお金がかかるので、パートで働いてはいますが、あとは、自分たちで老後のお金を使うのだとずっと言い続けていますから、体も鍛えなければいけないし、仕事も、子供が中学になったら社会保険のあるところに勤めようかなと今悩んでいます。

(金子) しばらく教育費がかなりかかりますよね。あと10年くらいはかかりますから、老後ということになかなか回らないのではないかな。

(梶井) 年金については、一つの大きな頼りとお考えになってらっしゃいますね。

(D) 具体的には、どれくらいもらうのか全然わかりません。

(梶井) ご夫婦でぜひ考えたほうがいいという意見がずいぶん出ております。先程、Bさんはシングルで子育て、Dさんから子育ての教育費用は非常に大変だという話が出ましたが、行政の支援が十分ではないとのことでしたので、具体的にお願いします。

(B) 母子貸付を受けていますが、全額支給は絶対にないので、民間の借入れも含めて高校を卒業させました。本人の希望で大学に行きたいということで、貸し付けを受けたのですが、十分に足りず民間を受けるということで、やっていくのが大変です。

(金子) 教育費が非常に重たいので今の年齢では老後のためにまとめてお金を残すということは不可能で、ほとんど子供に注ぎ込んでいます。国がもっと制度的に十分応援してあ

げる必要があります。

(C) 公立の方を選択してくれたのですが、それでも年間 50 万円近く要るのです。奨学金と私は下宿の費用だけ出して、自分であとはやってくれています。上の子も公立なので、私自体にかかる費用は今のところそれほどでもないですが、前に比べて教育費の負担がずいぶん大きくなってきていてしんどいなと感じています。

(金子) 50 代の半ばぐらいまで教育費のことに頭が向いているので、自分の老後のために何かを残すというのは不可能ですか。

(C) 自分の老後のために何かを残すというのは不可能ですね。今は子供の教育費にかけて、何とか生活をする。今度、母が悪くなったらそちらの方に行く。そうすると、自分のことはものすごく先なのです。具体的に何も考えず、目の前のことばかりを考えているのが現状です。

(金子) まず、育児で大変な目に遭って、次は介護にいつて、気づいてみたらかなり自分の体がいかれ、仕事を辞めざるをえない年齢にくるのです。それが次の世代の子供たちには見えているので、そんなに負担なら子供は産まないという選択、あるいは結婚しないということで少子化が進んでいる。京都も全国 3 番目で、東京、北海道、京都で、非常に少子化が進んでいるのだらうなという気がします。その循環をどこかで切らないと、自分のための老後の準備ということにもなかなか頭が動かない時代になりかかっているなという気がします。例えば、そういうことに対して、行政支援がまだ十分ではないという声をもっと出していきなり、ほかにどうしたらいいのかということでご自身の体験みたいなこととか、奨学金を増やしたほうがいいとか。

(梶井) 子供が少なくなりますと将来の年金の支えも少なくなる。子供を持つ人も持たない人も関係なく子供は社会の公共財という考え方がもっと普及して、私たちが介護保険を皆一律に払うように、子供は公共財なのだから、みんなでなんとか教育費を少しずつ負担してくれたらいいかなとはお考えになったことはありますか。

(B) 子供たちには、あきらめざるをえないことがいっぱい出てきます。いろいろな大学を選ぶにしてもいろいろ規定があり、もちろん経済的に払えないからそこへ行けない。そこで勉強する教育費以外に生活費もどんどん切り詰められていくので、精神的にもいい意味の生活をしてないみたいなことがいっぱい起こってきて、すごい悪循環です。

上の子が、「私はもう結婚はしない」と言っています。なぜってというと、「子供は産みたくない」からです。母親と生活していて生活苦ばかり見ているので、なんとか自分一人でやっていくのが精いっぱい、子供とか家庭とかに夢をもたせることができなかったのでしょう。これは私にも責任はあります。

(E) 子供がいないので、教育費という部分では、子供のいる友達から「恵まれているね」と言われます。夫の健康状態がよくなく、私の扶養家族にしていますが、転職の際そういう話をしますと、扶養家族にするのは、サラリーマンの奥さんを扶養家族にするのは非常にあたりまえにしてくれるのに、それが逆転しただけですごいハードルなのです。それから、主人がサラリーマンをもう辞めたいと言ったときに、新宿の年金センターに聞きに行ったのです。240 か月掛けないと将来ただけないと、それまでにあと 6 か月足らなかったのです。それで自分たちの老後が全然違ってくるので、何とかがんばりましたけれども、頑張れない方もいるから、その中間の段階があってもいいのではないかと思いました。また、中高年を対象にしたいろいろな講座が設けられています。今は IT と言われていますけれども、私は介護の分野と保育の分野を育てるような講座があればいいと思います。これからは、介護や保育関係の人材を育成したほうがいいと思います。

(金子) 例えば、2 級の資格を持ったホームヘルパーさんはどんどん増えています、

なかなか働けないわけです。それは、条件が悪いわけです。条件が悪いというのは、1つは介護保険の家事援助の点数が低すぎてという話になり、低すぎたら上げればいいのですが、上げると今度は利用者の負担が大きくなって、重たくなるということがあるのでなかなか上げられない。働けるようにするには、それぞれの負担を重たくしないといけないということが想定されるわけです。そうすると負担が重たくなる。

（梶井） 女性が世帯主になったときに非常にハードルが高いということで、最終的には女性の方が長生きですから、結婚している、していないにかかわらず最終的には女性が世帯主になる可能性が高いのです。そのときに社会的な評価が急に低くなってくるといった不安定さとか自立に対する不安とかがあると思うのですが、

（和田） システム上問題はないのだけれども、世間の見方としてそうなる。私も、住宅手当をとるときに、「前例がありません」と、男性であれば当然出るけれども、ということがありました。仕事を選ぶ、継続する問題で難しいとか、不便に思うこととかありますか。

（F） 私の始末を子供に託すことは私の世代で終わらせなくてはいけないと考え、転職活動中ですが、やはり福利厚生が充実しているところで一生仕事を持ち続けたいです。今、契約で働いていて、給与から年金の保険料 13,300 円を払うわけですが、非常に痛いんです。ですから、13,300 円が 65 才になってどれくらい入ってくるのか。母は、基礎年金の収入だけです。ですからデイサービスのお金だけでとんでしまう。そうすると、もちろん経済的な負担はこちらですし、母の介護に関わる諸費用は予定外のお金なのです。今現状で私と夫の収入でそれが賄われるかという、今までの蓄えを削っていくしかないのです。

末はわからないよと、将来夫と別に住むかもしれないという話もしていますが、彼は私の介護ををすると言っています。だけど、私はいやです。娘には、できればという密かな願いがあります。息子や夫にはいやで、息子のお嫁さんでもいやです。子供の足は引っ張りたくない。だから、子供にも最終的には施設に行くからと宣言しています。

（金子） 子供がもっと小さいときに、もっとご亭主が家事参加されると育児にとっては役立ったと思います。

（F） そういうお父さんを見ている子供が子供を育てていくことが大事だと思います。最近、お父さんが夜に食事を作ってくれると、まずくてもみんな残さず食べています。

（金子） 家事参加はもっと小さいときがいい。大学生や高校生ではやらないよりやったほうがいいけれども、少子化対策からいえば、とにかく生まれてすぐぐらいの、母親が一番大変なときに父親も家事に参加して、週に2回でも。

（F） それが核家族でしたらわりと言いやすいでしょうが、どうしても母がいるとさせたくないという思いが強いんです。私たちは息子にもさせないといけないと思います。

（梶井） 統計的にも、ご主人の小さいころの育児参加が、10年後の夫婦の愛情に非常に影響するという調査結果がありますが、Dさんのお宅はどうですか。

（D） 主人は、私がパートから帰ってきたら一緒に手伝うし、具合が悪ければ洗濯もしてくれます。子供は、「結婚したら子供をたくさん産みたい。お父さんみたいな人と結婚したい」とずっと言っています。

（梶井） 女性の自立で話を聞いていたのですが、女性が自立するためには男性も自立していかなければいけないということで、Cさんはずっと。

（C） 九州の男なので何もしなくて、仕事から帰ってきて子育てと仕事とを両立させて、そのまま共稼ぎしていました。10年後に京都に戻ってきて、もう一度前職を講師でやっていたのですが、仕事の方が遅くなって家のことが何もできなくて、その同居した母より、家の家事は全部しなければいけないと言われ、仕方がないので仕事を辞めてパートに戻ったのです。結婚した時点からよく考えてやっていかないと、私みたいに何でもずっとやっ

ていたら失敗するのだなと思いました。

（梶井） 結局、その時点でせつかく仕事を持っていたとしても、家事や何かで仕事を断念するというので、Fさんの場合も、たとえパートで仕事を続けても福利厚生面では切れていく。

（C） 違います。公務員だったので、扶養はどちらでもできますし、住居手当も多い方を選択できたのですが、今度会社に入ったら「扶養は男がするものだ」とかというのがすぐごく感じられるので、一般の会社と公務員とはずいぶん違うのだなと思いました。

（梶井） そこでも悪循環というか、女性が自立の道からだんだん遠ざけられていくという。やはり、どうしても経済的に夫に頼る。そうすると、いざというときに今度は女性が老後を迎える場合、やはり経済的に不安を抱えなければいけない。

（C） 今の私の会社では手当は最低、2人分の子供の扶養は認定されましたが、それ以上のものはできるだけ避けようとしています。だから、福利厚生や社会保険はいいけれども、将来的にもっとよく考えなくてはいけないなと感じています。

（金子） ということと、もう1つはパラサイトシングルで、30 過ぎても親から全部してもらって何もしないという男女が増えている。だから、育児、家事参加という話と裏腹に、30 過ぎてもまだ親にしてもらっている。それは何かという気がします。

（和田） 子供時代に家族、家庭の中で、子供でも何でも生活の自立ができていなければパラサイトしやすくなるわけですから、子育ての問題とかかわってくるわけです。

（佐藤） 男の育児、家事参加と言う話は簡単ですが、やはり前提としては今の雇用慣行は男中心の社会、企業の理解がないうちは、やりましようと言ってもできない。そこはかなり、男の働くシステム（労働慣行）を相当改善していかないとうまくできないでしょう。

（E） だから男の人ももう少し家事を負担して、女の人ももっと仕事を負担して、その人の生活パターンとか育児・介護の問題が発生したときに、10 時間貸しとか、借りとかあるといいと思います。夫子家庭は大変だと出ています。そういう意味では、時間的なこととか育児の時間がとれないということに関しては男の人も厳しいだろうと思います。

（梶井） 男の一人親家庭と女性の一人親家庭ではそれぞれニーズが違ってくる。男性中心の労働慣行の中で服部さんは女性として働き続けてお子さんも育てられてということで、何かそこに対する負担感とか社会にもう少しこのようなものをとか、経験的にありますか。

（B） 仕事への本格的参加はたぶんできないです。育児に時間を取られるので、重要な仕事は私に回ってこないこともあったのです。今は職場関係がいいのか、責任ある仕事をくださるので、その分育児に負担がかかってきます。

（梶井） 今は情報が氾濫して、自分が本当に必要な情報がどこにあるのかわからないとか、欠けているとかいう実感もあるのではないかと思います。老後とか自分の不安に応えるためにも、こういう情報はこういうかたちであつたら、ということがあれば具体的にご意見を伺いたいと思います。

（B） 常にニュースやテレビなどから聞き取っているつもりなのですが、いろいろな方面へ行って、自分から勉強しなければだめかなと思っています。欲しい情報は、自分の老後についてです。教育については、探してもなかなかニーズに合うようなものがなかったの、いろいろな情報で探していきたいと思っています。

（C） 年金について本を読みましたが、具体的にわからないし、年金相談があると聞いていますが、それが平日しかないのです。そうしますと休んで行かなければならないし、なかなか休めない。パソコンの講座も、できたら費用のかからないところだと思うと、やはり平日になります。ですから、どこから情報を取りたいのですが、サービスの安い講座が休日になれども取れるようにして欲しいです。

（金子） 例えば、厚生年金相談センターというものがあります。そこに返信用の封筒を

付けて出せば資料を送ってくれると思います。年金番号でわかります。

(C) とりあえずそれで知って、これから自分の老後を考えないとだめだと思います。

(G) 1年前になって相談すれば、きっちりといただける金額を教えてください。

(梶井) 情報をどこに求めて、主体的に私たちが最終的には判断して選び取らなくてはいけないということかなと思いますけれども、Eさんは何か情報で。

(E) 欲しい情報としては年金、介護です。必要なときにどのような介護を受けられるか、地域の医師、どこに何があるとかは電話帳や地図である程度はわかりますが、いわゆる評判です。インターネットで探してみたのですが、評判まではやはりわかりません。

(佐藤) 大きい病院ですと、外科部長さんとかが50人ぐらい集まって、ある程度信頼できる病院の京都版の本が出ています。ただ、病院は、ここが五つ星、三つ星とかありえない、そういう広告制限がありますから、むしろ今言われたように、大病院ではなく近くの診療所なのです。それは私もかなり欲しかったので、家内に聞いてもらった口コミです。

(金子) 例えば耳鼻科はいいが内科は悪いということがある。一概に大きいところがみんないいとは限らない。自分のネットワークを作るしかないです。

(B) 私は介護施設を、もっと入居者のニーズに合わせて、値段とか具体的なことをもっとオープンにして欲しいです。今、これから契約制度に措置制度から変わって、私たちが選ぶ時代になってきましたし、要介護1・2・3であればどこら辺があるとか、値段がどれくらいだとか、もっとオープンにして、いろいろなところで見せて欲しいです。

(佐藤) 今の話ですと、措置から契約で、自由契約だから消費者の賢い選択にゆだねられることになっているのですが、いかんせん施設不足なのです。だけど、その特別養護老人ホームというところがいかにオープンにしているのか、例えばボランティアとか、おむつたたみとかをしているとか、そういうことをやっているところは逆にいうと外から自分の施設をどんどん見られる。そういうところはかなり質が高いところです。

(金子) ボランティアが多いところはいいところです。結果的には、サービス水準が高いわけです。ボランティアの手が多いですから。

(F) それと、本音のところは在宅でというところがあるじゃないですか。だから今度逆に、今、在宅で死を迎えたいが施設に入らなければいけないお年寄が多いけれども、もっとオープンにして家族が週に1回でも遊びに行けたりできるような施設がもっとできれば、在宅にこだわっているお年寄りももっとお金を出して家族に負担をかけないようにできます。これが実現できるように、年金をもっと充実してもらって、自分が年取ったときにその年金でなんとかそういう形に持っていけるようなシステムを作って欲しい。

(金子) 2つの問題があって、1つは、年金充実のためには、少子化をどこかで食い止めるということは必ず必要になる。その手立てが見えない。それから施設を利用する場合の家族の意識というのは逆で、先程の亭主の家事参加と同じでほったらかしの人が多いわけで、意識を変えていかなければいけない。だから、亭主の家事参加と同様、教育みたいな問題があります。施設に入れるのはいいけれども、家族が行くようなことをそれこそ若いときから実践しておかないと。

(G) 現実には私は、いろいろ時間がありますから老人ホームなどの資料を取り寄せて研究しています。情報というものは実際にあたって人に聞かないと、新聞広告を頼ってはいけません。年をとったら、自分自身にいろいろな情報を詰め込んで、子供に教育するのではなくて自分を教育しないとこれからは生活できないと思います。

(梶井) 情報も自分が賢く選ぶ。そのための判断を支援してくれるような人間関係のネットワークも必要かと思います。予定の時間になりました。今日は長時間にわたり、貴重なご意見をいただき、本当にありがとうございました。以上

東京グループ面接 (第1回)

日時 2001年2月24日 13:00~15:00

場所 セブンシティ (銀杏の間)

(和田：司会) 日本社会では標準世帯は夫婦と子供2人で一つの単位とみなされてきたことが多かったわけですが、これからシングルの世帯が増えてくると予測されています。これからの社会においてどういうニーズがあるのか、どういうことを整備していかなければいけないのか、個人の人生設計をどうしたらいいのかと。まず自己紹介をお願いします。

(A：55才独身男性) 生まれは東京ですが、新潟県人です。数年前までは2人だったのですが、今は1人です。つれあいの親が同居で、80才を超えていますが、まだ達者です。しかし、ひとたび倒れたら不安です。仕事は早めに勇退するつもりですが、生計を考えたらローンを抱えているし、どうかなと思います。支援関係のボランティア活動にもう少しのめり込みたいと思っています。ある国立公園で、自然観察会をやっているのです。それから運動が好きなので、国家資格を取って、青少年向けのキャンプや野外活動の指導、スポーツ指導などもやっています。

(B：48才独身女性) 出身は九州です。東京の方がもう長くなっています。今、イラスト・図面の会社に籍を置いて、自分でもいろいろやっています。経済的にはこういうご時世ですから苦しいです。両親も、扶養家族もいませんし、ローンもないので、むりやり楽観的に思っているところがあります。田舎の改築した家に東京から10人ぐらい連れていって、1週間泊まらせたり、湯布院が近いのでその辺をデッサン旅行して回ったり、それを何回かくり返したりしています。田舎へはいつ帰るかわからないのですが、やはりいつか戻ろうと思っています。

(和田) そうすると、Bさんは雇用されているのではなくて、自営か何かですか。

(B) いえ、最低限は保証されているのです。会社に身をおいて、週4日出ています。会社の仕事も出たときはやりますが、会社から家に持って帰る仕事もあるのです。それが今暇なので、ちょっと経済的に苦しいです。

(C：42才独身女性) 東京が本籍地で、今は荻窪に住んでいます。短大を出て銀行に長く勤めていたのですが、不良債権問題とかあり、残業ばかりの生活がいやで、自分自身を見直し、ボランティアなど社会参加もしたいということで辞めました。今は派遣登録社員として働いています。両親は70才を過ぎて健在ですが、親も年をとっていきますし、親の老後、自分の老後も含めてどうしようと、40才を過ぎてから真剣に考えるようになりました。幸い住宅ローンはなく、自分1人食べていけるくらいの生活費は稼げます。離婚した姉が近所に住んでいて、いくらか安心です。ただ、子供もいませんし、自分の老後も含めてどのようにしたらいいかなと思っています。有料老人ホームなどの情報が欲しいです。

(和田) 親の老後というか介護の問題が現実的に迫ってくると、それをきっかけに自分の老後はどうしようと一番考える時期に入ってくると思います。

(D：53才独身女性) 5年前に主人が亡くなり、主人の母親と娘と3人暮らしです。夫を失って初めて自分の人生を考えるようになりました。自分は一体何をやりたいのだろうかと。私は料理を作るのが好きなので、料理ができる仕事をやり始めたのです。そのことで生じた問題は、一つは自分の娘の進路を一時ストップして、私を手伝わざるえない状況にさせてしまったことです。もう一つは同居の義理の母ですが、私が仕事のために家を離れていることは、彼女にとってはものすごく不安なのです。だから私の仕事場にずっと一緒にいたいとくっついてくるわけです。そうすると私は仕事ができないものですから、それで精神的にまた苦しくなってくるのです。母親も一緒にいて、娘にもヘルプしないで

いい状況を作るために計画していることがあるのです。義母の様子を見ると、家なんてどうでもいいんだという気持ちが非常に強くなってきたので、今の店を処分して、別なお店をマンションでやりたいなと思っています。

(E : 49 才独身女性) 出身は新宿区ですが、西東京市に引っ越しました。私は5人兄弟の末っ子で、父母と新宿区にいましたが、一昨年に父を亡くしました。保険などに加入していたこともあり、新宿区の土地を全部売り払って、一番上の兄の一家が家を建てて、私と母が西東京市のマンションに入りました。母は今年81才になりますが、幸いに元気です。私は現在、兄の知り合いのお店を週3日手伝っています。私は今、母親の年金と私のパート、あと遺産で生活をしているのですが、母がいつまでも元気だということはありませんので、もう少し確実な収入も考えてはいるのですが、今の状況では年齢的なこともあって仕事は大変見つけにくくなっています。私は40才頃に個人年金保険に入ったのですが、65才になったらいくらもらえるのだろうと。だからパートのお金はほとんど私の老後の方に貯めこんでいます。40才のころからそういうことを考え始めました。今の収入では母がもし亡くなって、国民年金がなくなってしまうと、ちょっと憂鬱ということで、今悩んでいる最中です。

(F : 55 才独身男性) 横浜の出身です。去年の3月までゼネコンにおり、55才で早期退職しました。5年前に家内が亡くなりまして、子供もいなかったものですから、経済面ではあまり気にならなかったのです。前職時のお客から「来ないか」と言われて、2社ですが、顧問的な仕事をしています。仕事人間でしたので、あまり趣味もなく、ゴルフをやる程度だったのですけれども、会社を辞めたらスポーツやボランティア、あるいは1人だから海外にでも移住しようかと、いろいろと楽しい夢を抱いたのですが、また昔の仕事人間に戻りつつあるのが現状です。前の会社は60才まで最小のお金を毎月くれるということと、2つの会社にも出るという状況で、60才まではやっていけるかなと思っています。将来は好きなことでも学べるだろうという感じでおります。

(G : 42 才独身女性) 今、家に79才の母と82才の父がいますが、母が末期ガンの宣告をされています。父は足が不自由で、外へ行くこともできないような状態です。私は小学校の図工の教員をしていましたが、絵の大学を出ただけでしたので、教えるということに対してすごく自分自身に不安があって、4年間だけ勤めて退職しました。それから自宅で漫画やイラストを描く生活を10年近く細々と続けていました。もう半年以上、母との最後の生活が続いています。介護保険も間に合わなくて、父も他人が家の中に入ることに抵抗がありましたので、私が仕事や習い事を断りました。これからのこととか、どうしようかなと不安です。今まではその場その場のことだけ、自分の目の前にあることだけしていましたが、自分のことをもう1回考え直す時期なのかなと思ったりしています。健康を保っていければ、父の年金があるし、私もまた非常勤の産休代替教員の登録をし直すなり、自分ができること、できないことなども考えたりしていきたいと思います。

(佐藤) 失礼ですが、家計はどういうものでなりたっているのですか。

(G) 父の年金です。私の今までの貯えは、学費に費やしてしまいました。それで父の年金とか、それに持ち家ですし、私も一人っ子ですし、ローンもないし。あと、イラストの仕事で本当にごくわずか、年間数万円程度です。

(H : 40 才独身女性) 私は山口県の生まれで、上京してきて19年です。広告代理店に就職しましたが、1年半で辞めました。そこからすぐ転職しています。めでたく離婚して5年になります。子供は10才です。母子というと人によっては暗いイメージがあると思いますが、今はそうではないですね。養育費ももらっていますし、生活していくにあたっては、別れる半年前に3DKの都営住宅に当たりました。しかも昨年、国の機関に勤めて

いたのですが、臨時職員で収入がすごく安かったものですから、減免で家賃が5400円なのです。別れる原因の一つには、夫婦でレストランをやっていたのですが、ほとんど母子家庭状態で、11時ぐらいに終わるのです。バブル崩壊直前にオープンしたものですから、主人が飲み屋に変えたいと言ってきたのです。こうなると11時半が3時になりますよね。私も一人っ子でしたし、離婚したのです。今は派遣スタッフとしてやっております。

(和田) 世の中の仕組みが、夫婦と子供という標準世帯の中で動いていますが、シングルでいることのメリット、デメリットということを聞いてみたいと思います。例えばシングルでいることによって非常に不利なことがあったとか、逆にシングルでよかったとか。

(H) メリットに関していえば水道代、電気代、児童扶養手当、家賃も減免などがあります。私自身は生活の面では離婚のメリットの方が大きいのです。

(梶井) 老後に関してはどうですか。

(H) 山口県で今弟夫婦が3世代同居しています。父も母も、年金生活をしています。今後いい人が現れても籍は入れないと決めています。子供がまだ10才ですし、一緒に暮らすパートナーとしては考えていますが、私の両親については、今、全然不安に思っていない。自分自身の老後については今考えてない、と言ったらおかしいのですが、子供の大学費用として300万円を私はためました。これは甘い考えなのですが、父と母は弟夫婦に家はやろうと思っていると思うのです。そしてたぶん私のために何かしてくれると思っています。

(和田) シングルでいるために、例えばクレジットカードを作ろうと思って作れなかったとか、家を借りようと思って借りられなかったというケースがあるのですが、何かそういったことでデメリットを感じられた経験はないですか。

(C) 私は賃貸を借りたことはないのですが、たしかに女性の場合は保証人が必要というか、なかなか借りるのは難しいというのは聞いたことがあります。私の場合、結構一人でいるのも好きなのです。一人といっても両親もいますし、姉も近所に住んでいますから孤独ではありません。そういう意味のメリットはすごくあると思います。しかし、経済的なデメリットより、友だちはすべて結婚していますし、家族単位で行動するとなると、つきあいも限定されてしまうので、精神的な面でのデメリットはたまに感じます。

(B) 私は兄弟も両親もいません。親戚づきあいはうとうしいのでやめています。今、賃貸のマンションに入っていますが、保証人の欄がその度にひっかかるので、友達に保証人になってもらっています。天涯孤独なわけですが何も不自由を感じません。皆さんは目に見えるものから入っていきますね。年金がいくらとか、貯金額がいくらだとか、子供がいるかないとか。あればあったで同じぐらいデメリット、メリットはあると思います。

(E) 父が2軒家を持っていたのですが、亡くなった後、なかなか厳しい状況で、結局全部を売ったのです。その段階で、年金融資を調べましたら、全く私はあてはまらないし、借りられたにしても微々たるものだということがわかりました。そして、私のような立場だと、マンションのローンを組んで買うということとはできないということを感じました。

(和田) 男性の場合で、Aさんは何かデメリットを感じる、あるいはメリットとまではいかないかもしれませんが、お一人になって不安が増したとか。

(A) いや、そんなことは全然感じません。ただ、親の元を離れて生活したことがないから、生きるためには食べなければいけないなと思います。要するに料理ができないのです。生活の自立ができていないので、それだけが非常にハンディで苦痛に感じています。それが一番です。いい人が現れたらそこだけでも救われるかなと思っています。週の半分くらいは、娘が用意してくれるから助かっています。

(和田) 次に、健康管理や、健康診断についてのお話を伺っていきたいのですが。

〔E〕 私は一昨年ぐらいから意識して、市の商工会議所の春と秋にある健康診断を毎年受けています。というのは姉が更年期で、だいぶひどい不安から神経症みたいなものになってしまったので、それを見ていて自分の健康診断を受けようと思ったのです。

〔F〕 会社の場合、海外に行ったときは2年に1度人間ドックに強制的に入れられます。しかし私は血糖値とかコレステロールが高いので、3か月に1度くらいは病院で血液検査をしていて、ドックには毎年入っていました。

〔和田〕 日常生活で何か、お食事に気をつけているとか。

〔F〕 いや、外食がほとんどですからなるべく土日は家で作ろうと思っています。外食するとどうしても好きなものしか食べないです。血糖値やコレステロールが高いので野菜をよく食べなさいと言われていたのです。

〔D〕 自分で料理できるようになったことがメリットです。あとは主人の保護なしに自立していろいろなことを考えなければならないということでは、娘から、「お母さん、やっと一人前になったね」といわれます。以前は、生活費のほとんどが全部食べるものに費やされていたのですが、今は非常にシンプルな食事です。私自身は結構身体が弱い部分があったのですが、ここ6年間、一度も風邪をひきません。自分できちんと考えて作るようになったということでは、自分自身の身体がわかってきて、一度も健康診断を受けたことがないのです。30代の初めに一度だけガンの検診を受けただけで、あとは全くしていません。なぜなら、見つかったとき、自分はきっとがたがたになるだろうという不安感と、今自分は家族の中心になっているわけだから、がたがたになった姿を見せたくないという。でも、やはり行かなければいけないなと思ったりもします。

〔B〕 私は生まれつきすごい虚弱体質で、いつも入院をくり返していたのです。それで小さいときから病院が怖かったのです。だから健康にはいろいろ気をつけていて、例えば20年前から無農薬野菜を食べていますし、外食もほとんどしません。最近は気功と水泳をしています、水泳ができないときは毎日歩くなど、運動はしています。

〔千保〕 ほかの方は定期検診を1年に1度くらいはやっていらっしゃるでしょうか。

〔G〕 教員をしていたときはしていました。そのあとの区からくる健康診断にも行ったりしていました。ここ何年か、ばたばたしているために行っていません。

〔H〕 私は去年、勤務先で受診しました。自分が倒れると子どもが倒れるので、風邪には本当に気をつけています。

〔G〕 健康診断ではなく、いろいろな時間的な制約がありまして、やはり風邪とか、親の方が弱っているので、例えば外から帰ったらうがいと手洗いをしたりしています。

〔和田〕 次は、経済的なことでお尋ねします。貯蓄の話ですとか、住居のこともできれば一緒にお願いします。経済的な不安とか将来の備え、貯え、見通しですね。これで十分なのかどうか、大丈夫なのか。足りない部分はどのように調達する予定なのかというあたりをお伺いしてみたいと思います。経済的な不安は、今は感じていらっしゃるのでしょうか。

〔A〕 いいえ。子供は大学を出て勤めていますし、1人は片付くし、住まいに関しては今の所にたぶんずっと住むと思います。土地を持っています、税理士によると相続税が何億円もかかるということです。それを軽減するために借金をして、今その借金を返済中なのです。親がアパートを営営していますが、その収入はみんないただいている感じです。

〔梶井〕 ある程度まで行くと皆さん深く考えないで、むりやり楽観視していますね。

〔A〕 そうなんです。70才くらいまで運動できて、その辺で逝きたいなんて思っています。根本的な願望はそうだから、長患いしたら大変だなと思っています。

〔和田〕 今、将来的にはアトリエがある、九州の方にも戻って。

〔B〕 あれはおかげさまで、古い家ですけども、土地も何百坪もあって、奥に山林が

続き、まわりの田んぼは全部自分のところみたいな感じです。貯えはあまりないですけども。そのときになったらいくらか下りるだろうという設定で個人年金をやっているのです。だから保険は無理をしてでも掛けます。その分、今の生活を圧迫していますが。ですから改築のお金にしても全部キャッシュで払い、ローンは一切組みません。今のところ健康ですし、将来的に絵を描いて、それが売れたらいいかなと思っています。不安は考えればありますが、特に感じてないという状態です。

（和田） 個人で自分の生活を守ろうという意味で個人年金をかけていらっしゃるというお話でしたけれども、公的な年金に関しては。

（B） 個人年金は掛けていますが、公的年金は自由業になった時にやめてしまいました。もらえるかどうかわからないからです。私の母が60代で亡くなったのです。働き過ぎが原因だと思いますが、ずっとかけてきたのがぴたっともらえなくなりました。母の世代は保険とか個人年金の制度がなかったのですが、私たちの時代はそれが選択できる社会状況が揃っています。同じくらいのお金だったら、やはりあてにはできないからと、個人年金の方を選択する人が周りに結構います。あてにできないのは悔しいけれど、税金だと思って払っているという人が数人います。

（和田） 将来に関しては何も不安はないわけですから、あとは自分の健康、老後ですね。体が弱ったときにどうするのか。

（B） ただ体さえ丈夫であれば。要するに衣食住のうち食と住は一応保証されていると思うのです。衣と、あと小遣いは自分の個人年金で何とかするのではないかと思います。

（C） 私の世帯は65才から年金という感じです。個人年金をつい1年ぐらい前から始めまして、65才から公的年金が出るかどうかわからないので、60才から受け取れるように年間80万円くらい掛けています。それで今のところは国民年金は税金だと思って、仕方がないから払っています。会社勤めしていた時からの合算で、厚生年金の部分が20年あり、25年積むと最低ラインを受け取れるので、あと数年掛けようかなと思っています。派遣の仕事だと、50才以降は働けるかなという不安ももちろんありますが、自分の老後のために働けるうちに貯めるだけ貯めるつもりです。両親の老後は両親自身の貯金と、2人の年金で、経済的には困らないと思っています。

（和田） Cさんの場合は例えば相続の心配はないのですか。

（C） そうですね。父が亡くなった場合には母の控除の部分が大きいですね。ですから賄えるのですが、母も亡くなった場合は、今住んでいる自宅を売却して、小さなマンションにでも移ろうかと考えています。しかし、相続税を払うと残らないだろうと思います。

（和田） そうすると、老後の住まいとか、自分がどうするかは。

（C） そうですね。マンションで暮らそうというイメージを持っています。

（D） 住居はシンプルにしようということで、いろいろなものを整理しようと。自営なので、自分で今後やっていくしかないのですけれども、これから勉強していきます。

保険はずっと掛けています。自分が今新しい仕事に相当量の費用を費やしているので、それを資本にしてやっていくしかないかなという感じがしています。

（E） 私は40を境にして表を作りました。60～70才で厚生年金は少しありますが、老後の支えは、ほとんど国民年金なのです。私はしっかり頼りにしています。それから、国民年金基金とJAの農協共済にも入りました。60才以降、月に約20万円の生活を目指しています。ですからパート代のほとんどはそこに費やしているので厳しい状況です。ただ60～65才ぐらいまでは払い込む時期も重なっているのです。購入したマンションの名義だけは母と私で6：4ぐらいになっています。父が変額保険で大きな負債を残してしまったので、相続は放棄しました。母の相続のときは、兄弟も5人いますし、どうなるかわから

ないのですけれども、もしだめだったら1LDKでもいいから賃貸で借りられたらと思っています。

(和田) Fさんは先程、お子さんもいらっしやらないということで、経済的なことでは問題ないのではないかというお話でしたけれども。

(F) 今、戸建ての実家に住んでいますが、最終的にはこの家を担保にして、死ぬまでお金をいただくというかたちで横浜市がやってくれれば、そうやってくれなければ信託銀行などに頼むつもりです。それ以前に戸建てではしんどいからマンションに引越してとか、老人ホームに入るとかいう計画もあります。それから、早々と退職したものですから、株をやったりして、何とか退職金をベースに自分なりの資金管理をしていくつもりです。

(和田) 動けなくなったときに、介護してもらいたい相手は老人ホームですか。

(F) パートナーが見つければまた別ですが、見つかっても入ろうと思っています。子供がいないので、結局それが一番いいのかなと思っているのです。

(G) 私はすごく問題があります。一時期漫画の仕事をしていた時は、毎月定期的には支払えないということで国民年金の停止手続きがあるのです。それをやめてしまってから、そのままずっと過ごしています。保険の方もその前に1回、母が脳梗塞で入院したのですが、その際に保険も解約しました。だから結構私の先々は何の保障もないので、どうしようかなという状態です。貯金もないですし、どうしたらいいのか不安です。道を歩いていてごみ箱をあさっている人を見ると、「私も将来はああなるのかな」と思ったりもします。

(千保) 申請して一応免除するという制度があって、多くの人が利用しています。申請していれば、国民年金は10にはならないのですが、手続きはわりあい確認されていない。ただ、届けていますと確認されていけば、それは税金が投入されていますから、ゼロにならないのです。ですから届けるという確認は、今のような状態ですと必要だと思います。

(G) よく国民年金の通知は来ているのですけれども、毎年これで何かやめる手続きをしてくださいという用紙が来ると、それに理由を書いて一応提出はしていたのですが、でももらえないのではないかなと思っていたのですが、それはもらえるのですか。

(千保) 届け出していれば大丈夫なのです。全額ではありませんけれども。

(和田) Gさんご自身は仕事をなさると思っていらっしやるということですが、仕事で何か計画をされていることはありますか。

(G) やはり小学校の図工の産休代用教員再登録ですね。あとは今絵を描く仕事ですが、それも親を養っていくほどは難しいと思います。あとはできる仕事と言えば、事務系の仕事であればアルバイトに行きながらとか、ビルの掃除とかですね。

(佐藤) 先程Eさんですか、40才から老後の収支の試算をされていますが、それはもうほとんど独学ですか。

(E) そうです。『日経マネー』を見たり、消費者センターの無料講座みたいなものがありますが、ファイナンシャルプランナーの保険の話の聞いたり、あとは全く独学です。プランナーの話を聞いて、自分で考えてみました。65才までにたくさんもらいたいとか、その後の疑問もあって、表を作りました。そうするとすごく現実的に見えてきました。支出の方はまだあまり考えていませんが、収入に関してはすごく現実的にわかりました。

(佐藤) 企業にお勤めになっているFさんやAさんはいかがですか。

(A) それは当然、ある程度は考えていますね。ローンの支払いも含めてです。

(佐藤) 会社でそういう退職セミナーみたいなものはなかったですか。

(E) 兄夫婦は会社の方であったみたいです。

(F) 厚生年金の証書も、辞めるときにはじめてもらいました。また、こんな感じになるだろうというのも、本当に少し教えてくれた程度で、あまり教えてくれませんでした。

あまりあてにしないで生きていかなければいけないのかなという気持ちがあります。それは小遣いにでもしておこうというような気持ちでないと甘いかなと思います。友達が「家を貸してあげるからそこにいらっしゃいよ」と。それで、畑でも耕して近所のいろいろなところとつきあったらどうですかなんていうことなのです。東京だと20万だとしんどいけど、地方だと楽だと彼は言いたかったのです。

（和田）最後に人間関係とか、地域社会のことでお尋ねしたいと思います。

（A）あまり近所とは、かかわってないです。ボランティアにかかわっているとって地域外なのです。僕は近所の人とつきあうのはいやです。だから離れてやっています。森林の保全保護をやっているのですけれども、やはり人は必要だと思います。

（和田）生きていくうえで人は必要ですか。

（A）パートナーもやはりいた方がいいと思います。それから、運動が好きだからスポーツクラブに入っていますが、環境が違った人がいっぱいいるから結構おもしろいです。

（和田）Aさんは退屈しない人生と言うか、いろいろなご興味がおありですね。

（A）興味は結構ある方です。だけど、出かけるにもお金はかかります。年間でスキーとかいろいろスポーツもやっていますから。だから飽きはないと思います。

（和田）Bさんは、絵をやっている関係で。

（B）私は東京に20年以上住んでいますが、杉並はただ住んでいるだけで、全然かわっていません。向こうの同級生と話したのですが、やはり田舎での生活も、都会での生活も両方不自然という感じが私はするのです。自分のお金、生活費ではなく、何か生産的な行動ができればいいかなと思っています。それが今の自分のテーマですね。何かできるのではないかと。それは美術活動とか文化活動とか入れると何となくは出来上がっていくのではないかとと思っています。東京と違っていい面もありますが、土足で踏み込んでくるようなところがあります。それがおつきあいがいやだとおっしゃられるところもあるのですが、その辺をうまくやっていかなければいけない。

（和田）Cさんは、お仕事変わられて、人間関係のおつきあいが変わりましたか。

（C）銀行勤務時代の先輩や後輩とか、元上司の方であるとか、いろいろありますが、それでも利害関係が伴わなくてつきあいが続いている方も十何人いて、ありがたいと思います。一方で二十数年来の同窓生というか、ほとんど奥さんですけれども、ずっと長いつきあいをしている友達も5～6人はいます。たぶん一生ずっとつきあっていくと思います。気が合えば、男性の方でしたらパートナーともなりうるのであれば。でも私もHさんみたいに、実は籍はあまり入れたくないと考えています。

（和田）その同窓生の方、5～6人のお友達というのはどのぐらいの頻度で、どんな会い方をしていらっしゃいますか。

（C）そうですね。電話とかeメールとか。パソコンのメールでは、1週間に1度くらいやりとりとかする人もいますし、もちろんもってない方もいますから、2～3か月に1度会う感じです。一番親しい人とは1か月に1度くらい食事をしたりします。

（和田）シングルでいることの精神的なデメリットはありますか。

（C）パートナーも子供も全部連れて旅行に参加したらしんどいです。同じ立場の人が1人か2人、そのときいたのですが、どうしてもそういう人と話してしまいます。

（和田）例えば仲良くなる方がシングルの人が多いというようなことはありますか。

（B）私は半々です。30代の友達が多いのですよ。40代も多いのですけれども。そうすると子育て真っ最中で、子育ては役割がなければいけないのですよ。お姑さんでもない友達でもない。ひと回り下ですからね。母親としてはそういう人はほしいのですよね。両方働いていらっしゃると。だからそれをわかっていかないと近づけないですね。

(C) 家族の方が私の立場を考えてくれる人だったら、すごくつきあいやすいのですが、家族というのを発散されるとしんどいです。やはり中心に回るじゃないですか。だからそのあたりに違和感を感じます

(梶井) 健康なときの人間関係は、お友達とかいろいろある。それから田舎の方、地方の方は少し難しいけれどもという話もありましたけれども、健康でなくなったとき、いざというときに救急車を呼んでくれる人はそばにいるかということはいかがでしょうか。

(C) 2年前にキャリアウーマンの友達が亡くなったのですが、やはり1人暮らしだと怖いなというのは切々と感じました。ですから将来的に両親が亡くなると、近くに姉はいますけれどもどうなるかわからないので、セコムとか公的機関とか、パートナーが見つからなかった場合はそういうのを真剣にやはり考えます。

(梶井) ある程度判断力と、足腰が立っている間に死に場所を決めるという決断もして。

(C) 判断力がだんだんにぶつてきたりすると、変な人にだまされるかもしれません。

(梶井) 皆さん、いざというときの場所と人をちゃんと考えられているかどうかということもお聞きしたいと思いますので、その辺に触れて続けて下さい。

(D) 今、義理の母を抱えています。主人が亡くなった後どうなったかという、義母は、すべて精神的なものを私にバーっとぶつけてくるので、私自身が耐えられなくなってきているのです。彼女は自分自身がないのです。他人を通して自分を生きているというか、私の一挙一動を把握していないと不安なのです。彼女の老後を見ることが苦痛なのではなくて、私自身が支配されているところに苦しみがあるのです。彼女以外の周りの方たちとの関係は100%に近いぐらいよくて、いろいろな方たちの支えでもって私は生きてきているという実感があります。いざというときは、娘だろうと思うのですがけれども、私は娘の足かせになりたくないのです。だから何とかして自立して1人で生きていかなければならないと、そういう道を探したいというのが自分の願いなのです。80才まで生きるか90才まで生きるかわかりませんが、そういうふうになった時でも何かちゃんと個として生きていきたい。そのためにも、何か公的なヘルプがあれば、今後できてくれればいいなと祈っています。

(和田) 公的ヘルプがあればというのは、具体的にはどんなイメージでしょうか。

(D) だから身体的なものをヘルプしてくれるということと、自分の生きがいをもっと発展させていけるような趣味ですね。趣味を単に個が楽しむものに終わらせず生き甲斐に発展させられるように、外的なもので評価してあげる。「あなたすばらしいですよ」と言えるようなものがあるとやはり生きがいにつながるのではないのでしょうか。

(和田) そうですね。人から評価されるというチャンス、機会が。

(D) 自分は年も老いて、腕も落ちてきてしまっている、こんなのを發表できないみたいな感覚ってあると思うのです。だからそういうものができうるようなものです。

(E) 日本の場合、なかなか利用できる施設がありません。もう何年待ちとかですね。クラスメートが5~6人いますが、冗談半分で、老後は「亭主も何もいらないから、私たちがガヤガヤ暮らせる家を探そう」なんていう話もあるのです。今は皆さんそれぞれ親の介護とかの問題がばたばたありまして、じっくりその話をする機会はないですけれども。地元の町内会というのもマンションで入っていませんし、管理組合とかにも参加してないので、やはりちょっと壁があります。今具体的に一つあるといたら、総合警備の非常ボタンですね。管理室のベルが何分鳴り続けると総合警備の方が来てくれるというのができたらいいなと思っています。

(F) 亡くなった家内を中心に地域との付き合いがあったものですから、会社人間だったために、それが切れちゃうと何もなくなりましたので、たまたま町内会の盆踊りの手伝いなどにかりだされ、それをきっかけに青少年指導員に入っていて、それを通じて少し

ずつ知り合いができています。近くに弟がいますので、弟に連絡できるようにしています。

〔G〕 地域の方々とは挨拶ぐらいでずっと過ごしてきたのですが、勤め先が遠かったので、朝が早く、帰りは遅い生活だったのです。父は家の中にこもっていますけれども、母は地域の方々と一緒にする機会もありましたので、声をかけていただくことも多くなりました。何かあったら頼ってね、と言われて地域の方と接していく中で、安心感みたいなことは最近はずいぶんあると感じています。もっと年老いて体が弱ってきたときに公共的な援助はあってほしいです。

〔H〕 人が好きで人の中に飛び込まなければ自分の成長はないと思っています。あと信仰もしていますし、地域とは密接にかかわりがあると思います。あと都営は今240所帯ありまして、地域活動はものすごく活発です。でも夏祭りとかもどんどん、〇-157ぐらいからなくなりましたし、本当に地域といってもだんだんそういうのがなくなってきています。でも私は地域だけではなくて友人関係も、職場でもそうですが、自分から誠実な人を切り離さなければ、絶対に友情は続くと思っています。

〔和田〕 時間になりました。今日は長時間にわたり、貴重なご意見をいただきありがとうございました。

以上

東京グループ面接 (第2回)

日時 2001年2月24日 17:00~19:00

場所 セブンシティ (銀杏の間)

(梶井：司会) 最初に自己紹介を兼ねて、現在の自分の状況や家族のこと、老後についての心構え、問題や不安などについてお話いただきたいと思います。

A：46才独身女性) 3か月前に夫と死別して、現在は独身で母と暮らしています。以前保険会社で秘書をしていましたが、現在は学会、国際会議に携わる仕事をしています。夫と死別してからは、これからのことをいろいろ考えるようになりました。現在は持家なので家は何とかなると思いますが、老後のことはやはり経済的なことや、仕事もこの先、正社員ではないので大丈夫かとか、子供がいなくて、だんだん歳をとってきて自分で自分のことができなくなった時に、そのところを自分で考えていかなければいけないと最近すごく思います。深く考えていませんでしたが、やはり子供がいる人といない人とは、年を取ってから精神的なものが違うのではないかと最近すごく思うようになりました。

(B：53才独身男性) 専門学校の講師をしています。年齢は50代前半で、1人です。60才ぐらいを契機に田舎の九州に帰ろうと思っています。天涯孤独ですが、逆に東京だからものすごく生活が充実しているので、つい日常が楽しくなり、老後の不安もなく、ノー天気にも暮らしていると言われます。老後は遠い話ではなく、会社勤めの人や公務員の人と同じように福岡や大阪に帰ろうとしていて、60才で辞めて急に亡くなった人の話を聞いたことがあります、働いた末に辞めて60才ぐらいで急に死にたくないと思います。

(C：41才独身女性) 家族は両親と11才の娘が1人います。一度結婚して離婚したので、今の家はもともと住んでいた家ですが、私が結婚している間に二世帯住宅として建てたものです。弟が2年前に結婚してから弟夫婦が2階に住んでいて、1月に子供まで生まれました。だから今後のことを考えると姑と小姑が下にいて、とても複雑だと思います。今は保険会社で営業をしています。今年で9年目になります。お客さまには老後のために年金を準備しましょうとか、日頃説明していますが、あらためて自分で今回ライフサイクルの表を作ってみて、本当にこれで大丈夫かなと悩んでしまいました。健康管理が大切と思いながらも健康を悪くしてしまうような生活をしているので、気をつけたいと思います。

(D：54才独身女性) 離婚して8年目で、25才の息子と同居しています。長女は米国で結婚して住んでいますが、息子が卒業見込みで就職活動中で、決まった際には出ていく予定です。私も仕事をして毎日生活に追われていて、貯金はゼロ、家もなしという生活で、老後はとても不安を感じます。健康面も自分で管理しなければということで、健康だけはあると思って。子供の世話にはなりたくないという意識が非常に強いものですから、子供たちには将来私の面倒はみなくていいと言い聞かせています。たまたま周りに私と同じような境遇の方で仲がいい方がいらっしゃいますので、将来2人で暮らそうという話も出ています。先はわかりませんが、子供には面倒をみてもらわないで、自活をしていきたいと思います。結婚している時、パート勤めをしていましたが、離婚を契機に正社員になりました。裁判離婚で、慰謝料と財産分与と養育費はいらないから離婚してほしいという条件で出ましたので、本当にゼロからのスタートでした。健康であれば、働けば何とかなると思っていましたが、年を取ってから、やはりお金がすごく大切だということがよくわかりました。

(E：49才独身女性) 私も離婚して子供と住んでいます。裁判にかけましたが、一切私の方が下りて、慰謝料も取らないで何も持たないで出ました。それから子供が公立の高校に入り、うちは母子ということで一時的に区の施設に入りましたが、すぐ都の住宅に応募して、何度目かに母子優先で入れました。それからがむしろに仕事をしてきましたが、

何年か前にリストラで仕事がなくなりました。娘は社会人になったので教育費はかかりませんが、今まで預金した分を切り崩して、あとはパートの職を探していますがなかなかなくて、今の状態でここまでできています。アルバイトはあればやるという形です。

老後はやはり健康面で、お金も大事ですが、今は健康を重点的に考えてストレスなどもためないようにしています。ストレスをためてしまう性格なので、週に1回ぐらいダンスとか、体を動かすことでストレスを発散させています。老後のことはやはり切実に迫ってきていますが、世の中を見るとぼけたり、ああいうことが一番いやです。子供に迷惑をかけたくないというのがすごく強いので、そういうことに気をつけていきたいと思います。

(F: 50才独身女性) 私は5年前に別居して、別居2年で離婚して、今年で3年になります。今私は次女と一緒に住んでいます。別居の時に都営住宅に応募しましたが入れなくて、2DKの家賃10万円強を稼ぐだけでも大変でした。別居からだったので夫からの援助が全くなくて、仕事があれば何でもやりました。今でいう介護サービスの会社で2級のヘルパーの資格を無料で取らせてくれる制度があり、それで2級の介護ヘルパーの資格を取りましたが、仕事に波があるのです。年寄りの方が入院したり、亡くなると仕事が切れてしまうので、全く収入が安定しませんでした。家賃10万円を稼ぐために、朝8時～9時半の1時間半、事務所の掃除などに通いました。そして去年母子優遇で都営アパートに入れたので、家賃は約3分の1に軽減されました。仕事は今お掃除と週2回の家事援助と、あとは調査会社の仕事がある時にお手伝いするという形です。仕事の波があるので収入は不安定で、今月は2万円くらいしかありませんが、何とかかなるかなという感じでいます。他人をあてにしないで、そのときはそのときで自分でやっていくならば、プライドを捨てれば、お掃除でも何でも仕事はあります。

なぜか私は40才になった時に老後のことを考え出して、民間の保険会社の個人年金や、酒屋に嫁いでいたので酒類組合の年金制度に入ったりしました。ずっと今もかけているので、老後はぜいたくをしなくても何かやれると思っています。次女は私立大学に行きたいというので、多少無理と思いますが行かせようと思っています。

(G: 51才独身女性) 大田区の方の高齢者用の給食サービスセンターで調理師として働いています。結婚制度に疑問があったことなどから、結婚しないで現在に至っています。現在の給食センター関係で大田区と東京都のネットワークがあり、そこで情報を得ていて、最近老後について考えるようになりました。やはり一番不安なのは経済的な問題です。現在もボランティア的な仕事で、ほとんど生活費は今までの貯金を崩して生活しています。グループリビングとかコレクティブハウスのような形の生活をしていきたいと思っています。都営住宅の空室の増加を見ると、そういう所をコレクティブハウスか、グループリビングの場所として開放して欲しいと思います。もう1つは、高齢者の方たちのグループのネットワークがあって、そこで得る情報は参考になります。民間の高齢者向け福祉マンションは高いですが、NPOを作って地域活動をしている人たちは、例えば民間アパートを1棟借りて、高齢者の方たちが一緒に共同生活をして、それをサポートしていくという形、それをホームリビングと名付けたりしています。それは地域の病院とコンタクトを取ったりして少しずつ出てきている。そういう情報を知ると、老後のことは悲観して考えず、地域の中でどのような生活をするとか、友人関係を築けばどうにかなると思っています。自分の健康には気をつけています。特にきちんとした食生活をしようとしています。

(梶井) ひと通りお話していただきましたが、年金制度、それから健康保険、例えば国民健康保険についての負担感とか不安感、特にAさんなどは今までご主人が掛けていたものを今度は掛けなければいけないからシングルは負担が大きいとか、デメリットがあるとか、そんなところも含めて制度に対する不安をひと通りお聞きしたいと思います。

(A) それはあまり感じていません。現在入っているのは国民年金ですが、遺族年金の請求に行った時に、私はずっと働いてきたから自分の年金といろいろ計算していただいたら、もう少し払っていけば結構暮らせる分が出ると言われたので、あまり深く考えていません。あと、民間の年金に入っていました、会社が破綻した場合 90%保障になるので、この4月から変えたため、民間の保険は今入っていません。だからそこが不安です。

(B) 私は国民年金を20年近く払っています。もらえるのでしょ、6~7万円ですから。あとは郵便局の一時払養老年金を払っていますが、それで食べていけるとも思えないし、田舎の田んぼとかありますから、それを耕せばいいと思っています。他に国民健康保険と掛け捨ての傷害保険をやっているだけです。国民年金だけで、民間のものはないです。でも頼りにはならないから60才過ぎたらまた考えなければいけない、でもどうにかなるだろうということで、今のところ不安はなくて突っ走って60才までいこうかと…。あとは決して1人ということではなくて、終生のパートナーを探す気持ちはあります。

(C) うちでは厚生年金で、25年間勤めての話ですが、65才から月額13万円出る予定です。豊かな老後を過ごすためには38万円ぐらいは必要ですが、厚生年金と個人年金を足してもとても38万円には足りません。子供が11才でこれから教育費がかかります。それは学資保険として別枠で準備していて、一時払養老などにも入っていますが、あらためて今回自分でライフサイクルを作ってみて、どうしたらいいのか悩んでしまいました。

(D) 当初は厚生年金に私自身も働いて掛けていましたが、会社がいろいろと事情があって、国民年金を掛けはじめました。ところが私もずっと掛けていなくて未払いです。それはあとで一括で払えばいいということになっていますが、この先また国民年金を掛けていくと思いますが、そうすると本当に生活できない状況になってきます。民間の年金も何も掛けておらず、本当に無謀ですが、今まで考えるゆとりもなかったという状況でした。

(E) 私は20才代の時に、厚生年金をやめて、まとまったお金をもらったことがあります。だけど期間としてはそれは見てくれる。あとはサラリーマンの妻としての期間も見えてくれるから、ずっと国民年金は掛け続けなければもらえないと言われて掛け続けていますが、掛けた額は本当に少ないので、すごく少ないよと言われました。民間のものは私がある生命保険会社に勤めていて、それに子供を入れたら、倒産してしまっ…。だから一般の生命保険に入るのも今の時代はどうなるかわからない。郵便局のだけは最低のものに入りましたが、あとはいざ考えたら不安の材料ばかりです。別れた時にマンションが共有名義で私も半分名義を持っているので、いざとなったらそういうものも。

(G) 民間の年金は掛けていません。厚生年金がまだ25年になっていません。現在は国民年金です。危ないという話も聞きますが、額は減っても厚生年金や国民年金は大丈夫だろうという話も聞くので、もらえるだろうということで、あとは何も考えていません。

(梶井) 老後の住宅のことについて先程Gさんからお話が出ましたが、Aさんは住宅についてはどういう備えをしておられますか。

(A) 今母と住んでいる所は分譲マンションで母の名義ですが、ローンは終わっていて、買い替えたいと思いますが、住宅は結構負担になるのでどうしようかと思っています。

(D) 今都民住宅に住んでいます。家賃は8万円強ですが、非常に厳しい状況です。私は8万円払っていけば頭金をためてマンションでも買おうかという希望を持っています。住む所を確保しないと安心できないので。娘も今は米国にいますが、私のように離婚して帰ってくるかもわからないし、その時に受け入れる場所を作っておいてあげたいと思って。

(梶井) 先程健康であればということが出ましたが、健康面についてはいかがですか。

(G) 私の場合は食事をきちんとすることと、運動、例えば気功をやったり、ウォーキングしたり、あまりお金をかけないでやることを考えています。

〔F〕 私は40才とか50才の節目で健康診断をしています。あとは定期的に献血しています。そうするとコレステロール値などがわかって、自分でバロメーターにしています。もう10年近く、週1回太極拳に行っています。食事は野菜を多めに摂ろうと心掛けたりして、食生活もなるべく気をつけています。

〔E〕 食べ物は添加物の少ない物とか、無農薬の物とか、そういう情報を入手して、きちっと食事を家で食べるようにしています。健康診断は区から来るものは一応受けています。一番はストレスをためないことですが、どうしても対人関係でためてしまうので、音楽を聞いたりダンスをしたりして、コントロールするようにしています。

〔D〕 ストレスをためて不規則な生活をしてきたので、3年前に血圧が200ぐらいまで上がり、眼底出血しました。ストレスをためないことと、以前外食が多かったのですが、今は家で自分で作って食べるようにしています。血圧の薬を飲み、ストレスをためないように詩吟をやっています。休日には友達とよく散歩をしたり、温泉に行ったりしています。

〔C〕 年に1回は人間ドックを受けています。少しでも具合が悪くなったらすぐ病院に行くようにしています。恵まれているのは母が食事を作ってくれることで、母は糖尿病なので糖尿病食でカロリー控えめで、それを私も食べていて、健康面で助かっています。ストレス解消法としては一応スポーツクラブに登録しています。よく仕事の合間にマッサージに行っていました。最近鍼の方が私には効くようです。時間的なゆとり感はないですが、仕事の合間に絵を見に行ったり、デパートに買い物に行ったりしています。

〔梶井〕 他の方は余暇に関してはどうですか。ゆとりの時間がどの程度確保できているか。

〔D〕 自分で積極的につくるようにしています。スケジュールがいっぱいなので、「この時間は絶対自分の時間にしよう」と優先させる。そうしないと時間はつくれないです。

〔B〕 私の難題は肥満です。その対策は別にしていませんが、3食ほとんど外食なのでなるべくバランス良くと考えています。一人暮らしの気楽さもあり、東京という大きさの中で、土曜、日曜は映画、芝居、スポーツ、美術などに行きっぱなしです。健康診断は区から来ます。胃の検診とか、1回受けたことがあります。40才以上の人に来ます。

〔A〕 最近風邪をひくとすぐにのどにくるので、風邪をひきそうと思ったら仕事を無理しません。あとは30代後半に体調を崩してから玄米食と添加物が入っていない物を食べるようにしたらだいぶ治りました。また最近甘い物を食べてしまうので、食生活に気をつけようと思っています。健康診断は最近は何回も受けていますが、今年は何回も受けています。

〔G〕 ずっと事務系の仕事をやっていて調理の現場に入ったので、4年前はすごいストレスでした。ただ同じ時期に猫を飼いはじめました。ぼーっとしている時間、猫を眺めているだけで幸せな気分になり、ストレス解消になっています。

〔F〕 区民館で月2回手編みのサークルがあって、仕事がない時はそれに行ったりして、手編みをしないでしゃべって帰ることもありますが、それもストレス解消だと思います。映画が好きで見に行ったり、母や妹たちと安くておいしい物を食べに行ったり、それもストレス解消になります。旅行には行けないので、お金をかけないで東京で楽しんでいます。

〔梶井〕 都会はいろいろなチャンネルがありますから、そういう意味ではBさんも最初に指摘されていましたが、シングルが生きやすい町ですね。

〔B〕 独身でうろうろしていると福岡あたりだと奇異な目で見られますが、東京はいろいろな面での許容度が大きい、器が大きいということですね。

〔F〕 先週妹たちと池袋のバイキングを食べに行った時に、安くておいしかったので、「東京にいたらつましく生活すれば、家さえあれば3～4万円で済む」という話をしたのです。だから先程、老後38万円必要とおっしゃったとき、「うっそー」と思いました。

〔梶井〕 例えばイタリア料理で、都会は競争があるから、1万円のフルコースがあれば、

量があっておいしいのに千円で食べられる所もある。それが地方ではイタリア料理店が1つしかなくて、そこが例えば3千円とか。そのように選択のチャンネルがありますね。

(F) 新聞の折り込みでも、朝日タウンニュースなどで見るとバイキングとかやっていて、そのクーポンを持っていけば割引があるとすぐに行こうということになる。それで得しておいしかったりすると、「わあー、今日は良かったね」とストレス解消になる。

(梶井) 先程から「チャンネル」という言葉を使いますが、東京ならではの情報網が発達しているということですが、特にシングル向けの情報に関して、こういうものがもっとあったらというニーズはありますか。例えばライフプランなど年金の情報とか、趣味、医療、健康、介護、仕事、住まい、地域などの情報やこれがあったらという情報ニーズを、それから、新聞で欲しいとか、広報でとか、インターネットでとか、手段の面についても。

(和田) 先程Gさんが、高齢者のネットワークが充実していて、そこからの情報が非常に価値があるというお話をされましたが、具体的にどういうところで得た情報ですか。

(G) 同じ給食サービスをしている地域と東京都のネットワークがあり、社会福祉協議会やボランティアセンターで得られる情報と、そこに集まってくる人たちから得られる情報です。これをもう少し社会化するには、例えば図書館を活用できないものかと思ったのですが。都の広報があり、各地区の広報があるから、やはり都の広報が一番いいのかと。

(F) 都の広報は区民センターに置いてあります。新聞を取ると各戸に配付されます。出張所、区民センターには都とその区のもの、外国語のものと全部置いてあります。

(G) いつも利用するスーパーに区報は必ずあるから手に入りますが、都のものは。

(梶井) そうすると先程のGさんの高齢者向けの情報を広報で流そうと思えば、都報よりも区報がいいですね。特にお年寄りがお金をかけずに見られるというのは区報ですね。

(和田) Gさんは住まいの情報を集めておられるような話をされていましたが。

(G) コレクティブハウスなどに関しても、自分の仕事と結びついて得られた情報なので、それがもっと気軽に手に入る場所があればいいなとつくづく感じます。たぶんパソコンを持っている人だったらインターネットでかなり手軽に情報が手に入るのでしょうか。

(F) 都のお知らせはラジオでも流していますが、「必要な方は電話で」と言われても、書きとめるものがないともうおしまいです。だからあまり意味がないかもしれません。

(E) 「リビング」というのが地域に配られています、結構情報源になります。

医療とか介護の情報は、やはりあるに越したことはないので、欲しいです。

(D) 一番心配なのは介護のことや医療関係です。両親は亡くなりましたが、両親の具合が悪い時は私も介護をして本当に大変な思いをしたので、自分でも老人福祉や介護のこと、時間があればボランティアもしたいと思いますが、生活に追われてボランティアはできない状態です。介護については、何かの時にどこに連絡して、情報を例えば都に聞くにはどこに聞けばいいのか、細かい情報がわかりません。大ざっぱにはわかりますが、細かく聞きたい時にどこに連絡したらいいのかという、そういうものがあればいいと思います。

(佐藤) 標準4人世帯だとすぐわかる情報でも、シングルの場合はこんな情報ではなく、もっとこういう情報をととなると、おそらく世の中全体ではシングルの女性は増えてきつてもまだ少数派だから、そのニーズまで行き当たっていないというか、例えば区報でも何でも。だからそういう人たちを組織化すればいいと簡単には言えますが、なかなか難しい話です。

(梶井) 世帯単位の情報はあるがシングルに対してはないという意見が他地域で出ました。

(D) どうしようかと悩んだ時にそういうものがあると非常に助かります。結婚している人たちに聞いてもわからない状況ですから、私たちのような人たちが気楽に情報を取り入れて。

(梶井) 私も自分で広報を見ていても、世帯の情報、母子支援の情報がありますが、純粹のシングルのための情報というのは、考えてみればあまりないかもしれません。

(D) もっとたくさんあって、色々な情報をもらえれば生き方も違ってくると思います。インターネットを見していますが、同じようなものばかりです。だからそういうものがあつたら。

(佐藤) 新聞か何かで、女性専用のよろず相談というか、そういうネットワークを今作りつつあると。男性がアクセスできないようにして、なおかつ年代別、世代類型によって欲しい情報も違うだろうというので、女性が10人くらい立ち上がってそういうホームページを作り上げたということでした。そうなってくれば少しいいですね。

(D) そうですね。年代によって、考え方もニーズも違いますから。この年代はこういう情報というのがたくさんあった方がいいですね。働いている人と働いていない人とか、子供がいる人といない人とか。そういうものがもっとたくさんあつたらいいと感じました。

(C) 情報についてあまり考えたことはありませんが、強いて言えば医療関係がもう少しわかればいいと思います。これに応募したのも「サンケイリビング」新聞の武蔵野版で、いろいろなことが書いてありますから、そういう情報だけで特に不満はありません。

(B) 都や区の広報は新聞にはさまってきますが、区は3回来ます。それを重宝していて、それでほとんどの情報を得ています。民間とか雑誌などでもおびたしく情報がありますから、いろいろアンテナを張っておけばかなり充実したものがあると思います。

(A) Gさんと一緒に、コレクティブハウスの情報をもっといろいろと知りたいと思います。すごく興味があるのでもっと知る方法があつたら、区報でも何でも。

(和田) Fさんは仕事の情報はどこで? 中高年で仕事を探すのは大変でしょう。

(F) 新聞の求人です。日曜日に別冊で入るものとか、あとは友だちの紹介。だから友人関係か新聞です。ハローワークに行ったことはありません。行っても倍率が高いし。

(梶井) 皆さんシングルで生きているわけですから、いざという時にこの人なら救急車を呼んでくれるだろうとか、いざとなった時に頼れる人間関係を確保されているかどうか。

(F) そこまではまだいいですね。そういう友だち関係は。

(梶井) 老後だれが救急車を呼んでくれるかという意味で地域とのつながりはどうですか。

(E) 今元気だからいろいろな趣味を通して友人はいますが、いざとなったら間に合いませんから。子供がいればいいですが。そこまでは期待できないですね。だから自分の健康をまず優先ということで。お互いそれぞれ家庭があるし、兄弟でも家庭を持っていればそこまではとても期待できないし。お年寄りにブザーか何かを持たせて、指令センターに連絡するというのを聞いたことがあるので、自分1人になった時には公共のそういう所に頼るほかないかなと昔考えたことがあります。

(梶井) そういうシステムのある地域とない地域があるかもしれませんね。

(佐藤) 公営住宅の入居者で高齢者にはありそうです。「安心」とかいうウルトラマンみたいなペンダントがあって、何かあると作動して情報センターに行くというシステムです。

(梶井) 将来60才、70才になったらそういうブザーが支給されるシステムがあつたらいいですね。都会は情報もあるし、安くておいしい物を食べられるという便利な面がある一方、地方であれば「このごろ〇〇さんの顔見ないわね」と言ったら、だれかが声をかけるといふ、そういう人間的なアットホームな部分は、地方はできますが、都会だとやりにくいというデメリットもあります。都会の地縁の薄さはやはり問題点としてありますね。

(E) 都会は冷たいというより、みんなそれぞれ生活があるから、それを差し置いて私を助けてとは言えません。絶対に。その人が自分から率先してやってくれたらいいですが、こちらからそれを要求するということは友だちでもできない。

(梶井) アメリカなどは個人主義が発達していますが、横の関係があって、個人を、一人一人を大切にすることがあります。日本では考えられないことですが、例えば子供さんが小さいのにお母さんが病気で倒れたとなると、その地域の方とか友達のお母さんがすぐネットワークを組んで、月曜日はAさんがお食事係、火曜日はBさんというようにすぐ地域とかPTAでシステムを組むそうです。だけど日本では「他人が人のお家に入って、そこまで押しつけがましくできないわ」と。だから欧米並にシングルが発達したわりには、そういう意味での安全網の整備がないというギャップがあると私は思います。

(E) でも日本でも地域によってはあるみたいですね。雑誌を読んでいると、自分が病気がしたときにみんながやってくれてよかったという投書があったりするから。

(D) 具合が悪くなったら、2人ぐらゐすぐに連絡できる人はちゃんといますし、常に携帯電話を持っています。息子と連絡を取り合ったり、友達にしばらく電話しないと「元気でやっているの」と留守番電話に必ず入っているし。私は世田谷から三鷹に来たものですから、隣近所にだれが住んでいるかわからない状態です。美容院でたまたま情報をもらったり、野菜を買った時のおばさんたちにいろいろ聞いたり、そのくらいしか情報網はありません。

(C) 自分が何かあった時というより、私の場合は両親がいるので、両親の方が先です。戻ってきた家は、私が小さい時から住んでいた家なので、ご近所は一応知っています。だから最初は戻ってきたので肩身が狭くてだれにも会いたくないと思っていましたが、何かの時にはやはり近所の方が頼りになるので、最近はなるべく挨拶するようにしています。

(B) 私は下町に近い住宅街で、ある人の家の離れを1人で借りています。近所の人もゴミを捨てに行っても、皆会釈しながら、かつそんなに介入しないところがあります。大家さんは90才近いおばあさんですが、ホットラインを引いています。近所の方は知らない人はあまりいないし、非常時にはある程度手助けしてくれる感じがします。だからほとんど私は交流はないですが、会釈する関係でも非常時には何とかなるかなと思っています。

(A) お友だちがよく電話をかけてくれたりします。地域では、教会には前から行って、地域の人たちとよく会っているので結構支えになっています。

(梶井) もう1つ、シングルのメリット、デメリットということでお聞きしたいのです。シングルで例えば、買い物のときにカードも作れなかったとか、ローンを借りようと思っても保証人がいないとだめだと言われたとか、具体的にお聞きしたいと思います。

(C) 子供はまだ小学校5年生ですが、やはり学校の面で、最近はシングルの人も何人かクラスでも多くなってきたのであまり感じなくはなってきましたが、父親参観日とか運動会などで、やはりそういうときに何となく肩身が狭いです。

(G) デメリットは、やはり独身でいることに対する偏見とか差別がまだあります。東京でも。特に私の職場では主婦の方が一緒に仕事をしていますから、やはり言葉の端々に偏見みたいなものが出てきています。メリットは、1人だと時間を自由に使えるということが大きなメリットと感じています。

(F) もっと安い賃貸マンションに移りたくても私の場合給与証明がなかったのです。単身でパートの身分なので、社会的な信用というか、自分の身分証明がどこにもなくて、それは今でもいやだなというのがあります。クレジットカードが何か作る時でも保険証ではだめな時があります。社会的信用がないというのがいやだなと思います。離婚して1人になったことのメリットは、時間が自由だということ。今まで夫が自営だったのでお昼でもいつあがってくるのかしらと、すごく待つというのが辛かったです。そういう気兼ねがあったからそれがなくて、そういう意味では気が楽です。

(E) 夜眠れず朝遅くなる時、自分の体を考えて、もう少し寝坊して体を休めようと思

って、それが今はできます。前はがんじがらめの主人との生活で、自由が全くなかった。自分の眠りたい時に眠り、食べたい時に食べ、行きたい時に行く。ちょっとぜいたくはできませんが。そういう面では気が楽です。子供がいましたから再婚は考えなかったのですが、淋しさはすごく感じました。話し相手とかパートナーとか、結婚するよりやっぱりお茶飲み友だちが欲しいと思います。

(D) メリットの方が多いですね。結婚はしたくないです。でも、彼は欲しいです。子供は成人して、娘は外国で結婚したので肩の荷が下りて、息子はまだ1人ですが、養子に行ってもいいと思っています。本当にメリットが多くて、離婚して良かったと思います。

(B) メリットについては言うまでもありませんが、気になっているのはデメリットです。ここ数年、都営住宅、都民住宅、区営住宅で、単身者用の数が少ないのです。高齢者用とかは結構確保してあります。30年前はワンルームで1家が住んでいたのが、少し余って単身用に来ているようですが、絶対数が少ないから当たる率が少ない。高齢者やハンディを背負った人がだいぶ確保するらしくて。住宅の面でいつも大変さを味わっています。

(梶井) 今日は貴重なご意見をいただき本当にありがとうございました。

以上

東京グループ面接 (第3回)

日時 2001年2月25日 11:00~13:00

場所 セブンシティ (銀杏の間)

(和田：司会) ご自分の状況、家族構成や背景など、自己紹介いただければと思います。

(A：47才独身女性) 私は現在、仕事はマネーライターとファイナンシャルプランナーをしています。現在家族は両親が健在で福岡に弟と同居しているので、介護の点はまだ心配ないというところです。私は都内に住んでおり、パートナーと同居して4年になります。実は一度結婚していて、大学生の子供もいます。専業主婦時代もありましたが、残念なことに、現在の生活では将来年金を受給することができないリスクを負ってしまったと思っています。今後も籍に入れていないということもあって、まったく1人ですので、老後の保障も全くありません。私的年金の方も全然まだ準備をする段階ではありませんので、何とか健康維持をと思っている状況です。人間関係は前の夫も子供も含めて非常にうまくいっています。フレンドリーな関係で続いているので、精神的にはそういった意味でのストレスはないという状況です。

(佐藤) ファイナンシャルプランナーでいらっしゃるということで、お仕事の関係で例えば50代の独身の方のご相談を受けるなどということはあるですか。

(A) 多いですね。一番多いのは老後に直面している方ですね。70才を過ぎた方が家を買いたいと。その理由が近所の人間関係があまりないからと。本当にそれだけなのです。息子さんたちは反対です。でもそのおばあちゃんにしてみれば近所の人間関係がすごく大事という。それで賃貸は絶対にいやという年代です。自分の生き方として自分の持ち家であればいいかと。この2つを何とか実現したいという話がありました。

(B：40才独身男性) 年齢は40才です。印刷会社に勤めております。家族構成は私と父と母です。将来のことは、まだ比較的金銭面であまり困っておりませんので、少しずつ貯蓄をしておかなければと思っております。きっかけは、父が株式などをやっていたもので、最近流行のオンライントレードなどもしていますので。私は給料は全部母親に渡していて、家計は一切まかせっきりです。会社に年金制度などもありますので、多少楽かなというような感じです。最近思うことには、景気をよくしようということで税金を注ぎこんでいますが、どんどん国債を発行して赤字になっているので、このままだと国の財政が破綻して将来国から年金が貰えなくなるのではないかと不安に思っております。

(C：46才独身女性) 年齢は46才です。長いOL生活を一昨年に辞めて、去年は失業保険をもらってのんびりしていました。今年からはパートで働いています。今後はもう正社員になるつもりはありません。これからは好きなようにやりたいと思います。年金はあてにしていなくて、個人年金を38才のときから掛けています。60才になると15年間、毎月6万円ぐらひはもらえます。貯蓄は結構ありますので、それを自分なりに運用して。あとは国民年金と厚生年金とダブルで、少ないなりに十分やっていける。シンプルに生活するのが目標です。余計なものは買いませんし、いらぬものはどんどん捨てています。これからは趣味もよけいなものに凝らないでシンプルに生活していきたいと考えています。

(和田) 当面、何か不安に感じられることなどはないですか。

(C) 不安はないですね。自由にやっていますので。

(和田) 正社員になるお気持ちがないというのは、何か理由があるのですか。

(C) 飽きたという感じです。今までずっと一般事務をしていたので、これからは体を動かす仕事をしてみたい。ポスティングなど外でやる仕事をやったりしていますが、掃除の仕事もやってみたいと思います。ちょっと世界を変えてみたいというのがあるので。

(D：51才独身女性) 今まで独身で、現在51才になります。ずっとOL生活（経理関係の仕事）をしていたのですが、3年前に父が入院したのをきっかけに仕事を変えました。現在1人で東京で暮らしていますが、父は実家の愛知県で現在健在であります。ホームヘルパーの講習を3年前に受け、2級ヘルパーという資格を取りました。現在、登録ヘルパーをしています。自分が老後に近づくと、自分にとってどういうことが一番生きやすいか、働きやすいかということを考えます。安定した生活よりも自分の好きな仕事、自分が向く仕事を目指していきたい。現在しているヘルパーという仕事も、肉体的よりむしろ精神的なストレスが意外と多くて、自分で支えきれない部分が多いです。まだまだ勉強が足りないのですけれども、自分が老後になったときにどういうふうなおばあちゃんを目指せるかというところで授業料を払わないで、いい経験をさせてもらっています。

山登りを40年近く続けていまして、それを続けながら健康維持をしています。あと、趣味の部分にもう少しお金を費やして、老後はその趣味を生かしたボランティアにかかわれればと思って、現在過ごしています。

(和田) 特に不安な点は感じられませんか。

(D) 具体的プランはできていませんが、親の介護は姉妹で交代で看るということは少し頭にあります。遠距離ですから気になります。あとは特別健康の不安もありません。

(E：45才独身女性) カメラマンで会社に所属しているので、年齢的に中の仕事が多くなり、ちょっと面白くなっている部分もあります。自分のできる範囲での撮影をピックアップして独立したいとは常に思っています。仕事を持っている独身女性のネットワークに非常に関心があります。そのような会のひとつに入って活動していますが、「こういう生き方があるのだな」と知ることによって、自分が困っていること、不安なことが一つずつ解消していった、今はとても良い精神状態で、安定しています。

今は犬と一緒に生活しています。実家は車で5分位の所にあります。両親は健在です。でも、私は3人姉妹の長女なので、両親に何かあったときは、妹は2人とも結婚していますので、ターゲットは私に来ると思っています。両親は持ち家で暮らしていますので、何かあれば家を売って、きちんとしたサービスを受けられるようなところへ移るということも可能なので、お金のことはまず大丈夫だろうと思っています。あとは精神的な親のケアです。精神的な弱さをカバーしていくのは、肉親でないとできないのかなと実感しています。自分自身の不安としては、このまま一人でいくのか明日のことはわからないですね。どんな出会いがあるかわからないし、そういう意味での希望は常に持っています。

12～13年前に入った個人年金が、生命保険会社がバタバタと業績を落としていますので、確定で15年出しますよとは言っていますが、それがいつひっくりかえるかわからないという意味で掛け金を払いながら心配なのです。そうかと言って今やめるのは一番もったいないので、しょうがないなと思いながら払っています。

(F：55才独身女性) 35年位一つの会社に勤めております。今まで独身で、若いときからそうなるだろうと思っていた予想通りです。学校も東京でしたので、学生時代、社会に出た友達等はどちらかというと独身が多いのですけれども、それなりに快適な生活だと思っています。健康だけが取り柄でしたけれども、5年前に目を悪くいたしました。せっかく勤めていたのだから55歳まで元気でやれたらいいなと思っておりまして、今のところは一応日常生活には支障なく、会社の方も続けております。私には姉妹がいて、それぞれ家庭を持っております。6年前に父が、1年前に母が亡くなりました。子供が女性だけということもあって、大変独立心の強い両親でした。母も父が亡くなってからずっと1人暮らしをしておりましたが、本来非常に自立心の強い人でした。3人姉妹だとそれぞれ分担できるので、介護というほどのこともいたしませんでした。でも他人よりは良かったので

はないかなと思います。けれども、自分のときはそういうことがないので、その辺はちょっと考えていけないといけないという状況です。

(和田) 会社で長くお勤めになると、いい面もたくさんあると思いますが、働きにくさを感じたことはありますか。

(F) 自由な社風ですが昇格などは、今は男女雇用平等法などで気を遣うのですが、何人かマドンナを作って「実力があれば処遇していますよ」という形は作るのですけれども、マドンナになりそこねた場合は非常に厳しいです。どの時期にどの上司と人間関係にあるかということが非常に左右されてしまうようで、私なども納得できないような処遇でした。

(G: 51才独身男性) 私は51才です。信託銀行に勤めておりましたが、昨年から関連会社に出向しています。父が他界しまして、母が他人のところで同居しています。3人の姉はそれぞれ嫁いで、末子の私が独身で今日まで来ているという状況です。特に考え方があったわけでもなく、独身生活が捨てがたいということもあり、独身生活もそれなりに楽しくやってきたのではないかと思います。楽しくやりつつも10年前からの将来の計画が非常に狂ってしまったのが現実です。経済的なことも含めて老後のことも含めて非常にバブルの崩壊は私たち個人の生活にも大きく影響してくれたと考えています。本来ならば今頃はいろいろな面で将来の見通しの立ったころかなと10年ほど前は考えていたのですが、株の暴落や不動産の崩落で支えが全部失われてしまい、ストックがなくなっていました。ストックがなくなるというのは非常に辛いですね。したがって元気である間は一生懸命に仕事をするということになります。

また健康第一に考えてきたものですから、まだ自分自身が支えとなっているのが現状です。年金等については会社でいい年金制度を持っておりますので、サラリーマンを辞めた後の年金生活はそんなに心配することはないと思います。それだけは助けです。

(和田) それは銀行にお勤めでいらっしゃるということもあるのでしょうか、かなり具体的な数字で老後の生活設計はできたのではないのでしょうか。

(G) モデルケースがあって、自分を当てはめてみますと、60才を超えたあとはそんなに贅沢はできないまでも、1~2人の基盤自体は何とかなるのかなという、おぼろげながらの数字は出ているようです。

(梶井) DさんとEさんとAさんは今賃貸のお家に住んでいらっしゃいますが、最終的に住もうと考える場所はどうか、一言ずつ教えていただけますでしょうか。

(D) 私は決めていないです。たぶん海外でのんびりしたい。友達と一緒に住むか、グループホームみたいなことも考えているので、実家の方でできればやりたいと思います。

(E) やはりマンションか、一戸建てか、自分のお家というのをいずれは手に入れるだろうとは思っていますので貯蓄はやっています。勤めているうちでないとローンを組めないのです。今年は不動産屋を回ろうかななどと、本当に真剣に思っていたところです。

(A) 理想を言えばもちろん海外と日本と半々、年金もらいながら、半分年金持っていてということですが、現実問題としては賃貸をどうするかということですね。その間にできるだけ貯めて、賃貸のままでいいのですが、どこで住むかということを考えています。それで、生きているイコール働きつづけるということを最大の目的としているので、景色のいいところで晴耕雨読を賃貸でと考えています。購入は全く考えていません。

(和田) 今日は独身の方たちの集まりということなので、日本の社会では夫婦と子供2人というのがモデル世帯と言われている中で、独身でいることのメリット、デメリットというような観点からお感じになることを率直にお話しいただければと思います。

(A) 単身でいることのメリットは、時間配分や生活の優先順位がほとんど自分中心でできるということではないかと思っています。デメリットは生活面では今のところあまりな

いですが、健康を害した時にどうなるのかなという不安は、家族を持っているのといないのとでは、大きく違うと思います。

（和田）それは精神的な部分でですか。あるいは実際にサポートということですか。

（A）実際のサポートという意味でも、精神的な意味でも両方です。誰かに迷惑をかけるというようなことがありますし、精神的な意味でも不安だし、実際に病気になって収入が途絶えたときに何の保障もない。その辺は無防備だなと思っております。経済的にある程度確保していくと精神的にも負担は少なくなるのではないかと思います。あとは自分の気の持ちようだと思います。歳をとるとだんだん周りに、去年まで元気だった人がいきなり亡くなるようなことが増えてきます。自分が死ぬということも次第に現実味を帯びて、死んだらどこのお墓に入るのかしらと考えたりします。

（B）ふた昔前の感覚と今の私が40才という年齢の感覚は違うと思うのです。おそらく私は30才ぐらいのイメージしか持っていないのです。だからそんなに困ったことというのは実はないのです。家事、洗濯とかは全部母親に任せていますので。

（和田）会社勤めの中で、独身でメリット、デメリットを感じることはありますか。

（B）むしろメリットの方です（笑）。結婚していたら子供が病気になったとか、早く帰ってきてくれとかあると思いますね。シングルだと好き放題残業できますから。

（和田）自分のエネルギーの大半をお仕事に使っていらっしゃる状態なのでしょうか。

（B）まだ親を介護するような状態でもないですし。今現在はメリットしかないですね。デメリットはないですね。別に独身だと会社で昇進が遅れるとかという話もないですから。

（梶井）ご両親の介護などという、万が一のときの介護は自分にかかってくるのではないかなというような不安もまだ持っておられませんか。ご両親はお元気だから。

（B）心の中では持っていますが、現実問題、70才になってもぴんぴんしていますし、倒れたり寝こまれたりしては大変だとは思いますが、現実性としてはないのです。

（C）独身でいるメリットを考えたのですが、昔から自由でいたいというのがすごくあったので。20～30才ぐらいまでは、親が結婚しろと喧嘩の種だったのです。「何で結婚しないのか」とか、毎日言われたのです。そのときは結婚したくなかったのですが、やはり自由がなくなるというのが一番でした。「男の世話など冗談じゃない」というのがありまして。今の日本の男性はほとんど自立していない。給料は稼いでくるけれども、自分の家では、帰ってきて、食って、風呂に入って寝るみたいなものですよね。そういうのを私は許せないのです。価値観が同じ人がほとんど周りにいなくて、結婚すれば全部女がやるのが当たり前のような人ばかりだったのです。そういう人に巡り合えなかったということもあるのですが。だから、結婚していた時と比べると今のほうがずっと楽です。やはり、本当に束縛されるのが嫌いなので。

（和田）昨日のグループ面接の中で独身でいるメリットは同じようにたくさん出てきたのですが、逆にデメリットでは社会的な信用が得にくいとか、クレジットカードが作れないとか、お金が借りられないとか。例えば職業がパートであったり、収入が低かったりとする理由でしたか。

（C）保険に入ろうとしたら、独身で仕事もパートということなので断われました。だから入ろうとは思いません。クレジットカードは勤めていた時のまま、別に職業が変わったとか言って届けていませんから相変わらず使っています。今パソコンをやっていますが、メーリングリストとか取っているのですが、ちゃんと説明すれば無職でもカードは作れるそうです。アパートを借りるにしても、知っている不動産屋さんだったのですが、会社を辞めた頃は「普通だったら貸さない」と言われました。以前銀行員でしたので、信用して貸してあげるといった感じになったのです。職業で人を見ているなと感じました。女性1人

で暮らすと遊んでみえると思うのです。旅館など宿泊を申し込んでも、女1人はやはり断られますね。だから私はユースとか。山が趣味なのでテントを持っていくのです。予約も要りませんし。

（和田）賃貸で部屋を借りるのは高齢になればなるほど1人では借りにくいというような話も出ましたけれども。

（D）私もやはりお部屋を借りるときに大変でした。会社を辞めて借りるとき「無職ですか？」と言われて。「前にお勤めしていたところは？」と聞かれ、大手建設会社だったのでその名前を出したとたんに、「ではそういうところにいらした方なのなら」と。でも、「やはり女性の1人は困るのです」と言うので、「何が困るのですか」と聞いたら、「結局長く居座ってしまう」とか、「出て行かない」とか。男性の場合だと結婚したら違うところへ移られるということがあるので。年齢のことと、女性1人だということで、もう面と向かって言われて、何かすごく理不尽なものを感じました。世の中はそうなのかなみたいに思いました。それでずいぶん不動産屋をあたりました。10件目ぐらいでやっといい方に巡り合えました。そういうことは2回ほど経験しました。

今でも結婚は否定していませんが、カナダにホームステイしていた際、結婚していても夫は夫、妻は妻という個人の時間を侵害しないで認めるという部分に共感しました。日本の男性は結婚している、していないにかかわらず、もっと自立してほしいと思います。

（E）独身でいることのメリットは、自分の稼いだものは自分の裁量で好きなように割り振って、疲れたらそのまま家へ帰って寝てしまうこともできるとか、やはりそういうことだと思います。単身のデメリットは、社会的な制度の中でまだまだ男性中心の社会ですから、保証人を立てなければお金も借りられないし、家も借りられないとか、いっぱいあると思います。その中で、いかに上手く泳いでいくことを女性は考えていろいろ知恵を絞っていると思うのです。いずれ単身の高齢者の人数がものすごく増えてくるので、社会制度自体も変わらなければいけないと思います。そういう方向で動いているわけですから。

1人で暮らしていて心配なのは、けがや病気で動けない時です。いきなり倒れてしまったり、意識がなくなったり、交通事故にもいつ遭うかわからない。結局、周りの知人、親、姉妹のサポートに頼らざるを得ない。そういうときの準備は、出来る限りやっています。私が以前入院したときは救急車で搬送されてしまったので、お金やパジャマにしても用意ができませんでした。一番頼りになったのは同年代の姉妹です。しかし物を揃えるのは助けてくれるのでOKなのですが、入院保証金などの現金もすぐ必要です。だから、いざと言う時のお金も、常に普通預金からまとまったお金が引き出せる状態をキープしています。これはすごく重要だと思います。「お金を10万単位ですぐ融通してあげられる」というのは普通の家庭ではできないですから。

（F）一人でいると、健康上のことが不安です。急に目の手術をすることになったとき、すごく動転してしまいまして、全然したくができなかったのです。その時はいろいろ妹に世話になって、感謝しています。

（G）私はメリットというのはまさに自分の裁量ですべてのことが決断できるということでしょうね。それが唯一のメリットだろうと思います。デメリットの方ですが、大きな意味でのデメリットはそんなに感じることもないのですが、唯一自分で処理できないことは、将来自分の判断で処理できない病気になったりした場合ですね。それだけが唯一の不安材料です。それとあと1点、お墓のことですね。最近いろいろなお寺さんが独身者でもいいという永大供養のお墓、販売などがありますね。私も田舎のお墓に入れないだろうかとか思ったりもします。散骨でもいいのかなと思ったり。この2点が老後のことを考えるときのテーマになっています。

〔C〕 最近お墓のことをやはり真剣に考えるようになりました。田舎の両親のお墓には入りたくなくて、できれば分骨して上野にある合同のお墓に入りたい。年に1回抽選があって、お金を払っておけば、死んだ時に入れてもらえるんです。

あとは50才になったら生前預託を頼もうかと思っています。自分が死んだら必ずここに連絡してくれと頼んでおけば、葬式から全部してくれる。いつ倒れても、頭がぼけてしまっても自分が何もできなくなった時でも、元気な時に書いておけば、入院したときはこうしてくれとか、お金はこうだとか、そういうのができるらしいのです。

〔D〕 人生80才までだとしても、あと30年もある。結構自由な時間が多くなるはずなのです。今まで組織の中で働いて、食べるためにお給料をいただいていたけれど、そういうのに拘束されない時間がこれからたくさんあると思ったら、どういうことをしたら自分が楽しくなるか、友達とのネットワークの中でどういうことが自分の刺激になるか、刺激を与えられるか、いろいろ考えると時間が足りないばかりで、死後のことなどあまりピンとこないですね。

〔和田〕 病気をしないにこしたことはないわけで、今度は健康を維持するために心がけていることを聞いてみたいと思います。

〔E〕 定期的な運動と、食事のバランスにすごく気を遣っています。運動も自分1人でやるよりは仲間と一緒に楽しく体を動かす。ですからジャズダンスやエアロビクスのサークルに入っています。いろいろな人がいて、とても刺激を受けるし、そういう意味で続けていれば運動はとても楽しいと思います。健康診断を受けても、体力測定などの項目でいい値が出たりするとうれしいものですよね。

老後というのは昨日、今日、明日の繰り返しの先にあるわけです。突然「今日から老後よ」ということはないわけです。私はむしろ定年を楽しみにしているのです。「早く仕事から解放されて遊びまくりたいわ」みたいな。今、仕事をしながら、老後にやりたいことを同時進行で探しています。仕事はもう細々と続ける程度で、ほとんどは自分のやりたいことをする時間にしたい。その時に体力がなければ遊べないわけです。そのために、健康管理には気を遣っています。

〔F〕 私は運動が好きで、よくスキーやテニスをしておりました。しかし、目の病気をしてから、できるだけ通勤の行き帰りに歩くようにしています。それから食べることが大好きなのですが、1人暮らしなのでいいかげんにならないように、できるだけ家で食べて、外で食べるときもバランスよく食べるようにしています。1人のわりには朝から野菜をゆでたりするなど、一回一回大変気をつけるようにはしています。

〔G〕 自分が単独で生活するようになってから二十数年になります。40才を境にして、約10年ちょっと前ですが、嗜好が変わってきたのです。油っぽいものはあまり好きではなくなりました。特に野菜を多く食べなさいという自己暗示と、カルシウムを摂るために焼き魚などを取り入れるようになりました。朝と夜の食事は自分でいろいろな栄養素をバランスよく摂るよう、気を配りながら作っています。自炊中心ですので、食費も助かります。食生活については、ちょっと太りすぎたなと思ったらセーブする心は常に持っています。

〔和田〕 すばらしいですね。自己管理をされているというのは。

〔G〕 それと運動ですね。太りすぎも運動不足から来るのだということで、去年の秋頃からスポーツクラブに加入して運動をしています。将来余力ができたなら毎日でも行ってみたいなと。自分のことが自分で出来なくならないように、1日も長く人のお世話にならなくて済むような体力づくりだけは心がけてしていかなければいけないと思っています。

〔和田〕 当然健康診断などは、会社で義務付けられているわけですね。毎年受けていらっしゃいますか。

（G）春、秋、それから自分の誕生月等に。いつも引っかかるのは太りすぎの面です。自分の適正体重は大体推定ができています。少々ズボンがきつくなってきたときは要注意だとか。私は10年間このスーツが入るのです。だからスーツに合わせて自分の体を作っているという。体に合わせてスーツを作っているのではなくて。

（和田）Aさんは健康診断ですとか人間ドックなどはどういう感じでしょうか。

（A）何もやっていません。常に自己診断です。病院には私は生まれてから1～2回ぐらいしか通ったことがないです。自分と付き合いが長いですから大きな病気は別として、どういうときに具合が悪くなるというのは、誘引が何となくわかるのです。それとストレスをためないことです。あまり人間関係でもめない。自分であまりもめたことがないという長所を生かしまして、それが一番ではないかと思っています。仕事上、執筆とかで寝ない日もあるのですが、だからといって何時間寝なければいけないとか、何を食べなければいけないと心配する方が私にとってはストレスになる。何も考えないことが、私の今の健康管理法ですね。必ずしも診断を受ければよいとは限らないのではないかと思います。

（C）健康に関しては食べ物を気にしています。昔、花粉症にかかったのですが、食事療法をして、結局自分で治しました。そういう自信がありますから、結局病気になっても自分で治す、ガンには絶対にならないと思っています。健康補助食品的なビタミンA、C、Eはずっと飲んでいきますので、ガンにはならないつもりではおります。健康診断は会社に勤めていた一昨年末までやっていました。去年はやっていません。市で無料のガン検診などは受けようかなと考えています。登山をしていますので体力的にはまだ30代の体力を持っていますから。好きで山に行っていれば体力もつきますし、おいしい空気も吸ってストレス発散するので、毎週のようにでかけています。年間を通して1～2ヶ月ぐらい行っています。それで健康維持をしていくという感じです。

（D）私はテニスを週1回やっています。ヘルパーの仕事が自転車で巡回なので、1日かなりの距離を走るし、時間さえあれば都内は結構自転車で移動します。それと自己暗示は結構大きいと思いますね。「病は気から」とも言いますし、やはりそういうことが体に大きいのではないかと。それから、私も食事は気をつけていて自炊しています。山へ行くにも生米を持っていっています。食べるものが体力づくりの基本かなと考えております。

（和田）お話を伺っていると心と体の健康が非常にリンクしているということを考えさせられます。今度は心の健康に役立つ趣味とか、生きがいとかを伺ってみたいと思います。

（B）プロの方がいらっしゃるからなので非常に言いづらいのですが、写真です。

（和田）それはお休みの日に写真をやっていらっしゃるのですか。

（B）そうですね。カメラ片手に。私の住んでいる近くに多摩動物公園がありますから、自然を見ながらぶらぶらしています。

（G）私は自己流の絵を描くことですが、あれは時間が必要なのです。今まで仕事中心でしたので完成品にならないものが多かったですが、これからはたぶん会社を離れることがあれば時間にゆとりができますので、風景であれ、人物であれ、完成品を目指して絵描きをしてみたいなど。スケッチ旅行も必要に応じてやりたいなどと思っています。

それから、趣味とはちょっと関係ないのですがけれども、学生時代からお会いできていない方々がたくさんいます。今の生活基盤は会社を中心とした人間関係で構成されていますけれども、年賀状で年1回だけの挨拶程度で終わってしまっている方々も結構多いのです。身近にお付き合いを復活したいなどと思っています。そうすると会社の枠を離れたところで新しい人間関係を復活できるかなと。私もずっと会社人間だったものですから、地域社会にとけこんでいないというところがあります。地域社会もちょっとのぞいてみようかなというのがこれからのテーマです。

(和田)最後に情報の問題で、どんな方法で情報を取っていらっしゃるか。それからそういう情報を得ていて不足しているなどと思われるもの。特に、今単身で生活していらっしゃるって不便を感じていらっしゃることを中心にお伺いできればと思います。

(G)情報源は日経新聞とNHKテレビです。社会的な主な情報は朝のニュースです。仕事に直結するような情報は23時のニュースというところでしょうか。本当の大きな情報源は会社の中での話題が私としては大きな情報だと思います。インターネットと言いましても、たくさんジャンルはありますけれども、豊富すぎて、どこにアクセスしていけば自分の知りたいところへ行くのか。というのはインターネットそのものを私自身は手段としては持っていますけれども、それを情報源としてまだ活用できている段階ではないからです。これからだと思います。しかしまだ私は生の情報の方が好きです。

(F)私はお得意様の広報を手伝う仕事をしていますので、仕事上たくさん雑誌があります。経済誌から女性誌など必要なものはそこから入ってくる感じです。オフィスにも、自分のデスクにもインターネットがありますのでいろいろ見えています。ただ自宅ではまだコンピュータを入れてはいません。ほとんど新聞、雑誌、テレビです。情報はかなり偏っているとは思いますが、情報そのものは好きなので楽しんで探しています。

(和田)豊富な情報の中で、欲しいけれどもなかなか手に入らない情報とかは。

(F)今はシニアの分野に興味があり、シニアの雑誌などもいっぱい出ているので見ます。シニアは大体楽しく暮らすみたいなこと、先程一生働くとおっしゃっていましたが、これからは単に社会にお世話になるばかりでなくて、若い人が減ってくるので、シニアも社会の一翼を担って、一緒にやっていかなければならないと思うのです。もっと生産的に。中高年の人たちがもっと社会に関わって、収入ももらえるような、そういう情報が少ないのではないかと考えています。そういう情報発信するようなことをボランティア的にでもやりたいなと、友達と考えています。

(E)私は新聞、テレビ、本、映画。新聞で国内や海外の大まかな情報を得ています。あと地域に密着した折り込みのチラシですね。そういう意味でも身近な情報を集めるというのはやはり新聞とチラシ。テレビは普通にニュースも情報源になってきます。

インターネットはやっていません。「それじゃちょっとやってみようかな」というふうに様子見のところなのです。あと映画館へ足を運んで映画を見るのが好きなのです。もう趣味の世界なのですけれども、洋画、いわゆるアメリカとかヨーロッパの映画というのは日本の5年先、10年先のことを題材にして作られていると非常に思うのです。映画を見るのは趣味だけれども、自分の中での情報の一つだととても思うようになっています。

(和田)逆に欲しいのだけれどもなかなか手に入らない情報とかというのはありますか。

(E)とりあえずあまり不便はしていないような気はしますね。何かどこかを調べたいというときは、役所へ行けばもう今は何でも雑誌になっていますよね。介護に関する雑誌、何があったときはどういうところへ連絡したらいいのかとか。それからあと電話で相談できるというのも、区のチラシなどが新聞に入ってくる。もうそれこそ暮らしの相談から法律相談まで全部。とりあえず電話すると、解決方法を教えてくれる。

(和田)公的機関をまた武器にして情報を取ると。

(E)まずそこに連絡すれば、そのあとどこを選んで行くか、自分はどこを選ぶか。かなり自分さえ動く気があれば探せるのではないかと思います。インターネットで探さなくても区のチラシ1枚あればとりあえず電話で。ファックスで取り出すこともできるし。だからあまり不便は特に感じていないですね。

(和田)例えば物を何か買おうとしたときに、ターゲットがすごく若者向けになっていて、中高年向けの商品の品揃えが悪いというようなことはないですか。お店が選びにくいとか。

〔E〕やはり東京に住んでいると買い物に関しては、あるデパートがいやだったら別のデパートでいいとか、すごく選択肢が多すぎるぐらいあるから。逆に本当に自分の必要なものを絞って見つけてくるというのに時間が逆にかかるかなと思います。

〔和田〕そうですね。私などは札幌で暮らしていますので、そういう意味では物を選べないということをつくづく感じます。資本投資の抜けてしまった年代という中で、そういうことを感じますが、それは東京であれば何も不自由することはないですね。

〔D〕情報はいっぱい入るのですけれども、すごく必要かという、基本的に「衣食住」ですから、「食」も自分で作るし。山に入ってすごくシンプルな生活をする、必要なものが何なのかということが見えてくる。中高年に向けた雑誌は図書館に行って読む。新聞も、図書館でほとんど見ます。私はとにかく情報を少なくしていく。逆に情報を得ようと思ったら自分の足で歩く。だから旅が好きなのですけれども、自分の足で歩いて確認するというのは、逆に限界もあるわけです。それが必要なものではないかということで、あまりいろいろなものに目を向けない。このごろはその姿勢でいます。

〔C〕私も新聞は取っておりません。パートを探すときに日曜版に地元のチラシが入りますので、それを買って見るという感じです。テレビはやはり4～5年見ていません。情報があまりにもあふれすぎていますから、自分でカットしています。必要な情報はどこから得るかという、地域的なものは市民センターに行けば市報がありますし、ボランティアの情報とか地域的なものはそこで十分得られます。インターネットは3年ぐらいやっています。これは山の情報、メーリングリストですね。新聞社のホームページを見て、新聞の欲しいところだけ読みます。それで情報は十分にあります。山に入っているととにかくシンプルライフに目覚めてしまうところがありまして、情報に関してはある程度セーブをしています。図書館に行けば、自分で買う必要がない。借りては読み、また返すというかたちで、省資源ではないのですけれどもそうしています。

〔B〕この座談会に応募をしたのもインターネットでした。残念ながらコスト的にインターネットはまだ引き合わないですね。私の場合はテレビもほとんどニュースしか見ませんし、新聞とか雑誌類が主体ということになると思います。そういうところですね。

〔A〕興味のある情報というか、仕事に関係のある情報としては、講演などに出かけることはあります。シニアのためのわかりやすく楽しくて夢を持たせるような情報誌というのはまだないし、情報は少ないのではないかなと思います。そういうものが出てくればもっと楽しく生活できるのになと思います。いろいろ公的機関が出しているものとかありますが、それはあくまで制度を閲覧できるといったものですし、地域によって違うということもありますので、トータルで日本とか世界の情報をわかりやすく、「こういうことをやったら楽しいな」と思われるような情報誌がもっとたくさん出てくればいいなと思います。

〔和田〕長時間にわたり貴重なご意見を聞かせていただきましてありがとうございました。これを持ちまして今日の座談会は終了させていただきます。

以上

グループ面接参加者の属性

面接 番号	面 接 場 所	年 齢	性別	子 供	親との 同居	職 業	職 種	婚姻状態	同居者構成	住居
1	札幌	41	女性	無し	無し	サービス業	一般総合職	独身	単身	賃貸
2	札幌	43	女性	有り	有り	その他(インテリア・コーディネート)	一般総合職	独身	親	持家戸建(本人名義)
3	札幌	48	男性	無し	無し	その他(シンクタンク)	主任(チーフ職等)	独身	単身	持家マンション(本人名義)
4	札幌	46	男性	無し	無し	サービス業	経営者	独身	友人(女性)	賃貸
5	札幌	40	男性	有り	有り	その他(記者)	主任(チーフ職等)	独身	親	持家戸建(他人名義)
6	札幌	44	女性	有り 2人	無し	主婦業	臨時パート	結婚している	配偶者、子供(中学生、高校生)	持家戸建(他人名義)
7	札幌	42	女性	無し	無し	無し	臨時パート	結婚している	配偶者	持家マンション(本人名義)
8	札幌	47	女性	無し	無し	サービス業	臨時パート	結婚している	単身	賃貸
9	札幌	46	女性	無し	無し	無職	専門職	独身	親	持家マンション
10	札幌	48	女性	有り	有り	サービス業	一般事務職	独身	親	持家マンション(本人名義)
11	札幌	51	女性	無し	有り	建設業	臨時パート	独身	親	持家マンション(他人名義)
12	札幌	43	女性	有り	有り	その他(医療)	臨時パート	独身、離婚経験あり、子供なし	親	持家マンション(本人名義)
13	札幌	52	女性	有り	無し	サービス業	一般事務職	独身、離婚経験あり、子供あり(1人)	親	持家戸建(他人名義)
14	札幌	44	女性	有り 2人	無し	主婦業	臨時パート	結婚している	配偶者、子供(小学生、高校生)	持家戸建(他人名義)
15	札幌	47	女性	有り 3人	有り	サービス業	臨時パート	結婚している	親、配偶者、子供(小学生、高校生、大学生)	持家戸建(他人名義)
16	札幌	53	女性	有り 2人	無し	金融業	臨時パート	結婚している	配偶者、子供(社会人)	持家戸建
17	札幌	41	女性	無し	無し	主婦業	専業主婦	結婚している	配偶者	賃貸
18	札幌	42	女性	有り 2人	有り	主婦業	専業主婦	結婚している	夫の親、配偶者、子供(中学生、高校生)	持家戸建(他人名義)
19	札幌	55	女性	有り	無し	主婦業	専業主婦	結婚している	配偶者、子供(社会人)	持家戸建
20	札幌	53	女性	有り 1人	無し	販売業	臨時パート	結婚している	配偶者	持家マンション(本人名義)
21	札幌	46	女性	有り 1人	無し	主婦業	専業主婦	結婚している	配偶者	持家マンション
22	福岡	49	女性	有り 1人	無し	建設業	役員職	独身、離婚経験あり、子供あり(1人)	配偶者、子供(中学生)	持家戸建(本人名義)
23	福岡	51	女性	無し	無し	公務員	専門職	結婚している	配偶者	持家戸建
24	福岡	48	女性	有り 2人	無し	サービス業	臨時パート	結婚している	配偶者	子供(大学生2人)
25	福岡	43	女性	無し	無し	青果加工	パート	結婚している	配偶者	賃貸
26	福岡	42	女性	無し	有り	販売業	常勤パート	独身	親	持家戸建(他人名義)
27	福岡	40	男性	無し	有り	販売業	一般総合職	独身	親	持家戸建(他人名義)
28	福岡	40	男性	無し	有り	公務員	その他	独身	親、妹と妹の子供3人	持家戸建(他人名義)
29	福岡	42	女性	有り	無し	販売業	臨時パート	結婚している	配偶者、子供(小学生)	持家マンション(本人名義)
30	福岡	41	女性	有り	有り	自営業	経営者	結婚している	親、配偶者、子供	持家マンション(本人名義)
31	福岡	41	女性	無し	無し	主婦業	専業主婦	結婚している	配偶者	持家マンション
32	福岡	53	女性	有り 1人	無し	自営業	専門職(塾の講師)	独身、離婚経験あり、子供あり(1人)	配偶者	持家マンション(夫婦共同名義)
33	福岡	52	男性	有り	無し	サービス業	管理職	独身、離婚経験あり、子供あり(1人)	友人(女性)	賃貸
34	福岡	52	女性	無し	無し	自営業	経営者	独身	無し	持家戸建(本人名義)
35	福岡	47	男性	無し	無し	自営業	経営者	独身、離婚経験あり、子供なし	その他(1人)	持家マンション(他人名義)
36	福岡	48	女性	有り	無し	主婦業	専業主婦	独身、離婚経験あり、子供あり	子供(高校生)	賃貸
37	福岡	41	女性	無し	有り	サービス業	主任	独身	親	持家マンション(他人名義)
38	福岡	52	女性	有り 2人	無し	その他(保母)	パート	結婚している	子供(社会人)	持家マンション(他人名義)
39	福岡	41	女性	有り	無し	その他(保険)	専門職(看護婦)	結婚している	子供(小学生)	持家マンション(本人名義)
40	福岡	45	女性	有り 2人	無し	製造業	一般事務職	結婚している	配偶者、子供(中学生、社会人)	賃貸
41	福岡	44	女性	有り 1人	有り	主婦業	専業主婦	結婚している	親、配偶者、子供(大学生)	持家戸建
42	福岡	55	女性	有り 2人	無し	その他(市場調査)	臨時パート	独身、離婚経験あり、子供あり(2人)	子供(社会人)	持家マンション
43	名古屋	50	女性	有り 2人	無し	主婦業	専業主婦	結婚している	配偶者、子供(中学生、高校生)	持家戸建(本人名義)
44	名古屋	51	女性	有り 2人	無し	無職	専業主婦	結婚している	配偶者、子供(社会人)	持家マンション(本人名義)
45	名古屋	45	女性	有り 3人	有り	主婦業	臨時パート	独身、離婚経験あり、子供あり(2人)	子供(社会人)	持家マンション(本人名義)
46	名古屋	45	女性	有り	有り	主婦業	専業主婦	結婚している	親、配偶者、子供(高校生、大学生)	持家戸建(本人名義)
47	名古屋	52	女性	無し	無し	その他(テレアポ)	臨時パート	結婚している	親、配偶者、子供(中学生、大学生)	持家戸建(他人名義)
48	名古屋	50	女性	有り	無し	自営業	フリーランス	独身、離婚経験あり、子供あり(2人)	配偶者	持家マンション(配偶者名義)
49	名古屋	46	男性	無し	無し	建設業	主任	独身	無し	持家戸建(本人名義)
50	名古屋	46	男性	無し	無し	建設業	専門職	結婚している	親(夫の母)、配偶者、子供(高校生)	賃貸
51	名古屋	49	女性	有り 3人	有り	その他(福祉)	臨時パート	独身、離婚経験あり、子供なし	親(夫の両親)、配偶者、子供(高校生、大学生)	持家戸建
52	名古屋	40	女性	無し	無し	その他	臨時パート	結婚している	親(夫の両親)、配偶者、子供(高校生、大学生)	持家マンション
53	名古屋	43	女性	有り 2人	有り	サービス業	役員職	結婚している	配偶者、子供	持家マンション
54	名古屋	41	女性	有り 2人	無し	販売業	一般事務職	結婚している	配偶者、子供(中学生)	持家マンション
55	名古屋	47	女性	有り	無し	製造業	臨時パート	結婚している	配偶者、子供(高校生)	持家マンション(他人名義)

面接 番号	面 接 場 所	年 齢	性 別	子 供	親との 同居	職 業	職 種	婚姻状態	同居者構成	住居
60	名古屋	48	女性	無し	有り	自営業	経営者	独身	親	持家マンション(他人名義)
61	名古屋	48	女性	2人	無し	主婦業	専業主婦	結婚している	配偶者、子供(小学生、高校生)	賃貸
62	名古屋	53	女性	無し	有り	金融業	一般事務職	結婚している	親、兄弟(姉)	持家戸建(本人名義)、持家マンション(本人名義)
63	名古屋	40	女性	2人	有り	その他(塾講師)	専門職	結婚している	配偶者、子供(小学生)、その他(義父母)	持家戸建(本人名義→配偶者との共有)
64	京都	40	女性	有り	有り	主婦業	専業主婦	結婚している	親、配偶者、子供	持家戸建(他人名義)
65	京都	52	女性	2人	無し	自営業	一般事務職	結婚している	配偶者、子供(小学生)	持家戸建(配偶者名義)
66	京都	43	女性	有り	無し	自営業	専門職	結婚している	配偶者、子供(大学生)	賃貸
67	京都	50	女性	2人	無し	無職	専業主婦	結婚している	配偶者、子供(中学生、社会人)	持家マンション(本人名義)
68	京都	51	女性	有り	無し	製造業	一般事務職	結婚している	配偶者、子供(大学生)	賃貸
69	京都	52	女性	有り	有り	サービス業	臨時パート	結婚している	親(実父)、配偶者	持家戸建(他人名義)
70	京都	45	女性	2人	無し	主婦業	専業主婦	結婚している	配偶者、子供(中学生、高校生)	持家戸建(他人名義)
71	京都	43	女性	有り	有り	製造業	一般事務職	結婚している	親、配偶者、子供(大学生)	持家マンション(本人名義)
72	京都	55	男性	無し	無し	サービス業	一般総務職	独身		持家戸建
73	京都	51	男性	無し	無し	自営業	経営者	独身	その他(内縁の妻)	持家戸建(他人名義)
74	京都	46	女性	有り	無し	自営業	一般事務職	独身	子供(大学生、社会人)	持家戸建(他人名義)
75	京都	46	女性	有り	無し	自営業	一般事務職	独身	子供(大学生、社会人)	持家戸建(他人名義)
76	京都	47	女性	有り	1人	自営業	経営者	独身	無し	持家戸建(他人名義)
77	京都	51	女性	有り	無し	サービス業	一般事務職	独身	子供(大学生)	持家戸建(本人名義)
78	京都	50	女性	有り	有り	その他(非常勤講師)	その他(音楽、ピアノ)	結婚している	親、配偶者、子供(大学生)	賃貸
79	京都	41	女性	有り	無し	その他(写真・資料管理)	一般事務職	独身	子供(小学生、大学生)	賃貸
80	京都	50	女性	有り	有り	サービス業	一般事務職	独身	親、子供(小学生)	持家戸建(本人名義)
81	京都	55	女性	無し	無し	主婦業	臨時パート	結婚している	配偶者、子供(小学生、中学生)	持家戸建(他人名義)
82	京都	47	女性	有り	3人	無職	その他	独身	無し	持家マンション(他人名義)
83	京都	45	女性	無し	有り	サービス業	その他(面立支援相談)	結婚している	親(義母)、配偶者、子供(中学生、高校生、大学生)	持家戸建
84	京都	48	女性	無し	有り	サービス業	専門職	結婚している	親、配偶者	持家戸建(他人名義)
85	東京	42	女性	無し	無し	自由業(製図・デザイナー)	その他(制作)	独身		賃貸
86	東京	53	女性	有り	同居	その他(派遣社員)	臨時パート	独身	子供(社会人)、義母	持家戸建(他人名義)
87	東京	49	女性	無し	有り	自営業	経営者	独身	親	持家戸建(本人名義)
88	東京	42	女性	有り	有り	販売業	臨時パート	独身	親	持家戸建(本人・母親の共同名義)
89	東京	40	女性	有り	有り	無職	家事手伝い	独身	親	持家戸建(他人名義)
90	東京	55	男性	2人	無し	公務員	一般事務職	独身	子供(小学生)	親所有住宅
91	東京	55	男性	無し	無し	建設業	専門職	独身	親、子供(社会人)	持家戸建(本人名義)
92	東京	51	女性	無し	無し	サービス業	管理職	独身	友人	賃貸
93	東京	50	女性	有り	無し	自由業	臨時パート	独身	子供(高校生)	都営住宅
94	東京	49	女性	有り	無し	販売業	臨時パート	独身	子供(社会人)	賃貸
95	東京	54	女性	有り	無し	自由業	一般総務職	独身	子供(大学生)	賃貸
96	東京	41	女性	有り	有り	金融業	その他(外交員)	独身	親、子供(小学生)	持家戸建(他人名義)
97	東京	46	女性	無し	有り	その他(派遣業)	臨時パート	独身	親(両親)、兄弟(弟)、子供(小学生)	持家戸建(他人名義)
98	東京	53	男性	無し	無し	その他(講師)	専門職	独身	親	持家マンション(他人名義)
99	東京	55	女性	無し	無し	サービス業	専門職	独身		賃貸
100	東京	45	女性	無し	無し	自由業	管理職	独身	その他(1人)	持家マンション(本人名義)
101	東京	45	女性	無し	無し	サービス業	経営者(マンション経営)	独身		持家戸建
102	東京	50	女性	無し	無し	サービス業	専門職	独身		賃貸
103	東京	46	女性	無し	無し	サービス業	臨時パート	独身	兄弟(弟)	持家戸建(他人名義)
104	東京	47	女性	無し	無し	その他(アルバイト、パート)	臨時パート	独身	友人(男性)	賃貸
105	東京	51	男性	無し	無し	自営業	専門職	独身		持家マンション(本人名義)
106	東京	40	男性	無し	有り	製造業	管理職	独身	親、兄弟(妹)	持家マンション(本人名義)

グループ面接調査参加者

面接場所		属 性												総合計
		専業主婦			既婚有職女性			独身女性			独身男性			
		子供有り	子供無し	専業主婦計	子供有り	子供無し	既婚有職女性計	子供有り	子供無し	独身女性計	子供有り	子供無し	独身男性計	
札幌	1回目	1		1		1				2		3		7
	2回目							1	5	6				6
	3回目	3	1	4	3	1	4							8
	札幌計	4	1	5	3	2	5	1	7	8	0	3	3	21
福岡	1回目		1	1	1		1	2	1	3		2		7
	2回目		1	1	2		2	2	1	3	1	1	2	8
	3回目	2		2	2		2	2	1	3				7
	福岡計	2	2	4	5	0	5	6	3	9	1	3	4	22
名古屋	1回目	2		2	1	1	2	2		2				6
	2回目	1		1	1		1	2	1	3	1	1	2	7
	3回目	2		2	2		2	1	2	3				7
	名古屋計	5	0	5	4	1	5	5	3	8	1	1	2	20
京都	1回目	2		2	1		1	3		3			0	6
	2回目	1		1	2		2	2		2	1	1	2	7
	3回目			0	3	1	4	2	1	3			0	7
	京都計	3	0	3	6	1	7	7	1	8	1	1	2	20
東京	1回目			0			0	2	4	6	1	1	2	8
	2回目			0			0	4	2	6		1	1	7
	3回目			0			0	1	5	6		2	2	8
	東京計	0	0	0	0	0	0	7	11	18	1	4	5	23
合計	1回目	5	1	6	3	2	5	9	7	16	1	6	7	34
	2回目	2	1	3	5	0	5	11	9	20	3	4	7	35
	3回目	7	1	8	10	2	12	6	9	15	0	2	2	37
	総合計	14	3	17	18	4	22	26	25	51	4	12	16	106

第3部 東京の中年女性のライフスタイルと 生活意識（東京アンケート調査の分析）

（執筆：北海道大学大学院文学研究科教授 金子 勇）

第1節 データ分析の方針と対象者の属性

第2節 現在の社会関係とライフスタイルにおける既婚者と独身者の相違

第3節 現在の社会意識における既婚者と独身者の相違

第4節 60歳以降のシルバーサービスニーズと介護資源としての信頼性

第5節 多変量解析からみた生活満足度の規定要因

第6節 中年女性への社会的支援の方向

第3部 東京の中年女性のライフスタイルと生活意識

北海道大学大学院文学研究科教授 金子 勇

第1節 データ分析の方針と対象者の属性

今回の中年（40－55歳）女性サンプルが通常用いられる一般的な住民基本台帳からではなく、商業新聞に無料折込の市民ペーパーの読者などに呼びかけて任意な形で参加者であることに留意しておきたい。本プロジェクトの目的は、そのような形で得られた中年女性の生活意識とライフスタイルを分析して、向老期を迎える彼女らへの社会的な支援の可能性を探求するものである。

そのために、サンプルとして意識的に中年女性のシングルと既婚者を選択して、その差異を明らかにしようとした。属性の尋ね方も1「結婚している」（子どもあり）、2「結婚している」（子どもなし）、3「独身」（子どもあり）、4「独身」（子どもなし）に類型化した。329人の有効回答総数は「結婚している」（子どもあり）が103人（31.3%）、「結婚している」（子どもなし）が51人（15.5%）、「独身」（子どもあり）が109人（31.1%）、「独身」（子どもなし）が66人（20.1%）になった。

しかし、この4つのカテゴリーをそのまま利用すると、「結婚している」（子どもなし）と「独身」（子どもなし）の実数が不足して、有効なデータ分析ができなくなる。そこで、2つのカテゴリーに再編した。一つは「既婚者」と「独身者」であり、もう一つは「子どもあり」と「子どもなし」である。

分析に先立ってあらかじめ主要な項目についてのクロス集計から、 χ^2 検定または平均値の差の検定を行い、同じく有意な差があるかどうかを判断した。そうすると、以下に使用する設問項目のうちで有意な差異がより多く検出できたカテゴリー群は「既婚者」と「独身者」であった。「子どもあり」と「子どもなし」では9つにしか有意差が得られなかったが、「既婚者」と「独身者」では17の設問に有意差が認められたのである。

この確認も今回の発見といってよいが、以下では基本的には「既婚者」と「独身者」のカテゴリーを軸にして分析を進めていきたい。

それに先立って、このうち家族形態を除いて、2つのカテゴリーでそれぞれに有意差が認められたのは、「年齢」と「世帯の1ヶ月の生活費」であったので、まず「年齢」から見ておこう。

「既婚者」と「独身者」では40－44歳では同じであるが、「既婚者」が45歳後半と50歳前半に均等に分付している反面、「独身者」の過半数が50歳前半であった。また、「子どもあり」と「子どもなし」では、「子どもあり」の半数が50歳前半にいたのに対して、「子どもなし」では40歳の前半と50歳前半に分かれたという相違がある。

表 1 年齢の相違（既婚者と独身者）

	40-44 歳	45-49 歳	50-55 歳
既婚者	24.2	37.3	38.6
独身者	24.4	25.0	50.6

$$\chi^2=6.63 \quad df=2 \quad p < 0.05$$

表 2 年齢の相違（子どもありと子どもなし）

	40-44 歳	45-49 歳	50-55 歳
子どもあり	15.6	34.0	50.5
子どもなし	40.2	24.8	35.0

$$\chi^2=24.83 \quad df=2 \quad p < 0.001$$

表 3 世帯の 1 ヶ月の生活費（既婚者と独身者）

	20 万円未満	20-30 万円	30 万円以上
既婚者	15.9	36.6	47.7
独身者	48.9	42.0	9.1

$$\chi^2=72.69 \quad df=2 \quad p < 0.001$$

表 4 世帯の 1 ヶ月の生活費（子どもありと子どもなし）

	20 万円未満	20-30 万円	30 万円以上
子どもあり	28.8	39.2	32.1
子どもなし	41.9	40.2	17.9

$$\chi^2=9.46 \quad df=2 \quad p < 0.01$$

次に「世帯の 1 ヶ月の生活費」を両方で見ると、「既婚者」の場合は 1 ヶ月の生活費は「30 万円以上」にもっとも多く、「独身者」の「20 万円未満」とは著しい対照を示した。一方、「子どもあり」では「20-30 万円」が一番多く、「子どもなし」では「20 万円未満」がピークとなった。すなわち、「既婚者」と「子どもあり」に相対的には 1 ヶ月の生活費が多かったことになる。

居住形式も本人のライフスタイルを左右することがある。持家ならば、居住者の永住意思が強くなり、近隣関係に志向させることが多い。しかし、移動型人間で借家暮らしならば、脱地域社会志向が濃厚になる。このような前提でデータを見ると、「既婚者」と「独身者」間でも、「子どもあり」と「子どもなし」間でも、有意な差異は認められなかった。ちなみに「既婚者」の持家率は 58.2%、独身者は 56.3%であった。残りはすべて「借家・公営住宅・社宅」の比率となる。また、「子どもあり」の持家率は 60.8%であり、「子ど

もなし」のそれは 50.4% になって、一見したところ有意差がありそうな印象を与えるが、 χ^2 値は 3.34 に止まり、自由度 1 では有意であるとはいえなかった。ちなみに p 値は 0.068 であった。

年収に関しては「子どもあり」と「子どもなし」間には有意差が得られなかったが、「既婚者」と「独身者」間には、「個人の年収」でも「世帯の年収」でもそして「世帯の金融資産」でも違いが判明した。ここからも、カテゴリーのもつ区別能力は「既婚者」と「独身者」間において強いといってよい。

まず個人の年収は調査票では「なし」から「2000 万円以上」までの 8 つの選択肢を用意したが、集計に際しては表 5 の通り 3 つにまとめ直した。そうすると、1 ヶ月の生活費が多かった「既婚者」では後に見る表 9 から分かるように、「無職専業主婦」が 36.6% いることによって、「年収なし」がほぼ同率の 36.2% になった。また「300 万円以上」の年収はわずかに 11.8% にすぎなかった。中心は「300 万円未満」の 52.0% にある。これに対して、「独身者」のピークは「300 万円以上」の 51.4% にあった。同じく表 9 を先取りすると、「仕事形態」や勤務先の規模から見て、組織従業者が 62.5% を占めたことに関係がある。独身者個人の「年収なし」は 1.1% であった。もちろん有意である。

表 5 個人の年収

	年収なし	300 万円未満	300 万円以上
既婚者	36.2	52.0	11.8
独身者	1.1	47.4	51.4

$\chi^2=96.24$ df=2 p < 0.001

これが「世帯の年収」になると、この傾向は逆転する。表 5 と同じく 8 通りの選択肢を 3 カテゴリーに再集計した表 6 から、「世帯の年収」では「既婚者」の過半数が「1000 万円未満」を回答し、「独身者」の中心は「500 万円未満」にあることが分かる。「1000 万円以上」でも「既婚者」の方が 33.8% になって、5.2% の独身者とは全く収入の分布が異なる。既婚者は定義上配偶者を持っているうえに、その 64% が自らも働いている。既婚者の 2/3 が共稼ぎと見なされるから、一人でしか稼げない独身者よりも、世帯の年収が多くなるのは当然である。

「個人年収」と「世帯年収」では逆転した傾向が把握されたが、「世帯の金融資産」ではどうであろうか。ここでも 8 通りの選択肢を 3 種類に整理しなおした。そうすると、「既婚者」に「1000 万円以上」の「金融資産」が多いことに気がつく。約 4 割である。「独身者」のピークは「300 万円未満」であり、同じく 4 割である。世帯の観点からすると、共稼ぎが 64% いる既婚者の方が独身者よりも年収や金融資産面では優っていた。

表 6 世帯の年収

	500 万円未満	1000 万円未満	1000 万円以上
既婚者	14.6	51.7	33.8
独身者	69.4	25.4	5.2

$$\chi^2=105.50 \quad df=2 \quad p<0.001$$

表 7 世帯の金融資産

	300 万円未満	300－1000 万円未満	1000 万円以上
既婚者	20.1	38.3	41.6
独身者	39.2	33.1	27.7

$$\chi^2=14.43 \quad df=2 \quad p<0.001$$

年収の指標は以上のとおりであるが、属性の最後に学歴を見ると、「子どもあり」と「子どもなし」間でも「既婚者」と「独身者」間でも、有意な差はなかった。「高校卒」と「短大以上」でまとめ直すと、ほぼ半数程度に分かれたといってよい。たとえば、「既婚者」の「高校卒」は 49.7%、「独身者」は 44.9%、「子どもあり」のそれは 48.1%、「子どもなし」でも 45.3%になって、極めて近似的であった。

以上を受けて、Ⅱ節以降では主としてその相違が鮮明となった「既婚者」と「独身者」のカテゴリーに依存して、その意識とライフスタイルの違いを分析して、どのような社会的支援が可能かを考えてみたい。

第 2 節 現在の社会関係とライフスタイルにおける既婚者と独身者の相違

今回使用した調査項目は、現在の社会関係、意識、ライフスタイル、基本属性のグループと仮定法による 60 歳以降における社会関係、意識、ライフスタイル、介護福祉ニーズ、基本属性に大別できる。本節ではこのうち「現在の社会関係、ライフスタイル、基本属性」を取り上げる。

まず、その「家族形態」は既婚者と独身者では大幅に異なる。いずれも未婚の子どもは多いが、独身者が自分だけで抱えているのに対して、既婚者は核家族の形態を取っている。

表 8 既婚者と独身者の家族形態の違い(%)

家族形態	一人暮らし	自分と未婚の子	夫婦のみ	夫婦と未婚の子	親と同居	その他
既婚者	0.0	2.6	32.7	51.0	11.8	2.0
独身者	35.2	44.3	0.0	0.0	15.9	4.0

$$\chi^2=257.28 \quad df=5 \quad p<0.001$$

今回の対象である 40 歳以上 55 歳までの女性の仕事形態は表 9 の通りである。既婚者の 36.6%は無職・専業主婦であり、仕事としてはパートアルバイトが 47.1%となつて、断然多い。家計の中では配偶者の補助に徹している姿が浮かんでくる。今回の調査では、会社・商店の経営、会社・商店の従業員、会社員、公務員を合わせて「組織従業者」と呼んでいるが、これに該当するのはわずかに 15.7%であった。しかし、独身者は家計の責任が重いので、補助的な地位に止まらない。「組織従業者」に含まれるのが 62.5%に達している。

独身者のパートアルバイトは 30%、無職・専業主婦はわずかに 7.5%にすぎなかった。この仕事形態は利害関係が大きく異なるために、中年女性の意識やライフスタイルをさまざまな面で規定するはずである。

表 9 既婚者と独身者の仕事形態の違い(%)

	組織従業者	パートアルバイト	無職・専業主婦
既婚者	15.7	47.1	36.6
独身者	62.5	30.0	7.5

$$\chi^2=79.70 \quad df=2 \quad p<0.001$$

仕事の形態とともに、その規模も態度やライフスタイルの規定変数になりえる。大企業なりの相違、零細企業なりの違いが交錯するからである。表 10 は会社・商店の経営、会社・商店の従業員、会社員、パートアルバイトと回答した女性にその規模を尋ねた結果である。パートアルバイトが多かった既婚者は「9 人以下」と「10-99 人」で 80%に近いが、独身者は「100 以上」の比率が 40%弱に達していて、勤務先の規模の相違も歴然である。このように働き先やその規模の違いは中年女性の意思や社会関係や介護福祉ニーズを規定するので、既婚者と独身者に見られるこれらの差異についてはきちんと認識しておこう。

表 10 既婚者と独身者の勤務先の規模(%)

勤務先の規模	9 人以下	10-99 人	100 人以上
既婚者	34.4	42.7	22.9
独身者	24.7	36.3	39.0

$$\chi^2=7.27 \quad df=2 \quad p<0.05$$

さて、次は現在維持している社会関係の親しさについての比較である。尋ねる対象を家族、親戚、現在の職場の同僚、友人、近所の人に 5 分割して、その程度を「非常に親しい」4 点、「まあ親しい」3 点、「あまり親しくない」2 点、「全く親しくない」1 点の 4 段階に設定した。全体としては既婚者も独身者もともにおおむね 80%程度が「親しい」と回答した。ところが、これらそれぞれで平均値の差の検定を行うと、「親戚との親しさ」においては既婚者と独身者間には有意な差が得られるが、それ以外の 4 つの社会関係では有意とはいえなかった(表 11)。

これはひとえに配偶者がいる既婚者といない独身者の違いに帰することが可能である。既婚者であれば、当然ながら、配偶者の方への目配りが必要になり、通常では親しい関係が得られるようになる。しかし、子どもがいても、配偶者と離別したり死別した場合は、親戚との関係は遠いものになりがちである。現在の職場の同僚や友人との親しさそれに近隣との関係では、既婚者と独身者では有意な差異が検出できなかった。もっとも、社会関係のカテゴリーのうち、近隣の平均値とそれ以外では 0.5 から 1.0 以上の相違があったことは記憶しておいてよい。ここから、東京の中年女性は既婚者でも独身者でも、地域社会志向（コミュニティ意識と行動）においては弱い状態にあるとあってよい。多くの場合、コミュニティ活動の主軸には中年女性や高齢男性が想定されがちであるが、今回の調査結果によれば、中年女性は友人や職場の同僚や親戚に比べても、近所の人との親しさの点では劣ることが確認された。

同じようにして、外出の機会を 3 通りに設定して質問したが、ここでも既婚者と独身者では有意な差異は得られなかった。ここでは「ほぼ毎日」と「週に 1 回以上」を合わせて 3 点、「月に 1 回以上」を 2 点、「年に数回」と「ほとんどない」を 1 点として再集計したので、各項目とも 3 点が最高点になる。趣味活動での外出は既婚者独身者ともにさすがに多いが、町内会・地域活動への参加は両者ともに少ない。表 11 と表 12 を合わせて、東京の 40-55 歳の女性は予想外に脱コミュニティ的な行動様式を持っていたといえる。既婚者で昼間に家にいても、地域社会への関わりは御免だということであろう。もちろん独身者はその大半が職場にいるので、事情は同じである。

しかしそうすると、20 年後は職場の関係性が亡くなり、親戚との交流も薄れがちになるはずだから、65 歳以降の高齢期においては地域における孤立感が深まり、孤独な老後が待っていると予想される。この点の自覚は今回の対象者にはなかったが、もっと地域社会との関係性を重視するようなライフスタイルが望ましいと考えられる。

職業の相違や規模の違いを越えて、このような社会活動指標に関しては既婚者と独身者間には有意な差異がなかった。

次に健康維持の方法について比較する。40 歳以上の女性が今回の対象者であるから、この健康維持の方法は切実な面があり、加えて「独身者で子どもあり」の場合は配偶者がいないのだから、自分の健康に子育ての責任が重なってくる。表 13 に見られるように双方でかなりな違いがあり、1%で有意であった。独身者は「十分な睡眠」と「規則正しい食生活」が同率で首位であったが、既婚者は「規則正しい食生活」を半数近くが選択した。これは配偶者がいるために、自分だけの食生活メニューを越えて、もっときちんと食生活の管理をしなければならないという状況の産物であろう。さらに既婚者の健康維持には「運動スポーツ」が 17%含まれている点が指摘できるが、既婚者が相対的に若かったこと、月収が多かったこと、無職・専業主婦が 36.6%いたことによるであろう。ただし、組織従業者で 4 倍、勤務先「100 人以上」の規模で 1.7 倍になった独身者のほうに「健康診断」が多いのは当然であろう。

表 11 既婚者と独身者間の社会関係の親しさ

	平均値	統計量 Z	p 値
(1) 家族の親しさ			
既婚者	3.757	1.399	0.162
独身者	3.679		
(2) 親戚との親しさ			
既婚者	3.105	2.007	0.044*
独身者	2.948		
(3) 現在の職場の同僚			
既婚者	3.031	-0.5747	0.566
独身者	3.073		
(4) 友人との親しさ			
既婚者	3.418	-1.479	0.139
独身者	3.509		
(5) 近所の人との親しさ			
既婚者	2.627	1.641	0.101
独身者	2.491		

表 12 既婚者と独身者間の外出の機会

	平均値	統計量 Z	p 値
(1) 友人知人宅への訪問			
既婚者	1.941	1.509	0.131
独身者	1.811		
(2) 趣味活動への外出			
既婚者	2.203	1.332	0.183
独身者	2.080		
(3) 町内会・地域活動への参加			
既婚者	1.216	0.076	0.940
独身者	1.211		

表 13 健康維持の方法

	十分な睡眠	規則正しい食生活	運動スポーツ	健康診断	その他
既婚者	24.8	47.1	17.0	5.9	4.6
独身者	39.8	39.8	8.0	9.7	2.3

$$\chi^2=14.85 \quad df=4 \quad p<0.01$$

それでは両方で「定期健康診断」の受診率に違いがあるのか。表 14 から見ると、「あり」が 70% 程度あるが、 χ^2 検定をしてみると、その値は 1.607 にとどまり、自由度 1 では有意であるとはいえないことが分かる。つまり、既婚者も独身者も「定期健康診断」の受診率には相違がないのである。

表 14 定期健康診断

	あ り	な し
既婚者	69.9	30.1
独身者	76.1	23.9

$$\chi^2=1.607 \quad df=1 \quad \text{有意であるとはいえない}$$

第 3 節 現在の社会意識における既婚者と独身者の相違

今度は現在の社会意識について見ておこう。使用するのはアノミー指標のうちの「無力感」と「無意味感」それに「経済的自立度」、「家族からの自立度」、「仕事面での自立度」そして「生活満足度」である。アノミーとはデュルケムが古典ギリシャ語を復活させて社会学概念につくりあげたものであり、「無規制状態」を意味する。それが強まれば、社会的統合が低下するので、アノミーは社会病理学や社会的危機論でも取り上げられる。

本調査ではアノミースケールを利用して調査票にその一部を盛り込んだ。本来ならアノミースケールは、①無規範性、②無力感、③無意味感、④絶望感、⑤自己疎隔感から構成されるが、今回は調査項目の数の問題から、無力感と無意味感だけに限定した。

では、アノミー無力感について既婚者と独身者の比較をしてみよう。設問文は「年金など現代社会の仕組みは大変複雑で、それがどこにどのようにして機能していくのかは、我々一般の人間にはとても分からない」というものであった。その回答に「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの 4 段階得点をつけた。高いほうがアノミー度も高いという立場である。全体的には「非常にそう思う」が 38.3%、「ややそう思う」が 54.1%になり、92%もの回答者には「無力感」が漂った。確かに年金制度を始めとして複雑な仕組みが社会システムを支えているので、これは予想通りの結果である。

これを既婚者と独身者にわけてその平均値の差の検定をすると、表 15(a)が得られる。

表 15 アノミー指標の無力感と無意味感

(a) 無力感			
	平均値	統計量 Z	p 値
既婚者	3.346	1.429	0.153
独身者	3.245		
(b) 無意味感			
	平均値	統計量 Z	p 値
既婚者	2.111	0.784	0.433
独身者	2.046		

最高点が4点だから、既婚者の3.346も独身者の3.245もかなり大きいといってよい。それだけ、現代社会の複雑な仕組みに対する「無力感」が強いのであろう。両者の間には有意な差はない。

同じく、「無意味感」を「自分はこの世の中でどういう役割を果たせばよいか分からない。自分が生きていることにいったい何の意味があるのだろう」という設問への回答によって測定した。得点化の方法は「無力感」の場合と同じである。アノミー度は「非常にそう思う」方に高く、「そう思わない」が低い。データからは、この「無意味感」が「無力感」とは逆に回答者には非常に少なかったことが分かる。「自分の生きていることへの意味」を回答者の75%は理解していたのである。そこで既婚者と独身者間で平均値の差の検定をすると、表15(b)に示すように、有意な差は検出されなかった。このカテゴリー間にはアノミー指標いずれも差異が認められなかったのである。念のために「子どもあり」と「子どもなし」間でもこの傾向が同じであったことを付加しておく。

今度は自立度を比較してみよう。まず経済的自立度から始める。経済的に自立していないことは「配偶者や親からのお金だけで」やっている場合であり、自立しているのは「自分の収入だけで」やっている場合である。これも4段階得点法であるので、得点が高いほど自立度も高くなる。

そこで、表16(a)を見ると、既婚者の自立度得点が2.144に対して、独身者は実に3.503に達していて、両者の差は歴然としている。既婚者は配偶者への経済的な依存度があるために、この結果が得られたのであろう。しかし、「子どもあり」と「子どもなし」ではともに自立得点が2.8程度になり、全く差異がないことも分かった。

同じ傾向は「家族からの自立度」でも認められる。「家族からの干渉はなく、自分なりに生きている」が4点であり、「家族への配慮を優先して、自分なりの生き方とは程遠い」が1点である。表16(b)から、独身者が3.427であるのに対して、既婚者は2.993に

とどまっている。この両者には十分な差異が存在する。

経済的自立度と同様に、「子どもあり」と「子どもなし」ではそれぞれ 3.189 と 3.286 になり、有意な差とはいえない。

表 16 2 種類の指標から見た自立度

(a) 経済的自立度			
	平均値	統計量 Z	p 値
既婚者	2.144	-15.141	0.000**
独身者	3.503		
(b) 家族からの自立度			
	平均値	統計量 Z	p 値
既婚者	2.993	-5.832	0.000**
独身者	3.427		

表 17 仕事面での自立度

	平均値	統計量 Z	p 値
既婚者	2.928	-4.166	0.000**
独身者	3.398		
子どもあり	3.151	-1.993	0.045*
子どもなし	3.359		

仕事面での自立度は「自分の判断で仕事をしている」から「自分の判断は少なく、上司や同僚の意見に従っている」までの4段階で測定した。仕事面での自立度も、他の2つの自立指標と同じく、独身者 3.398 が既婚者の 2.928 よりも有意に高い。パートアルバイトが多かった既婚者に比べて、独身者は 62.5% が組織従業者であったことに原因がありそうである。

ただし、「子どもあり」と「子どもなし」でも有意差が検出された点が前2者と少し異なる。「子どもなし」に仕事上の自立度が高かったのである。

以上の社会意識の総決算ともいうべき「生活満足度」はどのような構造であろうか。調査票では「非常に満足」から「非常に不満」までの4段階で尋ねているが、集計作業では「満足」2点と「不満」1点の2段階に単純化した。単純集計では「満足」が 76.0%、

「不満」が 24.0%になった。既婚者の満足得点は 1.797、独身者では 1.736 になり、等しかった。「子どもあり」と「子どもなし」でも傾向は変わらない。

表 18 生活満足度

	平均値	統計量 Z	p 値
既婚者	1.797	1.321	0.187
独身者	1.736		

第 4 節 60 歳以降のシルバーサービスニーズと介護資源としての信頼性

シルバーサービスとは和製英語であるが、ここでは高齢者の自立・介護・福祉を支援する商品とサービスを提供することと位置づけておこう。これは「高齢者のための宿泊やのりものの手配に関心があるかどうか」から「無農薬・無公害で生産された安心な食品の提供」までの 11 指標で構成されている。調査票では「大いに関心を持つ」から「全く関心を持たない」までの 5 段階で尋ねたが、集計に際しては「大いに関心を持つ」に 3 点、「多少は関心を持つ」に 2 点、「どちらでもない」「あまり関心を持たない」「全く関心を持たない」を合わせて 1 点とした。

そうすると、既婚者と独身者間で有意な差が得られたシルバーサービス項目は、まず「高齢者の資産に関する相談や助言」（表 19）であった。独身者の反応のうち過半数が「関心ない」であり、既婚者よりも多いが、同時に「非常にあり」でも既婚者を超えている。既婚者は「多少あり」が独身者よりもかなり多かった。独身者は高齢期における資産に関する相談や助言のニーズが乏しかった。

表 19 高齢者の資産に関する相談や助言

	関心ない	多少あり	非常にあり
既婚者	46.8	42.9	10.4
独身者	58.9	28.6	12.6

$$\chi^2=7.34 \quad df=2 \quad p<0.05$$

次に既婚者と独身者との間で有意な差が検出されたのは、「高齢者が持っている技術や技能を活用した人材派遣サービス」へのニーズであった。「関心がない」のは既婚者に多く、「非常にあり」は独身者に多かった。ひとつの理由には、既婚者の 36%が無職・専業主婦なので活用できる「技術や技能」が不足していることを指摘できる。これに対して独身者は組織従業者が 62%いるので、仕事面での「技術や技能」に既婚者よりも勝る可能性がある。

表 20 高齢者の人材派遣サービス

	関心ない	多少あり	非常にあり
既婚者	33.1	40.3	26.6
独身者	19.4	50.3	30.3

$$\chi^2=8.13 \quad df=2 \quad p<0.05$$

第三番目の有意なシルバーサービスは「高齢者のための職業紹介サービス」であった。ここにも既婚者の「関心の薄さ」と「非常に関心があり」とする独身者の反応が顕著であった。現在の仕事をもっている独身者では「高齢期の職業紹介サービス」に強い関心をもつし、既婚者ではその方面の志向が弱い。

表 21 高齢者のための職業紹介サービス

	関心ない	多少あり	非常にあり
既婚者	29.5	46.8	24.0
独身者	20.6	40.0	39.4

$$\chi^2=9.39 \quad df=2 \quad p<0.01$$

残りの 8 種類のシルバーサービスニーズでは既婚者と独身者との間には有意な差が得られなかった。それは「高齢者のための宿泊やのりものの手配に関心」（非常に関心ありと多少の関心ありの合計：既婚者 72.7%、独身者 78.3%）、「高齢者対象の教養講座・市民大学」（同上：既婚者 66.3%、独身者 66.9%）、「ドクターやヘルパーの派遣介護サービス」（同上：既婚者 90.3%、独身者 85.8%）、「高齢者対象の新聞雑誌、本」（同上：既婚者 66.2%、独身者 64.6%）、「高齢者の知識技能伝達セミナー」（同上：既婚者 66.9%、独身者 64.0%）、「高齢者の技術や技能を活かしたリサイクル」（同上：既婚者 60.4%、独身者 65.2%）、「医療施設を完備した高齢者向けの別荘やリゾート」（同上：既婚者 61.7%、独身者 62.9%）、「安心な食品の提供」（同上：既婚者 75.3%、独身者 81.8%）である。

そして、今後の新しい介護方法として、都市部ではある種の期待が集まっている「リバースモーゲージ」への関心にも両者はまったく相違がなかった。「関心がある」のはどちらも 30%を少し超えた程度であった。

さて、介護保険が立ち上がって 1 年が経過した。民間の参入チャンスが少ない、予想よりも低い利用状態にあるので、企業の大半が赤字経営の状態にある、ケアマネジャーの仕事がハードすぎる割には報酬には恵まれない、都市部と郡部とのサービス水準の格差が広がるなどの諸問題はあるにせよ、40 歳以上の国民全員が費用の一部負担をすることによって、高齢者の介護問題に全員が立ち向かう構造が作られたことは重要であり、今後ともその機能が十分に発揮されるように支援を続けていく必要がある。

なぜなら、要介護状態になった高齢者を家族だけではなく、社会全体で支え合うのが介護保険なのであるから。そして、今までは自治体間に地域格差が存在したことをマスコミも含めて無自覚だったのに、教育、文化、福祉、医療、道路、公衆衛生などの面で

地域格差が歴然とあることを自覚させたことだけでも介護保険立ち上げの成果といつてよいのである。

いうまでもなく介護保険は、①40歳以上が全員で介護費用を賄う、②要介護認定を2段階で正確に行う、③福祉専門家の評価を高め、増員できるきっかけになる、④民間企業の福祉部門参入を促進する、⑤既存の産業の枠を超えて融合できる、というような効果が予想されている。加えて、北海道であれば、⑥地域差（大都市と郡部）と季節差（冬と春夏秋）への配慮が重要になってくる。いまだ十分とはいえないが、試行錯誤の中からこのような機能が発揮できるような支援が望まれる。

以上のことを念頭において、調査票に盛り込んだ「現時点で、親の病気に伴い、現存の介護資源がどの程度信頼できるか」についての東京でサンプルとなった中年女性の判断を整理しておこう。これには「自分自身」、「自分の配偶者」、「自分の兄弟姉妹」、「近所の友人・知人」、「公的な福祉介護サービス」、「民間の福祉介護サービス」を指標として想定した。調査票では「大変頼りになる」、「多少は頼りになる」、「あまり頼りにならない」、「ほとんど頼りにならない」と表現したが、集計に際しては前二者を「頼りになる」としてまとめ、後二者「頼りにならない」として一括した。

シルバーサービスニーズと同様に、介護資源への信頼性を既婚者と独身者を比較しながらまとめてみる。結論からいえば、有意な差が得られたのは「自分自身」への信頼性のみであった。無職・専業主婦が36.6%いた既婚者のほうに「頼りになる」が92.5%と多く出た。独身者では「頼りになる」は82.7%にとどまった。親が病気をした場合、独身者よりも既婚者に「自分を頼りにする」比率が10%ほど高く出たが、これは1%で有意な差といってよい。

表 22 現時点で、本人は親の病気で頼りになるか

	ならない	な る
既婚者	7.5	92.5
独身者	17.3	82.7

$$\chi^2=6.76 \quad df=1 \quad p<0.01$$

しかし、「自分」以外では、既婚者と独身者間には「親の病気で頼りになるか」の差は得られなかった。既婚者における「頼りになる」に比率は、配偶者がいれば77.2%、兄弟姉妹では78.4%というように高いが、「近所の友人・知人」になると既婚者で41.2%、独身者で41.3%にとどまった。血はやはり水よりも濃いのであろう。

また、介護保険にもっとも関連が深い「公的な福祉サービス」は、「頼りになる」が既婚者で77.0%、独身者で74.4%になった。どちらも3/4が「頼りになる」と判断していたことは、施行後1年を迎えた介護保険への期待が一定以上は確実に存在するという意味で、心強いものがある。とはいえ、同じようにその飛躍が期待されている「民間の福祉サービス」は1年後でも苦戦を強いられている。利用者数の低迷に加え、価格設定が低い「家事援助」が多いためである。また、ヘルパーの家庭訪問に要する交通費が算定

されていないなどの問題点が残っている。ちなみに、訪問介護の大手であるジャパンケアサービス（本社札幌市）は、従来5億5000万円の黒字を見込んでいたのに、2001年3月期の経常損益は7億8200万円の赤字になったと発表した。当初は60億7000万円の売上予想であったが、実際には31億7800万円という半分にとどまった（『日本経済新聞』2001年4月7日）。

それでも、「民間の福祉サービス」への東京中年女性の信頼性は7割程度存在していた。「公的な福祉サービス」ほどではないにしても、既婚者で70.9%、独身者でも67.3%の信頼性が得られたことは、他はともかくサービス単価の問題とヘルパー派遣のための交通費の問題が解決すれば、民間のシルバーマーケットが活性化する可能性を秘めていると考えてよい。

そこで、今度はかりに回答者に60歳以降を想定してもらい、同じように「病気などで援助が必要になったとき、誰を頼りにするか」を尋ねると、「既婚者・独身者」間でも「子あり・子なし」間でも全く差異が現れなかった。中高年女性はこの意味で一色に塗られる。既婚者の結果を紹介すれば、60歳以降に「自分の子ども」を頼りにする比率は80.0%（独身者83.8%）、「配偶者」への依拠は86.9%（独身者85.2%）、「兄弟姉妹」へは59.5%（独身者59.6%）、「近所の友人・知人」へは42.0%（独身者44.4%）、「公的福祉サービス」へは74.7%（独身者72.0%）、そして「民間の福祉サービス」には74.6%（独身者66.3%）というような回答であった。比率の数字は違っていても、 χ^2 検定の結果から、すべての項目にわたって既婚者と独身者間には有意な差異はなかったことが指摘できる。

また、同じように仮定法で尋ねた「60歳以降で介護を受けたい場所」についても、「既婚者・独身者」間でも「子あり・子なし」間でも違いはなかった。既婚者でいえば、「自宅」での介護希望が53.9%（独身者44.6%）、「老人ホーム・老人保健施設」が31.8%（独身者30.9%）、「病院」が8.4%（独身者14.3%）、「子どもの家・親戚の家」は3.2%（独身者4.0%）にすぎなかった。

表23は私がこれまでに類似の調査をして得た結果を加えてまとめ直したものである。東京中年女性とは違い、沖縄、長野、全国すべての対象者は65歳以上であるが、介護を希望する場所としては「子ども・親族」や「病院」などはよく似ている。また、「自宅」は約半数、「福祉施設」は2-3割という傾向にある。

さて、今度は同じ仮定法のなかで、60歳以降における生活費の見通しや現在の用意状況についてのデータを整理しておこう。

まず、「60歳以降における生活費を年金でまかなえるか」についての既婚者と独身者間の比較である。「年金だけで可能」とみるのは両者ともに40%程度であり、「不足」とするのが60%ある。 χ^2 検定をすると、その値は3.283になり、自由度2の場合では有意とはならない。すなわち両者間に違いはない。

「不足する」場合の「工面方法」も両者間に違いはない。仕事や財産収入といういわば

表 23 介護を受けたい場所

	自宅	子ども・親族	福祉施設	病院	その他・DK
東京中年既婚者	53.9	3.2	31.8	8.4	2.6
東京中年独身者	44.6	4.0	30.9	14.3	6.3
沖縄高齢者	42.9	5.9	24.9	13.1	13.2
長野高齢者	65.2	4.0	8.1	16.1	6.7
全国高齢者	43.0	5.3	23.2	19.2	9.3

(注) 沖縄高齢者は本部町 65 歳以上の住民、長野高齢者は富士見町 65 歳以上の住民で、調査年は 1997 年。全国は総務庁「高齢者の健康に関する調査」(1997 年)

詳しくは金子勇『高齢社会とあなた』NHK出版、1998：110、参照。

「自力路線」を回答したのはどちらも 40%程度であった。それまでの「貯蓄」を切り崩すという意見も両者で 25%くらいと変わらなかった。「生活費を節約」と「親・兄弟姉妹・子ども」などの「家族からの支援」の合計もともに 30%弱あり、全体として既婚者も独身者も「不足の工面」方法は近似していた。

住宅や土地の不動産を担保に、本人の死後その売却代金を返済に充てることを前提としたリバースモーゲージへの関心度も尋ねたが、既婚者と独身者間の差異はまったくなかった。ともに「関心なし」が 68%程度、「関心あり」が 32%程度であった。

シニアプラン開発機構の業務の一つである「定年後の研修」の普及のための情報として類似の設問も試みた。その結果、既婚者は全員が「定年後の生活資金設計」というような研修を受けた経験をもっていなかった。独身者でも 97.5%が研修未経験であった。40-55 歳までの女性はまだこのような機会への関心がまったくないことが分かった。

では受講意欲はどうかというと、表 24 のように一見すると、両者間には有意な差異が想定されるが、 χ^2 値が 2.428 しかなく、自由度 2 では 5.991 が棄却点であるので、結局この表における既婚者と独身者間には有意な差があるとはいえないのである。すなわち、今後の研修希望の比率間にも差がなく、「意欲あり」「意欲はあるが、制度がない」、「制度が不明・意欲もない」がほぼ三等分の構造を示した。

表 24 「定年後の生活資金設計」の研修を受けたいか

	意欲はある	意欲はあるが 制度がない	意欲はあるが制度が 不明・意欲はない
既婚者	31.0	31.0	38.0
独身者	41.0	25.9	33.3

$\chi^2=2.428$ df=2 有意であるとはいえない

このように、統計学的な検定を行えば、表 24 のように目分量では有意であると判断しなくなる分布でも確実な言明ができる。

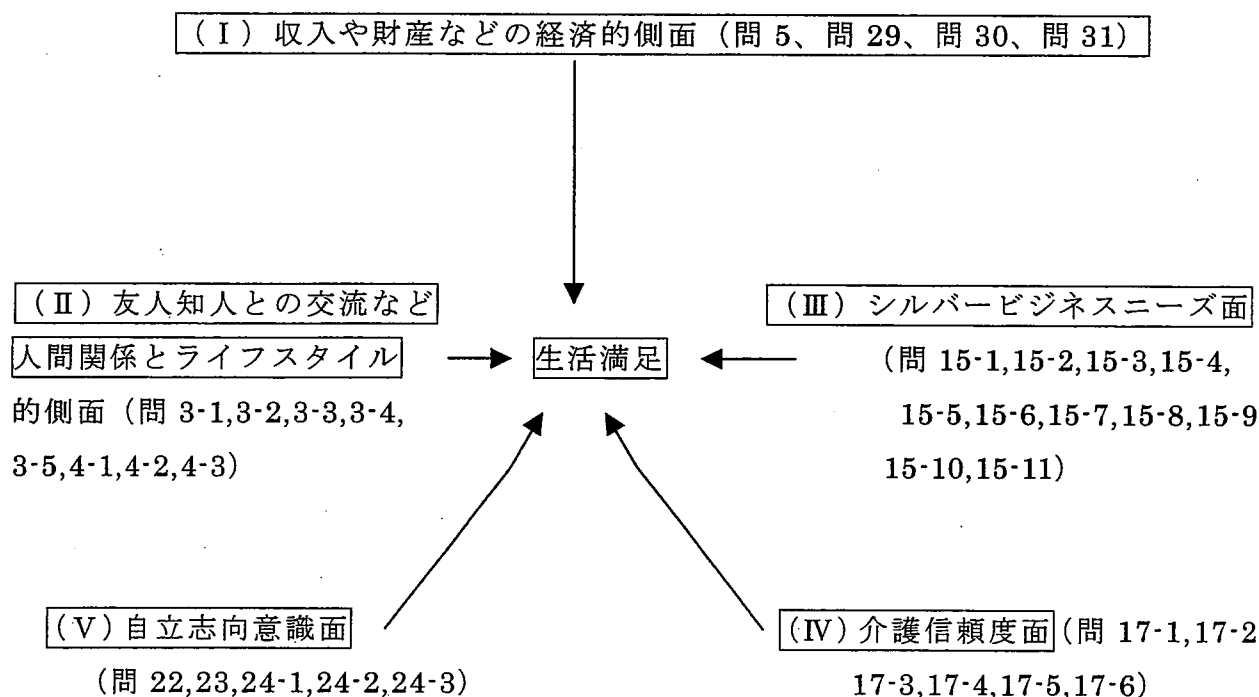
以上で、既婚者と独身者との間のクロス分析を終了して、次は「生活満足」を被説明変数とした多変量解析を行なう。

第5節 多変量解析からみた生活満足度の規定要因

ここでは多変量解析のなかでも一つの被説明変数を多くの変数で説明できる重回帰分析法を利用する。いうまでもなく、人が感じる「生活満足」には多くの要因がある。収入や財産などの経済的側面、友人知人との交流などの人間関係とライフスタイルの側面、シルバービジネスニーズ面、介護をめぐる個人の意識面、自立志向の意識面などから、「生活満足」は構成される。

本章での分析軸は既婚者と独身者にあるので、以下順次それぞれに重回帰分析法を行なっていく。この場合の分析図式は図1の通りである。

図1 既婚者と独身者の「生活満足」の重回帰分析図式



まず、収入や財産などの経済的側面から「現在の世帯における1ヶ月の生活費」、「個人の年収」、「世帯の年収」、「世帯の金融資産」を利用して、既婚者と独身者それぞれに「生活満足」度の説明をさせる。そうすると、既婚者では決定係数がわずかの0.018、P値は0.614となり、これら4つの経済変数は全く「生活満足」度を説明できないことが分かった。同様に既婚者でも決定係数が0.052、P値は0.075となって有意差まで今一步であるが、結局5%では有意とはいえず、「生活満足」に関する経済変数による説明力は存在し得なかった。

友人知人との交流などの人間関係的側面の変数は、「家族」、「親戚」、「現在の職場の同僚」、「友人」、「近所の人」という社会関係の親しさ、それに「友人・知人宅への訪問」、「趣味活動での外出」、「町内会・地域活動への参加」というライフスタイルを想定した。これら 8 変数で「生活満足」度の説明をさせたが、既婚者も独身者もともに有意な説明力が得られなかった。既婚者での決定係数は 0.110、P 値は 0.234、独身者では決定係数が 0.050、P 値は 0.556 にすぎなかった。

それで第三として、意識面の応用として「シルバービジネス」への関心度による「生活満足」度の説明も計算したが、同じく既婚者でも独身者でも説明力を持たなかった。

第四には、介護をめぐる現在の意識として「自分自身への信頼」、「配偶者への信頼」、「兄弟姉妹への信頼」、「公的な福祉介護サービスへの信頼」、「民間の福祉介護サービスへの信頼」を用いて「生活満足」度の説明をさせた。ここでも既婚者の決定係数は 0.086、P 値が 0.237、独身者の決定係数は 0.072、P 値が 0.597 となって、連立方程式の説明力はなかった。

比較の素材として、以上に使用したすべての説明変数によって「子どもあり」と「子どもなし」における「生活満足」度も説明させてみたが、ともにまったく有意となる結果は得られなかった。

すなわち図 1 における I から IV までの説明変数による重回帰分析は、既婚者と独身者の「生活満足」度を全く説明できなかったのであるが、唯一例外として V 「自立志向意識面」の変数は十分な説明力を有した（表 24）。すなわち、修正済決定係数による全体の説明力 0.208 は、この変数群だけで既婚者の「生活満足」度全体の 20.8% の説明力を有することの証明になる。

まず「アノミー無意味感指標」の標準偏回帰係数がマイナスであったことに留意したい。これは 5% で有意であったが、この意味は「世の中で自分の生きている意味がある」ことが既婚者の「生活満足」度を押し上げる働きをもつことを意味する。なぜなら、問 23 では「自分の生きている意味がない」と答えた方が高い点数が得られるように設計されていたから。従って、得点が低いとアノミー度も低くなり、標準偏回帰係数がマイナスになる。「アノミー無力感」は既婚者の生活満足とは無関係だった。

自立度についても興味深い結果が得られた。まず「経済的自立度」は既婚者の生活満足度を説明できなかった。しかし、「家族関係からの自立度」と「仕事面での自立度」はともに既婚者の生活満足度を 5% 水準で説明できた。既婚者は定義上配偶者がいるし、パートアルバイトも多かったが、この両者は生活満足をプラスに押し上げる作用をもったのである。

しかしながら、独身者ではこの 5 変数による重回帰分析の修正済決定係数はわずかに 0.018 でしかなく、P 値は 0.177 となり、全体としての説明力を持っていなかった。ここで初めて既婚者と独身者の明確な相違が検出されたことになる。そこで念のために、同

表 24 「自立志向意識面」の変数による既婚者の「生活満足」の重回帰分析結果

説明変数	標準偏回帰係数	t 値	P 値
アノミー無力感指標	-0.095	1.034	0.304
アノミー無意味感指標	-0.205	2.157	0.034*
経済的自立度	0.118	1.199	0.234
家族関係からの自立度	0.234	2.435	0.017*
仕事面での自立度	0.229	2.353	0.021*
修正済決定係数	0.208		
修正済重相関係数	0.456		
F 値	6.040		
P 値	0.000**		

表 24 「自立志向意識面」の変数による
「子どもなし」の「生活満足」の重回帰分析結果

説明変数	標準偏回帰係数	t 値	P 値
アノミー無力感指標	0.222	2.278	0.025*
アノミー無意味感指標	-0.281	2.790	0.007**
経済的自立度	-0.155	1.344	0.183
家族関係からの自立度	0.362	3.209	0.002**
仕事面での自立度	0.102	0.931	0.355
修正済決定係数	0.218		
修正済重相関係数	0.467		
F 値	5.851		
P 値	0.000**		

じ変数で「子どもあり」と「子どもなし」における「生活満足」度も説明させて見たところ、次の結果を得た。すなわち「子どもあり」の場合は修正済決定係数が 0.022 しかなく、P 値も 0.130 に止まり、有意とはいえなかったが、「子どもなし」においては有意と出たのである。修正済決定係数も 0.218 と既婚者の場合よりもやや高く、P 値は 0.000 であり、1%で有意であった。

既婚者の結果と異なるのは、「アノミー無力感指標」がプラスに聞いていた点である。

調査票の設計上、問 22 は「現代社会の仕組みは大変複雑だから、一般の人間にはとても分からない」としていたが、プラスの反応は「とても分からない」ことを意味するので、結局はここから「社会の仕組みは複雑で分からない」→「アノミー無力感が高い」→「生活満足度は高い」という構造が浮かび上がってくるのである。丸山真男風にいうなれば、「大政治」への無力感はあるけれども、身近な「小政治」には敏感であるといった「子どもなし」シングルの中年女性の思考形態が見て取れる。

「アノミー無意味感指標」がマイナスであったことは既婚者と同様であり、自分が生きている意味をしっかりと確認したときに「生活満足」も高まるのである。「子どもなし」女性のほうが既婚者よりも「家族関係からの自立度」において値が高いことも目立つ。

今回の東京中年女性のサンプルでは、「結婚している」（子どもなし）が 51 人（全体の 15.5%）、「独身」（子どもなし）が 66 人（全体の 20.1%）になっている。表 24 の「子どもなし」はこの合計であるが、独身＝シングルのほうが既婚者よりもやや多い。したがって、この層は定義上一人暮らしをしていることになり、「家族関係からの自立度」は当然高いものになる。いいかえれば、シングルであるがゆえに、「生活満足」度も高いのである。

以上から、図 1 の分析図式では、(V) 自立志向意識面のみが既婚者と「子どもなし」において「生活満足」を説明することができたことになる。

参考までに、既婚者と「子どもなし」の場合で、それぞれの説明変数の因子分析をしておこう（表 25）。まず、既婚者では因子 I に 3 つの自立志向指標が入った。定義からも実態からも、「経済的自立度」、「家族関係からの自立度」、「仕事面での自立度」は同じ因子群であった。しかし、アノミー指標は分かれた。因子 II には「アノミー無意味感指標」がプラスで該当して、合わせて「仕事面での自立度」がマイナスながら含まれた。すなわち「アノミー無意味感指標」の高さと「仕事面での自立度」の低さとが共存していたのである。自分の生きている意味への疑問と仕事面での自立の乏しさとが結びついていた。

既婚者における「アノミー無力感指標」はどこにも該当せず、因子 III にも当てはまらなかった。むしろ、これには「家族関係からの自立度」のほうが強い負荷量をもっていた。負荷量からだけで判断すれば、家族からの自立は経済的自立や仕事面での自立と一線を画すのである。二乗和から見ても、因子 I と因子 II との間には大きな差異はない。また、3 因子での累積寄与率は 26.9% に止まった。

他方、「子どもなし」では因子 I に 3 つの「自立志向因子」が含まれたのは既婚者と同じであったが、負荷量がそれぞれで大きく、二乗和も既婚者の場合に比べて 2 倍に近かった。ただし、経済的自立と家族からの自立とが密接に結びついている反面、仕事面での自立は因子 II により大きな負荷量を示した。さらに、因子 II は「アノミー無意味感指標」がマイナスで含まれていた。つまりこれは、仕事面での自立性が高いことと人生での無

表 25 「子どもなし」における「生活満足」の説明変数の因子分析結果

	既婚者			子どもなし		
	因子 I	因子 II	因子 III	因子 I	因子 II	因子 III
アノミー無力感指標	0.006	0.227	0.254	0.006	-0.013	0.479
アノミー無意味感指標	-0.054	0.512	0.012	-0.096	-0.373	0.365
経済的自立度	0.554	0.062	0.164	0.707	0.167	-0.034
家族関係からの自立度	0.351	-0.114	0.408	0.701	0.154	-0.029
仕事面での自立度	0.447	-0.309	-0.035	0.418	0.499	0.020
二乗和	0.636	0.426	0.259	1.175	0.440	0.365
寄与率	0.127	0.085	0.052	0.235	0.088	0.073
累積寄与率	0.127	0.212	0.264	0.235	0.323	0.396

意味感の低さとが結合していることになる。既婚者でもこの2指標は因子Ⅱを構成したが、符号が逆転していることに留意しておきたい。もちろん意味は変わらない。既婚者が示した人生の無意味感の強さと仕事面の自立性の乏しさは、裏返せば無意味感の弱さと仕事面での自立性の高さになるのだから。

因子Ⅲには2つのアノミー指標がプラスで共存した。全体的な累積寄与率は39.6%あり、既婚者の場合よりも13%も大きかった。

第6節 中年女性への社会的支援の方向

以上のデータ分析から、中年女性への社会的支援の方向を箇条書きで整理しておこう。

- ① 既婚者に比べて独身者は1ヶ月の生活費が少ないので、経済的支援が必要な事態が生じやすいと想定される。その場合の方法があらかじめ講じられておいてよい。
- ② ただし、個人の年収だけの比較では既婚者に無職や専業主婦の比率が高いせいもあり、独身者の年収額が多い。独身者は自前の自立的な経済的生活を行うが、既婚者は配偶者である夫がいるために家庭内では従属的な地位にある場合が予想されることに留意しておきたい。
- ③ 世帯年収では、独身者は既婚者よりもかなり少ないし、同じく金融資産も少ないので、まとまった金額を捻出する可能性は独身者のほうに乏しいであろう。
- ④ 独身者は企業や商店や役所で働いている比率が高く、しかも100人以上の従業員を持つ職場での勤務が39%あまりあるので、既婚者に比べて時間的な融通が困難な人が多い。

- ⑤ 社会関係の親しさは既婚者と独身者ともに、親戚との付き合いを除いては家族、職場の同僚、友人、近所の人においては相違がない。
- ⑥ 親戚との付き合いでは、独身者よりも配偶者をもつ既婚者に親しさが強く出た。
- ⑦ 両者に比率の相違はないが、家族の親しさが一番その得点が高く、以下順次友人との親しさ、職場の同僚との親しさと続き、近所の人との親しさは家族に比べて平均値が1点も低い。
- ⑧ ライフスタイル面でも両者に相違はない。平均値だけでいえば、趣味活動への外出が高く、友人知人宅への訪問がこれに次ぎ、町内会・自治会への参加が最も低い。
- ⑨ 健康維持の方法では、独身者は「十分な睡眠」と「規則正しい食生活」が同率首位だが、既婚者では後者が第1位となり、前者が2位になった。また、「運動スポーツ」は無職・専業主婦が多い既婚者に独身者よりも2倍の比率を見た。
- ⑩ アノミー指標の無力感と無意味感では両者に相違はないものの、無力感は非常に大きく、無意味感が両者とも低いという結果が得られた。
- ⑪ 経済的自立度は個人の年収では圧倒的に多かった独身者に高い。
- ⑫ 合わせて、配偶者がいない独身者では家族からの自立度も高かった。
- ⑬ 仕事面でも、パート・アルバイトが多い既婚者よりも、組織従業者が多い独身者に自立度が高かった。しかし、以上の相違にもかかわらず、両者の生活満足度は全く変わらなかった。
- ⑭ シルバーサービスニーズでは、「高齢者の資産に関する相談や助言」、「高齢者を人材として派遣するサービス」、「高齢者のための職業紹介サービス」のみ、両者間に相違が検出された。独身者では「高齢者の資産に関する相談や助言」への関心はなく、「高齢者を人材として派遣するサービス」には関心があり、「高齢者のための職業紹介サービス」では非常に関心があった。
- ⑮ 現在の時点で「親の介護」に関して頼りになるのは「本人」だけが既婚者（92.5%）と独身者（82.7%）間で有意であった。配偶者がいることや無職・専業主婦が多いことが差異の理由であろう。残りは両者の比率には統計的に見て相違がなかった。高い順には、70%台が兄弟姉妹と「公的福祉サービス」、60%台にかかるのが「民間の福祉サービス」、「近所の友人・知人」は40%台の「信頼」にとどまった。
- ⑯ 仮定法での60歳以降の「病気の際の援助者」への信頼もまた、両者間には違いがなかった。「配偶者」への信頼と「自分の子ども」への信頼は80%台で高く、70%台が「公的福祉サービス」と「民間の福祉サービス」、兄弟姉妹は50%台に落ちて、「近所の友人・知人」は40%台と「現時点」での信頼度と変わらなかった。
- ⑰ 同じく仮定法の「60歳以降の介護を受けたい場所」では「自宅」が約半数、「福祉施設」が3割、病院が1割となって、「子ども・親戚の家」はほとんどなかった。
- ⑱ 「定年後の生活資金設計」のための研修については、「受講経験者」は既婚者独身者

ともに絶無に近く、今後の受講意欲も「あり」は1/3程度にすぎなかった。

- ①⑨ 生活満足を多方面から説明しようとしたが、経済的要因、人間関係とライフスタイル要因、シルバービジネスニーズ面、介護信頼度面からの説明力はまったくなかった。
- ②⑩ 唯一例外的に説明力をもったのは、既婚者への自立志向意識面であり、低いアノミー無意味感、家族関係からの高い自立度、仕事面での高い自立度が有意となった。この結果から、既婚者への社会的支援は生活上の意味を感じてもらえるような役割や機会を提供することに尽きる。元来自立度が高かった独身者の生活満足がこの説明変数でも説明力を持ち得なかった現状からすると、相対的に自立度が低い既婚者への家族関係からの自立度支援と仕事面での自立度支援の意義が分かるであろう。

以上で、東京の任意サンプルである既婚中年女性と独身中年女性についての調査票に基づくパイロットスタディを終える。調査票によるデータの分析からは、予想以上に既婚者と独身者、および「子どもあり」と「子どもなし」との類型の相違は得られなかった。したがって、中年女性への社会的支援もまた、調査票の結果に現れたいくつかの有意な差異が得られた項目を除くと、ほぼ40-55歳の「中年女性」として一括した支援体制を組むことが可能であろう。

全体としてはグループインタビューの結果と合わせて、この調査結果が利用されることが望ましいが、中年女性の属性に照らした類型化ごとの支援メニューの必要性はあまり高くはないことに留意しておきたい。

第4部 関係資料

1. アンケート調査票

2. 議事録（研究会・ワーキンググループ）

1. アンケート調査票

○参考：アンケート対象者の年齢構成等について

(1) 調査対象地域： 東京23区に居住または勤務の女性

(2) 回収サンプル数： 329人

(3) 年齢構成等：

年齢（才）		40～44	45～49	50～55	合 計
結 婚 し て いる	子供あり	16 (5%)	46 (14%)	41 (12%)	103 (31%)
	子供なし	22 (7%)	11 (3%)	18 (5%)	51 (16%)
		38 (12%)	57 (17%)	59 (18%)	154 (47%)
独 身	子供あり	17 (5%)	26 (8%)	66 (20%)	109 (33%)
	子供なし	25 (8%)	18 (5%)	23 (7%)	66 (20%)
		42 (13%)	44 (13%)	89 (27%)	175 (53%)
合 計	子供あり	33 (10%)	72 (22%)	107 (32%)	212 (64%)
	子供なし	47 (14%)	29 (9%)	41 (13%)	117 (36%)
		80 (24%)	101 (31%)	148 (45%)	329 (100%)

(4) 生活形態：

	1人暮らし	自身と未婚の子供のみ	夫婦のみ	夫婦と未婚の子供のみ	親と同居	その他	全体
全 体	18.8%	24.9%	15.5%	23.7%	14.0%	3.0%	100%
既婚(子供有)	0.0%	3.9%	5.8%	75.7%	12.6%	1.9%	100%
既婚(子供無)	0.0%	0.0%	88.2%	0.0%	9.8%	2.0%	100%
独身(子供有)	17.4%	71.6%	0.0%	0.0%	8.3%	2.8%	100%
独身(子供無)	65.2%	0.0%	0.0%	0.0%	28.8%	6.1%	100%

生活ニーズ・将来意識に関するおうかがい ～豊かな将来を送るための支援制度の拡充に向けて～

あなた様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

この度は「生活ニーズ・将来意識に関するおうかがい」にご協力いただきまして誠にありがとうございます。

このアンケートは、40代～50代の女性の方々を対象に、現在および将来に対する意識やニーズをおうかがいし、その結果を踏まえて支援方策の可能性を探る目的で実施させていただきます。

なにとぞ統計の主旨をご理解のうえ、忌憚のないご意見をお知らせくださるようお願いいたします。

なお、調査の結果は全て数字で処理されますので皆様のお名前が出ることはなく、また後日セールス等でご迷惑をおかけするようなことは絶対にございませんのでご安心ください。

今回の調査にご協力いただくお礼といたしまして些少ですがご用意しておりますので、どうぞご笑納ください。

平成13年1月

アンケート記入上のお願い

●まず次のような点にご注意いただいた上で、お答えください。

- ・以下の質問は全て、あてはまる項目を一つだけお選びいただき、その数字を○で囲んでいただくものです。
- ・選択肢にあてはまる項目がない場合は、「その他」に○をつけて、（ ）がある場合はその中にあなたの回答をお書きください。
- ・あなたご自身のお考えをお聞きするものですので、回答に際して他の方とご相談されることはご遠慮ください。
- ・記入に際しては、なるべく濃いエンピツをご使用くださいますようお願いいたします。

●調査実施機関

財団法人シニアプラン開発機構

東京都新宿区西新宿4-34-1 東京年金基金センター2階

担当：仲山、小林

●調査に関する不明点の問い合わせ先

株式会社 アイレ

東京都港区芝大門2-12-6 ダイアパレス芝大門801号

担当：赤城、下野 電話：(03) 3435-7231



財団法人 シニアプラン開発機構

以下の質問は全て、あてはまる項目を一つだけお選びいただくものです。
各質問とも、該当する番号一つだけに○をつけてください。

まずはじめに、現在の生活についておうかがいします

問 1 あなたの現在の生活形態について、あてはまるもの一つに○をつけてください。

1 一人暮らし	2 自身と未婚の子供のみで暮らしている	(6)
3 夫婦のみの二人暮らし	4 夫婦と未婚の子供のみで暮らしている	
5 親と同居している(未婚・既婚や子供の有無を問わず)	6 その他	

問 2 あなたの現在のお仕事をお聞かせください。

1 会社・商店の経営	2 会社・商店の家族従業員	3 会社員	4 公務員	(7)
5 パート・アルバイト	6 無職(専業主婦を含む)	7 その他()		

問 2-1 <問2で1・2・3・5のいずれかに○がついた方のみにおうかがいます>
勤務先の規模はどの程度ですか。

1 5人未満	2 5～9人	3 10～29人	4 30～49人	(8)
5 50～99人	6 100～499人	7 500人以上		

問 3 次の(1)～(5)のそれぞれについて、現在その方々との程度親しくお付き合いされているか、あてはまる番号に○をつけてください。

	いない	非常に親しい	まあ親しい	あまり親しくない	全く親しくない	
(1) 家族	9	4	3	2	1	(9)
(2) 親戚	9	4	3	2	1	(10)
(3) 現在の職場の同僚	9	4	3	2	1	(11)
(4) 友人	9	4	3	2	1	(12)
(5) 近所の人		4	3	2	1	(13)

問 4 現在、あなたは以下に挙げるような外出の機会はどれくらいありますか。

	ほぼ毎日	週に1回以上	月に1回以上	年に数回	ほとんどない	
(1) 友人・知人宅への訪問	5	4	3	2	1	(14)
(2) 趣味活動での外出	5	4	3	2	1	(15)
(3) 町内会・地域活動への参加	5	4	3	2	1	(16)

問 5 現在、あなたの世帯の1か月の生活費(扶養・医療・教養・娯楽費等を含む)は次のどれに該当しますか。

1 10万円未満	2 10万～20万円未満	3 20万～30万円未満	4 30万～50万円未満	5 50万円以上	(17)
----------	--------------	--------------	--------------	----------	------

問 6 現在あなたが、健康維持・増進のために最も気をつけていることは何ですか。一つだけ○をつけてください。

1 十分な睡眠をとる	2 規則正しい食生活をする	3 運動やスポーツをする	(18)
4 健康診断を受ける	5 その他()		

問 7 あなたは健康診断を定期的に受けていますか。主なものに一つだけ○をつけてください。

1 かかりつけの医者に診てもらっている	2 勤務先の健康診断を受けている	(19)
3 自治体の健康診断を受けている	4 その他の健康診断を受けている	
5 受けていない		

次に、60才以降（ご自身や配偶者の方の退職後）の生活についておおうかがいします

問 8 あなたは60才以降（退職後）の生活設計について考えていますか。また、考え始めたのはいつ頃からですか。

- 1 まだ考えていない 2 20～30代の頃 3 40才の頃 4 45才の頃 5 50才を過ぎて

⑳

問 8-1 <問8で2～5に○がついた方のみ> それは主に何がきっかけでしたか。一つだけ○をつけてください。

- 1 住宅購入 2 親との同居 3 親の介護・死亡 4 転職
5 退職 6 友人・同僚等の身近な人の話 7 その他()

㉑

問 9 次の(1)～(5)のそれぞれについて、60才以降（退職後）に、その方々との程度親しく付き合っていると思われるか、あてはまる番号に○をつけてください。

	いない	非常に親しい	まあ親しい	あまり親しくない	全く親しくない
(1) 家族	9	4	3	2	1
(2) 親戚	9	4	3	2	1
(3) その時点での職場の同僚	9	4	3	2	1
(4) 友人	9	4	3	2	1
(5) 近所の人		4	3	2	1

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

問 10 60才以降（退職後）、あなたの世帯の1か月の生活費（扶養・医療・教養・娯楽費等を含む）はどのくらいだと思いますか。

- 1 10万円未満 2 10万～20万円未満 3 20万～30万円未満 4 30万～50万円未満 5 50万円以上

㉗

問 11 あなたは、60才以降（退職後）の生活費を年金（公的年金＋企業年金）だけでまかなえると思いますか。

- 1 十分にまかなえる 2 まかなえる 3 やや不足する 4 非常に不足する

㉘

問11-1 <問11で3・4に○がついた方のみにうかがいます>

不足する場合は主としてどのように工面しますか。一つだけ○をつけてください。

- 1 仕事をする 2 財産収入（不動産の賃貸収入等）で 3 貯蓄を切り崩す
4 生活費を節約する 5 家族（親・兄弟姉妹・子供等）から支援を得る 6 その他()

㉙

問 12 あなたは「リバースモーゲージ」（住宅・土地等の不動産を担保に、死後その売却代金を返済に充てることを前提として、老後の生活に必要な資金の融資を受けられる制度）に関心がありますか。

- 1 非常に関心がある 2 まあ関心がある 3 あまり関心がない 4 全く関心がない 5 分からない

㉚

問 13 <現在、仕事（パート・アルバイトを含む）をお持ちの方のみにうかがいます>

年金・退職金を中心とした「定年後の生活資金設計」について社内研修を実施している例がありますが、あなたご自身はそのような研修を受講したことはありますか。

- 1 受講したことがある 2 受講したことはない

㉛

問13-1 <問13で2に○がついた方のみにうかがいます>

今後、上記のような社内研修を受講したいと思いますか。

- 1 制度があるので受講したい 2 受講したいが制度がない
3 受講したいが制度があるか分からない 4 受講したくない

㉜

問 14 60才以降（60才近くになったら）、あなたは現在のお住まいからの住み替えを予定していますか。

- 1 予定なし 2 夫婦どちらかの親元（親の近く）に引っ越す
3 子供と同居予定で二世帯住宅を建てる 4 友人または兄弟姉妹などと共同生活をする
5 有料老人ホームに入居する 6 その他()

㉝

問 15 以下に挙げるのは、今後考えられる高齢者向けの商品やサービス、あるいは高齢者自身によるビジネスです。60才以降（退職後）、あなたは(1)～(11)のそれぞれについて、どの程度関心を持つと思いますか。

	大いに関心を持つ	多少は関心を持つ	どちらでもない	あまり関心を持たない	全く関心を持たない	
(1) 高齢者のための宿泊・乗り物の手配や現地案内サービス	5	4	3	2	1	③4
(2) 高齢者の資産に関する相談や助言、または資産管理の代行サービス	5	4	3	2	1	③5
(3) 高齢者を対象とした教養講座・市民大学	5	4	3	2	1	③6
(4) ホームドクターやヘルパーを派遣する介護サービス	5	4	3	2	1	③7
(5) 高齢者を対象とした新聞や雑誌・本など	5	4	3	2	1	③8
(6) 高齢者が持っている技術や技能を活用した人材派遣サービス	5	4	3	2	1	③9
(7) 高齢者の知識や技能を若い人たちに伝えるための教室やセミナー	5	4	3	2	1	④0
(8) 高齢者の技術や技能を活かしたリサイクル・再生工房	5	4	3	2	1	④1
(9) 医療施設や救急体制を完備した、高齢者向けの別荘やリゾート施設	5	4	3	2	1	④2
(10) 高齢者のための職業紹介サービス	5	4	3	2	1	④3
(11) 無農薬・無公害で生産された安心な食品の提供	5	4	3	2	1	④4

問 16 あなたが60才以降（退職後）を豊かに過ごすために、今から必要な情報として、下記の情報をどの程度必要としていますか。

	ぜひ必要	多少必要	あまり必要ない	まったく必要ない	
(1) 年金	4	3	2	1	④5
(2) 趣味	4	3	2	1	④6
(3) 健康（医療）	4	3	2	1	④7
(4) 介護保険	4	3	2	1	④8
(5) 仕事	4	3	2	1	④9
(6) 住まい	4	3	2	1	⑤0
(7) 地域施設	4	3	2	1	⑤1

介護についておうかがいします

問 17 あなたの親ごさんが病気などで援助が必要になったとき、以下の(1)～(6)はどれくらい頼りになると思いますか。

	いない	大変頼りになる	多少は頼りになる	あまり頼りにならない	ほとんど頼りにならない	
(1) 自分自身		4	3	2	1	⑤2
(2) 自分の配偶者	9	4	3	2	1	⑤3
(3) 自分の兄弟姉妹	9	4	3	2	1	⑤4
(4) 近所の友人・知人		4	3	2	1	⑤5
(5) 公的な福祉介護サービス		4	3	2	1	⑤6
(6) 民間の福祉介護サービス		4	3	2	1	⑤7

問 18 <仕事（パート・アルバイトを含む）をお持ちの方のみにうかがいます>

あなたが親ごさんを介護することになった場合、あなた自身の現在の仕事を継続できますか。

- 1 このまま継続できる 2 家族やホームヘルパーの協力があれば継続できる
3 介護休暇制度など職場の理解があれば継続できる 4 継続できない

58

問 19 あなた自身が60才以降(退職後)、病気などで援助が必要になったとき、以下の(1)～(6)はどれくらい頼りになると思いますか。

⑤ 頼みますか。

	いない	大変 頼りになる	多少は 頼りになる	あまり 頼りにならない	ほとんど 頼りにならない
(1) 自分の子供	9	4	3	2	1
(2) 自分の配偶者	9	4	3	2	1
(3) 自分の兄弟姉妹	9	4	3	2	1
(4) 近所の友人・知人		4	3	2	1
(5) 公的な福祉介護サービス		4	3	2	1
(6) 民間の福祉介護サービス		4	3	2	1

59

60

61

62

63

24

問 20 あなた自身が60才以降(退職後)、万が一介護が必要となった場合、介護を受けたい場所はどこですか。

- | | | |
|----------------------|--------|--------------|
| 1 自宅 | 2 子供の家 | 3 兄弟姉妹など親族の家 |
| 4 老人ホーム・老人保健施設等の福祉施設 | 5 病院 | 6 その他() |

65

問 21 あなたは現在、介護保険制度についてどの程度理解されていますか。

	ほとんど 理解している	多少は 理解している	あまり 理解していない	ほとんど 理解していない
(1) 介護サービスの内容	4	3	2	1
(2) 相談窓口	4	3	2	1
(3) 手続・申込方法	4	3	2	1
(4) 介護サービスの負担費用	4	3	2	1
(5) 月々の保険料	4	3	2	1

66

(67)

68

69

70

SKIP (71) ~ (80) / (1) = 2 DUPE (2) ~ (5)

社会に対する考え方などについてお聞かせください

問 22 「年金など現代社会の仕組みは大変複雑で、それがどこにどのようにして機能していくのかは、我々一般の人間にはとても分からない」という考え方について、あなたご自身はどう思われますか。

- 4 非常にそう思う 3 ややそう思う 2 あまりそう思わない 1 全くそう思わない

⑥

問 23 「自分はこの世の中でどういう役割を果たせばよいかわからない。自分が生きていることにいったい何の意味があるのだろう」という考え方について、あなたご自身はどう思われますか。

- 4 非常にそう思う 3 ややそう思う 2 あまりそう思わない 1 全くそう思わない

⑦

問 24 「自立とは、他からの指図や援助を受けずに、自分の意志と力で身を立てること」だと仮に考えた場合、次の(1)～(3)について、あなた自身はどの程度「自立」していると思われますか。

(1) 日々の生活の経済的な面で

- 4 自立している(自分の収入だけを充てている)
- 3 まあ自立している(自分の収入が中心だが、配偶者や親などからのお金も少しある)
- 2 あまり自立していない(自分の収入は少なく、配偶者や親などからのお金を中心にしている)
- 1 自立していない(配偶者や親などからのお金だけ)

8

(2) 家族（親・兄弟姉妹・配偶者・子供など）との人間関係の面で

- | | | |
|---|------------|------------------------------------|
| 4 | 自立している |(家族からの干渉はなく、自分なりに生きている) |
| 3 | まあ自立している |(家族からの干渉にも配慮しつつ、自分なりに生きている) |
| 2 | あまり自立していない |(家族からの干渉があり、自分なりの生き方にはなっていない) |
| 1 | 自立していない |(家族への配慮を優先して、自分なりの生き方とは程遠い) |
| 9 | 家族はいない | |

⑨

(3) <仕事（パート・アルバイトを含む）をお持ちの方のみにうかがいます>

仕事の面で

- | | | |
|---|------------|------------------------------------|
| 4 | 自立している |(自分の判断で仕事をしている) |
| 3 | まあ自立している |(自分の判断だが中心だが、上司や同僚の意見にも左右される) |
| 2 | あまり自立していない |(自分の判断よりも、上司や同僚の意見に左右される) |
| 1 | 自立していない |(自分の判断は少なく、上司や同僚の意見に従っている) |

⑩

問 25 現在のあなたの生活を全体的に見て、どの程度満足されていますか。

- | | | | | | | | |
|---|-----------|---|----------|---|---------|---|----------|
| 1 | 非常に満足している | 2 | まあ満足している | 3 | やや不満である | 4 | 非常に不満である |
|---|-----------|---|----------|---|---------|---|----------|

⑪

最後に、ご自身のことについてお聞かせください

問 26 あなたの年齢は次のどれに該当しますか。

- | | | | | | | | |
|---|--------|---|--------|---|--------|---|-------|
| 1 | 40～44才 | 2 | 45～49才 | 3 | 50～55才 | 4 | 56才以上 |
|---|--------|---|--------|---|--------|---|-------|

⑫

問 27 あなたは現在ご結婚されていますか。

- | | | | | | | | |
|---|--------------|---|--------------|---|----------|---|----------|
| 1 | 結婚している（子供あり） | 2 | 結婚している（子供なし） | 3 | 独身（子供あり） | 4 | 独身（子供なし） |
|---|--------------|---|--------------|---|----------|---|----------|

⑬

問 28 あなたのお住まいは次のどれに該当しますか。

- | | | | | | |
|---|---------------|---|----------|---|---------------------------|
| 1 | 持ち家（自分や配偶者所有） | 2 | 持ち家（親所有） | 3 | 民間のアパートやマンション（家賃を払っているもの） |
| 4 | 公営住宅 | 5 | 社宅・寮 | 6 | その他 |

⑭

問 29 あなたがご自身の税込年収は次のどれに該当しますか。 ※公的年金を含みます

- | | | | | | | | |
|---|---------------|---|-----------------|---|-----------------|---|-------------|
| 1 | なし | 2 | 300万円未満 | 3 | 300～500万円未満 | 4 | 500～700万円未満 |
| 5 | 700～1,000万円未満 | 6 | 1,000～1,500万円未満 | 7 | 1,500～2,000万円未満 | 8 | 2,000万円以上 |

⑮

問 30 あなたの世帯（生計をとともにされているご家族）の税込合計年収は次のどれに該当しますか。 ※公的年金を含みます

- | | | | | | | | |
|---|---------------|---|-----------------|---|-----------------|---|-------------|
| 1 | なし | 2 | 300万円未満 | 3 | 300～500万円未満 | 4 | 500～700万円未満 |
| 5 | 700～1,000万円未満 | 6 | 1,000～1,500万円未満 | 7 | 1,500～2,000万円未満 | 8 | 2,000万円以上 |

⑯

問 31 不動産を除いて、あなたの世帯のおおよその金融資産（預貯金・有価証券などの合計）は次のどれに該当しますか。

- | | | | | | | | |
|---|---------------|---|-----------------|---|-----------------|---|-------------|
| 1 | 100万円未満 | 2 | 100～300万円未満 | 3 | 300～500万円未満 | 4 | 500～700万円未満 |
| 5 | 700～1,000万円未満 | 6 | 1,000～2,000万円未満 | 7 | 2,000～3,000万円未満 | 8 | 3,000万円以上 |

⑰

問 32 あなたが最後に卒業された学校は、次のどれに該当しますか。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|---------|---|--------|---|--------|
| 1 | 中学校 | 2 | 高等学校 | 3 | 短大・専修学校 | 4 | 大学・大学院 | 5 | その他（ ） |
|---|-----|---|------|---|---------|---|--------|---|--------|

⑱

SKIP ⑲～⑳

長い時間どうもありがとうございました。

回答に漏れがないかお確かめのうえ、調査員にお渡しください。

2. 議事録（研究会・ワーキンググループ）

○研究会・ワーキンググループ会合実施スケジュール（日付順）

- | | |
|-----------------|---------------|
| （１）第１回ワーキンググループ | 2000年 9月 11日 |
| （２）第１回研究会 | 2000年 10月 18日 |
| （３）第２回ワーキンググループ | 2000年 11月 15日 |
| （４）第３回ワーキンググループ | 2000年 12月 8日 |
| （５）第２回研究会 | 2001年 1月 11日 |
| （６）第４回ワーキンググループ | 2001年 4月 6日 |
| （７）第５回ワーキンググループ | 2001年 4月 21日 |

「壮年期シニア研究」（第1回ワーキンググループ 議事録）

日 時：平成12年9月11日（月）15：00～17：00

会 場：ホテルニューオータニ札幌（青葉の間）

（出席者：9名）

1. 金子座長（北海道大学大学院教授）
2. 和田委員（北海道武蔵女子短期大学助教授）
3. 梶井委員（北星学園女子短期大学非常勤講師）
4. 佐藤上席調査役（厚生年金基金連合会）
5. 千保主席研究員（シニアプラン開発機構）
6. 小林主任研究員（シニアプラン開発機構）
7. 仲山主任研究員（シニアプラン開発機構）
8. 吉田主任研究員（シニアプラン開発機構）
9. 千葉主任研究員（シニアプラン開発機構）

議事次第

1. 開会
 - ①事務局挨拶（佐藤上席調査役）
 - ②各委員自己紹介
2. 報告事項（シニアプラン開発機構）
 - ①研究概要（テーマ選定と研究の進め方）
 - ②研究調査（サンプル抽出）方法と調査スケジュールについて
3. 意見伺い等
4. 閉会

本ワーキンググループでは、本研究に対する問題意識と研究スケジュールの大まかな方向性の検討が行われた。

（本ワーキンググループの中から抜粋した意見等を以下に記載）

○研究概要について

・今回の研究対象となる独身女性(40～50代)は、「1人でいるつもりはなかったのに、たまたま1人でいた。」と言う人が多いと思われる。40～50代の独身女性の現状と将来に対しての自立・不安の問題発見をすることが今回の研究の最重要部分と思われる。

○研究調査方法について

・財団(以降 事務局)単独で、面接調査を実行するのは難しい。また、マンツーマン(1対1)面接は一層困難なので、7～8人のグループ面接で問題発見型の調査を行うこととする。面接調査の進行役は金子座長を中心に、財団は事務局としてモニター選定等の作業と面接記録の要約作業を担当する。

・面接調査の背景にある資料を面接モニターに事前送付し、予め問題意識をもっていた方が面接調査を効率的に行うことができるので、総理府等の資料を中心に事務局にて加工後、モニターへ事前送付を行う。

・面接調査は、政令指定都市である札幌、東京、名古屋、京都、福岡の5カ所にて行う。

・札幌を第1回目の会場としてその際に出た意見を次回以降の質問例に反映させる。

・モニターの属性については「独身女性」が中心となるが、「独身女性」を浮かびあがらせるため、「独身男性」、「既婚女性」も含める。

・面接モニターのサンプルは、出来る限り同じ条件で選ぶことが重要なので、地元紙等に広告依頼を行うことを想定。

・アンケートの設問については、面接調査で得られた「キーワード」が軸となるので、第1回面接調査(札幌)の結果を参考に設問を作成予定(平成12年12月初旬)

○スケジュールについて

・第1回研究会(10/18)

・面接調査：平成12年10月～平成13年2月(全国5カ所：1ヶ月1会場)

年内スケジュール：札幌(10/27、28)、福岡(11/25、26)、名古屋(12/2、3)

・アンケート調査：平成13年1月～平成13年3月(東京地区を中心)

・報告書完成予定：平成13年6月末

以上

「壮年期シニア研究」(第1回研究会議事録)

日 時 : 平成12年10月18日(水) 13:00~16:00

会 場 : セブンシティ(銀杏の間)

(出席者 : 12名)

1. 金子座長(北海道大学大学院教授)
2. 棕野委員(日本社会事業大学教授)
3. 白波瀬委員(国立社会保障・人口問題研究所第2室長)
4. 和田委員(北海道武蔵女子短期大学助教授)
5. 梶井委員(北星学園女子短期大学非常勤講師)
6. 佐藤上席調査役(厚生年金基金連合会)
7. 千保主席研究員(シニアプラン開発機構)
8. 小林主任研究員(シニアプラン開発機構)
9. 仲山主任研究員(シニアプラン開発機構)
10. 吉田主任研究員(シニアプラン開発機構)
11. 喜田主任研究員(シニアプラン開発機構)
(講演)
12. 高山憲之(一橋大学 教授)

議事次第

1. 開会

- ①事務局挨拶(佐藤上席調査役)
- ②各委員自己紹介
- ③座長挨拶(金子座長)

2. 講演

講 師 : 高山憲之(一橋大学教授)

講演名 : 少子化と年金問題

3. 報告事項(シニアプラン開発機構)

- ①研究概要(テーマ選定と研究の進め方)
- ②研究調査(サンプル抽出)方法と調査スケジュールについて
- ③グループ面接調査シナリオについて

4. 意見伺い

5. 閉会

本研究会では、第1回ワーキンググループで議論をした問題意識と研究調査方法の方向性の検討が行われた。今後の研究に年金問題が絡むことも想定されることから、高山先生（一橋大学教授）にご講演いただいた。

（本研究会の中から抜粋した意見等を以下に記載）

○研究概要（テーマ選定と研究の進め方）

- ・40～50代の独身女性を対象とする研究調査は今までないはずなので、実態調査を行うだけでも十分な調査だと思う。
- ・問題点を発掘するのが目的であり、グループ面接調査はその手段として活用するのに有効だと思う。今回の研究では、15回のグループ面接を通して最大公約数のデータを取ることが重要である。
- ・報告書のまとめ方については、「独身女性の生活実態、将来に対する意識を探る」ことを中心にしていく。

○研究調査（サンプル抽出）方法について

- ・親との同居の有無、配偶者の有無、子供の有無、職業、収入等のカテゴリー分けが重要。また兄弟姉妹等の家族はいるはず。属性シートは面接モニターからいただくのか。
（回答：属性シートは事前に送付し、グループ面接時に回収予定。また、面接モニターには事前に基礎データを手持ち資料として送付する。）
- ・生涯非婚率は男性の方が高いので（50代：男性10%、女性5%）独身男性のサンプルを増やした方がよいのではないか。
（回答：今回は女性に重点をおく。）
- ・グループ面接については、もう少しいろいろな属性を混ぜた方がよいのではないか。
（回答：札幌の調査では既にモニターを確定しているので福岡以降の調査で対応したい。）

○グループ面接調査シナリオについて

- ・40～50代の独身男性は収入の面では確かに女性に比べて多いと思うが、その他の暮らしの面では、どのように暮らしているのかを聞いた方がよいと思う。
- ・親子の関係、親の体力低下の影響等の質問をいれたほうが良いと思う。
- ・グループ面接では、具体的な例をあげて質問をしたほうがよい。グループ面接の利点は、なによりも議論ができることだと思う。
- ・自立支援のニーズについては、こちらから質問しないと話がなかなか出てこないと思う。
（回答：札幌でのグループ調査の結果を見てから…福岡以降の面接に応用する予定。）
- ・地域社会との接点、さらに金銭面については消費ニーズの動向を知ることが必要と思う。

以上

「壮年期シニア研究」(第2回ワーキンググループ 議事録)

日 時 : 平成 12 年 11 月 15 日 (水) 14:00~17:00

会 場 : セブンシティ (シニアプラン開発機構会議室)

(出席者: 7 名)

1. 金子座長 (北海道大学大学院教授)
2. 梶井委員 (北星学園女子短期大学非常勤講師)
3. 佐藤上席調査役 (厚生年金基金連合会)
4. 吉田主任研究員 (シニアプラン開発機構)
5. 小林主任研究員 (シニアプラン開発機構)
6. 仲山主任研究員 (シニアプラン開発機構)
7. 喜田主任研究員 (シニアプラン開発機構)

議事次第

1. 開会
2. グループ 面接調査要約作成について
3. 東京アンケート調査票について
4. 閉会

本ワーキンググループでは、グループ面接調査(札幌)の結果を基に今後のグループ面接調査要約作成についての作業方法の確認。また東京アンケート調査の準備作業の検討を行った。

(本ワーキンググループの中から抜粋した意見等を以下に記載)

○グループ面接調査要約について

各グループ面接調査実施後、40～45日で1回分を10ページ以内に要約する作業を全員で行う。札幌分は、手本として和田、梶井の両委員が要約し、金子座長が校閲する。福岡以降は、グループ面接に同席する研究員が要約作業を行なう。要約版については、最終的には（1回あたり）6～10ページ×15回＝100ページを目処に、5都市におけるグループ面接記録の要約として報告書に掲載する。15回も実施したという大事な記録であり、又会議参加者に対しても自分の発言がどこに使われたかとの回答にもなる。

○東京アンケート調査について

・モニターの選定について

独身女性と既婚女性をほぼ同数にして、意識や行動パターンを比較した方がよい。パターンとして独身 vs. 既婚、独身 vs. 既婚子供有り、独身 vs. 既婚子供無し、既婚子供有り vs. 既婚子供無しの4パターンの比較が考えられる。

40～55歳 独身女性 150人

40～55歳 既婚女性 150人— 1) 居住優先

2) 子供無し 50名 努力目標

3) 地域（山の手、下町等） 努力目標

独身女性が170名抽出できれば、既婚も同数抽出する。

・調査票について

原案については設問数が多すぎるので、表紙をいれて5ページくらいに修正する必要がある。設問内容については、自立、不安、負担の度合を把握できるものが必要なので全体的にやり直すこととする。

○次回ワーキンググループ（12/8）までの作業

1. アンケート調査設問内容の確定

事務局で修正した内容を11月末までに金子座長に送り、擦り合わせのうえアンケート調査票の内容を完成させる。

2. 札幌グループ面接記録要約版を作成する。（3回分）

以上

「壮年期シニア研究」（第3回ワーキンググループ 議事録）

日 時：平成12年12月8日（金）14:00～17:00

会 場：セブンシティ（シニアプラン開発機構会議室）

（出席者：8名）

1. 金子座長（北海道大学大学院教授）
2. 和田委員（北海道武蔵女子短期大学助教授）
3. 梶井委員（北星学園女子短期大学非常勤講師）
4. 佐藤上席調査役（厚生年金基金連合会）
5. 千保主席研究員（シニアプラン開発機構）
6. 小林主任研究員（シニアプラン開発機構）
7. 仲山主任研究員（シニアプラン開発機構）
8. 喜田主任研究員（シニアプラン開発機構）

議事次第

1. 開会
2. 東京アンケート調査票について
3. グループ面接調査要約作業について
4. 今後の研究スケジュールについて
5. 閉会

本ワーキンググループでは、本ワーキンググループ開催前に、アンケート調査票を金子座長（案）と財団（事務局）（案）で各々を作成し、金子座長（案）をベースとして財団（案）を若干追加した修正（案）を作成しアンケート調査票の最終のすり合せ作業を行った。

（本ワーキンググループの中から抜粋した意見等を以下に記載）

○東京アンケート調査

1. 調査票の中身

- ・第1回面接調査（札幌）から得られた、「お金・健康・人間関係」のキーワードを中心に自立・不安を尋ねる設問とした。
- ・表紙を含めて6ページ以内に落ちつく設問数（32問）とし、設問の順番については過去のアンケート調査等よりモニター（回答者）が自然に設問に回答しやすい順番に並び換えを行う。

2. 今後のアンケート調査のスケジュール

平成12年12月初旬 最終原稿作成

平成13年 1月初旬 アンケート調査票配布

2月中旬 アンケート調査票回収

3月中旬 アンケート粗データ到着

3月下旬 アンケート分析作業

サンプル回収目標を、300（東京在住で40～50代の独身女性150、既婚女性150）とし、回収方法は留置回収とする。

○グループ面接要約作業

今回作成した札幌での面接記録要約版を基に意見をいただき、今後の要約版作成の参考とする。

1. 司会進行のコメントをいれて、設問切替時等、全体の流れが浮き上がってくるようにする。
2. グループ面接で得た、「お金・健康・人間関係」のキーワードを中心にまとめていく。
3. 1回の1人の発言をあまり長くしないようにする。（最大10行を目処にする。）
4. 抽象的意見よりも具体的意見を重視してまとめる。
5. 名前は仮名にし、1回目の発言時に属性を記載する。（例：名前、年齢、属性）

○今後の研究スケジュールについて

- ・第2回研究会（1/11）
- ・グループ面接調査 京都（1/20、21）、東京（2/24、25）
- ・アンケート調査：平成13年1月～平成13年3月（東京地区を中心）
- ・報告書完成予定：平成13年6月末

以上

「壮年期シニア研究」(第2回研究会 議事録)

日 時 : 平成13年1月11日(木) 14:00~17:00

会 場 : セブンシティ(銀杏の間)

(出席者:9名)

- 1.金子座長(北海道大学大学院教授)
- 2.白波瀬委員(国立社会保障・人口問題研究所第2室長)
- 3.和田委員(北海道武蔵女子短期大学助教授)
- 4.梶井委員(北星学園女子短期大学非常勤講師)
- 5.佐藤上席調査役(厚生年金基金連合会)
- 6.千保主席研究員(シニアプラン開発機構)
- 7.小林主任研究員(シニアプラン開発機構)
- 8.仲山主任研究員(シニアプラン開発機構)
- 9.喜田主任研究員(シニアプラン開発機構)

議事次第

1. 開会
2. 報告事項(シニアプラン開発機構)
 - ①グループ面接調査について
 - ②アンケート調査について
3. 意見伺い
4. 今後のスケジュールについて
5. 閉会

本研究会では、グループ面接調査(札幌・福岡・名古屋)から発見できた問題点の確認と、今後のグループ面接調査(京都・東京)の方向性の検討ならびにアンケート調査(東京)で使用するアンケート調査票の内容の最終確認を行った。

(本研究会の中から抜粋した意見等を以下に記載)

○グループ面接調査（札幌・福岡・名古屋）の振り返り

- ・札幌で老後に向けての対策の３要素として、①健康、②サマナー（お金）、③人間関係というキーワードが発見でき、以降のグループ面接調査では「不安・負担・自立」というキーワードを縦軸に、①健康、②サマナー（お金）、③人間関係というキーワードを横軸に加えた観点から意見をいただき問題発見を行った。
- ・モニター属性の数のバランスによって発言が違ってきた。独身男性がいたグループ面接は、かなり意見の幅が出た。

（印象深い発言内容）

- ・再就職年齢制限が厳しい。（正社員だと４５歳）
- ・介護保険制度ができて良かったという意見が多かった。
- ・独身女性は、社会的信用度の面で不利。
（独身女性で自営業の場合、収入があっても、クレジットカードを作りにくい。住居を借りにくい。）
- ・住宅、コミュニティハウスなどに興味がある。
- ・ライブパフォーマンスにも参加したいとの意見があった。
- ・個人年金に何本も入っていて掛金負担が重く、普通に使えるお金はさほどない。

○グループ面接調査（京都・東京）の方向性の検討

- ・今までは問題発見中心のグループ面接調査であったが、今後のグループ面接では今までに発見できた問題点の整理・確認に重点をおく調査とし、独身女性に対して支援可能な意見を中心に上げていく。

○アンケート調査

- ・費用等の関係から、独身女性 150 人、既婚女性 150 人の 300 人で行うことに決定。
回収方法は留置回収方式とし、単純集計作業は 3 月中旬頃の予定。
- ・アンケート調査票の中身については、ワーキンググループで検討した最終内容を提示し最終確認を行った。

○今後のスケジュールについて

- ・グループ面接調査：京都（1/20、21）、東京（2/24、25）
- ・アンケート調査：平成 13 年 1 月～3 月（東京地区）
- ・次回ワーキンググループ 予定：4 月中旬
- ・報告書完成予定：平成 13 年 6 月末

以上

「壮年期シニア研究」(第4回ワーキンググループ 議事録)

日 時 : 平成13年4月6日(金) 15:00~17:00

会 場 : セブンシティ(シニアプラン開発機構会議室)

(出席者: 5名)

1. 金子座長(北海道大学大学院教授)
2. 佐藤上席調査役(厚生年金基金連合会)
3. 小林主任研究員(シニアプラン開発機構)
4. 仲山主任研究員(シニアプラン開発機構)
5. 喜田主任研究員(シニアプラン開発機構)

議事次第

1. 開会
2. アンケート調査分析途中経過について(金子座長)
3. 報告書作成作業について
4. 今後のスケジュールについて
5. 閉会

本ワーキンググループでは、はじめにアンケート調査(東京)について金子座長より分析途中経過と分析における着眼点について説明があった。また、グループ面接調査(札幌・東京・名古屋・京都・福岡)とアンケート調査(東京)が終了したことにもない、今後の報告書作成作業についての具体的な方向付を行った。

(本ワーキンググループの中から抜粋した意見等を以下に記載)

○報告書作成作業について

1. 分析の視点（執筆方針）

グループ面接（札幌・東京・名古屋・京都・福岡）の調査結果を基に
独身女性（40～55歳）について以下の項目を中心に分析し執筆を行う。

- ①現在生活をする上で何に支障をきたしているのか
- ②老後に備えて現在準備していることは何か
- ③老後を迎えるに当たって不安視しているものは何か、必要としているニーズは何か
- ①～③を踏まえ、老後を迎えるに当たって今後どのような支援が可能か

2. 報告書内容について（イメージ）

項 目	ページ数	担当
I. グループ面接分析	60P	金子座長・和田委員・梶井委員
II. グループ面接要約	100P	シニアプラン開発機構
III. アンケート調査分析	30～40P	金子座長
IV. 調査票・議事録等	20P	シニアプラン開発機構

○今後のスケジュールについて

- ・第5回ワーキンググループ：4/21（札幌）
- ・最終原稿完成予定：平成13年5月末
- ・報告書完成予定：平成13年6月末

以上

「壮年期シニア研究」（第5回ワーキンググループ 議事録）

日 時：平成13年4月21日（土） 14:00～16:00

会 場：ホテルニューオータニ札幌（3階 紅葉の間）

（出席者：5名）

1. 金子座長（北海道大学大学院教授）
2. 和田委員（北海道武蔵女子短期大学助教授）
3. 梶井委員（北星学園女子短期大学非常勤講師）
4. 佐藤上席調査役（厚生年金基金連合会）
5. 喜田主任研究員（シニアプラン開発機構）

議事次第

1. 開会
2. 報告書作成について
3. 閉会

本ワーキンググループでは、最初に事務局が、報告書に含める予定の各種資料（グループ面接記録縮小版、アンケート調査票、会議メモ等）の事務局案について説明を行なった。その後、金子座長、和田委員及び梶井委員よりそれぞれの執筆分担部分の内容の概略について説明があり、今後の報告書作成作業について意見の擦り合わせを行なった。

（本ワーキンググループにおける主な確認事項等を以下に記載）

○報告書作成作業について

1. 報告書の内容

- ・報告書執筆方針の1つとして、「老後を迎えるに当たって今後どのような支援が可能か」という項目が含まれていることに鑑み、グループ面接分析の記述の前に、社会的支援に関する時代背景、位置付け、具体的内容等についての記述を追加する。そして、この追加記述にグループ面接結果も織り込む。

- ・札幌で5月10日頃に金子座長・和田委員・梶井委員の3者で原稿を持ち寄り、最終的な内容の打合せを行なう。その後、5月25日までに最終原稿を事務局宛送付する。

2. 報告書のタイトル

- ・報告書のタイトルについては、事務局としては、「独身女性（40～50代）を中心とした将来に対する意識および支援に関する調査」（仮題）としたいと考えているが、帰京後速やかに決定のうえ、座長・各委員に連絡する。

3. 校正作業

- ・報告書印刷前の校正（2回以上を予定）については、最低1回は執筆者自身が行なう。

○今後のスケジュールについて

- ・2001年5月10日頃 札幌において金子座長、和田委員、梶井委員の3者で執筆内容等について最終打合せ
- ・2001年5月25日 最終原稿完成予定
- ・2001年6月末 報告書完成予定

以上

財団法人シニアプラン開発機構は…

厚生省、厚生年金基金連合会および民間企業の協力により昭和 61 年 11 月に設立された財団です。当財団では、おおむね 50 才以上の企業在職者及び企業退職者の方々を＜シニア＞と位置付け、豊かな人生経験を持ち、広範な分野で活躍できるこの年代の方々がその持てる力を活かして、充実したシニア生活を送るためのシステム＜シニアプラン＞を企画開発し、社会に提案しています。

【主な事業】

- サラリーマンの生きがい、社会活動、生涯学習等の研究
- 年金生活設計（P L P）セミナーの研究開発
- 企業福祉に関する研究調査
- シニアプランフォーラム等、豊かなシニアライフに向けた啓発活動

この調査研究事業は、社会福祉・医療事業団＜長寿社会福祉基金＞の交付金により財団法人長寿社会開発センターが助成したものです。

独身女性（40～50 代）を中心とした中年女性の老後生活設計ニーズ

及び社会的支援に関する調査

平成 13 年 6 月

財団法人 シニアプラン開発機構

東京都新宿区西新宿 4-34-1 東京年金基金センター 2 階

TEL：03-5371-2022

FAX：03-5371-2100